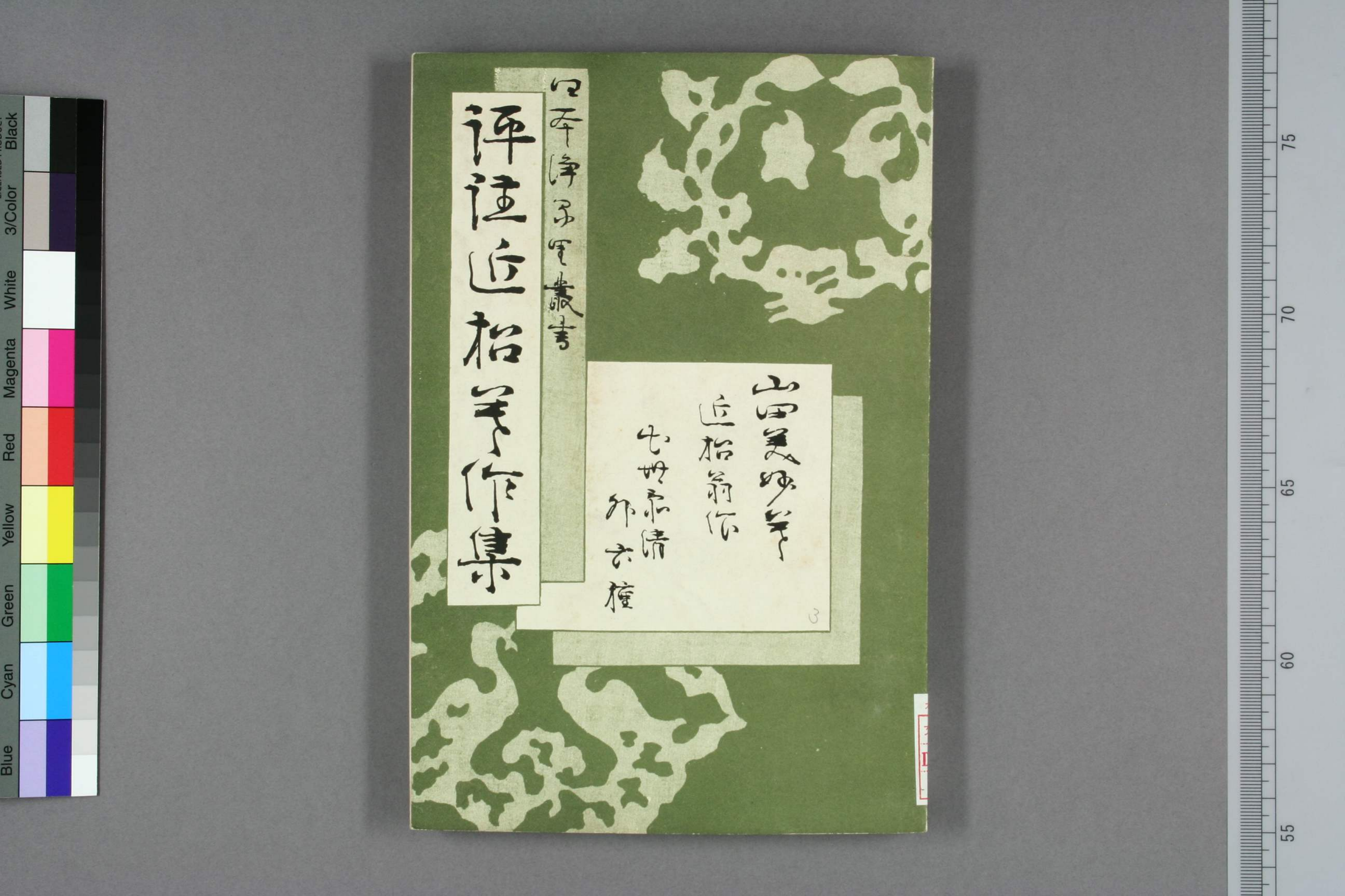
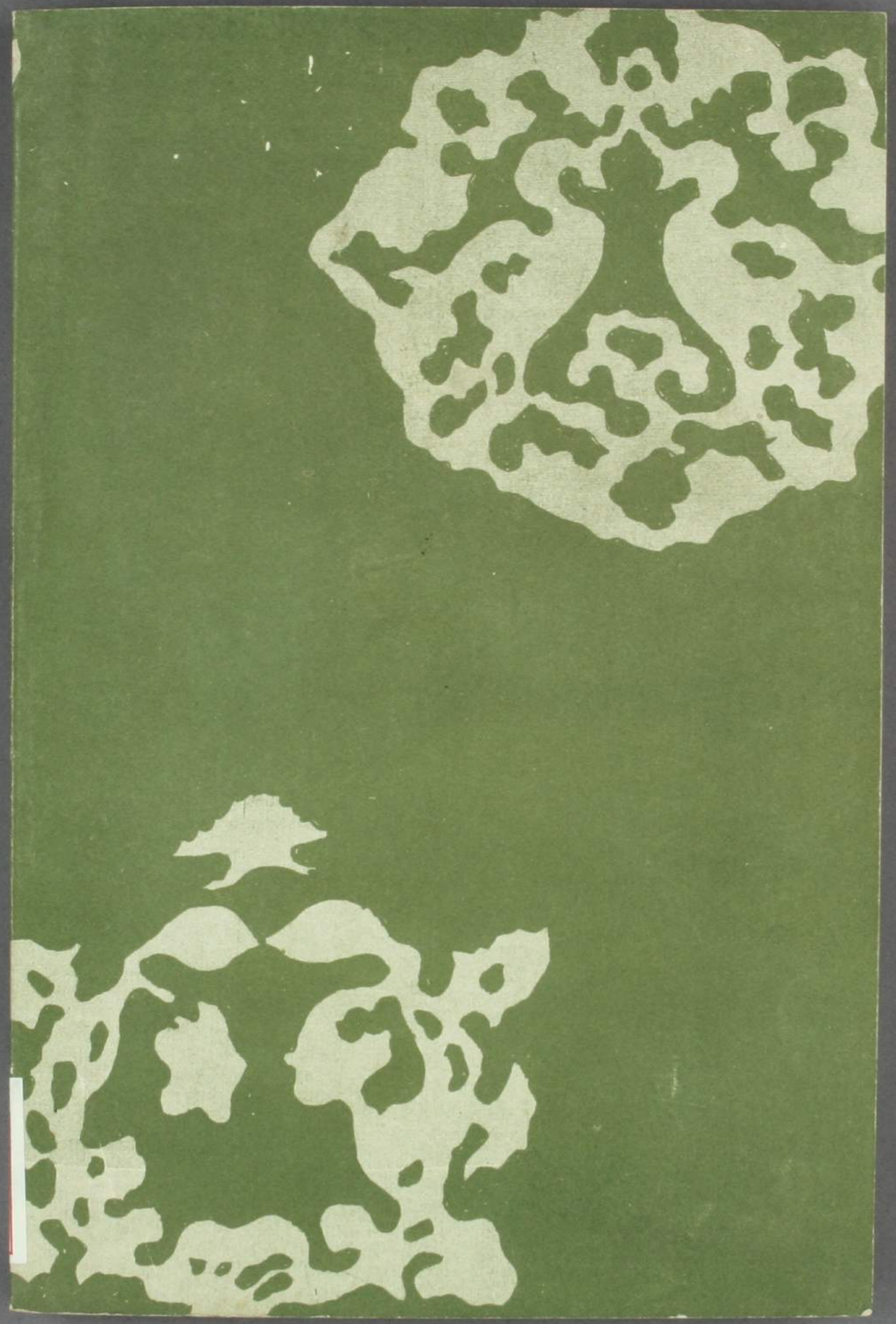


評註近松筆作集
日本淨瑠璃叢書
山田美妙筆
近松翁作
七世永清
外六種

本間文庫
文庫 14
D 247
3



山田美妙年

日本淨瑠璃叢書

評註近松年作集

近松門左衛門作

文庫14
D 247
3止

日本淨瑠璃叢書
評註近松著作集

目次

○出世景清……五七五頁
○百日曾我……六〇〇頁
○世繼曾我……六四四頁
○曾我會稽山……六六二頁
○本朝三國誌……七一九頁
○傾城反魂香……七六八頁
○國性爺合戰……八一五頁

出世景清

第一

扨も其後、妙法蓮華經觀世音菩薩、普門品第二十五は、大乘八軸の骨髓信心の行者、大慈大悲の光明に、あつかり奉る觀音智力ぢ有り難き。玆に平家の一族悪七兵衛景清は、西國四國の戰ひに、討ち死にすべき者なりしが、死は輕くして易し、生は重くして難し、所詮命を全くして、平氏の御敵石大將頼朝を一太刀うらみ、平家の恥辱を雪がんと落人となり、尾張の國熱田の大宮司に、いさゝか知る邊有りければ、深く忍びて居たりけり。素より大宮司は平氏の重恩の人なれば、深くいたはり、一人姫のをの〻姫と聞こえしを景清に妻せ、子とも婿ともかしづき給ふ志しこそわり無けれ。景清大宮司の御前に出で、「誠に某無二の御懇志に預かり、長長裁居仕り、身は埋もれ木と朽ち果てん、末頼み無き身ながらも、せめて頼朝を一太刀窺ひ、君父の恨みを散じ其後は、腹切ッて兎も角も爲らんと、空しき月日を送り候ふ。然る處に今朝究竟の事を聞き出し候ふ。其故は鎌倉殿は南都東大寺の、大佛殿を御再興有るべしとて、秩父の重忠彼の奉行を承り、昨日の暮れ程に、此所を打ッて通り候ふ由。假へば頼朝七重八重の城廓に取り籠もり、天地に黒鐵の網を張ッて、用心嚴しく候ふとも、此景清が一念にて、なでか狙はで候ふべき。然りながら重忠、常に頼朝の傍を離れず、神變不思議を兼ねたれば、其身は都に有りながら、心は鎌倉殿の傍に在り。斯う申す景清は二相を悟り候へども、重忠は

○大慈大悲　觀世音の廣大な慈悲。

○大宮司　神主の長。

○我居　同居。

四相を悟る。頼朝に出會ひ既に討たんとせし事、三十四度に及べども、彼の重忠に隔てられ、遂に本望遂げ申さず。然れば先づ重忠をさへ討ち取らば、頼朝を討たん事踵を廻らすべからず。重忠此度東大寺の奉行に上る事、幸ひかな仕合はせかな。天の時來りたり。忍びやかに南都に下り、重忠が首提げて參らんに、早お暇」と申さるる。大宮司聞き給ひ「げに究竟の時節御座んなれ。かまへて人に覺られ給ふな。急いて事を爲損ずな。片時も早く」と有りければ、北の方も悦びて、宗盛公より給びし給ふ、あぢ丸といふ名劍を景清に賜はり「首尾よく爲おふせ給ひなば、一日も逗留無く、早く御歸りませませ」と、門出での杯出だされば、互に千秋萬歳と、獅子の勢ひ龍の勢、勇み〳〵て行く虎の、尾張の國を立ち出でて、奈良の都へ上らるる。いで其頃は文治五年、春過ぎて、夏來にけらし白旗の、源氏の大將朝頼は、南都東大寺大佛再興の御願にて、畠山重忠奉行職を承り、松にも花を春日野や、飛ぶ火の野邊に假屋を打たせ、横目張付け勘定方、やなと大國飛彈匠、杣人木づくり事終り、今日吉日の杜立て。我身は棧敷に一段高く、むらごうの大幕打たせ、續いて見えしは本多の二郎、其他の侍ひ共、帳場〳〵に標を立て、弓鎗長刀吹き拔きに、柳櫻をこきまぜて、花やかなる御普請なり。斯くて番匠の棟梁、杢の頭、修理の頭己が爲馴れる出で立ち吉方に打ちむかひ、先づ屋固めの祭文を誦へつつ、御幣を振って再拜し、手斧始めの其儀式、嚴重にこそ務めけれ。むべも富みけり三枝の、三つ葉四つ葉の大伽藍、手斧始めの壽きに、千代を固めの杜立て。春は東に立ち初むる、これ萬物の初めなり。夏は南に巡る日の、菖蒲が軒や薫るらん。秋は又西の空、盡きせぬ契り象りて、天の河原に橋

○行く虎の　虎は景清の勇猛な筈を現すための形容。獅子又は龍などに對しての語。「虎の尾」といふ草の名のある處から、尾張の國と續けた。

○夏來にけらし白　旗の　持統天皇の御歌「春過ぎて夏來にけらし白栲の富士の高嶺に雪は降りつつ」から出た句。「白旗」は源氏を用ゐる所から下に源氏の事を出す續りに、「白栲」を「白旗」と言ひ替へた。

柱、しらげ立つるや擣き鉋。雲を其方に遣り鉋。冬は北にて筒井筒、水こそ家の寶なれ。めぐれや廻れ井戸車。竈賑はふへつい殿。先づ陰陽の二柱。二本の柱は女神雄神を表したり。三本の柱は三世の諸佛、四本の柱は四天王、四海大平民安全と、祝ひ籠めたる墨壺の、絲の直ぐなる國なれば、寶や宿に三つ目錐。鋸屑の數々と、濱の眞砂と君が代は、數へ盡くさじ面白や。然るに此大伽藍と申すは、聖武皇帝の御建立、三國無雙の靈場なり。兜率天の内院を、さも在り〳〵と移さるる。塔の高さが二十丈。佛の御丈は十六丈。雲に續けば自から、月を後光とみかさ山。杜の數は天台の、一念三千の氣を現じて、三千本と定まれり。軒の椽は法華經の文字の數、六萬九千三百八十四本なり。山門には獅子の狛。扨正面より四方四面の、扉々の彫り物には、松に唐竹牡丹に獅子、豹と虎とが威勢を爭ひ、百千萬の獸をぼッ立て〳〵、くるり〳〵と巖に追ひ上げ追ひ下ろし、風に嘯く波間より、紫雲を捲いて昇り龍又下り龍、玉を攫んで虛空に捧げ、鱗を立てたる其勢ひ。手を盡くさせて彫り盡くし、扨棟瓦、軒瓦、金銀瑠璃玻璃硨磲瑪瑙、珊瑚琥珀水晶を、拭き立て〳〵珊瑚珠の、梟をひッしと打ッたる臺には、金襴錦に柱を包んで、黄金の鎭を鋲かしせん○(?)棟木おほふの柱をして、なんほの農夫よりも多く、梁にかすかの椽は、○○の○○よりも多く、釘頭の磷磷たるは、湯に垢の泡よりも多く、田甫の說法讀誦の聲は、市塵の言語よりも多からしむ。佛法繁昌四海鎭護の大伽藍。如意滿足の柱立て。愛でたし〳〵おゝ愛でたし〳〵。鉋取り延べさら〳〵ちやう〳〵と、打ち始め取り始め、三々九度の

○春日野　大和の地名。松にも花を「貸す」と掛けた。

○飛ぶ火の野邊　奈良の地名。

○檜目「横目付け」の訛。武家で事務を監督する役。

○飛彈匠「飛彈の匠」の訛。工匠の義。始めは飛彈の國から出た工匠にのみいふ稱へであッた。此例證は「飛彈匠物語」といふ書にも載って居る。

○木づくり　今いふ「木取り」で即ち大工が材木を挽き、それぞれの見積もりを付け、種種の用に充てる準備を爲ること。

○柱立て　建築に當たって先づ柱を建てる儀式。

○むらごう　「むらご」の延。色の一樣に揃はず、濃淡の處處にある

御酒を捧げ、千度百度祈念して、重忠に式臺し、棟梁座をぞ下りける。手斧はじめの事過ぐれば、數千の番匠下々まで、皆々小屋にぞ入りにける。遙の後より四十ばかりの男なるが、人足と思しくて晝餉の櫃を擔ひ、頬被りして通りける。秩父の執權本田の二郎きッと見て、「やあ是なる下郎奴は、斯かるはれいの庭なるに、頬被りは緩怠な。しきだいせよ」と咎むれば、彼の者小聲になり、「作法を知らぬ下々なれば、御免」と云ッてつッと通る。「どこへ〳〵。扨々存在千萬なる奴めかな。頬被りを取らずんば、誰れかある、それ毆て叩け」と下知すれば、中間共承り、一度にはらりと取りまはす。番匠の棟梁此由を見るよりも、「いやこれ本田殿。彼奴は其日雇ひの人足にて、差別も知らぬ下郎なれば、さぞ推參も候ふべし。然りながら、斯かる愛でたき折りなれば、唯何事も穩便に、計らひ給へ」と申しける。本田聞きも入れず、「いやさ彼奴は些人に似たるものゝ候ふ」といへば、「扨珍らしや本田殿。人が人に似たるとは候ふ。如何に下郎奴。おのれ大分の錢を取りながら、かだを爲て働かず、横着ひろぐ故にこそ、人々にも怪しまれ、祝儀に邪魔を爲しけるよ。價を損にするまでぞ。罷り歸れ」と叱りければ、好き幸ひと景清は、擔ひし櫃を下ろし捨て、迷惑さうに揉み手をして、表にこそは出でらるれ。重忠幕の内より御覽じて、「暫らく〳〵。如何に方方。平家の落人此處彼處に忍びて、君を狙ふと聞きけるが、唯今の人足まさしく惡七兵衛、景清と見しは僻眼か。やあ彼れ餘すな。言ふても是は一大事の、柱立ての淨めには、穢らはしては如何なり。前なる野邊に追ひ出だし、討ッて捨てよ」と曰へば、素より揣る關東武者、我も〳〵と駈け向かふ。景清是を見て、擔ひ棒に仕込みた

義。
○吹き拔き　風の吹き通る處即ち野邊の義。
○番匠の棟梁　昔し京都へ勤番した大工の頭。
○屋固めの祭文　建築の祝詞。
○手斧始め　建築に取り掛かる始めの儀式。
○むべもとみけり　三枝の　上古建築祝賀の歌の句。
○しらげ立つ　仕上げを掛ける。
○擣き鉋　鉋の一種。向かふへ突き出して削る拵への物。
○三つ目錐　工匠の具。寶や宿に「充つ」と掛けた。
○兜率天　佛說、上界。
○ぼッたて　打ち立ての義。
○梟　垂る木の端に在ッて、軒を貫く木の稱。
○しッていしッてい　槌を打つ音の形容。
○さらさら　鉋で木を削る音の形容。
○式臺し　式臺はもと玄關前に在る板敷き。此所では重忠の座を其式臺のやうに拵へての義。
○晝餉　晝食。
○秩父　畠山重忠を指す。
○はれいの庭　「はれい」は晴れの延。儀式立ッた場所との義。
○緩怠　無禮。失禮などと同義。
○しきだいせよ　鞠問。
○存在　粗略。
○かだ　懈怠の義。
○番匠箱　大工の道具を入れて置く箱。
○力業、早業、輕業、神通業　共に

る、件のあざ丸するりと拔いて挿し簪し、大勢を左手に受け、頭を叩いて呵々と笑ひ、「これ御侍ひ。某は尾羽を枯らせし鎌倉の、浪人者にて候ふが、朝夕に迫り、斯かる佗びしき營みを仕る。さすが人目の恥づかしく、面を隱して有りければ、何ぢや某を惡七兵衛景清とは。眼が眩みて有りけるか。但しは其景清が恐ろしさに、面影に立ちけるか。よし何にもせよ、これほどまで雜言せられ堪忍罷りならず、景清ほどこそ有らずとも、はッと手並を見せんず」と、例のあざ丸小傍に搔い込み、多勢が中に割ッて入り、火水になれとぞ切り合ひける。時刻も移らぬ其中に、十四五人切り伏せ、「重忠に見參せん」と、此所のつまり彼處の隈に、駈け入り〳〵騷げども、大勢に隔てられ、今は早これまでなり、深入りして雜兵に、手を負ふせられては景清が、末代の名折れなり。又こそ時節有るべけれ。いで追ッ拂ふて落ち行かんと、番匠箱を押し開き、大鑿小鑿手斧鋸遣り鉋、究竟一の手裏劍と、押ッ取り〳〵打ち立つれば、さしもに勇む軍兵共、わッと曰ふてはさッと引き、猶も寄せ來る者共を、小舍の小柱引ん拔いて、八方むぐらに振り巡れば、秋の嵐に散る紅葉、むら〳〵ばッとぞ遁げにける。「おお然もさうづ然もあらん。此度は爲損ずとも、此景清が一念の、釼は巖通さんものを」と、踊り上がり飛びあがり、齒嚙みをなして行く雲の、月の都に上りける。惡七兵衛が力業、早業輕業神通業、唯飛ぶ鳥の如くなりとて、恐れぬ者こそ無かりけれ。

第二

さるほどに、誠や猛き武夫も、戀ひに窶るる慣らひ有り、薪を負へる山人も、立ち寄る花の景清も、常

に清水寺の觀世音を信じ奉り、參詣の道すがら、清水坂の片邊りに、阿古屋といへる遊君に、假染めて、世に大人しくぞ見えにける。阿古屋は素より遊女なれども、妹脊の情濃やかに、世に無き景清を愛ほしみ、二人の子供を養育し、兄には小弓小太刀を持たせ、父が家督を繼がせんと、習はぬ女の身ながらも、兵法の打ち太刀し、武道を敎ふる志し、類ひ稀にぞ聞こえける。斯かる所へ惡七兵衛景清は、重忠を打ち損じ、やう〳〵として清水や、阿古屋が庵に着き給ふ。女房子供を引き連れ「こはは、我平家の御恩を雜せんため、鎌倉殿を狙へども其甲斐無く、一兩年は尾張の國、熱田の大宮司に匿まはれ、空しく月日を送りし所に、此度畠山の重忠、東大寺再興の奉行に上るを好き機と、先づ重忠を狙はんため、吾身を賤しき下郎に爲し、既に間近く付け寄せしが、運強き重忠にて、我等が智案露れ、本意無くも打ち損じ、一向に重忠と刺し違へ、死なんとは思ひしが、思へば御身が懷かしく、子供が顏をも見まほしく、無念ながらも存へて、扨唯今の仕合はせなり。誠に久しく會はぬ間に、子供もいたう成人し、御身もすんぜ女房を仕上げたり。何でも今宵はしッぽりと、積もる辛さを語らん」と、しと〳〵寄れば「ええ禁耀らしい。斯く浪人の憂き身といひ、殊更敵を持ッたる身が、せめて一年に一度の便りも爲給はず。ふゝそれも斷りよ。此頃聞けば大宮司の娘、をのの姫とやらんに深い事と承る。尤もかな自らは、子持ち席の裏ふれて、見る眼に嫌と思すれども、子に絆されて御出でか。惜に清水寺の觀世音を信じ奉り、參詣の道すがら、清水坂の片邊りに、阿古屋といへる遊君に、假染め臥しの假枕、いつしか馴れて今は早、二人の若をぞ設けける。兄のいやいし六才、弟のいや若四才にながらも、兵法の打ち太刀し、武道を敎ふる志し、類ひ稀にぞ聞こえける。斯かる所へ惡七兵衛景清は、重忠を打ち損じ、やう〳〵として清水や、阿古屋が庵に着き給ふ。女房子供を引き連れ「こはは、我平家の御恩を雜せんため、鎌倉殿を狙へども其甲斐無く、一兩年は尾張の國、熱田の大宮司に匿まはれ、空しく月日を送りし所に、此度畠山の重忠、東大寺再興の奉行に上るを好き機と、先づ重忠を狙はんため、吾身を賤しき下郎に爲し、既に間近く付け寄せしが、運強き重忠にて、我等が智案露れ、本意無くも打ち損じ、一向に重忠と刺し違へ、死なんとは思ひしが、思へば御身が懷かしく、子供が顏をも見まほしく、無念ながらも存へて、扨唯今の仕合はせなり。誠に久しく會はぬ間に、子供もいたう成人し、御身もすんぜ女房を仕上げたり。何でも今宵はしッぽりと、積もる辛さを語らん」と、しと〳〵寄れば「ええ禁耀らしい。斯く浪人の憂き身といひ、殊更敵を持ッたる身が、せめて一年に一度の便りも爲給はず。ふゝそれも斷りよ。此頃聞けば大宮司の娘、をのの姫とやらんに深い事と承る。尤もかな自らは、子持ち席の裏ふれて、見る眼に嫌と思すれども、子に絆されて御出でか。惜

同聲の文飾。
○若こそ無かりけれ　此曲不思議に此句を結末とする段が多い。唯最後の結びと第二段から「をのの姫道行」の段へ移る處ばかりは然も無かッた。但し後者は段の切れとは云へぬ。それ故此曲は最後の結び一つしか違ッたものは無いことである。殊に第二第三第四の曲には更に「感ぜぬ」の句を添へた處まで一致して居る。

❶第二
○新を負へる山人も云云　山人も花の陰には立ち寄る、即ち色は知る。それと同じく景清も觀世音に參詣の道から終に戀ひと爲ッたとの義。山人も景清も觀世音を信ずるとの義では無い。「花の陰」の「陰」の語から直ぐと同聲の「景清」に續けた。
○假染め臥し　假の契り。
○いやいし、いや若　景清の子の名。
○いたう「いたく(甚く)」の音便。非常に。
○ずんど女房を仕上げたり　ずッと女ッ振りが好く爲ッたとの義。
○しとゝ　じッと
○しや本に「しや」は感歎詞
○しかじか　親しく。
○八幡八幡　誓ッて物を言ふ時の感歎詞。
○犬が食ふとや「めをさ爭ひ犬も食はぬ」との俚諺の轉用。
○いやいし　景清の子の名。
○一七夜　滿一週間。
○通夜　神佛の堂

氣するでは無けれども、浮き世狂ひも齡に據る。しや本に可笑しいまで、善い譏嫌ぢや」と有りければ、景清打ち笑ひ、「これは迷惑。其大宮司の娘をのの姫には、しか〳〵物をも言はばこそ。八幡〳〵然うした事で更に無し。其方ならで世の中に、愛しい者が有るべきか」と、猶こそ凭る袖枕。阿古屋も心打ち解けて、思ふあまりの小爭ひ、犬が食ふとや是ならん。銚子杯携へて、いやいしに酌取らせ、三歳積もりし物語り、語らひ明かし給ひける、契りの程こそ懷しけれ。景清曰ふやう「我久しく尾州に蟄居して、觀音參詣怠れり。在京の間は一先づ日參の志し有り。然りながら、是より每日往來せば、人の咎めも如何なり。とゞろきの御坊にて、一七夜は通夜申す。やがて歸り對面せん」と、編み笠取ッて打ちかづき、表を指して出で給へば、いやいし門まで送り出で「さらば〳〵」の小手招き、しほらしかりける生ひ先なり。茲に阿古屋が一腹の兄、いばの十藏廣近は、北野詣でを爲たりしが、大息ついで我家に歸り、いもうと妹の阿古屋を傍に招き「是を見よ。誠に果報は寢て待てとや、悪七兵衛景清を討ッてなりとも參らせたる者ならば、勳功は望み次第との、御制札を立てられたり。我等が榮華の瑞相此時と覺えたり、兵衛は何處に有りけるぞ。早六波羅へ訴へて、一角御恩に與らん。いかに〳〵」と申しける。阿古屋は暫し返事もせず、涙に暮れて居たりしが、「なう兄上。そもや御身は本氣にて曰ふか、但しは狂氣し給ふかや。妾が夫にて候へば、御身のためには妹婿。此子は甥にて候はば、誰れか有らう景清と、飛ぶ鳥までも落ちし身が、今此世にて候へばこそ、數ならぬ我々を、賴みて御入り候ふ物を、たとへば日本に唐を

に參籠して終夜祈ること。
○生けらぬ内　存命中。
○いなせ　古言。否應の義。それから轉じて安否の義。

添へて給はるとて、そもや訴人が成るべきか。飛ぶ鳥懷に入る時は、獵人も助くるとよ。昨日までも今日までも、隔てぬ中をそもやそも、遁れう物か然りとては、人は一代名は末代。思ひ分けても御覽ぜよ」と、泣いつ口說いつ止めける。十藏から〳〵と打ち笑ひ、「名を惜しんで德を取らぬは、昔風の侍ひとて、當世は流行らぬ古るい事。其上御邊が夫よ夫よなんどとて、心中だては爲けれども彼の景清はな、大宮司が娘をのの姬に最愛し、御身が事は當座の花、後悔するとも叶ふまじ。女さかしくて牛賣られぬとは御分が事ぞ。諸事は兄に任せよ」と、飛んで出づれば又引き止め、「いや大宮司の娘は人の言ひ做し、惡口ぞや。景清殿に限り左樣の事は候ふまじ。よし人は兎も角も、妾が二世の夫ぞかし。然ほどに思ひすゑ給はば、子供も妾も害して後、心の儘になし給へ。やあ生けらぬ内は叶はじ」と、縋り付きてぞ泣き給ふ。然る所へ「熱田の大宮司よりの飛脚なり。景清樣の御旅宿は是にてや候ふらん」と、やがて文箱を出だしける。十藏出合ひ、「如何にも〳〵。是は景清殿の旅宿にて候ふが、宿願有ッて兵衛殿は、清水參詣致され候ふ。御文預かり置き、歸られ次第見せ申さん。明日御出で候へ」と飛脚を歸し、兄弟文を開いて見れば、をのの姬の文にて有り、「かりそめに御のぼりまし〳〵て、いなせの便りも爲給はぬは、兼々開きし阿古屋といへる、遊女に御親しみ候ふか。未來を掛けし我契り、いかが忘れ給ふか」と、細々とぞ書かれける。阿古屋は讀みも果て給はず、はッと急きたる氣色にて、「恨めしや腹立ちや、口惜しや嫉ましや。戀ひに隔ては無きものを、遊女とは何事ぞ。子の有る中こそ誠の妻よ。斯くとは知らで果敢無くも、大切がり愛しがり、心を盡くせし

○りんゑ　猶豫。

悔やしさは、人に怨みは無きものを、男畜生いたづら者。ああ恨めしや無念や」と、文寸々に引き裂きて、喞ち恨みて泣き給ふ。理とこそ聞こえけれ。十藏悅び、「それ見たか。此上は片時も早く訴人せん。最早思ひ切ッたか」と言へば、「ふゝ何しに心の殘るべき。せめて訴人してなりとも、此恨みを晴らして給べ」、「げに宜き合點」と立ち出づれば、又「しばらく」と引き止め、「とは言ひながら、如何に恨みが有ればとて、夫の訴人は成るまいか。いや又思へば腹も立つ。憎いは女め。ええ是非も無や」と、或は止め或は勸め、身を悶えてぞ歎かるる。十藏袂を振り切ッて、「ええりんゑしたる女かな。其處退け」と突き退けて、六波羅指して急ぎしは、了簡も無き次第なり。斯くとは知らで景清は、清水寺に參籠し、轟きの御坊に通夜申し、同宿達に雙六打たせ、助言してこそ居られけれ。頃は卯月十四日、夜半ばかりの照る月に、直兜五百餘騎、江馬の小四郎大將にて、訴人の十藏眞先に駈け、轟きの御坊を、二重三重に取りまはし、鬨の聲をぞ作りける。元來堪へぬ荒法師、門外に突ッ立ッて、「そも此寺は田村將軍此方、守護不入の靈地なるに、狼籍は何者ぞ。夜盜なんぞと覺えたり。あれ小僧共討ち取れ」と、聲々に呼ばはれば、江馬の小四郎駒駈け寄せ、「然ふ曰はれそ法師達。御坊に科は無けれども、平家の落人惡七兵衛景清、今宵是に籠もりし由、いばの十藏訴人に據ッて、義時討手に向かふたり。異儀に及ばば寺とも曰はせじ、沙門とも言はすまじ、片端切ッて切り散らせ」と、曰ひも敢ぬに、「惡七兵衛是に有り」と切ッて出る。當陸の律師叡範此由を見るよりも、「慈悲第一の此寺にて、信心の行者を空しく討たせては、觀世音の誓願は如何ならん。防げや〳〵法師輩。支へよや

下僧共」。「承り候ふ」と、衣の袖を絞り上げ、得物〳〵を提げて、三十餘人の荒法師、五百餘騎が四方に分かッて、隙を有らせず防げども、景清は飛鳥さささへて、命を惜しまず戰ひける。五百餘騎が四方に分かッて、隙を有らせず防げども、景清は飛鳥の術を得たれば、左右無く討たれんやうも無し。双方白みて扣へたり。景清爆端に突ッ立ッて「今宵の訴人は妻の阿古屋、同じく兄の十藏と覺えたり。おのれ數年の恩愛を振り捨て、大欲に耽る愚人共、勿體無くも此御寺に、血をあやす奇怪さよ。迚も世に無き某が、己等が身のためならば、何條命惜しからん。人多く討たせんより、女房兄弟折り合ひて「搦め捕れ」とぞ喚きける。十藏が下人二三太といふ者、分別も無く飛んで掛かる。景清にッこと打ち笑ひ、傍に有りける雙六盤、片手に取ッて投げ付くれば、二三太が眞甲に、響き渡ッてばッしと中たれば、首は胴にぞ呑みける。「おおでッくともせぬ丁稚奴が、手柄爲さうに見えけれども、ぐし〳〵と爲りけるは、誠に愚人夏の蟲」と、譏れて立つ處を、十藏續いて切ッて掛かる。景清長刀おッ取り延べ、「蟲同前の木端武者、婆婆の訴人は是までぞ。閻魔の廳にて訴人せよ」と、受けつ流しつ切り結ぶ。江馬の軍兵之を見て、「訴人討たすな加はれ」と、どッと連れて押し隔つる。「心得たり」と景清は、甕門を木立てに取り、入りかへ〳〵大勢を左右に受け、眉間眞甲鎧ひの外れ、切らば餘さず打ち立つる。「こは敵はじ」と軍兵共、十藏を引ッ包み、六波羅指してぞ引きにける。景清「今は是まで」と、音羽の山の峰を越え、梢を踏み分け巖を起こし、飛び越え跳ね越え刹那が間に、飛ぶが如くに東路指して落ち行きしは、誠に稀代の武夫やと、扨感ぜぬ者こそ無かりけれ。

○あやす　古言。ほどばしらせる、走らせるなどの義。

○でッくとも　丁稚と同聲の文飾。「びくとも」の義。

●第三

○斯くて其後　是も「者こそ無かりけれ」を好一對。此曲第三、第四、第五は總べて是から始まッた。

○陳ぜば　一種の慣用から、此語には「偽りを申すならば」の義を含む。

○力無く　所據無く。

○たッては　强ひて言ふのは。

第三

斯くて其後、惡七兵衛景清行方知れず成りたれば、最も天下の御大事と、諸國の由緣を詮義あり、中にも熱田の大宮司は、「現在の舅とて、千葉の小太郎搦め取ッて、警固嚴しく打ち連れさせ、六波羅に引ッ据ゆる。梶原源太大宮司に對面し、「汝は當家の大敵、平氏の落人景清を、婿に取るのみならず、剩へ行方も無く落としける、罪科甚だ輕からず。何方へ落としけるぞ眞直ぐに申せ。少しも陳せば拷問せん」と、はッたと瞰んで恐りける。大宮司聞き給ひ、「仰せの如く景清とは、緣を結び候へども、去年の春國元を立ち出で、今に便りも候はず。土も木も源氏一統の御代なるに、一旦陳じ申すとて、隱し遂げられ申すべきか。婿に取りしを曲事とて、誅せられんは力無く候ふ。行く方に於いては存ぜぬ」と、詞涼しく申さるる。重忠仰せけるは、「尤も〳〵。たとへ行く方を知ッたればとて、婿の訴人は致されまじ。たッては此方の無重寶。如何に梶原殿。彼の景清は仁義第一の勇士なれば、所詮大宮司を牢舍させしと傳へ聞かば、舅の難を救はんため、己と名乘ッて出でん事は、目前に見え候ふ。此儀は如何に」と有りければ、各評定尤もと、六波羅の北の殿に、新造の牢を建て、大宮司を押し籠めさせ、嚴しく番をぞ……

をのの姫道行

せさせける。人に辛くは當たらねど、何の報いや袖の露。涸れも果てなでをのの姫、いたはしや去歲の春、夫は都へ往にしより、阿古屋の松の夕時雨、染め着けられて若紅葉、戀ひ散らんと明け暮れ

●をのの姫道行

○せさせける　前の段からの送りの句。

に、人目包みてくゆ〳〵と、案じ煩ふ身の上に、父は都の六波羅へ、擒となりて淺ましや、憂き目に遇はせ給ふとの、其音づれを聞きしより、思ひに思ひ積み重ね、せめては憂きに代はらんと、乳母ばかりを力にて、旅の衣で涙つめたき紅に、紅裏濡れて夕ぎれし、空飛ぶ鳥の歸るさに、物わすれせぬ故郷の、風も吾身に吹きかへて、今の門出を終りぞと、國の名殘も包ましく、身の種蒔きし産の神、熱田の宮居伏し拜み、父と夫とを安穩に、惡魔秡へと取る弓の、桑名の船に梶枕。しきねの苦の荒蕪、肌に荒れて辛ければ、戀ひする蜑が鴛鴦の、よるの衾と見るめかや。潛く枯る藻は何々ぞ。歌に詠まれし鹿尾菜や。かだめ甘海苔春も又、若布雜りの目指し儘す、鹽屋が軒に竹見えて、幼鶯音をぞ啼く。花に紛がひの櫻海苔、天を濕せば雲海苔に、月を包みて刈るとは爲れど、手には取られぬ桂男のふくいぶりさは、何時青海苔も堅海苔と、身の相艮布を神馬藻や、あら珍らしと荒布刈る、二見の浦は遙々と、松の群立ち色の濱。蒔繪にかくも似たるよな。後は白雲とばかりを、故郷の夢と空さめて、庄野に續く鼈山は、誰がため永き萬代ぞと、喞つ涙は堰きとめて、何をか關の地藏堂。せめて未來を願まばや。上り下りて坂の下。谷の川瀨にがらころと、鳴るは河鹿の鳴く聲か、小石流れて行く音か。いや、水の泡散る、玉で無いよの駒の膝節。更けて藁打つ土山や。伊達の旅路に行くならば、買ふても給もれ水口の、葛籠緒笠に露漏りて、己が儘なる鬢水は、櫛に溜まらぬ亂れ髮、疾く〳〵行けば洛陽や、六波羅にこそは着かれけれ。扨父上の御座します、牢屋は何處なるらんと、此處彼處に佇み給へば、折りもこそあれ梶原源太、町巡りして

○くゆ〳〵と　今いふ「くよ〳〵よと」。

○しきね　敷いて臥す事。

○青海苔　此邊海の縁で海藻を聯ねた文飾。是も其一つ。何時「逢はう」と掛けた。

○堅海苔　同前。

○逢ふ事も「難し」と掛けた。

○相艮布　同前。身の「さがなさ」に掛けた。

○荒布　同前。「あら珍らし」と同聲の文飾。

○圧野、鼈山　共に地名。鼈の齢は萬年といふところから、下に「永き萬代」と出した。

○關の地藏堂　何をか「堰き」と掛けた。

○河鹿　蛙の一種。此から浮いた調子になる。

○ちりからころり　鈴鹿山の「鈴」の縁語。

○土山　地名。「搗」に掛けた。

○疾く疾く　「解く」と掛けた。急いての義。

○己おもすは　恐れ入らなければ。

歸るさに、此體を屹と見て、「彼奴が有り樣唯者ならず。何者ぞおゝ」と咎めける。姫君聞こし召し、「さん候ふ。みづからは尾張の國、大宮司が娘なるが、故も無きに父を捕られ候ふゆゑ、我命に代はらんため、是まで參り候ふ」と、曰はせも果てず景季、「おゝ皆まで言ふな。己が親の大宮司に、景清が行く末曰へと言へども知らぬと曰ふ。己は夫婦の事なれば、よも知らぬ事は有るまじ。既に清水坂の阿古屋は、子の有る中を振り捨てて、一度注進申せしぞや。有りの儘に白狀せよ」と、小腕取ッて忿りける。「なう恨めしや命を捨てゝ、是まで出づるほどの心にて、たとへ行く方を知ッたればとて申さうか。此上は水責め火責めに逢ふとても、夫の行く方は存せぬなり。唯父上を助けて給べ」と、聲も惜しまず泣き給ふ。「おゝ曰ふまでも無い事さ。已がちずば唯置かうか」と、高手小手に縛り付け、六條河原に引き出だし、種々に梻問したりしは、喃情無うこそ見えにける。梶原親子が奉行にて、方一町に籬を結ひ、突く棒刺す叉鐵の棒、兵具ひッしと並べしは、さながら修羅の獄卒が、八逆五逆の罪人を、苛責に掛くる如くなり。いたはしやをの〳〵の姫、荒き風にも當てぬ身を、裸になして縛に掛け、十二の障子に胴中を縛り付け、哀れも知らぬ雜人共、湯桶に水を注ぎかけ〳〵、「落ちよ〳〵」と責めけるは、「唯瀧つ瀨の如くにて、眼も當てられぬ氣色なり。無殘やなをの〳〵の姫、息も早絶え〳〵に、心も亂れ目眩めき、既に最期と見えけれども、いや〳〵武士の妻となり、心弱くて叶はじと、然あらぬ體に持て做し、「いかに方方。夫の景清常に清水寺の、觀世音を信向し、我にも信じ奉れと、深く教へ給ふゆゝ、今とても尊號を、絶えず稱へ奉れば、此水は觀音の甘露方と覺えたり。今此水にて死する

命は惜しからず。夫の行く方へを知らぬぞや。千日千夜も責め給へ。南無や大慈大悲の觀世音」と、苦しき體を押し隱し、潔くは曰へども、流石強き拷問に、聲も濁りて身も震ひ、弱々と爲り給ふ。扨も悲しき次第なり。「此分にては落ちまじきぞ。やれこぼく責めに爲よや」とて、細首に繩を付け、松の枝に打ち掛けて、「えいや〳〵」と引き上ぐる。下ろせば少息を繼ぎ、引き上ぐれば息絶ゆる。哀れといふも餘り有り。「たとへば如何なる鬼神も、是にては落つべし」と、二三度四五度責めければ、今は斯うよと見えけるが、又眼を開き、「なう掘原殿。此木の上に釣り上げられ、世界を一目に見下ろせども、夫の行く方は見え申さず。方々も愍みに、ちッと上がッて見給はぬか。是へ〳〵」と有りければ、景時腹に据ゑかね、「扨々しぶとき女かな。此上は引き下ろし、火責めにせよ」と、炭薪を積み重ね、團扇を持ッて扇ぎ立て〳〵、天を霞めし黑烟りは、焦熱地獄と言ひつべし。既に責めんとせし所に、惡七兵衛景清、何處にてか聞きたりけん、諸見物の其中を、飛び越え跳ね越え雛の中に踊り入り「こりや景清ぞ見參」と、邊をはッたと睨めまはし、二王立ちにぞ立ちたりける。姫君はッと驚き潰れ、立ち寄らんとし給へば、人々取ッて引き据ゑ「すは景清を通すな」と、一度にはらりと取り周す。景清から〳〵と笑ひ、「ええ仰々し。此景清が隱れんと思はば、天にも上がり大地をも潜らんずれぞも、妻や舅が憂き目を見る悲しさに身を捨てて出でたれば、最早氣遣ふ事は無し。さあ寄ッて繩を掛け、六波羅へ連れて行け。妻や舅を助けよ」と、手向かひしてんず氣色無し。姫君涙を流し、「口惜しの有り樣や。みづからや父上は、生きて甲斐無き浮き身なるに、御身は存へ本望遂げんと思さず

○こぼく責め　木につるして責めること。

して、何とて是へは出で給ふ。淺ましの御所存や」と、又さめ〴〵と泣き給ふ。景清も涙を押さへ「お賴もしの心體や。人は素性が恥づかしし、子中をなせし阿古屋奴が、夫の訴人を爲たりしに、御身は命に代はらんとは、賴もしや嬉しやな。然りながら、父大宮司の御事、心もと無う覺ゆれば、御身は是より疾く〳〵歸り、菩提を訪ふて給び給へ」と、鬼を欺く景清も、不覺の涙を流しける。理せめて哀れなり。此事六波羅へ聞こえしかば、重忠大宮司を同道にて、六條河原に馳せ來り、「扨も景清人の難儀を救ひ、我身を名乘ッて出でらるる段、近頃神妙、尤も斯うこそ有るべけれ。此上はののの姫大宮司共に、御赦免なさるる條、景清に繩を掛け、急ぎ引き立て申すべし」。畏まッて人々、繩よ綱よと犇めけば、景清悅び、「それこそ望む所よ」と、千線の繩を掛かり、先に進めばをの姫、「なう自らも諸共」と、駈け出で取り付き泣き給ふを、大勢中を押し隔て、邊を拂ッて引ッ立て行く。彼の景清の心底、勇有り義有り誠有り、前代未聞の男なりとて、皆感ぜぬ者こそ無かりけれ。

第四

斯くて其後、實にや猛將勇士も、運盡きぬれば力無し。不便やな景清、鎌倉よりの評定にて、六波羅の南面に、始めて牢を立てさせらる。櫟白樫楠の木榲の木、長さ一丈に取らせ、地へは七尺堀り入れ、上三尺の詰め牢に、矢籠の木を以ッて雲手格子に切り組んで、一尺二寸の大釘の、裏をかへさず打ちたれば、劍を植ゑたる如くなり。七尺寬の景清を、二重に取ッて押し入れ、上を七輪に束ねて、七方へこそ釣ッたりける。足を牢より引き出し、左手右手へ取り違へ、山出し七十五人して、曳いた

●第四

○矢籠の木　やぐらに用ゐる木。

る楠の木にてあげほだしを打たせ、膝錠つめがねたう〳〵ぐるゝ、千引きの石材木を積み重ね、首には根堀りの大砲を、二本までかづかせたり。諸人に見せて恥お掻かせよと、番も嚴固も付かざれども、中々五體働かず、然れば文王は羑里に捕らはれ、公冶長は刑戮に罹れり。君がため名のため、何ぞ嘗て討たれんと、觀音經の讀誦の外、世間口を閉ぢたれば、聲聞耳に鎖せり。動く物は兩眼のみ。見る眼も悲しく哀れなり。いたはしやをのの姫、不思議の命助かり、牢屋近きに宿を取り、酒果物を調へて、牢屋の格子に立ちかかり、勵り給ふぞ哀れなり。やう〳〵として景清心地善げに酒を飲み「今日は一入骨髓に徹ッて侯ふ。誠に御身の志し何時の世にかは忘るべき。扨假り初めながら某は天下の朝敵。定めて最期も遠からじ、今景清が生きたる顏を形見にて、疾う〳〵御身は尾張へ下り、後世訪ふて給び給へ。是に付けても阿古屋奴が、心體の恨めしさよ。二人の子供も今は早殺して捨てつらん。思へば〳〵景清が運の盡きこそ口惜しけれ」と、恨み嘲ちて泣き給ふ。姫君も涙を流し、「御仰せは然る事なれども、迚もみづからは、御最期の先途を見届け、兎にも角にも爲り參らせん。一日も一時も、御命の有らん內は、徃生の御いとなみを、心に掛けて何事も、定まる事と思し召し、人を恨み給ひそよ。何時までも是に有りたく侯へども、人目繁う侯へば、明日又參り申さん」と、泣く〳〵歸り給ひける。是は扨置き阿古屋の前、いや石いや若諸共に、山崎山の谷陰に、深く隱れて御座せしが、景清牢舍と聞くよりも、吾身も有るに有らばこそ、六波羅に走り付き、此體を一目見て、「喃あさましの風情やな。やれ彼れこそ父よ。わが夫」と牢の格子に縋り付き、泣

○後先の踏まへ　兎角の考へ、行き屆いた考へなどの義。

○ほだし　もと馬の脚などを繋ぐ繩。

くより外の事ぞ無き。景清人の眼に角を立て、「やれ物知らずめ。人間らしく詞を掛くるも無益ながら、斯ほどの思愛を振り捨て、夫の訴人を爲ながら、何の生面下げて今此所へ來りしぞ。己指一つ叶ひなば、摑み拉いで捨てん物を」と、齒噛みを爲してぞ居られける。「實に御恨みは理なれども、妾が事をも聞き給へ。兄にて侯ふ十藏、訴人せんとせしを、再三止めて侯ふ處に、大宮司の娘をのの姫とやらんより、親しき御文參りしゆゑ、女心の淺ましさは、嫉妬の恨みに取り亂れ、後先の踏まへも無く、當座の腹立ち遣る方無く、兎も角もと申しつる、後悔先に立たばこそ。然はあれながら、嫉妬は殿御の愛しさゆゑ〻女の慣らひ、誰が身の上にも侯ふぞや。申し分け致すほどに、皆言ひ落ちにて侯へども、今までの好しみには道理一つを聞き分けて、唯何事も御免有り、今生にて今一度、詞を掛けて給び給へ。それを力に自害して、吾身の言ひ分け立て申さん」と、地にひれ伏してぞ泣き居たる。無蓋やないやいし、父が姿をつく〳〵見て、なう「父ーほどの剛の者が、何故やみ〳〵と捕らはれ給ふぞ。押し破ッて助け奉らん」と、柱に手を掛け「えいや〳〵」と、押せども引けども搖るがばこそ。不使なりける所仕なり。弟のいや若は、ほだしの足に抱き付き、「痛いかや父上樣。なう痛むかや」と、撫で上げ撫で下げ擦り上げ、兄弟わッと叫びければ、思ひ切ッたる景清も、不覺の涙は堰きあへず、やや有ッて涙を押さへ「やれ子供よ。父が斯樣に爲りたるはな、皆彼の母が惡心にて、繩をも母が掛けさせ、牢にも母が入れけるぞ。邪慳な母が胎內より出でたる者とも思ふな子とも思はじ。はや〳〵歸れ」と叱るにぞ、子供は母に思へば、汝等までが憎いぞや。父とも思ふな子とも思はじ。はや〳〵歸れ」と叱るにぞ、子供は母に

○ねだれ歎きし有り樣「ねだれ」は强請の義。理非も殆ど無差別で悲しみ請ふ樣子との義。

○和御前　女房を差していふ對稱の代名詞。

縋り付き、「なう父を返しや、父上返しや」と、ねだれ歎きし有り樣は、眼も當てられぬ次第なり。阿古屋は餘りに堪へ兼ねて、「よし此上は自らは兎も角も、可愛やな兄弟に、優しき詞を唯一言、然りとては掛けて給べ。なう子は可愛うは思さぬか」と、又堰き上げてぞ歎かるゝ。景清重ねて、「御事がやうなる惡人に、返辭もせじとは思へどもな、今の悔やみを、など最前には思はざりしぞ。然れば天竺に獅子といふ獸有り、身は畜生にて有りながら、智慧人間に超えたれば、獵人にも捕られず、却ッて人を取り食ふ。されども腹中に、とぐくといへる蟲有ッて、此蟲毒を吐く故に、體を破ッて自滅すなり。然れば女の嫉妬の仇、人を恨むと思へども、夫婦は同じ體なれば、皆これ吾身を責むる道理。和御前がやうなる我慢口の猿智慧を、獅子身中の蟲に譬へて、佛も戒め給ふぞや。汝が心一つにて、本望遂げず剩へ、耻辱の上の耻辱を取り、今言ひ分けして、妻子が歎くを不便よとて、日本一の景清が、二度心を返すべきか。何ほど言ふても汝が腹より出でたる子なれば景清が敵なり。妻とも子とも思はぬ」と、思ひ切ッてぞ居たりける。「扨は如何ほど申しても、御承引有るまじきか」「おお諄い〳〵。見苦しきに早々歸れ。思ひ切ッたぞ」「なう最早存へて何方へ歸らうぞ。やれ子供よ。母が誤り有ればこそ、斯く詫び言致せども、つれなき父御の詞を聞いたか。親や夫に敵と思はれ、御主等とても生き甲斐無し。此上は父親持ッたと思ふな。母ばかりが子なるぞや。自らも存へて、非道の浮き名流さん事、未來をかけて情無や。いざ諸共に死出の山にて言ひ分けせよ。いかに景清殿。妾が心體是まで」と、いやいしを引き寄せ、守り刀をずばと拔き、「南無阿彌陀佛」と刺し通せば、いや若

○しなしたり　仕舞ッた。

驚き聲を立て、「いや〳〵我は母樣の子では無し。父上助け給へや」と、牢の格子に顏を差し入れ〳〵遁げ歩く。「えい卑怯なり」と引き寄すれば、「わッ」と言ふて手を合はせ、「赦して給べ堪へて給べ、明日からは大人しう、月代も剃り申さん。灸をも据ゑましやう。扨も邪慳な母上樣や。救けて給べ父上樣」と、息をばかりに泣き喚く。「おお理よ然りながら、殺す母は殺さいで、助くる父御の殺さるるぞ。あれ見よ兄も大人しう死したれば、御事や母も死なでは父への言ひ分け無し。愛しい者よ能う聞け」と、勸め給へば聞き入れて、「ああ、それならば死にましやう。父上さらば」と言ひ捨てて、兄が死骸に寄り掛かり、打ち仰きし顏を見て、「いづくに刀を立つべき」と、阿古屋は眼も眩れ手も萎えて、轉び伏してぞ歎きしが、「ええ今は叶ふまじ。必ず前世の約束と思ひ、母をばし恨むるな。追ッ付け行くぞ南無阿彌陀」と、心元を刺し通し、「さあ今は恨みを晴らし給へ。迎へ給へや御佛」と、刀を咽喉に押し當て、兄弟が死骸の上にかッぱと伏し、共に空しく爲り給ふ。扨も是非無き風情なり。景清は身を悶え、泣けど叫べど甲斐ぞ無き。「神や佛は無き世かの。さりとては免して呉れよ吾妻」と、鬼を紿く景清も、聲を上げてぞ泣き居たり。物の哀れの限りなり。斯くとは知らでいばの十藏、梶原が取り做しにて、少々勳功に預かり、若黨小者數多連れ、遊山より歸りしが、此體を見て膽を潰し、「是は扨しなしたり〳〵。不便の事を見る物かな。これ侍ひ共、我此如く御恩賞を受け、榮耀榮華に榮ゆるも、彼奴等を世に在らせんため。此咱方々尋ねしかども、其行き方の無かりしが、扨は何者ぞ偏執を起こし害せしか、但しは大宮司が計らひと覺えたり。よし何にもせよ猶景清に言ひ分

○ほッても　とても。

○うて無しのふりずんばい「うて無し」は目先の見えぬ義。「ふりづんばい」は礫を投げる竿の義。

有り、先づ〳〵死骸を取り置け」と、傍に葬らせ、牢屋に向かッて立ちはだかり、「是さ妹婿殿、如何に恨み有ればとて、現在の妻子を殺させ、腕叶はずば何政生き骨でも斷たざるぞ。内々は某御邊が命を申し受け、出家させんと思ひしが、最早ほッても爲らぬ〳〵。侍ひ畜生大だはけ」と、いかつはいてぞ申しける。景清くつ〳〵と吹き出し「こりや狼狽者。彼の者共は己が貪慾心を悲しみ、自害したるが知らざるか。それさへ有るに汝奴が口から、侍ひ畜生とは誰が事ぞ。命惜しむほどならば、斯かる大事を巧むべきか。又生きやうと思ふほどならば、へろ〳〵柱の五十や百、此景清が物の數と思ふべきや。心靜に觀音經を讀誦する嬉しさに、慰み半分に牢舍して有るものを、緩怠過ぎたる戯言つき、二言と吐かば摑み拉いで捨てんず」と、はッたと瞰んで申さるれば、十藏から〳〵と笑ひ、「其縛めに遭ひながら、某を摑まんとは、うて無しのふりずんばい。片腹痛し事可笑し。幸ひ此頃痃癖痛きに、ちッと攫んで貰ひたし」と、空嘯きてぞ居たりける。景清腹に据ゑ兼ね、「いで物見せん」と言ひも敢ず、「南無千手淺間生々世々、一文名號滅重罪、大慈大悲觀音力」と、金剛力を出し、「えいやッ」と身ぶるひすれば、大釘大繩はら〳〵ずんど切れて退いた。門取ッて押し歪め、扉をかッぱと踏み倒し、大手を廣げ踊り出で、八方に追ひ巡すは、暴れたる夜叉の如くなり。群らがる若黨中間、はらり〳〵と蹴倒し、十藏を搔い摑み取ッて押し伏せ、背骨も折れよとどうと踏まへ、「何と景清を訴人して御褒美に與り、榮華といへるは此事か」と、二つ三つ踏み付くれば、「なう悲しや。骨を碎けて息も絶え入り候ふ。御悲慈に命を助け下され」と、聲を上げて泣きにける。景清も手を叩き

○しとと　しッと。

●第五

打ち笑ひ、「おゝ某が褒美には、廣い國を取らせん」と、兩足取ッて倒さまに引き上げ、肩を踏まへて「えいやッ」と裂きければ、胴中より眞二つに、さッと裂けてぞ退きにける。「えい心地善し氣味善し」と、左手右手へからりと捨て、「さあ爲濟ましたり此上は、關東へや落ち行かん、いや西國へや立ち退かん」と、行きつ歸りつ戻りつ行きつ、一町ばかり走りしが、「いや〳〵此度落ち失せなば、又大宮司やをのの姫、憂き目を見んは治定なり」と、思ひ定めて立ち歸り、舊の牢屋に走り入り、内より門しとと締め、千筋の繩を身に纏ひ、さあらぬ體にて普門品、讀誦の聲は自から、即身菩薩の變化ならんと、皆感せぬものこそ無かりけれ。

第五

斯くて其後、右大將賴朝公、南都の大佛御再興まし〳〵、既に成就と訴ゆれば、供養の法師に急ぎ大赦を行ふべしと、天下の科人京鎗倉の牢を開き、殘らず御免なされける。中にも惡七兵衛景清は、朝敵重罪なれば助くるに所無く、佐々木の四郎に仰せ付けられ、遂に首を刎ねられ、今は四海大平なり。大佛供養御聽聞有るべしと、諸國の大名御供にて、南都に御下向爲されける。路次の行列華やかなり。既に我君小倉堤に差し掛かり給ふ時、畠山の重忠息をばかりに馳せ來り、御馬の前に脆き、「扨も惡七兵衛景清は、御成敗の由承り候へども、未だ恙無く牢の内に罷り在り候ふ。一大事の囚人なれば、早々首を刎ねられ然るべう候はん」と、謹しんで申し上ぐる。賴朝聞こし召し、「不思議の事を申す物かな。景清は佐々木の四郎に申し付け、一昨日の暮れ程に首を打たせ、則ち其首賴朝が見

參して、獄門に掛けさせしが、僻事なるかは今朝景清が生き顔を、慥に見て參り候ふ」と、言ひも果てぬに佐々木の四郎つッと出で、「いや是畠山殿。筋無き事な申されそ。其景清は某仰せ承り、高綱が手に掛け首を刎ね、我君の實見に備へ、三條繩手に獄門に掛けて候ふものを、景清が二人有るべきか。近頃粗忽千萬」と、嘲笑ふてこそ申さるゝ。重忠聞き給ひ、「尤も〳〵。御分が手にも掛けつらめ。又重忠も慥に見て候ふは如何に」。高綱色を違へ、「はて埒も無い事。一度斬ッたる景清が、蘇るべきやうも無し。それは定めて血迷ふて何がな見つらん。但しは寐惚れて夢をばし見給ふか」。「いやさ御分が狼狽へて、よし無き者を景清と思ひ斬ッたるか」。「夢を見たか」。「慌てたか」。「これ眠を覺まして思案せよ」と、氣色變はッて爭ひける。頼朝段々聞こし召し、「いか樣佐々木畠山、麁忽有る人にて無し。不思議千萬霽れやらず。是より取ッて返し、頼朝直に見分くべし」。各靜まれ〳〵」と、御馬の鼻を立て直し、都に歸らせ給ひける。さる程に三條繩手に、景清の首を斬り掛け、「平家の一族謀叛の棟梁、惡七兵衛景清」と高札を添へられたり。頼朝立ち寄り御覽あり、高綱重忠を招き、「是見られよ」と仰せける。重忠も不審晴れず、諸大名立ち掛かり能く〳〵見れば、今まで景清の首と見えけるが、忽ち光明赫耀として、千手觀音の御首と變じ給ひける。○○不思議ぞ有り難し。しかッし處へ清水寺の大僧、我も〳〵と馳せ參じ、「扨も一昨日の夜中に、佛前のしるしとて參らせ給ひ、切り口より血流れて候へば、觀世音の御首斬れて失せ給ひ、各開きて候ふゆゑ、若し盜人の業にやと、御戸を開き長床朱に染み、勿體無き御風情に

○しかつし處　然せし處。

拜まれさせ給ひ候ふゆゑ、驚き入ッて汗進申し上げ候ふ」と、事の次第を申し上ぐれば、君を始め奉り、畠山も高綱も、供奉の上下押しなべて、あッと感ずるばかりなり。君信心の感涙を流させ給ひ、「誠や景清年來清水寺の觀世音を信じ奉り、十七の春より三十七の今日まで、毎月二十三卷の「普門品を讀誦懈怠無く、修行せしと聞きけるが、疑ひも無く觀世音、兵衛が命に代はらせ給ふ有り難さよ」と、御手を合はせ給ひければ、僧俗男女下々まで、皆々禮拜して、涙を流さぬ者は無し。重ねての御諚には、「扨くては如何勿體無し、急ぎ千人の僧を供養し、一萬座の讀經かせ、御首繼ぎ奉れ。奉事の上にて景清にも對面致すべし。いざ頼朝も參詣せん」と、御身を淨め佛の御首を直垂の袖に受け入れて、清水寺への御參詣、ためし稀にぞ聞こえけれ。枯れたる木にも咲く花の、千手の誓ひぞ有り難き。斯くて頼朝御奉事も事終り、佛の御首を繼き參らせ、宿坊に入らせ給ひける。時に佐々木畠山、景清夫婦を伴なひ御前に出でらるる。頼朝御覽じ、「珍らしや景清、我を平家の敵とて、狙ひ擊つべき志し神妙〳〵。尤も武士の慣り、實に然うも有るべけれ。然れば頼朝がためには御邊又敵なれば、討ッて捨つべき者なれど、汝が身には觀世音の「入り換はりまします故、二度害せば觀音の、御首を再び討つ道理。勿體無し〳〵。若し又頼朝誅盡さて、御邊に討たるるものならば、觀世音の御手に掛かると思ふべし。此上は助け置き、日向の國宮崎の庄を當て行ふ」と、御懇誓の御詞に、御判を添へて賜はりける。景清涙を止め兼ね、「誠に身に餘りたる御諚の段、生々世々に有り難き、魂に徹ッて覺え候ふ。斯く情有る我君と知らで、狙ひ申せし景清が、所存の程こそ悔やしけれ」と、

○御土器　土器で酒を飲むゆゑ、此所では直ぐに酒の義に用ゐた。

○刄向いたる　刄を向けて來る。此邊すべて謠曲「景清」の文句を尊ぶ。

○さもしや　「や」は感歎詞。卑劣であるとの義。

○案のうち物　「案の中」から直ぐと「打ち物」に續けた。

御前をも打ち忘れ、聲を上げてぞ泣き居たり。扨御土器給はり、諸國の大名殘り無く、皆々杯さし給ふ。重忠仰せけるは、「斯かる愛でたき折りといひ、且は我君御慰みのため、和殿屋島にて功名の、樣子語ッて聞かせ給へ。内内君も御所望ありしぞ。平に〳〵」と有りければ、頼朝公を始め參らせ、滿座の人々一同に、「はや遂く〳〵」と望まるる。景清辭するに及ばねが、袴の裾を高く取り、御前に式臺し、過ぎし昔しを語りける。「いで其頃は壽永三年、三月下旬の事なりしに、平家は船源氏は陸、兩陣を海岸に分かッて、互に勝負を決せんと欲す。能登の守教經曰ふやう、去年播磨の室山、備中の水島、鵯越に至るまで、一度も味方の利無かりし事、偏に義經が謀いみじきに依ッてなり。如何にもして九郎を、打ち取る謀こそ有らま欲しけれと曰へば、景清心に思ふやう、判官なればとて、鬼神にても有らばこそ。命を捨てば易かりなんと、教經に最期の遑乞ひ、陸に上がれば源氏の兵、餘すまじとぞ駈け向かふ。景清是を見て、物々しやと夕日かげに、打ち物閃かいて切ッて掛かれば堪へずして、刄向いたる兵を、四方へばッとぞ遁げにける。さもしや方々よ、源平互に見る眼も恥づかし、一人を止めん事は案のうち物小脇に掻い込んで、某は平家の侍ひ景清と、名乘り掛け〳〵、手取りにせんと追ふて行く。三保の谷が着たりける、兜の錏を取り外し〳〵、二三度遁げ延びたれども、思ふ敵なれば遁がさじと、飛び掛かり兜を押ッ取り、えいやと引くしほに、錏は切れて此方に止まれば、主は先へ遁げ延びぬ。遙に隔てて立ち歸り、然るにても汝恐ろしや。腕の强きと言ひければ、景清は三保の谷が、首の骨こそ强けれと、笑ッて左右へ退きにける。昔しを忘れぬ物語り、御恥づかしう

候ふ」と、語り給へば人々は、一度にどッとぞ感じける。斯くて我君御座を立たせ給ひければ、大名小名續いて座敷を立ち給ふ。景清君の御背姿をつく〴〵と見て、腰の刀をするりと拔き、一文字に飛び掛かる。各「是は」と氣色を變へ、太刀の柄に手を掛くれば、景清退ッて太刀を捨て、五體を拋ち涙を流し、「ああ南無三寶あさましや。いづれも聞いて給はれ、斯く有り難き御恩賞受けながら、凡夫心の悲しさは、昔しに返る恨みの一念、御姿を見申せば、主君の敵なるものをと、當座の御恩は早忘れ、尾籠の振る舞ひ面目無や。眞平御免を被らん。誠に人の慣らひにて、心に任せぬ人心。今より後も我と吾身を諫むるとも、君を拜む度毎に、迚も此所存は止み申さず、却ッて仇とや爲り申さん。兎角此両眼の有る故なれば、今より君を見ぬやうに」と、言ひも敢ず刺し添へ拔き、両の眼球を括り出だし、御前に差し上げて、頭を項低れ居たりけり。頼朝甚だ御感有り、「前代未聞の侍ひかな。平家の恩を忘れぬ如く、又頼朝が恩も忘れず、末世に忠を盡くす事、仁義の勇士武士の手本は景清」と、數の御褒美淺からず、鎌倉指して入り給へば、猶景清は觀音に、三萬三千三百卷の、普門品を讀誦して、日向の國を本領し、悅び〳〵退出す。なほ〳〵源氏の御繁昌、國靜謐の初めなるはと、皆萬歳をぞ稱へける。

百日曾我

●第一

○火串　烽火の土臺の上の杙。轉じて此所では「烽火」の義。
○寅の一天　午前四時。

百日曾我

第一

文宣王は大野に狩りして麒麟を得。韓退之が獲麟の解に曰く、麟は德を以ッてして、形を以ッてせずと云々。麟は仁獸にして生けるをくらはず、生草を踏まずともいへり。道ある君が御狩り場や、麒麟を得ずといへども、農業をさまたげず、民をたすけて山田もる、火串の光り明々として、斐たる君子の一遊一豫。國をなびかす旗棹の、すぐなる掟樂しめり。これとき建久四年内夏下旬、征夷將軍賴朝卿、富士の御狩りの當日を、待つも程なき短か夜や、御發向は寅の一天。かり屋の木戸も明けがたに、御出馬の御ふれあり、昵近外樣の大小名、狩り裝束に美をつくし、列卒の人數は所領の高、下面々持ちの場所にまとひを立て、組み子には思ひ〳〵の笠じるし袖印。扨御鷹はつみゑつさいさしばしやうはさふさこのり、鷲角鷹はくてうとりの朝鮮鷹、揃へて三千よもとなり。逸物の犬唐犬、是も同じく三千疋。馬くら皆具の綺羅かざり、花と紅葉を武藏野に、一度に詠むる如くにて、御感は斜ならざりけり。ここに信濃國の住人海野の小太郎行氏、八十ばかりの老入道を御前にひッすゑ申すやう、「ただ今御假屋へ參勤仕る所に、此入道弓矢携へ、ほのぐらきに御假屋の邊、忍んで徘徊いたす體、さながら山賊强盜とも見えず、必定平家の餘黨と存じ、早速召しとり候ふ。きッと御糺明有るべし」とぞ申しける。賴朝聞こし召し、「先年大佛供養の時、惡七兵衛景淸が、賴朝を狙ひしためしもあ

○陳じなば　僞りを申し立てれば。

り。いか樣おのれ仔細有るに紛ぎれなし。まッすぐに白狀すべし。陳じなば拷問せん。いかに〳〵」と仰せければ、此入道ちッとも憶せず、「今は何をか包み申さん。某は一とせ奥州衣川にて、御腹召されし九郎判官義經の家臣、武藏坊辨慶が父、熊野の別當辯眞が、生き殘りたる身のはて候ふ。忝くも我君、今天下の武將とあふがれ給ふは、全く判官殿の戰功なるに、讒人の口によッて、一日も安堵の思ひなく、うしなはれさせ給ひ、子にて候ふ辨慶も、迷途の御供仕りぬ。せめて無念を晴らさん爲、討ち死にしたる御家人共が、生みすてし子にても候はば、幼少なりとも狩りあつめ、心ばかりのとふらひ軍、仕らんずる血まつりに、先づ讒者を一矢と心がけ、忍びよッたる甲斐もなく、海野とやらんに見付けられ、白狀無念の至りなれども、君故すつる老いの命。とく〳〵首を召されよ」と、返答すずしく申しける。賴朝聞き給ひ、「是一應の事ならず。後日に評議有るべき條、先づそれまではいたはれ」とて、和田の義盛に預け置かれけり。時に工藤左衛門祐經すすみ出で、「誠に彼の法師其まま置かば、何事か仕出だし、御遊興のさまたげならんに、いしくも仕ッたる海野の太郎、御褒美下され然るべし」と取りなせば、君御悅喜の餘り、「オ、尤も〳〵。何にても、褒美を望め」と仰せある。海野面目ほどこし、「御諚冥加に叶ひ候ふ。然らば御秘藏の御名馬、陸奥より召されたる、松嶋月毛を賜はりなば、千町萬町の御加增にも、まさりて悅び奉らん」と、申しもはてぬに祐經「オ、何しに御意に異變あらん。誰れか有る御馬ひけ」と取り持つ所へ、新田の四郎忠常はばからずつッと出で、「しばらく〳〵工藤殿。彼の御馬には言ひ分有り、某先年富士の人穴へ入り、御褒美望めと有りし時、松島月毛

拜領を願ひしかど、御出陣の召し料とて、某願ひかなはぬ所に、老いぼれの痩せ法師、召しとッたる御褒美とて、只今海野に賜はッては、忠常が武士道立ちがたく、且つは上の御依怙にあたり、よしそれとても工藤殿の御取り持ちにて、是非海野に下されなば、某も思案候ふが、御返答承らん」と、色を違へて申しける。祐經えせ笑ひ「緩怠なり忠常。以前は以前今は今。御邊が望みあればとて、日本の武將として、誰に恐れて御詞をたがへらるべきぞ。此祐經が取り持ちにて、海野に拜領せさせんが、して御分が思案とは何うした思案。聞かん」といへば、「いや只思案までも無し。彼御馬をどうなかより二つに切り、先づは某頭の方、海野にはとゞもの方、御前にて半分づつ、切り取るなり」と忿りける。海野もせいて膝立てなほし、「某が拜受の御馬、半分づつ切り取るとは、「愛宕白山指もささば、堪忍せぬ」とつめかくる。忠常も刀に手をかけ、「ゑゝ拜領したくばしても見よ。諏訪八幡も照覽あれ。馬人共に一討ち」と、三方論議の意地づくになり〳〵。是は左右方道理にて、頼朝が無念なり。先づ彼將あふぎを上げ給ひ「新田も海野もしづまれ

り〳〵の色里通ひ、なじみのかたも有りと聞けば、遊女の腹に情のたねの、やどるまい物でなし。よし其事はかまはねども、それからそれがどう轉けて、御兄弟の御身に、萬一お崇り有る時は、もとみづからが親入道が、仕損じより事おこる。是をあはれと思し召し、御聞きとどけ候ひて、もしも曾我殿の子だねなど候はば、御了簡頼み奉る」と、理をつくし事をわけ、手を合はせてぞ歎きける。新田聞きもあへず、「扨はお事は聞き及ぶ鬼王が妹。今朝の入道も辨慶が父とは僞り、鬼王兄弟が親なるとや。扨々よぎなき頼み事、心得たりと言ひたいが、ここに一つの難義あり。海野と某御前にて、松島月毛と云ふ名馬をあらそひ、三度の功名ある者に、賜はらんとの御諚を蒙り、兩人が我さきに、何をがな功にと、意地を張る最中、曾我は伊東の末なれば我君の御あだ、海野に先を越され、彼御馬を取られては、某腹を切るばかり。此事に於ては成りがたし。外の事は何なりとも、無心あらば聞くべし」と、云ひ捨てて乘り出だす。「なうお情なし」と尾筒を取りて引きもどし、「御ことわり至極致したり。誠にお侍ひの手がらにせんと思し召すを止むるは不重寶。その返禮に進ずる寶の候ふ」と、守り袋より一包み取り出だし、是は韃靼國より渡りたる、虎の生き爪にて候ふ。死したる虎の爪はあれども、生き爪は稀なる物。誠や虎はけだものの王にして、地を走るけだもの怯ぢ恐るるは必定。わらはが在所三河國、安部山の狩人、此虎の生きづめを、守りにかけて狩りに出づるに、いかなる荒熊あらじしも、やす〳〵手取りにいたす事、猫のねずみを取る如し。是を只今參らせん。御身につけて御狩り場にて、猪とも熊とも引き組んで、人の及ばぬ手がらを遊ばさば、海野が先はよも越さじ。

○どう轉けて　まかり間違ッて。

○尾筒　馬の尾を包む袋。

いで〳〵證據を見せ申さん。隨分御馬に鞭うち給へ」。「心得たり」と乘り出だす。娘はさきに立ちふさがり、追ひ戻せばたぢ〳〵〳〵。とどろ〳〵と千鳥足。四足を折ッて恐れしは、不思議なりける次第なり。忠常も我を折ッて悦び、「奇代の重寶手に入るからは、御狩りにて高名し、海野が望みの御馬を、拜領して名を上げん。此上は曾我兄弟、いかなる狼籍ありとても、子孫まで見のがしなり。弓矢八幡大菩薩此詞に僞りなし。お事が父も和田殿と、内通して助くべし。人見付けてはいかがぞ」と、さらば〳〵もよそ事に、聞き捨てて行く時鳥。五月のそらの雨曇りに、まぎれてこそは別れ路の、宵の移り香たきしめて、晝まで寢るを作法にて、他ともんちの揚屋町。くつわの亭主下々まで、それをならひに朝寢する、大磯小磯けはひ坂。朝顔知らぬ里ぞかし。町の番太あわただしく、「何事やらん御詮議とて、新田殿海野殿御出でなり」と觸れありく。町の年寄り五人組み、ねほれ髪に袴肩衣、土にひれふし居たりける。程なく兩人入り來り、「此度仔細有ッて、姙みたる傾城の、父親を御詮義ある。少しも僞るに於いては、腹を切りさき吟味する。懷妊の傾城共、殘らず出だせと申しける。町人共承り、「懷姙と申しても、三四人ならでは候はず、それ先づ藤屋の竹とり出でよ」と云へば、戀ひには恥ぢぬ傾城も、包む色にや胸高の、帶でかくすもしほらしく、海野新田詞をそろへ、「汝がはらみし子の親は何者ぞ。帳にしるし鎌倉殿、御らん有るぞ僞るな」。「さればとよ。此子の親は京の衆。偶々とは云ひながら、勤めで逢はねば眞實の、人目を包む闇のよや。烏丸の烏帽子屋、ふり樣」と云ひければ、海野帳にぞとめにける。「次ぎに出でしは井筒屋の、ひがきと申す新造」と、傍からい

○弓矢八幡大菩薩　武士の誓言。

○もんちの揚屋町本義未詳。

○朝顔知らぬ里　朝顔の花は見られぬ里との義。朝寐を爲るゆゑの形容。

○竹とり　傾城の名。

○胸高の帶　上の方に高く締めた帶の義。「胸苦しい」といふ意を聞かせた。

○闇の夜や…　闇夜の烏といふ所から京都の地名「烏

丸」を續け、「烏」の字の縁で「烏帽子屋」を出し、「烏帽子」の縁で名前を「おり様」を出した。

○紅葉が谷　地名。縁語「あかくなる」から續けた。

○荒磯「荒井」と同聲の文飾。共に地名。「有らぬ」の意を聞かせた。

○惡阻　懷姙した女に起こる一種の病氣。

○かね言　豫て言った言葉。

○ばいため　「め」は罵って呼ぶ語。「ばいた」は賣婬婦の方言。

○此場をさまし　此場の熱を冷まし即ち此場の厄難を遁がれての義。

○間夫男　情夫。

○みじかし　足らぬ、了簡が若いなどの義。

○あぐんで　持ち扱って。

○しし矢　猪を射るために作った矢か？

ふも耻づかしく、打ちかけのつま打ち合はせ、見せじとすれど振り袖の、下よりもるるふくよかさ。「其子が父は誰れなるぞ」。問はれて顔もあかくなる、「紅葉が谷の客なるが、ひよッと變はるな變はらじの、其言の葉で妊み句や。連歌師の山様」と、同じく帳に付けにける。其次ぎは眉目わるく、歩りきぶりさへ横町の、「青柳と申し候ふなり」。「扨汝が胎内の、子の親は何者ぞ」。「誰れと申して我身には、二人の客も荒磯の、荒井の宿の馬方。本名は六藏、かへ名は四の二物惡ふ、流れの浮き身をすてとんある〳〵、或人の申されしは、色もかほも腹も脉も唯では無い。さだめて〳〵あん、青梅好きやらば惡阻でござろ。名譽な不思議や中戸のかね言が、はや七月」とぞ答へける。扨其次ぎは虎御前、おめる色なく二人の前に立ちながら、「お尋ねなれども、みづからは、懷姙にては候はず勤めのうさが支へとなり、斯〳〵る病まひを受け候ふ、よし又懷姙なればとて、夜な〳〵かはる男の數、それがどれやらなんの其。夫に覺えの有るものか」と、云ひすて歸れば海野の太郎、「ヤイ〳〵ばいため待ちをらう。ヤアのぶとい奴め。おのれと曾我の十郎、事あるまいと思ふか。祐成が子に極はまッた。サア吐さぬか」とぞおどしける。新田曾我といふ聲に、花野が契約思ひ付き、「ヤア海野殿。浪人なれども祐成も侍ひ、推しつけてさうも曰はれず。病まひとあらば病まひにして、帳面をすまされよ」といへば、海野聞きも入れず、「宥免するも事による。曾我は君の御あだ。不吟味には成りがたし。腹を割かん」とひしめきける。忠常ちやくと思案を出だし、「ヱ、是非もなし。今は何をか包み申さん。あれは拙者が子にてあり。某虎に通ひしかど、世間をはばかり、曾我と云ふかり名をして、遣り手かぶろ花

街中、懷姙するまで隱せしが、手づめなれば打ちあける。沙汰なしに賴み申す」と、いへば虎は嬉しく、「ハテ臭性千萬な。たとへ今死ねばとて、それを今云ふ事か」と、詞を合はする利發さよ。海野かぶりを振って、「おいやるな〳〵。此場をさまし、重ねて曾我がゆかりとて、一人の手柄にせんたくみ。當座のでき合ひ、但し虎となじみの有る、證據は無く、心をくだき思ひ付き、花野があたへらうな。後に否とは曰はせぬが」と、詞をつめても證據は無く、心をくだき思ひ付き、花野があたへし猛虎の爪、守りより取り出だし、「コレ此書き付けを見給へ。虎の生き爪と書いて有る、放し呉れたる虎が爪。守りにかけたる間夫男。疑ひめさるは、合點〳〵。今朝の遺恨に胎内の、せがれを殺さうのむさい心底。びやくらい聞かぬ」とぎしめければ、誠とや思ひけん、いきほひにや恐れけん。「ヘみじかし忠常。證據あれば疑ひなし。帳面もむづかし」と、虎は病まひにかた付ける。新田が思案なかりせば、あやふき曾我の運命なり。かゝる所へ海野が方へ、祐經よりはや使ひ、「富士野の御狩りまッさい中、然るに只今いく年經るとも知れぬ猪、あれ出で、列卒四五十人かけ殺し、各あぐんで見え候ふ。御詮議早く御しまひ、此ししとめて高名し、望みの御馬拜領あれ。事急なり」とぞ告げたりける。海野は「あッ」と云ふよりも、挨拶もなくかけ出だす。「おくれじ物」と新田の四郎、一散にかけ出でて、後になり前になり、足もためず走りしは、さながら競馬の如くなり。案の如く狩り場には、幾年ふりし猪の、牙は劒の如くなるが、し矢三つ四つ負ひながら、近づく者を懸け倒し、ふちあふ者を蹈みちらし、大きに呀ッて巖窟を、木立てに撐へ鼻を吹き、寄らば懸けんず其勢ひ。人々馬を

立ちかねて、列卒も亂れてただよひける。やうゆうが衛きよりくりうが神變も、かなふべしとは見えざりけり。君國扇をひらめかし、「誰れかある。あの猪とめ高名せよ」と呼ばはり給へば、武藏の國の住人太樂の平馬の丞。某とめて御酒宴の、御肴に」と、夕日にかがやく大太刀かざし出でたりける。猪は巖に身を伏せて、飛びかからんとする氣色。ただ牛鬼ともいッつべし。詞には似ざりけり。面もふらず逃げてゆく。平馬が姉婿愛敬の三郎、熊手提げかけ向かふ。猪は身を振り飛び懸り、左手の腕をかけきれば、熊手を捨ててぞ入ッてけり。安西の彌七郎「かへせ〳〵」と聲をかけ、長刀かまへかけ向かふ。猪はいかッて牙をみがき、唸りてかかる其聲も、高ももをひッかけて、三間ばかりふり上げしは、鞠の曲ともいッつべし。臼杵の八郎景信つづいてかかれば隙き間もなく、眉間を二つに引きかけられ、眼くらんで引いたりけり。御所のくろ彌五是を見て、大の尖り矢打ちつがひ、暫し固めて切ッてはなす、矢よりも早く飛び來り、腰のつがひを横がけに、ざッふとかけてぞ落としたる。岡部の三郎原小二郎、鎗ひッさげて兩方より、上段下段のつつみ突き。はッし〳〵と突きかかる。猪は一期の死にぐるひ、ひらりと飛んではかッしと跳ね、くるりと廻はッてちやうぞかけ、くるり〳〵はた〳〵〳〵。蝶鳥なんどの如くにて、ひるむ氣色の見えざれば、二人もあぐんでさッと引く。猪は岩根に身をちぢめ、花の嵐にたけりをかき、息つぎしたる有り樣は、凄まじかりける次第なり。心開のあら四郎、「憎し穢し方々よ。鬼神にてもあらばこそ。あの畜生に恐れては、誠の合戰なるべきか。某が打ちころし、皮引ッ張いであふりにせん」と、つく棒取りのべ打ッてかかる。猪は睨

○あふり　馬の泥よけ。

○しや　感歎詞。

○刹那に　息一つする間に、即ち瞬間の義。

○尾筒　尾の根の脹れた部分の稱。

○行騰　騎馬の時に腰に付ける具。

○大わらは　亂れ髪。

んで牙を鳴らし、只一かけと唸りけり。此いきほひに恐れをなし、突く棒からりと投げ捨てて、鹿垣を推し破り、高ばひして逃げければ、數萬の狩り人聲をあげ、一度にどッとぞ笑ひける。海野小太郎行氏眞一文字にかけ來り、「この猪を組み留めなば、高名三度にたらずとも、御馬を拜領いたさん」と、小太刀をかいこみ躍りかかれば、猪は透かさず一足に、飛ぶとぞ見えしが小太郎が、膝口よりくろぶしまで、まッくだりにかけ通せば、片足立ッてちが〳〵と、列卒の中にぞ逃げ入りける。今は折り合ふ者もなく、いたづらに守り居る所へ、新田の四郎忠常後ればせに驅けつき、「あら物々し仰々し。漢の李廣は石虎を射る。明の金氏は女なれども、猛虎を擊ッて夫をたすく。たとへ鐵石をまろめたる猪、なりとも、しや何事か有るべき」と、簸竹笠かなぐりすて、「えいやおう」と聲をかけ、二丈あまり飛びあがり、向かふさまに乘りうつれば、倒にこそ乘ッたりけれ。猪は乘られていかりをなし、土をけたて木の根をうがち、雲と霞みにわけ入ッて、飛びこへ跳ねこへ、駈けのぼりかけ下り、虛空を飛んでまはりしは、周の穆王法の爲、八疋の龍馬に乘じ、萬里を刹那に至りしも、斯くやらんとぞ見えてける。新田は馬上の名人にて、樂天がみつがしら、王良が秘密の鞭、尾筒を手綱にしッかとどり、腰も切れよと締め付け〳〵、くつ石膝は山おろしに、さら〳〵さッと斷れて退けば、大わらはに亂れなッて只落ちじ〳〵落ちまじとぞ堪へける。小笹茅原岩石枯木、打ちつけ〳〵吠りをかき、落ちばかけんとあがきしが、新田は虎の爪をもつ、其威勢にや恐れけん。とあるふし木につまづきて、よわる所を誤またず、差し添へ扱いて肋骨、四五枚はらりと掻き切れば、四足を土にふみ入れて、立

ちすくみになる所を、頓てひらりと飛んで下り、數の止めを然しもの猪、しとめて新田は優々と、扇を遣ふて立たれば、大將軍を始めとし、大名小名列卒かり人、足輕あらしこ一同に、「のッたり新田とめたり四郎。出來いた〳〵手柄〳〵。いや〳〵ぞッ」とわめく聲。山もくづるる如くなり。賴朝御感限りなく、「新田が振る舞ひ、千度百度の高名にもまさりたり。松島月毛を取らするなり」と曰へば、祐經すすみ出で、「松島月毛の事は、高名三度ある者に、給らんとの仰せなるに、たと〳〵鳴る雷とくめばとて、三度の都合も合はざるに、忠常に賜はりては、海野の太郎に腹きれよとの仰せかや。先づ此度は御無用」と、たッて止むれば力無く、「先づ〳〵休息仕れ」と御本陣に入り給へば、大名小名八數をつき、「皆々假屋に入り給ふ。新田の四郎忠常本意なげに見送り「ニヽにッくい祐經。海野と己線者故、彼奴に譽まれを付けんため、度々我に恥辱をあたふ。出頭一の祐經が首取ッて、高名三度の都合にせん」と立ちあがる所へ、若者一人木蔭よりつッと出で、「申し〳〵新田殿。前代未聞の御手がら。目をおどろかし候ふ。拙者は曾我の十郎祐成と申す者。先刻くるわにて虎が難儀を御身に受け、救はせ給ふ御懇切。生々世々の御厚恩。御禮申し上げ候ふ」と、かうべを地につけ禮義をなす。「扨は承り及ぶ十郎殿か。某猪をとめたるも、御家來鬼王が妹、虎の爪をあたへし故、其契約にて虎御前を、助け申し候へば、お禮は爲替に仕る。此爪返辨申す間、花野とやらんに返して給べ。某は祐經めを、討たでかなはぬ意趣あり」と、飛んで出づるを引きとどめ、「コレ申し重ね〴〵の御無心なれども、祐經は我々が大事の親の敵。御自分に討たれては、曾我兄弟が侍ひ立たず、しばしの無念をや

○終しもの猪　止めを「刺し」と掛けた。

○爲替に仕る　雙方に一つ宛の禮をいふべき事がある故、何れも禮を曰ふまいとの義。

○御座らうか　御出でなさるるか、即ち「最う御歸りですか」の義。

●第二

すめられ、彼奴を我等に討たせてたべ。やす〳〵と討ちおふせ、御所近く切り入らん。時には狼籍入りたりと、折り合はんは必定。千騎萬騎が防ぐとも、我々兄弟物の數とは存せねども、新田四郎忠常と、御名乘りを聞くならば、首さしのべて討たれ申さん。然れば我等も本望とげ、貴殿は三度の高名なり。聞き分けてたべ新田殿」と、理を盡くしたる詞の末、忠常うなづき、「ヲ、出來た〳〵面白し。然あらば祐經討ち給へ。和殿が首は貰ふたぞ」。「いかにも遣ッた。忝ない。それまで隨分御健固に」。「そなたも御無事に」。「お暇申す」。「御ざらうか」。「首をとッたり」、「やるまぞの」、「先づ是が」、「お暇乞ひ」と、たがひの一禮こま〳〵と、降る五月雨や袖がさの、竹笠取ッて打ちかづき、新田は假屋、曾我は伏せ屋に立ち歸る。のべも述べたり、答へも答へたりのふの、詞の末は神妙。神妙〳〵なりとて、後に聞く人感じけり。

第二

己が人に及ばざるを恨みず、人の己に過ぐるるを妬むは小人の慣らひ。されば海野小太郎行氏新田と武功のあらそひ、蝸牛の角のつのめ立ち、挑み鬪むといへども、新田が猪に乘りたりし、功名に續く功名もがなと、心は強情手は立たず、空しく氣根を費やしける。もとより祐經線者といひ中よしなれば、彼辨慶が父辨眞と、名乘りし津藏の入道を、鬼王が親とは夢にも知らず、和田に預け置かれしを、工藤祐經取り成しにて、暫らく申し預かり、此辨眞を目印にて、狩り場の見物群衆の中を、東西南北引き通り、若し見知ッたる者あらば、それぞ義經の家來筋。鎌倉殿の御敵と、召し取ッて高名

し、新田が功名を踏付けんと、企む思案もまはりぞほき、野山を引いてぞめぐりける。曾我兄弟は聞き及び、譜代の下人を四人となし、亡からん後まで耻辱なり。人も多きに和田殿の、御預かりこそ仕合はせなれ。密かに歎き申して見ん。さりながら、祐成は人見知れり。昨今の元服にて、五郎は見知る人なしと、鬼王兄弟妹の花野、和田の假屋へ急ぎける。海手山手をかぎりにて、大垣亂杭逆茂木引き、東海東山三十三ケ國の、大小名の假屋のしるし、所々に木戸を打ち、御家人給人商人見物、行きかふ人に紛れても、時宗は此夕敵討たんと思ひこむ。眼を四方に見くばりて、案内うかがひ通りける。所こそあれ海野が持ちの木戸口にて、覗面にはたとあふ。花野父の入道を見付け、「あれよ」といへば鬼王團三郎「是はいかに」と仰天す。入道いかッて「やあ某は見知らぬやつら。何者なればうろたゆる。此入道に知られては、「穿鑿がむつかしい。早く通れ」と、つこうぞに言ひはなす。海野さとき男なれば「ィヤ待て〳〵彼れ等が仕方、両方見知ッたるに紛れなし。ｻｱ何者ぞ眞ッ直ぐにいへ。然なくばいッかな跡へも先へも遣らぬ」といふ。鬼王兄弟つッと出で、「御尤も千萬。我らは上方の貧者にてござ候ふ。是なるは妹。老いたる親を養育みのため、奉公稼ぎに方々召し連れまはりし時、何方にてやらあの御坊、見たるやうに候ふ故、扨只今の通り」と、いひ捨てて通らんとす。海野眉をしかめ「ぞこへ〳〵。ｼﾃ其見たるといふは、何所にて見たるぞ。うろんならば通しはせぬ。勿論もどしもせぬ搦め置くが、いかに〳〵」と一面に取り廻す。鬼王兄弟大事と思ひ、「是は近頃不肖なる所へ、參りかかッて候ふ物かな。妹が奉公かせぎのため、方々まはりし事なれば何方とは覺え候はねども、先づ上方の女のならひ、大内がたを望むゆゑ、中宮女院仙院十二の對の局々の女孺おすゑ、内侍所への刀自采目、公家に松殿薄殿、近衛關白政所、一條殿や九條殿、久家菊亭に花山院、頭の中將頭の辨、儀同三司女三の宮、御比丘尼御所まで稼ぎしが、御所の風にはあはずとて、兩六波羅のやしきがた、武家は行儀むづかしく、ここもありつき縁うすき、衣の店や數珠屋町、めぐり〳〵て室町の、糸屋組み屋ひさき女に、御影堂の扇折り。ほね身を碎き稼げども、都の奉公口もなく、西國方へ身をしぼる、豐後の國の染め殿や、そこをも既に立ち別れ「因幡丹後の紙すき奉公。それより紀州熊野には、能き奉公の口ありと、聞くを知る邊に立ち越えしに、それは小歌比丘尼とて、尼にする由承り、逗留もせず歸りしが、ｺﾝそれよ。今思ひ合はすれば、熊野山のぞこやらにて、一寸見たる御坊にて候ふ。ｻｱ御通し候へ」と、つッと行かんとする所を、「ぞッこへ〳〵。ｴ、己めらはしれ者かな。入りもせぬ長口上、紛らかして通らんとや。熊野山にて見たるとて、似つこらしく云ひまはす。察するする所ふのれは、義經の家來熊野の住人、鈴木龜井が一族よな。此辨眞めと心を合はせ、鎌倉殿へあだをなす御敵の張本、からめとッて功名にせん。ｯﾚ脫すな」とひしめく所へ五郎時宗、編み笠取ッて大手をひろげ、「ｻｱ樣な御侍ひ。あの者共は某が、大分の給銀にて、召しかかへたる下人ぞや。最前より何れもの我儘。はらわたが燃え返り、胸の虫がむか〳〵と、耐へかねて候へども、無事にすまば濟まさんと、齒をくひしばり扣へし所に、理非もろくに聞きとどけず、なんぢや搦め捕らんとはいか樣の科がある。さあ承らん。もし科も無いに下人をしばり搦めさせ、主人の身にて堪忍ならず。

○亂杭　亂して地に繁く打ち込んだ杭。
○逆茂木　鹿の角のやうな木の枝を逆に植ゑて垣とした物。敵の防ぎなどに用ゐる。
○つこうぞに　曇く、亂暴に。
○不肖なる所　迷惑な場所ぐらゐの義。

○左の店　左の縁語「うすき」に續けて出した語。
○ぬぐりぬぐりて　數珠屋町の「珠數」の縁。
○骨身を碎き　身を惜しまず。「扇折り」の縁で「骨」と出した。
○染め殿　禁中で染め物を扱ッた御殿。「染め物」の縁語「しぼる」から續けた。
○立ち別れ因幡　古歌「立ち別れ因幡の山の峰に生ふるまつとし聞かば今歸り來ん」の句を借りて續けた。
○しれもの　馬鹿。茲では「ごぶとい」との義を含む。

町人なれば太刀かたなの、お相手にはかなはずとも、腕やすねの力は御侍ひにも負け申さぬ。はりみづくら　共に同聲の文飾。なぐりづくら、踏み付けづくらの義。みづくら踏みづくらは、此膝骨のくだくるまで」と、すね打ち叩いてねめ付くる。海野ちッともひるまず「ヤこりや若い者。たとへ其方が下人にも主にもせよ。是は頼朝公の御敵。判官殿のゆかりを尋ねもとむる穿鑿なれば、いふても天下の御大事。誰れをか憚かる事あらん。こいつは辨慶が親熊野の別當辨眞、それに親しき者なれば、熊野そだちの鈴木龜井が、一族ならんと咎むるが僻事か。彼奴を下人といふからは、扨は汝は義經の、落とし子の有りと聞きしがそれ成るよな。ここでの論は無益の事。あやまりなくば御前にて、すみやかに云ひ分けせよ。御所の假屋へ同道せん。早あゆめ、さあ來い」と、云はれてさすがの時宗も、御前へ出ては惡しかりなんと、返答遲々して見えにける。入道是ぞ一大事と思ひ、大聲上げて氣色をかへ、「扨々おのれらは何者なれば、何の用もなき事を、仔細有りげに云ひなすゆゑ、科もなき判官殿、彌々御科深くなる。勿體なくも御骸に、苦艱をかくる後生のまよひ。いか樣かたりか物取りか。ェ、腹立ちやにッくい奴。暫し御免」と郎等が、ついたるより棒押ッ取ッて、つづけ打ちに時宗を、ちやう〳〵と打ちたりける。「是は」と云ふて鬼王兄弟、立ちよる所を「ヤヤ己等とても唯置かうか」と、はらひ打ちにたたき付け〳〵、「つたへ聞く判官殿。御存生の折りから、東下りの忍び路や、安宅の關にて、我が子の辨慶判官殿を打ッたるとや。それは富樫をたばかりの、智略の棒のゆがみなき、此辨眞が心底を、海野殿への云ひ分けに、たたき殺して見せ申さん」と、口にはいへど心根は、主君なり我子なり、思ひの色をはら立ちの、涙に見せて打つ杖もはづれよかしそれよかしと、打てばこなたは覺られじと、用捨もなく身にうくる。互の心ぞ哀れなる。

海野我を折り「ヤ然なせそ辨眞。殺してはいかがなり。もうよいわ」と引きとむる。「いやたたき殺さん」と、猶振り上ぐるを、棒もぎはなせば「ェ、殘念や口惜しや。草のかげにて判官殿。さぞや悲しくおぼされん」と、義經にかこつけて胸にたもちし涙をぞ、わッと泣き出す其こころ。鬼王兄弟時宗も、思ひやりたる忍びねの、歎きを隱してうつふけり。海野重ねて「是々若者。以前汝はあの者が、主人といひしが、いづくの町人しやうばいは何ぞ。時宗聞きもあへず、「さん候ふ某は、奥州伊達の郡の、傾城屋にて候ふが、あれなる女を金銀出し、傾城にめしかかへ、只今つれて下り候ふ」。海野なほもうたがひ、「ェ、然らば定めて請け狀あらん。それにて讀め聞かん」といふ。

傾城請け狀

もとより請け狀あらばこそ。懷中より時宗が、戲書き爲かけし普門品を取り出だし、請け狀と名付け、たッからかにこそ讀み上げけれ。「傾城奉公請け狀の事。一此なみと申す娘、ながれの道に身をしづむ。建久四年みづのとの丑、五月十五夜つき出し女郎。何所の雲もさはり無き、影も九年十年きッて、金子百兩たしかに手取りの身は籠の鳥。親は他國の死に目なりとも、年の間は花街の外へ一足にても、踏みも通はぬ、遠國波濤へ、賣りて遣り手や姉女郎の、掟背かず勤めさせもが露ほども、奉公に加手無く、客をば振らず心にかけて、ぐるひ、浮き名ほくろに入れ性根する男あッて、勤め麁末にいたすに於いては、着の儘、あがらの橋に

●傾城請け狀

○はりづくら、踏みづくら　共に同聲の文飾。なぐりづくら、踏み付けづくらの義。

○戲書き　無駄書き。

○なみ　女の名。

○「流れ」は其縁語。

○つき出し女郎　初見世の女郎。「十五夜」の縁で同聲の「月」に聞かせた。その月の縁で後に「雲」及び「影も九年」と出した。

○手取り　手渡しに爲ること。「籠の鳥」も始めは手取

りに爲れる處から、其縁で出した語。「籠の鳥」は遊女の身の境遇を形容した語。

○させもが露ほども　動めを「させる」と掛けた。「させも」は「さしもぐさ」の轉の「させもぐさ」の略。即ち艾の義。「させもが露」としての用例は古歌にる「契り置きしさせもが露を命にて哀れ今年の秋もいぬめり」などとある。其「露」の字を借りて「直ぐと」「露ほども」即ち「少しも」の義に續けた。

○客を掘らず　客の情に顧はぬやうな事無くの義。

○紋日　廓で衣服を着替へなどする祝ひ日。

○間夫ぐるひ　遊女が勝手に情夫を拵へて、其情夫にふざけ散らすとの義。

○入れ性根　入れ智慧。

○國戸はき　裏手を掃くこと。

○紙くずの葉の紙屑などを始末する義から直ぐと同聲の「葛の葉」と出し、「信田の森の恨みし葛の葉」の句の縁で下に「恨み」の語を續けた。

○掴を髪　解いた髪。請け人が出て「掴きを爲る」即ち處置を付けるとの意に掛けた。

○身のいれたて自分持ち。

○戀ひぞ積もりてみなの川云云　川の縁語「深き」に續けて出した句。出所は陽成院の御製「筑波嶺の峰より落つるみなの川戀ひぞ積もりて淵となりぬる」句の意味は縁有ッて請け出して呉れる客が有ッた時には、身

下ろされ、又は水仕の下女にせられて竈の火を焚き、湯殿の水くみ門ばき瀬戸はき、庭の掃除のちりや芥や紙くずの葉の、恨みとぞんじ候ふまじ。萬一此者年のうち、花街をにげて走り井の、水に身を投げ又に伏し、心中して死したりとも、御難はかけじ何方までも、請け人出でて捌き髪、油もとゆひ紅はな紙、足駄石駄に至るまで、仕着せの外は身のいれたてとの定めなり。もし又深き縁のあり、戀ひぞ積もりてみなの川、さそふ水とて請け出だす、あたひ千金萬金なりとも、それは主人の得分たるべし。もし誰れ人ぞ流れの身に、よこ波かけて妨げの、さしでの磯のもがり舟、推していとまを取るならば、衣裳殘らず蔵薄の、奉公かまひ給ふべし。總じてつとめの其間、下戸なりとも酒飲み習ひ、文には虚を書き習ひ、ねふたくとも居ねふらず、泣きともなくともきぬ〴〵の、別れに泣かせ申すべし。起請誓紙に身の内の、血をば惜しませ申すまじ。指は切り損髪も切り損、申し分候ふまじ。其外浪華の葭葦に付き、後日のための傾城奉公。請け狀の趣き件の如し」と、天も響けと讀み上げたり。海野の太郎疑ひはらし、「扨は子細もなき者なり。とう〳〵通れ」と許しけり。

時宗しすましたりと思ひ、「御聞き分け有りがたし。扨さいぜんより承れば、判官殿のゆかり御尋ね候ふとや。我らが本國奥州には、其末々の多く候へども、今日まで手を置き、誰れかまふ者も無し。あの辨眞めが我々を、ちやうちやく致せし憎さもにくし。拙者に預け下されかし。からめて國へ罷り下り、辨慶が親をとらへしと、國中に風聞せば、義經のゆかりども、堪忍せず集まらん、所を皆々かりもよほし、搦め取ッて參らせん。一つは旦那の御奉公」と、誠しやかにささやけば、海野ほッかり

そたらされ、「ィヤ是は出來た。彼奴は某我君より、預かり申せし奴なれば苦しからず、人を添へて汝に預けん。かれをお鳥にからめ取ッて、我に手がらをさせて呉れよ。それ〳〵」と別れしは、愚かにも又あさましし。角田兄弟、「是はふしぎの同道、いざ參らん」とぞ申しける。時宗あたりを見まはし、海野ははるかに行き過ぎたり。鬼王にめくばせし、二人を左右へばたと〳〵とけたふせば、「コハ狼籍者」と起きあがるを、鬼王團三郎つッとよッてしッかと取る。時宗からと〳〵と笑ひ、「我を誠の町人と思ふか。河津が次男曾我の五郎時宗といふ者。此入道は鬼王團三郎が父、津瀨の入道といふ者。我々をかばひ辨けい親辨眞と僞りしを、鎌倉中の大名小名のひげ口へ、うまく〳〵とときこしめしたる可笑しさよ。何とぞ奪ひ返さんため、和田殿へ參る折りから、海野殿の運のつき。よい所で出くはせ、時宗にたらされて、お預かりの大事の四人、ふか〳〵と渡さるるは、猫に鰹、武士に似合はぬあまい事、是ここななぶし達。うぬらが首よりつまさきまで、みぢんに削ッて兄祐成が、手がひの虎に慨ばせん。それ〳〵と引き起こし、「口に込み藁いきぼね立たすな。山ぎはにて討ッて捨てよ。入道妹は古郷へ送れ。某は祐成の狩り場の出立きづかはし、追ッ付けて本望遂げん。門出よければ行くさきの、仕合はせは手に取ッたり。吉左右知らせん」と、「待ち奉る」と、にッこと笑ふ貌と顔。主從此世の見をさめとは、後にぞ思ひ知られたる。其日の御狩りも列卒をあげ、

息をやすむる午の刻、お辨當と觸れければ、狩り場も暫し靜まりける。ここに富士の根がたより、七年物の牡鹿、八またの角ふり立てて、嶮岨苦路をのさ〳〵と、北をさして落としける。秩父の家臣本田の二郎近經、天のあたへと弓と矢つがひ、駒をひたぢに歩ませよせ、すでに矢ごろと見えし所へ、工藤左衛門祐經一散にあふりかけ、「コレ〳〵本田。あの鹿は祐經が見付け、射とむるぞ。粗忽すな」と聲をかくる。「御諚にて候へども、狩り場のならひ、目がけし鹿を人に渡す法は無し。はづれんまでも近經が、射とめて御らんに入れ申さん」と、なほ引きしぼれば祐經いかッて、「ヤァおのれは緩怠者。秩父が下郎、またものの分として、此祐經に慮外をなし、主の爲も惡しからん」と、廣言吐いて乘り出だす。近經無念に思へども、慮外といへば力なく、「エ、おのれ祐經め。矢印に名乘りなくば、遠矢に射落としくれんもの」と、こぶしをにぎッてひかへし所に、曾我の十郎祐成、祐經を遙に見、竹笠引ッ込み、弓をふせ、しげみをわけて忍び寄る。本田きッと見、「是々申し祐成殿。忍んで御狩りの御供の由、主人重忠聞き及ばれ、御用あらば承れと申し付けられ候ふ。貴公數年御狙ひの鹿こそ見えて候ふ。然りながら、かれは馬上貴公は歩行。幸ひ近經も當座の遺恨候へば、この馬をかし奉る。召されて鹿のまッただ中、うらみの矢壺は外れ申さじ。人目あれば御いとま」と、おり立ち馬をあたふれば、祐成手綱をおしいただき「兎角は詞多からず」と、ふもとをさして近經は、我假屋へぞ歸りける。祐經鹿を見うしなひ、谷をへだてし岡の邊の、小松の中を乘りまはる。祐成あはやと谷ごしに、馬引きよせ打ちのれば、「不審儀や此馬身の毛をたて、四足をしじめて立ちすくむ。南無三寶と打て

ども〳〵あふれども、ちッとも動かず跳ねあがり、前足折ッて祐成を、眞顚倒に跳ね落とせば、祐成は枯れ杭に、弓杖ついて下りたッたり。落として馬はかろ〴〵と、谷をくだりにかけて行く。折りしも時宗はるかに見付け、走りかかッて馬の口。しッかととめて引き來り、「扠よき所へ參りたり。鞍心しらぬ馬、主をきらふと覺えたり。鐙を蹈みしめしッかと召せ」。「心得たり」とひらりと乘れば、又此馬高いななきし、躍りあがッて祐成は、屏風がへしにどうと落ち、岩角にむねをあて、氣をうしなひたるばかりなり。時宗兄をいだきあげ、「エ、にくや。此馬は目前のかたき。差し殺さん」と飛びかかる。祐成はッと心づき、「やれまて時宗。まッたく馬のあやまりならず。花野が新田にあたへつる、虎のいきづめ懷中せしが、怕れたるに紛ぎれなし」と、守りよりとり出だし、はるかの谷へ投げすて、駒引きよせうち乘ッて、引き立て見れば不思儀やな。元の如くに歩み行く。「つづけや時宗。來れや五郎」と、谷を乘りこへ乘りおろし、岡の茅原ふもとの松原。追ッ返しつ尋ぬれども、はや祐經は見えざりけり。兄弟目と目をきッと見合はせ、こぶしをにぎり牙をかみ、「寶の山に入りながら、空しく歸る口惜しさよ」。「よし〳〵今日は助くるとも、明日まで生けては置くまじきぞ。此富士山は死出の山。富士川は三途の川。兄弟せぶみのかど出での、酒盛りせん」と、笑ひたはふれ立ちかへる。揃ひに揃ひしもののふの、手本なりかがみたり。敎へなるはと後の世まで、つきぬは曾我の話しなり。

第三

請け金が千兩萬兩でも御主人の方の得分として故障は無いとの義。
○横波かけて　流れの身の緣。「横矢を入れて」などの義。
○さし出の磯　同前。「指し出口」に聞かせた。
○もがり舟　「もがり」即ち難題の義に聞かせた。「もがり舟」はもやひ舟。
○推して　强ひて。舟の緣語。
○萩薄の　「萩」及び「薄」共に秋草の聯絡。衣裳を「剝ぎ」と掛けた。但し句法は拙な方。
○燒き習ひ　嫉妬する體な客に見せ掛けることを覺えて。
○浪華の葭葦　浪華は葦の名所。葭葦に「善し惡し」を聞かせた。
○ひげ口　口元よ髭の生へて居る人との義。「ひげつち」などと同格。
○うまうまときこしめしたる　「きこしめす」は飲食する義。此所では「一杯食はせられた」と同義。
○猫に鰹　鰹節は猫の好物。その好物を與へられば悅んで貰ふとの譬へ。その鰹節の「節」を同聲の「武士」の字に掛けて下の句へ連續させた。
○なまぶし　鰹節の緣語。「なまりぶし」と同義。又一方では「なまくら武士」に通はせた。
○微塵に削ッて　「なまぶし」の緣語。細く削ッて即ちずだずだに切り殺して。
○手飼ひの虎に悅はせん　「手飼ひの虎」は大磯の遊女虎を指す。海野

には懷姙吟味の時の恨みがある故、海野の家來を切り殺せば虎も悅ばうと五郎が思ッての言葉。
○込み藁いきぼね立たすな　藁を口に押し込んで騷がせるなとの義。
○手に取ッたり　案の內、必定などと同義。
○午の刻　正午即ち午前十二時。
○ひたぢ　ひたひたと近く。
○またもの　陪臣。
●第三
○かげろふ　うららかな春の日又は夕暮れなどに燃え立つやうに見える氣。いといふ。此語は和歌などに多く用ゐる。新古今集にも「今さらに雪降らめやもかげろふの燃ゆる春邊となりユしもの」などとある。

身はかげろふの浮き命〳〵。暮るるや限りなるらん。頃しも五月二十八日空さみだるる黃昏の、虎が涙や少將の、よるの雨さへしきりなるに、兄弟最期の晴れ小袖、母の手づから縫ひ仕立て、請けし五體の胎內へ、歸る心に本來の、經帷子と觀念し、揚げ羽の蝶や群千鳥も、翼しをるる風情にて、松明かかげ笠ふりあげ、兄弟顏を見合はせて、涙ぐみたる哀れさよ。「いかに時宗。和殿三歲祐成五歲、竹馬の鞭を打ちしより、片時放れぬ兄弟の、六度契りて兄となり、七度むすびて弟となりと傳へしが、今宵裾野の五月雨ぐさの雫と消えはてて、未來の逢ふ瀨は定め無し。今ぞ此世の見をさめぞ。御身が貌をよッく見ん」。「母上見奉ると思ひ、祐成殿の御顏をも、今一度見せ給へ」。事問はぬ草も木も、雲水空のなごりまで、今を限りの別れとや。いつも風は吹きけれども、こよひの風ぞ身にはしむ。虎少將が書き置きを、あけなば歎かん不便さよ。鬼王や團三郎。最期の供にはづれたる、悔やみの歎き是一つ。二の宮の姉禪師坊。彼れ是れ盡きぬ思ひの涙。敵を討ッて本意をとげん、うれし涙も樣々の、雨にあらそひ袖と袖、しぼりかねたるばかりなり。時宗涙の隙よりも、「彼れ御覽ぜ十郎殿。御所の假屋の方より、供人供したる乘り物の、庵に木瓜付けたる提灯こそ、祐經と見しはいかに」。「オ、うたがふ所なし。ここにて待ち受け本望とげん」。「もッとも」と松踏みしめし、天にもあがる嬉しさに、足のたてども覺えばこそ。漫ふるひて待ちかけたり。程なく近付く左右方より、二つの提灯ばた〳〵と切り落とす。「あは狼藉」と夕やみの、刺すとも突くとも知らぬ夜の、中間若黨たてよこに、打ち物抜いて薙ぎまはれど、二人は小わきに身をひそむ。危ふかりける有り樣なり。輿の內には女

日が暮れれば見えなくなる所から、此所では果敢ない命の形容に用ゐた。
○揚げ葉の蝶や群千鳥　蝶は五郎、千鳥は十郎の着物の模樣。
○はあははあはと思ひし故　やれ扨實に危い事だと甚しく感動したので。
○虎さまはまめなるや…「まめ」は「壯健」の義。此邊妙筆。咄嗟の間に安閑とした問ひなどを出すところ女郎などに有りさうな叙事。
○穴一　小兒の遊びの名。「錢うち」の一種類。地に線を引き穴を開け、少し離れて穴又は線の中へ錢を打ち込んで勝負をする遊び。

の聲にて、「必定夜盜と覺えたり。大道へ出でつらん。此處を捨てて外垣より、山際を搜索されよ」と、あらぬ方へ敎ゆれば、おろかの下人「尤も」と、しどろになッて追ッかくる。ややあッて女輿より出で、小聲になッて、「十郎樣五郎樣。是なう申し最前ちらと御兄弟と見付けたり。大事ない時宗樣。祐成樣」と呼ぶ聲は、聞いたやうな物ごしなれども、麁忽に「あッ」とも言はれぬじぎ。兎角の思案も無きうちに、女は急いて「ア、しんき。なうお二人樣。だん無いわいなあ。喜瀨川の龜菊ぢやわいなあ」。兄弟ほッと力を得、「オ、いかにも五郎十郎なり。シテ龜菊殿の、かうした事は合點ゆかず」といふ。聲をしるべに近より「先づお久しや懷かしや。扨わし事は、虎樣や少將樣の、御苦勞になされし故、舞ひの一手もまひならひ、上手でもないものを、私が仕合はせにて、また跡の月祐經に請け出され、則ち主の親分にて、只今は賴朝樣へ御奉公に出され、御酒宴のお肴の舞ひや謠ひや琴琵琶にて、御前をつとめ候ふが、最前おかほはちよッと見る。供の者が見付けしか、刀のさきでも當てましてはと。よき智慧出して下部共を去なせしが、さだめし日頃の御望みならん、さりとてはあぶない首尾。はあは〳〵と思ひし故、是つかへが上がッた。御無事な顏見て御嬉しや。虎樣はまめなるや。少將樣は赤子うまんしたか。杉の痴氣は起こらぬか。猫の子は何うしたへ。かぶろ共は今に穴一しますか」と、急な所に取りませし、女郎はあどなき慣らはしなり。兄弟氣は急く耳へも入らず。「一段のお仕合はせ。シテ先づこよひはいづくえ」とあれば、「さればとよ鎌倉殿。さみだれの夜のつれ〴〵に、祐經の假屋へ、お成りなされんと有り、お使ひに參る」と、いひもはてぬに時宗、「イヤ是、日頃知ッての

○あどなき慣らはし　あどけない即ち無邪氣な習慣。

○うつり　緣誼。

○如才に思ふ　如才無く無いやうに爲る。

○ならびて　加擔して。

○至極した　道理に適ッて居る。尤もである。

○地髮　天然に生へた頭の毛。

事なれば、何をかくさう、こよひ祐經を討つ覺悟。それに賴朝入り給ひては、本望とげぬのみならず、仕損ぜんは目前なり。何とぞ思案し、賴朝公今宵のお成りを止めて給べ。生々世々の厚恩。曾我兄弟が一生に、人を拜むは是が初め」と、手を合はせてぞ賴まるる。龜菊しばし答へもせず、「是は餘義なき御賴み。虎樣や少將樣の、うつりといひお二人を、如才に思ふ心でも、祐經かばふ心でも、誓文くされ無けれども、親分を討つ人に、ならびてなどとの後日のさた。傾城の果ては道知らず、尤もかなといはれん事、妾ばかりか勤めたる身の總耻ぢなり。どうもお返事なりがたし。わるうは聞いて下んすな」と、あぐみし色ぞ道理なる。時宗聞いて「オ、至極した〳〵。日本一の思案有り、兄弟祐經うッての後、御所へ切ッて入らん時、百萬人がかかッても、事ともせぬ我々なれども、御身むかッて此時宗を、組みとめ給へ。女と見たらば某が、やす〳〵と搦められん時には御身も親分を討ッたる者を、女の身にて組みとめしと名を取れば、身一分の道は立ち、我々も本意をとぐ。ひらに賴む」と手をすれば、龜菊も恐ろしながら、「おいとしや其義なら、祐經病氣とちうにて御所へお返事申す。今宵のお成りをとめ申さん。御本意とげられ其後は、みづからに組みとめられ、吾が一分を立てて給べ」と、いへどもさすが女心の、身もふるはれて聲こもり、「あれ供人の立ちかへる。一言たがへな」。「たがへじ」と、左右へわかるる雨の脚、行く方暗く風さわぐ。虎少將は寢ねがての、枕に殘る書き置きを、見るより驚き年頃の、契りはここぞ冥途まで、おくれじ物とかねてより、思ひそめ置く蝶千鳥の、裝束引きかけ太刀かたな。髢小枕取ッてすて、地髮ばかりを鉢卷し、假屋まぢかく忍び入り、出で立ち小がらにりりしくて、女とさらに見えざりけり。かッては知らず雨夜なり。二人手を組み隈々を、「祐成やおはする」。「時宗やまします」と、小聲に呼うでうそ〳〵と、尋ねまはるは過ぎし夜の、手くだに似ても事かはり、胴ふるはるるばかりなり。斯くとは知らず兄弟は、袖打ちかざし松明に、足もとばかり照らさせて、遙に見ゆるを虎少將、「アレ夜廻りか番衆か。見付けられては惡しかりなん。一先づのけと一村の、森を目あてに走り過ぎ、逢はで別れし本意なさよ。兄弟は祐經が、假屋の外垣切り破り、中門につッといれば、郎等若黨悉く、晝の狩りには爲疲るゝ。雨を賴みの油斷酒。みな高いびきして伏したりけり。所々のともし火を、吹きけし〳〵そろり〳〵と差し足して、難無く敵祐經が、一間の寢所に忍びつき、溜め息ほッとついたりし、心のうちこそ嬉しけれ。「サア是までは爲すましたり。今暫らくぞ南無八幡。はこね兩所伊豆三島。力を加へ給へや」と、近付き寄ッて見てあれば、祐經沈醉高枕。前後も知らぬ其有り樣。「一眼の龜の浮き木にあひ、有曇婆羅華の三千歲の、春にあひたる心地ぞや。優曇華の咲く時は、をがみて枝を折るとかや。まれにあふたる親の敵。拜み打ちにうてや」とて、にッこと笑ふて立ッたりし、嬉しさ類ひは無かりけり。兄弟刀を拔き放し、祐經が胸板に、あてゝは引き、引いてはあて、大音上げて、「河津の三郎が嫡子十郎祐成」。「次男五郎時宗なり」。「起きあへや祐經」。「左衛門やッ」といふ聲に、「心得たり」と枕の太刀、取らんとするを祐成、左手の肩より右手のわき、衾をかけて切り付くる。「五郎是に」といふまゝに、腰のつがひを板敷きまで、切れも切れたり年月の、仇と恨みと一時に、今打ちとくる氷の太刀。折れもせよ碎

○うそうそと　うろうろと。

○優曇婆羅華　優曇華は印度にあるといふ木の名。三千年で始めて花が咲く。それ故、得易からぬ好機會の例に引く。源氏などにも「優曇華の花待ちたる心地して」などとある。

けもせよと、づた〳〵にこそ切り付けけれ。傍に臥したる大藤内、太刀風に目を覺まし、「狼藉有り、出あへ〳〵」と、裸身ながらかけ出でて、彼方此方とわめきまはるを、兄弟左右より諸膚薙ぎ、四つ五つに切りちらし、門外さして切り出づれば、「すは夜討ちこそ入りたれ」と、弦なき弓に矢をつがひ、つなぎ馬に鞍を打ち、太刀のつかを腰にさし、上を下へと返しける。たいらくの平馬のじょう、「祐經が討たれし上は、狼藉者は曾我殿原。いで〳〵きやつらを討ちとめて、狩り場のしゝの恥辱をすゝげ」と、愛敬安西海野うすきが、入れかへ〳〵打ち出づる。兄弟は事ともせず、小柴がきを小だてに取り、もみにもうでぞ戰ひける。多勢とは云ひながら、曾我殿原が死に狂ひに、手おひ討ち死に四百人。足の踏みどころも無かりし所に、新田の四郎忠常、祐成に契約有り、是をとらんとかけ出でしが、イヤ新田の四郎と名乘りなば、首さしのべんは必定。然れば武士の本意ならず。うんづくの勝負せんと、祐成にわたしあひ、切りむすび切りほどき、戰ふ暇にも祐成は、「本望は達したり。惜しからぬ命なれども、新田の四郎忠常に預かッたる我首を、人手には渡さじ物を」と、つぶやきながら打ち合ひたり。新田是を聞くよりも、「優しき者の志し」と、猶恥お入ッて名乘りもせず、「物のあいろも見えざれば、松明出だせ」と呼ばはる聲。祐成はッと飛びしさり、「さいふ和殿は新田殿か」。「ヲ、忠常」とこたふ。「南無三寶こはいかに。それとも知らず最前より、太刀を合はせし悔やしさよ。厚恩といひ契約の、誓文たがへし面目なさ。サア契約の首取り給へ」と、太刀を投げすて座をくみて、首さしのべてぞ待ちゐたる。新田涙をはら〳〵と流し、「扨も〳〵優しき今の振る舞ひ。頼もしや神妙や。蛇は一寸にして徹あらはれ、頻迦は飼ひ子の内にて、其聲諸鳥にすぐるとは、殿原達の御事よ。幼少よりひかげの身。武士のさんくわいも絶え、百姓士民に立ちまじり、弓馬の道もとり失しなひ、給ふべきかと侮どと、思ひやられて今更に、いづくに太刀をあつべきぞ。忠常討たれば討たるるまでよ。運に任せ勝負あれ。なう祐成殿。十郎殿」と、なほ急きかぬる感涙は、こぼれおちてぞ哀れなり。十郎も涙にくれ、「嬉しき人の詞や倭ふ。年月ねらひし敵を討ち、御邊のやうな弓取りの、手にかゝッて死なん事、祐成はなんぼう果報者。成佛まで疑ひなし。はや首を取り給へ」と、涙をどゝめいひけれども、忠常は目も眩れて、討つべき氣色は無かりけり。祐成いかッて「ヱ、曲もなし忠常。雜兵の手に掛かッて、名を下せとの事なるか。是非に及ばず自害せん」と立ちあがれば、忠常「ヲ、誤ッたり御免あれ。南無阿彌陀佛」と諸共に、水もたまらず打ち落とし、きッさきに首つらぬき、「鬼神と呼ばれたる、曾我の十郎祐成を、武藏の國の住人、新田の四郎忠常討ち取ッたり」とぞ名乘りける。むざんやな時宗は、にぐる敵をおッかけしが、「今は何を か期すべき」と、御所の假屋へ走りこむ。すぢのかげより女の姿、うすぎぬかづいて時宗を、捕ッたといふてしッかと抱く。時宗ふり返りきッと見て、「扨は龜菊ごさんなれ。今少し死にぐるひに、よき侍ひ二三百も、切りとめたくは思へども、契約なればヤア離

○類迦　鳥の名。迦陵類迦。佛說で極樂に居るといふ不死の鳥。其鳴き聲は美しいと云ひ傳へる。

めよ、あッぱれおのれは日本一の、剛の者をぐんでうづよ」と手をまはすを、高手小手にからみ付け、大音あげて、「天魔波旬と呼ばれたる、曾我の五郎時宗を、御所の五郎丸がいけ取ッたり。をり合へやッ」と、うすぎぬ取ればわッばなり。「南無三寶はやまッて、搦め捕られし口惜しや」と、はぎりをなしおだんだふみ、かがみの様な両眼に、涙を流すぞ哀れなる。是非なく大勢をりかさなり、千筋の縄を四方へ取り、引き立て行くこそ無念なれ。斯くとは知らできせ川の龜菊は、曾我の五郎に契約有り、紐みとめんと顔かくし、縄をかいこみ此虞彼虞、目を配ッて尋ねける。とら少将も兄弟は、まだ討たれ給ふまじ。此さわぎの其の内に、ちらとなりとも顔を見て、冥途の契りを結ばんと、同じ所を行きかへり、立ちまふ揚げ羽のひたゝれは、宵に見たりし時宗なり。あまさじと飛びかゝり、「きせ川の龜菊ぞや。時宗やらぬ」としかと組む。組まれて少將振り放さん〳〵ともだゆれども、龜菊はなさじと捻ぢあふ所を虎御前、両方へ押し分くる。顔を見れば少將なり。龜菊あッとおどろきて、暫し呆れて詞もなし。やゝあッて虎少將「つれないぞや龜菊殿。昨日今日まで斯う三人ぱ、兄弟よりも底意なく、あかしあひたる中ぞかし。時宗やらぬのがさぬと、女子のざいにあんまりな。然うした物では無いぞや」と、云ひ捨てて行くを引きとゞめて、「御恩をうけし皆様の、殿御とある御兄弟に、そもや如才をいたさうものか。宵はや御兄弟のあやふき所をたすけ参らせ、こよひの御本意遂げ難かりしを、わらは心の働きゆゑ、扨みづからに組みとめよとの御契約候ふ」と、宵の次第をあらましに、語るも聞くもいそがはしく、「ヤア此上はこゝの勝手を案内して、御兄弟に今生で、今一度逢

○天魔波旬　「波旬」は惡魔の義。「天魔波旬」は剛勇の形容。

はせて給べ。はや今の間もお命知れず。はや尋ねん」といふ所に、夜廻りの本田の二郎、馬上ながら大音聲、「曾我の十郎祐成は、新田の四郎が討ちとめ、弟の五郎時宗は、御所の五郎丸が組みとめて、はや事はをさまりぬ。御所の假屋は安全たり。鎭まり候へ〳〵」と、舘々をふれまはる。人々はッと耳にたち、「あれ聞き給へ」と魂も、消ゆるばかりに身にこたへ、「もしや〳〵」の樂しみの、心の綱も切れ果てたるか情なや。同じ道にと走り出で、かけ出で〳〵歎かるゝは、目もあてられぬばかりなり。龜菊やう〳〵慰めて、すかしいさむる詞のつゆ。共に消えては誰人か。永き來世を弔はん。此世ばかりは短夜の、そら明け暮れに星消えて、澤の螢や鳴く蛙。昨日の聲にかはらねど、今のあはれを忍び音に、そふらひかはす八聲の鳥々、野寺の鐘のひゞきまで、又まつ宵にいつ聞かん。これや限りのきぬ〴〵ならんと、泣く〳〵連れてぞ歸りける。

第四

明王は一人の爲に、其法をまげずとかや。然れば賴朝曾我兄弟が、有り様甚だ感じ思し召し、時宗が死罪を宥めまほしく思せしかど、國法もだしがたくして、明くる廿九日に誅せらる。扨又新田の四郎には、高名三度の御契約相違なく、松島月毛に金覆輪の鞍あぶみ、五色のあつぶさ馬よろひ、新開のあら四郎、御使ひを承り、新田が假屋へ曳かせける。朝比奈の三郎義秀は、曾我兄弟の墓まうでして歸るさに、此體を見てむやくしくや思ひけん。つか〳〵とより「ヤア新開殿。見申せば君御秘藏の名馬を曳かせて、どれへがなと」いへば、心開いて、「和殿は御存じないと見えた。新田の四郎忠常

●第四

○むやくしく　無益らしく。

拝領なり」とこたふ。朝比奈とぼけた顔にて、「ムヽめづらしや。此馬は池月歷墨にもまさッたりとて、秩父北條我らが親父をはじめ、此義秀さきとして、皆々願ひ申せしかど、下されぬ御秘藏を、新田には何とて、オヽウがてん〳〵。價がよさに賣らせらるるの」といふ。新開重ねて「ムヽ惡口を申さるる。新田は富士の人穴へいり、希代の猪をのりとめ、高名三度に及びし故、御契約にて拝領なり」と、いはせもはてず朝比奈から〳〵と笑ひ、「ィヤしやらくさし腹筋千萬。三度や五度の高名を、珍らしさうに何事ぞ。但し高名して御馬をもらふならば、保元平治より源平の合戰まで、高名有る者數を知らず。此朝比奈もお耳にたッたる覺えあらん。高名づくにてもはるる御馬ならば、新田までやらせうか。此朝比奈が拝領申す。ふしやうながら新開殿。お取り次ぎよいやうに頼み申す」とにおかけける。新開ほうど持てあつかひ、「所望ならば御前にて、直に訴訟候へ。某はふ使ひなれば、罷り通る」と行かんとす。「ぞッこい〳〵。扨はしかと爲るまいか。朝比奈はわるい癖。あるひは敵の首でも城でも、ほしいと念をかけてからは、取らずに置いたるため し無し。是非に及ばず此所で、山賊して盜み申す。後日に盜人とあッて、切腹仰せ付けられんは必定。馬と朝比奈とは頼朝こそ換へぞんなれ。サア盜んだ渡せ」といへば、「ィヤこいつ男を見違へたか。新開なるぞ。盜んで見よ」と、氣色する。朝比奈くつ〳〵とふき出し、「ィヤ見違ひはせぬ。なるほど〳〵。曾我兄弟に出合ひ、小柴垣を押しやぶり、たかばひして逃げたる心開。見知ッた〳〵。サア馬をぬすむ留めて生從「やらじ」と寄る見よ」と、取ッて突きのけ馬とり、中間蹴たふし、手綱かい繰りひらりと乘る。

○ほうど　殆んど。

○氣色する　怒りの意を顏色に出す。

○色を入れ　鐙のかどで馬の脇腹を蹴て馬を働かせること。

❸虎少將道行

○力を越後　力を「得」と掛けた。

○寒し行く　身裝をやつして旅路を辿る。

○白地や淺黃地や　共に扇面の地色。秋と「知らじや」と掛けた。

○さッと畫ぐる一筆烏　あッさりと彩色でぼかして端を立てて、その模樣を一筆で書いた烏を付けた扇子。

○墨繪彩色　共に扇の縁語。「住み」と掛けた。

所を、馬引きかへし八方へ、踏みちらし〳〵、鞭うちくれて角を入れ、雲をかすみに飛ばせける。心開は力無く、わらんべの手を切ッたる如くにて、恨めしさうに打ちながめ、「待て已覺えてをれ」と、御所の假屋へ立ちかへる。

虎少將道行

戀ひといふ、文字の字形を判じもの。言葉しがらむから糸の「解くにとかれぬ下心。いとはしや虎少將、母の歎きをいさめかね、慰さめかねつせんかたも、涙のうちに思ひつき、すこし力を越後なる、禪師の君に告げばやと、旅だつ姿此儘は、人や見知ると、さしかざす。扇あき人團扇賣り、昔忍ぶの戀ひ風を、よそに吹かせて窶しゆく。世のならはしこそ果敢なけれ。人は兎もいへ我身には、三國一の殿もちて、富士さへ次ぎに見し山の、今は上なき雲のみね。月を招きしあふぎにも、見しはかへらで面影の、なほ懷かしみ御影堂。きぬのが扇召すまいか。夏を忘れて涼しさは、秋と白地や淺黃地や。さッと畫ぐる一筆烏。なにを恨みに仇し世を、墨繪彩色いろ〳〵に、情の種をまき砂子。すかし扇にたうあふぎ。あふぎ〳〵。あふぎ召せ〳〵。あふぎとは空言よ。逢はでぞ戀ひは、それ〳〵。それます〳〵。鏡圓扇や奈良うちは。扱繪うちはの品々は、武者繪のたけき武士も、心やはらぐ婦繪や、浮き世をところたて髪に、長い刀をさすぞ盃奴の〳〵、奴がかけし武藏野の、くさ花づくし青丹よし、丹や綠青塗りうちわ。羨ましきは高砂の、夫婦いもせのとも白髪。我に泣けとや箔うちは。風をあきなふ其身さへ、空の暑さは凌がれぬ。しのの石原日にやけて、蝶も翼をやすめか

ね、千鳥鶺鴒足ひやす、清水がもとの柳陰。風を見つけて走りつき、立ちやすらへばさら〳〵〳〵。さツさ時雨の雨かとて、聲にかさきる夏の蟬。春秋知らぬあたら世を、よそに聞きしも身の上と、是も涙を添へぬべし。慣らはぬ旅の憂き泊まり。夢さへ薄くまどふなる。蚊帳のつり手の短夜を、來ては水雞のこと〳〵〳〵と、格子叩くにきしまがひ、思ひ紛がひつ見まがへて、雲間にさわぐ稻妻と、行方も知らぬ思ひぞや。身は慣らはしの假寢にも、あひなれし夜のくせわるく、ひとり寢られぬ露の床。こちよれ枕ひきよせて、寄せても締めても又恨みても、抱き力なき草枕。投げそ枕に科も無や。いざとて二人よりそへど、女子どうしの仇ぶしや。我は深紅の結ぼれ糸の、解けぬ心がつろムる。いよつろムる。とけぬ心の氷室もり、夏の氷もあればある。だんせつの扇雪なれど、消えても殘る世のなかに、嗚呼如何なれば我々は、戀ひの瀬ごしを幾世とも、越えし甲斐なきななせ川。四十八ヶ瀬うち過ぎて、越の白山白雪の、つもるは富士に似たれども、裾野の原に我おもふ、魂の在所はあらし吹く、松江の里くれゆけば、暫らくやすらひたち給ふ。日も暮れ行けば人々は、宿を借らんとやすらひ給ふに、「曾我一類の囚人此所のとまりにて、外の旅人は一人も今宵の宿は叶はぬ」といふ。南無三寶と膽を消し、「曾我一類の囚人とは、誰れなるらん」と問ひければ、「五郎十郎が弟。越後の國くがみの寺、禪師坊といふ法師を、海野太郎行氏殿が承り、召し取ッて御通り。用心固く仰せ出だされ、旅人の泊りは叶はぬ」と、云ふうちに早牢輿の、前後嚴く取りかこみ、御家人さきを打ちはらひ、海野の太郎は押さへを乘ッて、弓に矢つがひ長刀の鞘はづし、朝敵むほんの生け捕りなんどの如

○まき砂子　扇面に金銀の粉を吹き付けた物。情の種を「蒔き」と掛けた。
○青丹よし　もと奈良に掛かる枕詞。しかし此所では色の青に通はせたのが主で、僅よ「青丹」の「丹」の字の縁で「丹や緑青…」と續けた。
○箔うちは　箔を置いた團扇。「薄情」の意に聞かせたものか？
○しのの石原　地名。「凌がれぬ」と同聲の文飾。
○きしまがひ　「思ひ紛がひ」、「見紛がへて」と同聲の文飾。
○仇ぶし　もと獨寐の義。此所では男と枕を並べずに寐るとの意。
○深紅の結ぼれ絲の…　「深紅」の語に「辛苦」の意を通はせた名句。「結ぼれ」、「解けぬ」の二語いづれも絲と心とに通ずる。
○いよつろムる　「いよ」は感歎詞。「つろムる」は「辛うムる」の約。
○白山　「はくさん（白山）」即ち所謂小富士。白雪と同聲の文飾。
○押さへ　しんがり。
○左前なる　逆に行くこと。齟齬すること。「旅衣」の縁語。
○おうそれながら　「恐れながら」の延。憚りながら。
○一腹一生　同じ腹から生まれたこと。

くにて、驛路の中へ舁き入れしは、見る目も哀れに淺ましし。「聞き給ひしか少將樣」。「こは如何にせん虎樣なう」。「せめて御兄弟のうつりにもなれかし。又は母御の御なぐさみ。便りをだにもと志し、はる〳〵下る甲斐もなく、はや召し取られ給ひては、亡き人の御形見も、誰人にかは渡すべき。お二人の御最期にも、一足ちがふて逢ひもせず、わすれ形見に禪師樣を、見んと思ひてはる〳〵と、來たる甲斐なき旅衣。左前なる世の中や」と、なげくも心便り無し。「此上は越後に行て益無し。曾我に歸りて母御樣に、一先づ知らせ申さん」と、今來し道を立ちかへる、心の內こそわひしけれ。さるほどに右大將頼朝公、曾我一類の落着は、ふじ野にて御沙汰有るべしと、いまだ假屋に逗留ある。斯かりし所へ海野太郎、禪師坊を召し取ッて、御前にひッすゆる。君御覽じて、「和法師は河津が末子よな。兄共が敵討ちしを知りつるか。但し知らせざりつるか」と御諚ある。禪師ゐだけ高になり、「おうそれながら大將軍の、仰せとも覺えぬ物かな。一腹一生の兄が親の敵をうつと申すに、知らぬ貌をする人間や候ふべき。但し法師なれば、知ッても討つまじき奴と、御覽ぜられて候ふか。我君天下をしろしめすも、文覺と申す法師の力。此ばうず文覺ほどこそ候はずとも、一寸の虫に五分の魂、斯くとしらする程ならば、祐經を兄共におし向け、愚僧は御座近く推參いたし、おほぢ伊東入道が、御恨みをも申すべかりしものを。殘念や本意なや」と、憚る氣色は無かりけり。頼朝なほも志し引き見んと思しけん。「オ、さもこそあらめ。汝はさせる科も無し。伊東が所領をあたふべきが、還俗して頼朝に、奉公してんや」と曰へば、禪師眼に角を立て、聲をあららげ、「よッく某を腰拔けと

御覽せしな。兄共は誅せられ、三衣に縄をかけられて、所領がほしい命が惜しい。還俗いたさんと申さうか。但しそれもお心次第。さりながら愚僧を助け置かれうならば、あッぱれ御身の一大事。明け暮れ君を見る度に、うらめしや先祖の仇。恨めしや〳〵と、思ひつもッて何處ぞでは、御首ほしくなり申さば、粗忽いたさんは必定。然れば虎の子を飼ふに似たり。よッく御思案候へ」と、なほ憚らず申しけり。御前伺候の諸大名、「誠に河津が子なりし」と、舌を捲かぬは無かりけり。君も感涙押さへかねさせ給ひ「あッぱれ猛き勇士どもや。彼等兄弟召しつかはば賴朝が、一方の用にも立たんず者なれども力なし。時宗が最期の所へ引き出だし、擊ッて遣を取らすべし」。「畏ッて候ふ」と、引き立てんとする所へ、老母二の宮とら少將、警護も番もおちばこそ。外垣二かは押し通り、御白洲の內垣に、ひし〳〵とすがり付き、「やれ母こそ來たれ禪師坊。あさましの有り樣や。やれ可愛の者や」と泣きさけび、「なう我君も聞こし召せ。老中達も聞き給へ。そも出家は佛子とて、衣を墨に染むるより、釋伽如來の御子となり、此世の父母兄弟とは、他人になッたるあの法師に、何の科の候ふぞ。侍ひの子の敵うッたが不思議かや。時宗が切られしさへ、世に御恨みに思ひしに、遠國波濤のすみ〴〵まで、さ程にさがし曾我一家を、絶やさで叶はぬ事なるか。あの子ばかりは助けてたべ。なう御慈悲なるは人々よ。申しなほして給はれ」と、理非をもわかず聲を上げ、垣にすがり伏しまろびきえ入り絶えいり泣き給ふ。今まで勇む禪師坊。母の歎きを一目見て、朝日に消ゆる初霜の、ただしほ〳〵と心くれ、前後も分かぬ其有り樣。君を初め參らせて、滿座の諸武士下々まで、袖を絞らぬ者は無し。

三部經

ややあッて禪師坊、「ァ、愚なり母上さま。疾まひにおかされ劍に伏し、火に入り水に溺るるも、前世の業。品こそかはれ生死の繰。のがるる道の有るべくば、世尊入滅有るべしや。十神力をあらはせば、一日も百千歲、迷ひの衆生は以如半日。あかず惜しと思ひなば、千歲の夢の心ぞや。母も姉も聞き給へ。禪師坊が最期に、自受用即身成佛の、御法を說いて聞かすべし。御前伺公の人々も、鳴りをしづめて聞き給へ。それ世尊一代五千七千の經卷は、そも華嚴寂滅どうじやうに始まり、法華ねんに書きをはる。其中間の五時八きやう中にも薩、達賭 陀利花、妙法蓮華とほんじたり。三世の諸佛出世の本懷。衆生成佛の直路。超八だいごの鷲のみね。上なき御法と說かれたり。ここに暫らく緣なき衆生を度せんがため、方便のかどをかまへて、妙法蓮華の五字をかくして、南無阿彌陀佛の六字に接す。五戒十善のまどの前には、てんとうの霧立ちのぼり、座禪の床には煩惱のねふり深く、修行の天地にいたりがたき愚痴の凡夫は、六字を誦じて極樂に往生す。しやは分段の凡身にりけり。己心の彌陀唯身の淨土なれば、本來無東西がしよ、有南北と觀ずべし。提婆達多は前生にて、佛の師匠たりし身が、阿鼻に墮して苦をうくる。ふきやう菩薩は打擲せられ、憎まれながらみやうかくの、佛のくらゐに至り給ふ。皆是一念信解の德。それ六字の名號といッぱ、華嚴經にて南

の字をあらはし、阿嚴經にて無の字を接し、方等經にて阿の字をひらき、大盤若にて彌の字をつゞめ、法華經を以て陀の字を皆會し、南無阿彌陀佛と申すなり。めうらく大師の御釋に、諸經諸讀だざいみだ、縁深厚故とのべ給ふも、深き心や有り明けの、一心三ぐわんのむねの月は、ゑんとんしくわんの空にかゝる、隨縁眞如のはつしほは、同一ッかんみの岸にみつ。中道實相の車は、無二無三のかどにとゞろき。一乘菩提の駒は、平等だいゑの園にいばふ。とうがくしんかの時鳥ば、めうかくくきやうの峰に啼き、二乘作佛のうぐひすは、無作三身の谷にさえづり、諸行無常の春の花は、是生滅法の嵐に散り、生滅滅已の秋の時雨は、寂滅爲樂の紅葉を染む。一子出家の功力によッて、めうしやうごんの悟りを得、いだいけぶにんの無生恩に、あやかり給へ母上樣。禪師が素懷是にあり。思ふ事もいふ事も、是までなり人々。ァ我首を召されよ」と、目をふさいでぞ居たりける。賴朝重ねて「學問といひ武勇の法師。近頃惜しき者なれども力なし。此上は罪なつくらせそ。早々討ッてすてよ」と有る。然る所へ新田の四郎忠常、「言上のこと有り」と、簀戸を開かせ伺候する。人々は涙ながら「あれ祐成討ッたる敵」。「人こそ多きに彼の者が討ッたるか。恨めしや面にくや。腹立や口をしや。食ひ殺して退けたや」と、齒がみをなして歎かるゝ。忠常御前に向かひ、「曾我の十郎を討ちとめ、高名三度の都合合ふて候ふ。御契約の御馬給はらん」とぞ申しける。君聞こし召し、「それは沙汰にも聞きぬらん。心開を使ひにて、汝が方へ引かせし所に、朝比奈が狼藉にて、盜み取り行きがた知らず。それ故義盛を初め、三浦一黨開門をせさせ、心開までも出仕をとゞめ、置きつるは」と曰へば、新田大

きに不興し、「いや是は御說とも覺えず。以前君の仰せには、三度の手柄仕れ。それまでは賴朝が預かッたりとの御意なれば、畢竟我らの預け物。盜まれしとは大將の御意とも存ぜず。馬を得んばかりに祐成を討ッて候ふ間。是非に於いてお馬を、後とも言はずたッた今、給はらん」とぞねだれける。垣の外には母上、「にくき奴が詞やな。たとへ龍馬千疋萬疋にもせよ。人の大切の秘藏子を、馬にかへて討ッたるとは、人でなしの畜生め」と、聲を上げてぞ泣き給ふ。賴朝もあぐませ給ひ、「其義ならば他の物を、何にても望め」と有る。新田あたりを見まはし、「然らばお馬のかはりに、此禪師坊を申うけ候ふべし」。「いや〳〵彼は大事の四人。かなふまじ。賴朝が重代、ひげ切り膝丸にても望め」と有る。新田かぶりをふり、「ィヤ馬は四足有る物に、足も手もなき御太刀は嫌にて候ふ。是非禪師坊を給はらずば、但し始めの通り松嶋月毛を給はるか。二つに一つの御返答、承はらぬ其内は、まッたく此處を立ち申さじ」と、どうぞ座を組み居たりけり。賴朝思案に盡き給ひ、「此上は詮方なし。禪師坊を取らする」と、御詞もをさまらぬに、「こは有りがたし」と罷り立ち、繩切りほどき塵打ちはらひ「是々曾我の母御。どう〳〵つれて歸られよ」。「はッ」とばかりに手を合はせ、「神か佛か新田殿。生々世々の御慈悲なるわ」と、忠常を拜むやら、禪師坊をさするやら、行きつもどりつ泣いつ笑ふつ、うれしさ足も地につかず、暫しぞよめき悦びし、心ぞ思ひやられたり。斯かる所へ朝比奈の三郎、松島月毛の口を取り、御白州に馳せ參じ、「義秀めは盜を仕り、直に立ちのき候へども、思案を仕り、我と我身を訴人に罷り出で候ふ。盜んだ所は罪ふかけれども、自身訴人の御褒美に、此馬は朝

○不興し　不興顯で。

○ねだれける　無理な事を言ひ掛ける。今いふ「ねだる。

○いッそう「いッそ」の延。寧ろの義。

比奈が拜領致し申すべし。若し御聞き入れなくば、訴人致して盜も無し。いッそう元の盜人なり。和田の一門九十三騎。三浦の一黨同類をくみし、盜みを致す程ならば、恐らく鎌倉中東八ケ國をぬすみ立て、後には何を盜まうも知れ申さず。時にはかへッて我君の御損たらん。理をまげて義秀に、拜領仰せ付けられかし」と、恐れなくこそ申しけれ。賴朝わらはせ給ひ、「朝比奈が我儘、今に始めぬ事ながら、是は余り興がッたり。さりながら、和田一家に免じて取らするなり」と仰せける。朝比奈頭を地に付け、「有りがたし〳〵」と御禮申し、「扨こりや新田。おぬしは近比出來いたり。あの禪師坊が命は、日本國が御訴訟しても叶はぬ所。まづ斯うせうと思ひ、扨此馬を盜んだり。朝比奈と同腹中出來いた〳〵。此馬を朝比奈が、引き出物に和殿にやッた。是でどこもまるうなる。名は朝比奈となのれどや、智惠はふかひな分別義秀。ほめてくれよ」とどッと笑へば我君も、同公の人々一同に、興に入りてぞ感じける。斯くて大將讌中に入り給へば、海野太郎行氏役所よりかけ來り、「コレ朝比奈殿。御邊のしかた新田は悦びなるべきが、此海野は立ち申さず。御邊が馬を盜みし放、某召し取りたる禪師坊を忠常に助けさせ、あらそひの有る此馬を、新田にやるは何事ぞ。それでは海野が一分立たず、了簡し直せ朝比奈」と、いへば義秀ゑせ笑ひ、「ヲヤこしやくな一分だて。おたいあの馬は御へんなどには似合はず。お主たちには牛がよし。其上あの馬は、手がら三度したる者に給はらんとの御言葉に、ろくな手がらを一度もせいで御馬を望むは、經も讀まずに布施とるか。今でも手がらに、さあ此朝比奈をなげて見よ」と、大手をひろげ追ひまはせば、「我儘者のむほうやぶり、かまひは爲ぬ」と口の内、ぶつくさ〳〵つぶやきて、表をさして逃げ出づる。新田朝比奈ぞッと笑ひ、禪師ふや子の人に禮義をなせば、人々も朝比奈の志し、新田殿の御情、敵にては無かりけり。草のかげなる兄弟も、さぞ悦びのみつせ川。かへらぬ水のあはれ世に、ながらへ一所に有るならば、いかがはせん嬉しかりなんと、なほ繰り言のくやみ草。むかし戀ひ草しのぶふく、ふせ屋にいざなひ歸らるる。實にや樂しみ哀しみは、定めがたなき人界なるはと、今こそ思ひ知られたれ。

第五

數ならぬ身にも宿にも來る秋は、折りもたがへぬ風の音。去年まで魂をまつりし身が、今年はかげも新精靈の、棚に折りしく蓮葉の、盂蘭盆まつる哀れなり。いたはしや母上は、虎少將が黑髮の、思ひ切ッたる姿を見て、面影に立つ我子の顏、物忘れする老いが身に、なぞ是ばかりは忘れぬぞと、日の暮れ夜半の明くるにも、折りふしに增す歎きなり。素より貧家の曾我の末、なほ御勤氣は强くなる、世間廣き吊ひを、すべき使りも無かりけり。誠や菩提の知りやうは、法界の回向にしくは無しと聞くぞとて、祐成や時宗の最期場に、日おほひ擔へ籠をまうけ、接待に天台乳花の茶を煎し、往き來の人に施し、一遍の回向を受くべしと、鬼王兄弟水薪、おりくみ連べば虎少將、母上も諸共に、取る茶柄杓の回向の念佛。往來の僧俗男女、貴賤をわかず聞き及び立ちどまり、「是廣大の功德ぞ」と、皆々茶をうけ手向けをなし、一杯にのんぞをうるほし二杯にくらきしんをあきらめ、「三杯に枯れたる魂を索ぐり、四杯にかろき汗をおこして、平生不平の氣を散じ、五杯に肌いさぎよく、六杯には自から、

○くやみ草「戀ひ草」と共に文飾。但し何れも草の名では無く、唯それ「悔やみ」と「戀ひ」とを現したまでに止まる。

○人界　人間世界即ち娑婆。

●第五

○新精靈　新佛の盆祭り。○影も「有らぬ」と掛けた。○思ひ切ッたる姿　黑髮を思ひ切ッて剃髮した有り樣。

○法界　僧俗社會。

仙靈に通達し、七碗きッする其中に、清風に乘じて不退地の雲に遊ぶと、みな禮拜して念佛す。妙なる功德と聞こえけり。斯かるところに編み笠にて、顏かくしたる侍ひ一人、茶をのみて回向をなし、懷中より黃金一包み取り出だし、「近頃殊勝千萬。たださへ不勝手の曾我殿。御兄弟に放れ、さぞ不自由に候はん。貧者の御茶ただのみ申すは如何なり」と、膝に於いて立たんとす。老母御覽じ、「おん志しは嬉しけれども、子共が追善に施す茶、あたひを受けんやうは無し。返辨いたす」と返さるる。彼男小聲になり、「ィヤ是は我一人の金子にあらず。鎌倉の大名衆、方々をみつぎのため、少しづつ奉加をいたされ、集められたる金なれば、恩に着給ふ事でもなし。平に取ッて置き給へ」と、虎に渡せば辭退する。少將に遣れども手に取らず。「然らば御兄弟聖靈に參らする」と、さし置いて逃げて行く。禪師坊外より歸り、つつみし黃金押ッ取ッて彼の者になげ付け、襟元つかんでどうと引ッすゑ、「いづくの誰とは知らねども、慮外千萬なる奴めかな。身こそ貧なれ伊東が孫、曾我兄弟が追善ぞや。但しおのれは茶をうる出茶屋と見たか。先祖より此かた曾我一家が、物を賣ッて商ひしたる例しなし。おのれ誠の志しならば、たとへ一紙半錢なりとも寺へ持參し、三寶に供養すべき事。たとへ千金萬金にもせよ、群集の中にて茶のあたひを取ッて、日本無双の五郎十郎が、濯きしかばねに泥をぬるか推參者。殊に鎌倉中の大名が奉加して集めたと、ェ、胸わるや穢らはしや。さほど曾我を大切に思ふならば、兄弟が存生に志しも有るべし。なぞ時宗が一命をも申し受けて助けざりしぞ。祐經が威勢に恐れ、世間をはばかり、見ぬ顏せし腰ぬけ共が、なんぢや此めくさりがね。兄弟の者共には、

忘れがたみの子供等あり。若しもの事の有るならば、甥共に腹卷せさせ、此法師が衣の上に鎧なげかけ、坊主あたまに兜をいただき、痩せたる馬に打ち乘ッて、太刀脇ばさみ一陣に進んで、能き敵と引くみ討ち取り、一方を切りやぶり、かうなる者の子々孫々と、後代に名をとどめんと、朝暮念ずる我々が、諸大名の奉加を受け、生きたる甲斐が有らうと思ふか。浮世も命もすて坊主、いつの時をか待つべきぞ。鎌倉中の大名の、惣名代には不足なれども、おのれが相手ぢや逃さぬ」と、腕まくりし怒りしは、凄じかりける勢ひなり。彼者笠を取ッて捨て、「ォ、頼もしし〳〵。必らず粗忽せらるるな。某は頼朝公の御近習大友の一法師。元服して大友の左近の將監に任せられ、若君へ付けられ只今は頼家公につかへ申すよ。然るに祐成時宗、前代未聞の勇士とて、君御感ましまし、せうめい荒神あら人神といはひ、富士の裾野に社を立て、兄の宮弟の宮獻詩有り、近日御社參との御事なり。其節兄弟の忘れ形見の幼き者共、所領を下され頼家公の御伽に、召し出だされんとの御内意なり。然れども、方々久しくちんりん流浪の家。俄の用意見苦しかるべし。沙汰無しに此黃金手に入れ置けと、忝くも頼家公御建設の尊意なり。必らず粗忽し給ふな」と、いひもあへぬに禪師坊「あッ」と頭を地につくれば、老母をはじめ虎少將、鬼王兄弟まろび出で、「世に有りがたき御惠み。いつの世にかは忘るべき。是に付けても祐成や時宗が、浮き世にながらへ此仰せを同じやうに、承るほどならば、いかに嬉しかるべき」と、先立つ物は涙なり。大友重ねて「御内意なれども此首尾にて、か樣に顯はし申す上は、此通りを披露いたし、追ッ付け御社參有るべき間、其節罷り出むかひ、御目見え候ふべし。委

細は和田殿秩父殿より申さるべし。先づおいとま」と有りければ、只「御前をば宜しきやうに」と禮義をのべ、いとゞ名ひつゝ用意有る。歎きは失せて愛でたさの、曾我の出世の悦びも、大平の代の秋津君。仁義の道や白旗の、源野の社に御參詣。忝くも大將御父子、曾我兄弟の神靈に、御手を合はさせ給ひければ、近習外樣のめしゞの人、殘らずほッせをさゝげられ。取りわき今日は重陽の、折りに幸ひ曾我菊や。種たやさじと若共に、河津の本領三萬町、あんどの御判の墨色も、深き恩みに取りそへて、御恩をになふ木瓜の、紋も再び榮えける。愛でたかりける次第なり。

歌仙

さて其後賴朝公拜殿に立ち出で給ひ、數の歌仙を御覽じて、「いかに方々聞き給へ。何れの宮社頭にも、みな萬民の宿願にて、繪馬歌仙をかけ奉る。中にも此三十六枚の歌仙と申すは、是ならびなき名歌たり。あるとのみばかりにて、事の心をよも知らじ。いで〳〵此歌のしなゞ〳〵を、あらまし說いて聞かすべし。こなた〳〵參れ方々」と、一々次第に述べ給ふ。「そも〳〵此歌仙といッぱ、中比四條の大納言公任といひし人、選び置かれし人々なり。歌仙と書きてはうたのひじりと是をよむ。されば三十六人の歌人は、世にたぐひなき名人なり。先づ左の第一番は柿の本の人丸。此人丸と號すは、忝くも大聖文殊の化身たり。和歌の道を弘めんため、かりに人間とあらはれ、奈良の帝にみやづかへ、位正三位に至り、一代の詠歌の數、五千三百八十首。みな眞言の秘密なり。中にも此所に書かれたるは、ほの〴〵と明石のうらの朝霧に、しまがくれ行く舟をしぞ思ふ。此歌の口傳樣々なりと

○ゆしゞの人　召し具したる人即ち從者共。
○重陽　九月九日の節句。
○木瓜　曾我の紋所。
●歌仙
○歌仙　冊六歌仙の圖。

申せども、是は神道の根本、佛果菩提のめうもんなり。人間生死の有り樣を、うらこゞ舟になぞらへ、弘誓の海を渡り、涅槃の岸に至るべき、其行く末を思ひやる、深き心を詠まれしなり。狂言綺語のたはふれも、さんぶつせうの因緣とは、よくこそ是を傳へたれ。扨右の第一は紀の貫之の詠歌に、櫻散る木の下風は寒からで、空にしられぬ雪ぞ降りける。此貫之と申すは、延喜のみかどの御時に、歌の ほまれ世にたかく、御書所を承り、住吉玉津島あり通しの明神にも、あひ奉る歌人なれば、是又凡人ならずとて、かの人丸ともろ共に、和歌の祖師とぞ定められる。歌の心を尋ぬるに、嵐のさそふ山ざくら、こかげの雪と積もれども、照る日のひかり曇らねば、空にしられぬことわりの、實にたぐひなき名歌かな。左の二ばんは是も又、同じ延喜の御宇に有りし、凡河內の躬經なり、詠める歌には、住吉の松を秋風ふくからに、聲うちそふる沖つ白波。歌の心は濱松の、梢のひゞき沖つ風。立つ白浪も音添へて、神の心をすゞしめの、さつ〳〵の聲とや聞こゆらん。右の二番の歌人に、伊勢といへるは女なり。書かれし歌は、みわの山いかに待ちみん年ふとも、尋ぬる人もあらじと思へば。歌のしさいを尋ぬるに、是はびはの左大臣、中平と申せし人の、心がはりをうらみつつ、大和の國へおもむく時、詠みて送りし歌なれば、偖こそ所も三輪の山。そるしの杉の古る事を、我身の上によそへたり。偖左の第三は中納言家持、春の野にあさる雉子のつまごひに、おのがありかを人に知れつつ。とは春の狩り場にすむ雉子の、草葉に身をばかくせども、妻こひかぬる折り〳〵は、けい〳〵ほろろと鳴く聲に、よその袂も濡れぬべし。右のかたの第三は、山の邊の赤人のつらねし歌は、和歌の浦にしほ滿

○弘誓の海　弘く衆生を濟度するとの佛の誓ひ、その恵みの弘大なのを海に譬へた語。
○涅槃の岸　「涅槃」は往生の義。「弘誓の海」の縁で岸に續けた。
○狂言綺語　俗史や小說。
○あさる　餌を求める。

ちくれば片男波、あしべをさして田鶴なきわたる。實に此浦のならひとて、女浪は立たで片男浪。蘆邊の田鶴の立ちさわぎ、行方も知らぬ心なり。在原の業平の歌の言葉は、世の中に絶えて櫻の無かりせば、春の心はのどけからまじ。と花に心を染め川の、深き情をあらはせり。僧正偏照の詠歌には、末の露もとのしづくや世の中の、おくれさき立つためしなるらん。實に世の中の有り樣は、今日は人の上、あすの我身を白露の、風まつ程の命ぞと、思ひ知れとの教へなり。猿丸大夫は、遠近のたつきも知らぬ山中に、おぼつかなくも呼ぶ子鳥かな。と便りなき身をおく山の、鳥の心にたとへたり。小野の小町が、わびぬれば身をうき草のねをたえて、さそふ水あらばいなんとぞ思ふ。と詠みけん歌の心こそ、殊に優れて哀れなれ。むかしの花の一さかり、世におちぶれし行く末は、水の上なる浮き草の、定めかねたる身のほどを、思ひやらるる言葉かな。ここに左の十六に、藏人左近と聞こゆるは、是も女の歌仙なり。いは橋のよるのちぎりも絶えぬべし、あくるわびしきかづらきの神。と詠める心はいにしへの、役の行者のかづらきや、くめぢにかけし岩橋の渡しもやらで中々に、神にうきめをみしめなは。長き恨みを結びける。夜のちぎりぞ哀なる。大中臣の能宣が、千とせまでかぎれる松も今日よりは、君にひかれて萬代や經ん。と子の日の松の行く末も、久しかるべき例しぞと、君を祝ひし名歌なり。十八ばんのをはりには、左に平の兼盛が詠歌を見れば、暮れて行く秋のかたみに置く物は、我もとゆひの霜にぞありける。と老いをいとひてよむ歌も、ただ我々が身の上に、思ひ知らるることわりの、むかしにかはる黒髪は、霜の翁と衰へて、過ぐる月日はあづさゆみ、引くに

○たつき便り、寄る邊などの義。

○身をうき草「うき」は「憂き」と「浮き」との兩義に通ふ。

○もとゆひの霜白髪の形容。

○あづさゆみ　引くに掛かる枕詞。

○王法、佛法、國法　共に同聖の文飾。

ときまらぬ世の中の、生老病死の有りさまを、悟れと詠める心なり。右のときまりは中務。是こそ伊勢がひとり姫、母におとらぬ名人なり。つらねし歌は、黃鳥の聲なかりせば雪消えぬ、山里いかで春を知らまじ。と實に心なき鳥類も、時を忘れぬ初聲に、四方の春をや知らすらん。されば花に鳴く鶯。水にすむ蛙の聲。何れか歌を詠まざるや。神も佛も押しなべ納受有るは此道なり。やあ弓馬の家に生まるるとも、歌の道をも嗜むべし」と、一々次第に語らせ給ひ、すぐに還御なされける。今に絶えせぬ大日本、王法佛法國法は、萬劫經るともよも盡きじと、貴賤上下押しなべて、悦びの眉をぞ開きける。

世繼曾我

第一

扨もその後、それ天下太平、國土長久安全に、治まる富士の山なれば、裾野の草の葉末まで、靡かぬ方もあらざりし、源氏の御代こそ愛でたけれ。其頃右大將頼朝公。淺間三原那須野の原、あさづまの狩り倉より、富士野御狩り有るべしとて、諸大名思ひ〳〵に小屋打たせ、君を守護し奉れば、然しもに廣き富士の裾野に、駒の立て處は無かりけり。斯かる由々しき折り節、一藏工藤左衛門祐經に討たれたる、河津が二人の子、曾我の十郎祐成、同じく五郎時宗、假屋の內へ忍び入り、敵祐經討ち果せ、其上御所の侍ひ三百餘人に手を負ふせ、祐成は仁田に討たれ、弟五郎時宗は、御所の五郎丸に生け擒られ、鷹が岡にて斬られにけり。斯くて頼朝公梶原を召され、「明日は鎌倉へ歸るべし。凡そ此度具したる諸大名。裝束更め出で立たせ、とゞめたりし鳥獸、その色々を名乘りせよ。奉行には新開の荒四郎を申しつけ、帳面に委細を記させよ」との御詞なり。梶原畏まッて御前を罷り立ち、郎黨共に申しつけ、御陣の假屋の其內を、一々次第に觸れにけり。然るほどに、頼朝公井櫻高くしつらはせ、ひた白の幕打たせ、さも大樣に座し給ふ。君の左は老中なり。さて御扈從中花を飾りて見え給ふ。その時國々の諸大名、思ひ〳〵の狩り裝束。駒の鼻を立ちならべ、裾野を狹しと扣へたり。さて新開の荒四郎棟梁を賜はり、大紋のつゆを結んで肩にかけ、筆取り一人召し具して、御座の右手に伺公して、次第〳〵を記しけり。「まづ一番に春日野や、若紫の裝束に、白いの行縢たぶやかに、萌え黃の裏うち竹笠を、木枯らしに吹きそらし、陸奥立ちの荒馬に、乘ッたる武者は誰人ぞ。狩り場の獲物は如何に〳〵」。「さん候ふ。某は先年我君七騎にて、敵に襲はれ給ふ時、寄る邊定めぬうたかたの、安房の國龍が崎にて、甚だ忠を勵みける、十井の彌太郎遠平なり、一昨日の列卒いたに猪と引き組んで、早速とめて候ふ」と、名乘ッて通れば筆取りは、頓て斯くとぞ記しける。「二番にかちんの裝束に、金襴の小手をさし、白熊の敗皮。さび月毛の馬にふくみ轡を懸けさせしは、天晴れなる出で立ちや。誰れ人なるぞ。誰れやらん」。「誰そやとは人がまし。又申さんも如何なり。名乘るも流石耻づかしの、盛長にて候ふ。誰れに紛がへて藤九郎。鹿子三頭」と答へつゝ、靜かにこそは通りけれ。「三番には木賊色、秋野の摺ッたる狩り衣に、大口の稜高くとり、尾花葦毛の馬に乘り、手綱追ッ取り、ゆられ出でたる若侍ひ。家名實名名乘られよ」。「名乘れとは浪のまに〳〵藻鹽燒く、三浦の平六兵衛義村。二つ連れたる飛び兎。追ッ駈け〳〵峯へわけ、谷へ下ッて懸け違へ、其儘兩手に引ッ摑み、上覽に入れしかば、汝は翼やあるらんと、御感れにあづかりし、今更名乘るも事ぐるし」と、然も大樣にぞ通りける。「その次ぎは梨打ち烏帽子に鉢卷きし、むらごうの袖印。鹿子の行縢くゝり下げ、足利樣の染め手綱、鞭に採りそへ繰り懸けし、馬上の達者は實にまこと、秩父の重保侯ふな」。「何と包まん隱れなき、園生に植ゑし紅の、染め羽の矢先にかけ鳥を、二つ續けて射て落とし、見參には備へねど、證人紛れ侯はず。御帳に記し給ふべし」。「實に尤も」と夕まぐれ。「雲立て筌の狩り

○扨もその後　是また「出世景清」と同じやうに、第一曲だけは「扨も」の字を頭に頂いたが、第二曲から第六曲まで何れも「其後」の語で始まッた。

○井樓　やぐら。

○しつらはせ　建てさせて。

○ひた白　眞白。

○大紋の露　水干又は狩り衣の袖括りの緒の垂れた處。

○行縢　獸の皮で作り、騎馬の時に腰に付ける具。

○たぶやかに　古言「たふやかに」即「たッぷり」の義。

○うたかたの　「泡」に掛かる枕詞。此所では類聲の「安房」に掛けた。「うたかた」は泡に似たもの。それ故、緣語「寄る邊定めぬ」に續けた。

○かちん　古言「かち」の轉。紺色の殊に濃厚な物。もと其音が「かち（勝）」と通ふ所から武具などに用ゐ始めた。

○恥づかしの森　長一恥づかしの盛といふ地名に寄せた語。其下に「誰れに紛がへて藤九郎」の句の有るのは九郎判官義經の「九郎」だけ似た故に出した句。即ち藤九郎盛長と名乘ッたのである。

○大口の稜「大口」は昔し東帯の時袴の下などに穿ッたもの。稜は其端。
○尾花葦毛　淡色の葦毛。
○梨子打ち烏帽子　梨子の皮にあるやうな斑を鍛の寄せ方で現した作りの烏帽子。略して「梨子打ち」ともいふ。
○むらこう「むらこ」の延。「むらこ」は色に濃淡のある物の稱へ。
○人溜居　控へ所。

衣。青漆の尻鞘かけたる太刀を帶し、雲雀毛の馬に淺黃の總かけさせしは」。「是は信濃の國。相澤の彌五郎。鹿壹頭射留めて候ふ」。「續いて小松の摺り衣、露を含みて絞りあげ、徒歩立ちの弓杖は、誰人の下人ぞや」。「さん候ふ。上にも豫て知ろしめす、畠山が郎黨本多の次郎近經。去んぬる廿日の朝山に、御馬屋の德竹が、手負ひ猪に追ひ立てられ、今を限りと見えし時、尾の上を横に走りつけ、猛ッて嚙せる荒れ猪の、片膁とッて引ッ伏せて、草分を三刀に、突き留め申して候ふ。鳴呼がましう候へども、御尋ねなれば」と會釋して、人溜居にぞ入りにける。「跡より乘りて出でしほの、流石氣高き亂れ髪。額に滿てる月の貌。二瓜ばかりの若武者は、何方の御曹司。聞かま欲しや」といひければ、「抑もこれは村上天皇の後胤、こ作りの忍ぶ丸。富士川の岸行く鹿を跡より追ッかけ、先へ廻り向かふを射留め候ふ」と、高聲に呼ばはッて、手綱掻いくり靜づ〳〵と歩ませしは、由々しかりける次第なり。「八番に糸毛の腹卷き斑の駒に目結ひの手綱。一際勝れて出で立ちしは誰れ人なるぞ」「さん候ふ。是は御所の五郎丸。此度の狩り倉に、然までの事はあらねども、鬼神と言はれつる、曾我の五郎時宗を生け擒りて候ふなり。御帳に記して給はれ」と、打ッて過ぐれば荒四郎「天晴れ比類なき御手柄。曾我十倍ぞ」と誉しッて、頓て帳にぞ書かせける。扨その外甲斐源氏、三浦の一黨伊勢平氏、坂東坂西北陸道、南は紀の路八庄司、在鎌倉の諸大名、都合十萬七千餘騎。駒も千歳を嘶ふれば、君の御威勢。知るも知らぬもおしなべて、萬々歳とぞ祝ひける。斯かる處に朝比奈の三郎義秀は、遠侍ひに扣へしが、する〳〵と立ち出で、新開が傍にむんずと直り、「やあ荒四郎。見れば御分は

耳、聞えぬか。目の無きか。何とも不審晴れやらず」と、「苦々しくぞ申しける。新開氣色を損じ、「こは某を侮りたる言ひ分かな。汝が眼に能く見よ」と、太刀の柄に手をかくる。義秀冷笑ひて「いや汝等合點ゆかずば、子細を語ッて聞かせん。今日の結構は、何事とか思ふらん。此度御狩りに留めたり、鹿猿鳥の物數を、書き留めよとこそ上意あれ。何ぞ御所の五郎丸が、時宗を生け擒りし、帳面に記す事。いつの間にかは時宗が、鹿にばし成りけるぞ。眼も耳も有るならば、事の道理を篤と聞け。曾我は三浦の一家なり、我々とても遁れぬ中。彼の兄弟が働きは、日本無双の侍ひと、君も御褒美なされしに、己が分にて善くも〳〵、畜生には爲けるよな。幸ひかな己を斬ッて、此朝比奈も御狩りにて、新開の荒四郎一疋と記させん」と、飛んで懸かれば人々慌て押し止め、「御所なるに、さりとては鎭まり給へ」と制しける。賴朝御覽じ、仰せ出だされけるやうは「朝比奈が申し條、一々道理至極せり。さりながら、かほど愛でたき鎌倉入り、双方和談あるべし」と、御座を立たせ給ひけり。然しも勇む朝比奈も、君の仰せの重ければ、「え〳〵己ばら。上意なれば許し置く。誠に曾我の時宗は、命助かる者なれども、侍ひの道を守ッて死ぬるぞや。けふの帳面に五郎丸が、時宗を生け擒ッたると云ふからは、曾我の敵は五郎丸。重ねて曾我の所線あらば、此朝比奈後見し、必らず狙ひ討たすべし。新開とても危なし」と、はッたと白眼んで言ひければ、始めは言葉荒四郎、後は慄々ふるひつゝ、行くさき中々〳〵氣遣はしく、見返り〳〵退出す。朝比奈猶も怒りをなし、「時日は少し延びるとも、己等二人の奴原を、爭でか助け置くべき」と、獅子奮迅の怒りをなす。彼の朝比奈が言葉の末、尤も斯

うこそ有るべけれとて、貴賤上下押しなべて、皆感ぜぬ者こそ無かりけれ。

第二

その後新開の荒四郎。朝比奈の三郎にさん〴〵悪口せられつゝ、無念更に晴れやらず、如何せんと思ひしが、我一分にて適はじと、五郎丸を呼び寄せて「斯様〳〵の次第なり。此上は義秀を生けて置くものならば、以後とても両人が悪となるべきは鏡にかけて覚えたり。三浦が館へ押し寄せて、朝比奈に腹切らせ。浮き世を広く暮らさんは、如何あらん」と申しける。五郎丸聞いて、「さりながら、日中に押し寄せんは、君への聞こえ世の憚り。所詮今宵夜討ちにせん。いざ討ち立たん」といふ儘に、都合其勢三百餘騎、馬物の具を用意して、朝比奈館へ押し寄せて、鬨の聲をぞ上げにける。朝比奈此由聞くよりも、大手の門へ走り出で「何者なれば狼藉や。其名を名乗れ」と呼ばはッたり。斯くて寄せ手の大将、騎一陣に駈け出だし、「只今是へ押し寄せしは、珍らしからぬ御所の五郎丸、新開の荒四郎両人なり。されば富士野の悪言、以ッての外の不禮なり。其本懐を達せんため、我々是まで向かッてあり、命惜しくば以後とても、遺恨なき由を。降参せよ」と呼ばはッたり。義秀聞いてから〳〵と打ち笑ひ「扨も申せし不敵さよ。敵にあふては柴垣破ッて高這ひし、又は女に身を化けて、偽り高名こそ能ならん。侍ひに打ち向かひ、晴れ業の合戦は、おのれ等が分にては、思ひも寄らぬ過言なり。入らざる推參申さんより、やあ其陣を引き退き、命をつげ」とぞ申しける。両人聞いて腹を立て「物云はせぬ軍兵共。憑かれ〳〵」と下知すれば、両方互ひに入り亂れ、軍は花をぞ散らしける。

○貴賤上下押しなべて皆感ぜぬ者こそ無かりけれ　此長文句も「出世景清」の「者こそ無かりけれ」と同じく、煩はしきまで多く用ゐて在る、即ち第一第二第四第五第六曲の結末は總べてこれ。

●第二

○鏡にかけて覚えたり　「鏡にかけて見る如く」と同義。明白であるとの意。

戰中の事なるに、寄せ手の陣より六尺ゆたかの大男二人。得物〳〵をひッ提げ、ゆらり〳〵と立ち出でて、大音聲にて云ふやうは、「斯く申す吾々こそ、定めて聞きも及ぶらん。五郎丸が家の子片瀬の大六」○「同じく扇が谷の陸童なり」○「人がましき者あらば、是へ立ち出で手並の程」「そッと試みせよや」とて、仁王立ちに立ッたりけり。古郡左衛門此由を聞くよりも、する〳〵と走り出で「偖も由々しき過言かな。手並の程を試みん。参り候へ」と討ッて懸かる。大六陸童これを見て、「是こそ願ふ敵なり」と、両人一所に渡り合ひ、半時ばかりぞ戰ひける。されども勝負は見えざれば、「寄れ組まん」○「尤も」と、押し並べてむんずと組み、上を下へと返しける。古郡少しも更に事ともせず。両人を押伏せ、首一々に討ち落とし、「日頃鎌倉にて鬼神と言はれし、大六陸童両人を、古郡が手に懸けて打ち取ッたり」と呼ばはッて、然も大様に引き返す。五郎丸是を聞き、「南無三寶」といふ儘に、壹丈餘りの鐵の棒輕々と提げ、一文字に打ッて出る。味方の軍兵「すは大將なるは余すな」と、我も〳〵と駈け出づる。五郎丸きッと見て、「ええもの〳〵しや」と渡り合ひ、向かふ者の眞向逃る者の奴原東西へ、ひら〳〵ばッと追ひ散らし、近づく敵のあらざれば、とある所へさッと引き、暫らく息をぞ繼ぎにける。朝比奈見て「おゝ甲斐〳〵しき働きかな。さりながら、雜兵を何百人打ッたりとも、果敢〳〵しき事あらじ。此義秀と引ッ組んで、勝負をせよ」○「尤も」と押し並べて引組んだり。上手に懸けて義秀を押しひしがんとせし所を。朝比奈石の腰を指し延べ、大渡しに引ッかけ、彼處

へぞうぞ取ッて伏せ、首捻ぢ切らんとせしさんとする處を、義秀「もの〳〵しや」と新開を比奈を刎ね退け、新開諸共逃げたりけり。義秀見て「余さじ」と、揉みに揉うでぞ追ひ懸くる。されども遙に逃げ延びたり。朝比奈今は詮方なく、「ええ思ひかけたる一念は、爭でか空しく果つべき」と、齒噛みを鳴らして引ッ返す。彼の義秀が其勢ひ、さながら不動明王の、荒れたる氣色も斯くやらんと、貴賤上下押しなべて、皆感せぬ者こそ無かりけれ。

●第三
○影の如く　始終の義。影は其人に始終伴なッて居るといふ處から。

第三

その後曾我兄弟の郎黨、兄に鬼王弟に團三郎と申す者、祐成や時宗の未だ幼き比よりも、影の如くに附き添ひて、共に敵を狙ひつつ、此度の落着に是非二世までも御供と、達て望み申せしに、祐成も時宗も母の御事氣遣はしく、最期の御供許されねば、力及ばず兄弟は、形見の品々取り持ちて、主なき駒の口を取り、泣く〳〵曾我へぞ歸りける。斯かる處へ誰れとは知らず「暫し〳〵」と呼びかけて、「何れもは曾我の御家人、鬼王團三郎にて在ますや。是は朝比奈の書狀なり」とて差し出だす。鬼王請け取り披き見れば、「かた〳〵が主人曾我兄弟。君御裁許明きらかゆゑ、何れに仇を殘さず。相果てらるゝといへども、子細有る事にて新開の荒四郎、幷に御所の五郎丸、此兩人曾我の敵に相極はまる。御分等兄弟の內一人は曾我に歸り老母に仕へ、一人は早く鎌倉へ歸るべし。義秀が手引きを以ッて、彼の者共を討たすべし。早疾く〳〵」と書かれたり。兄弟大きに喜び、使者に一禮相述べ、鎌

倉へ歸し、偖鬼王團三郎を近づけ、「此上は某鎌倉へ取ッて返し、五郎丸荒四郎を狙ふべし。和殿は曾我に立ち歸り、御形見を奉り、御母君をも養くみ申せ」と言ひければ、團三郎聞きあへず、「ィヤ某は若輩者の事なれば、御母君の勞はりは、中々叶ひ申すまじ。思ひ定めて候へば、身はくだ〳〵になるとても、古鄕へとては歸らぬなり。左樣に思し召すならば、御身も我も歸らん」と、言葉を放ッて申しける。鬼王聞いて「おゝ誤まッたり團三郎。此上は兩人共に三浦へ打ち越えて、朝比奈殿を賴み、主の敵を打ち取ッて、世上へ其名を殘さん事、案の內と思ふなり。さりながら、御形見の品々を、曾我へ送らん便りがな、あらまし欲しや」といひければ、團三郎承はり、「おゝ善き便りこそおはしませ。大磯の虎御前、化粧坂の少將。此兩人を賴み、密かに送り申すべし。いざさせ給へ「鬼王」と、兄弟打ち連れそれよりも、化粧坂へぞ急ぎける。是は扨置き大磯の虎御前、つく〴〵物を案ずるに、實にうけ難き人界の、此生を受けながら、例し少なき川竹の流れの身こそ定め無し。思ふも思はざりけるも、夜毎に替はる憂き枕。辛き中にも勤めをして、朝な夕なの化粧坂。此身も同じ憂き勤き。是に付けても少將は、「如何渡らせ給ふらん。今宵行ッてや大磯の、勤め過ぎに忍び出で、迎り〳〵と露踏めば、猶しも濡るゝ我袂。化粧坂にぞ着かれける。折りふし少將局に出で、「善うこそ渡らせ給ひたれ。此方へ來らせ給へ」とて、常の處へ入り給ひ、互ひの思ひを語らるゝ。斯かる處へ鬼王兄弟、化粧坂へ來りつゝ、夜討ちの次第討ち死にの有り樣を、一つの卷き物に認め、「是を御覽じ候へて、御慰みませ」と、泪と共に出だしけり。虎少將聞き敢ず、「こはそも誠か悲しや」と、其儘眞處に倒れ伏し、

○くだくだす。

○今宵行ッてや大磯の「逢ふ」と掛けた。

消え入るやうにぞ歎かるゝ。「神ならぬ身の悲しさよ。斯くとは知らで樣々に、恨み申せし敢果なやな。夢にだにも知るならば、諸共にこそ死せずとも、何しに浮き世に存へん」と、云ひも敢ず鬼王が、腰の刀に取り付けば、「こは如何に」と押し留め、「吾々さへ御最期の御供をば許されず、況して女性の御身なり。左樣に思し召すならば、永く御跡弔はせ給へ」と、樣々敎訓申しつゝ、「さて吾々は朝比奈より、斯樣〳〵の御狀ゆゑ、新開の荒四郎、五郎丸といふものを、討ち申さん其爲に、道より歸り候ふなり。御難義ながら此馬と、御形見の品々を、曾我へ送りて給はるべし。片時も早く吾々は、鎌倉へ取ッて返し、二人の奴原討ち取ッて、曾我精靈に手向けん」と、涙をはら〳〵とぞ流しける。今は早虎少將、當たる道理につめられて「然あらば我々御形見を、母上に捧ぐべし。さらば〳〵」との、涙の別れぞ哀れなる。さりとても、戀ひは曲者皆人の、迷ひの淵や氣の毒の、山より落つる流れの身、うきねの琴の調べかや。曳く手數多に繫けれど、思ひ出だすは彼人の、形見の駒の口を取り、夫ゆゑ沈む身の行く方。思ひ遣られて哀れなり。悉多太子に別れにし、車匿童子が往古は、檀特山の岨傳ひ、犍昵駒の諸手綱。脆き涙に暮れけるも、それは生きての別れぞや。我身の憂さは富士の山。裾野の原は草隱れ。露の下にや兄弟の、はや入り相の鐘の聲、寂滅爲樂と響けども、輪廻の花は散りもせず、いつか火宅の門をさへ、伊豆の三島のしほき取る、浦の煙りの一結び、又二結び。よれて縺れて解けて亂れて、靡き大磯。君を小磯の道すがら、去りし夕の頃までも、此處を通ひて來にけらし。「此駒よ〳〵。鞭を打たれし恨みをも、今は形見と思はずや」と、二人手綱に縋り付き、口說

○火宅の門をさへ「出づ」と掛けた。「火宅」は塵世の義。
○靡き大磯　靡いて「逢ふ」と掛けた。
○君を小磯　君を「戀ひ」と掛けた。小磯は地名。
○しどろもどろに　亂れる體の形容。「知る邊」と同聲の文飾。

●第四

○いなせ　安否。

き給へば流石に、聞き入れたりし風情にて、諸膝折りて身ぶるひし、頭を頂垂れ耳を伏せ、主の別れを歎きける。誰が玉章の箱根山、涙に染みて赤澤山。鎌倉山の谷々も、かげけを晒すか蘆高山。苅藻かくなる臥す猪の床に、石の枕や苔莚。二人かはさば惡からじ、待つ人持たぬ歩路の旅。すずの篠原眞葛が原、小菅蓬生玉蔓、押しわけ搔きわけ、しどろもどろに知邊なく、主なき駒の馬方いやよ。穗に出でて逢ふ夜も有る鞠子川。御身とても我とても、花ならば初櫻、月ならば十三夜。盛りに足らぬ身を持ちて、思ふ人には添ひもせず、斯かる憂き目を見る事よ。是も誰ゆゑ紫の、一もとの緣ぞや。歎き給ふな歎かじと、諫められては諫めつつ、水洩らさじと契り置く、其移り香も殘るや袖。手に手を取りて行くほどに、曾我の里にぞ着きにける。虎少將の其有り樣。哀れとも中々、申すばかりは無かりけり。

第四

その後物の哀れを留めしは、曾我の里に在します、兄弟の母上にて、殊に哀れを留めたり。兄弟富士野へ趣き、けふ二十日に餘れども、兎角いなせのあらざれば、暫しまどろむ隙もなく、明くれば十郎戀ひしや、暮るれば時宗戀ひしやと、待ちあこがれ給ひつゝ、萬事の床に臥し給ふ。二の宮の姉御前、女房達に至るまで、後や枕に寄り添へて、「富士の御狩りも過ぎぬれば、愛でたく歸らせ給ふべし」と、樣々慰め奉れど、齡傾むく老いの浪。折り節ものをも曰はず。守り居るより外ぞ無き。斯かる所へ虎少將、門外にたゝずみ、涙ながらに案內乞ふ。折り節二の宮の姉御前、「誰そや」と立ち出で見

○愛くしき　愛らしい。

○思ひ寄りしぞ　考へついたことがある。

給へば、さも愛くしき女性二人、悄々として申すやう、「是は大磯の虎、化粧坂の少將と、申すものにて侯ふが、御兄弟敵工藤祐經を、思ひの儘に討ち給へど、其身空しくなり給ふ、御形見の品々を、取り持ち參り候ふ」と、云ひも果てぬに姉御前、「是は夢かや現か」と、前後も分かず泣き給ふ。虎少將も涙に暮れ、「誠に御歎きは道理なり。此上は吾々も、髮をも下ろし姿を替へ、御菩提を吊ひ參らせんと、思ひ定めて候ふなり。御兄弟の御形見に、母上樣を拜みたう候ふ」と、思ひ入ッてぞ望みける。姉君感じ入り給ひ。「誠方々の志し、返す〳〵も頼もしけれ。尤も母上に逢はせ參らせたう候へども、兄弟を戀ひわびて、今を限りと見え給ふに、斯くと知らせ申しなば、中々命も候ふまじ。さりながら方々の御望み、無下に成さんもいががぞと」、兎や角案じ給ひしが、「おお誠思ひよりしぞ」と、形見の烏帽子直垂を、虎少將にうち着せて、中門に佇ませ、頓て内に走り入り、「なう母上樣。兄弟こそ敵を討ち、祐成歸り候へ。時宗歸り候ふ」と、誠しやかに曰へば、悼はしや母上は、重き枕を輕くあげ、「何兄弟が歸りしとや。あら嬉しや疾く〳〵」と、身の勞りをも打ち忘れ、勇み給ふぞ哀れなり。晝さへ疎き老いの身の、黄昏過ぐるをはしまの、心までくる憂き涙。押し俯いて居たりけり。母嬉しげに御覽じて、「珍しの兄弟や。終に便りも無かりし故、若しは狩り場の流れ矢にも當たり、過ちばし爲たるかと、案ぜし憂さの病まふとなり、時を待つ間の我命、存へし甲斐ありて、敵討ちての對面は、最早死しても本望ぞや。とても事に祐經を、討ッたる有り樣物語りし、母をも慰さめ且うは又、冥途にまします父上にも、手向け申して敎養に、夜道を照らしまゐらせよ。はや疾く〳〵」

○白眞弓　「引く」に掛かる枕詞。「知らぬ」と掛けた。

○まさなう　兒戯に似て、見ッともないとの義。「正無う」と書く。

とぞ望まるる。無殘なるかな虎、少將。母の仰せを重んじて、「あッ」と答へ立ち上がり、聞き傳へしを知邊にて、狩り場の小野の物語り、聞くに枕も濡れぬべし。然るほどに建久四年五月雨の、黑白もわかぬ闇き夜に、今宵限りと白眞弓、引き返さじと一筋に、思ひ定めて祐經が、狩り場の庵に忍び入り、松明振ッて見てあれば、宵の酒宴に醉ひ沈み、前後も知らず臥しにけり。浮き木の龜や優曇華の、花待ち得たる心地して、兄弟思はず打ち頷き、にッこと笑ふ、心の中こそ嬉しけれ。「寢ねたる敵を討たんは、死人を斬るに異ならず」と、歩みの板どう〳〵〳〵と踏み鳴らし、「親の敵に見參せよ」と、呼ばはる聲に目を醒まし、起き上がらんとせし處を、弓手の肩より、右手の肋のはづれまで、ばらりずんとぞ斬り付けたり。時宗透かさず諸臑薙き、五つや三つの頃よりも、十八年の天つ風、今吹きかへす葛の葉の、うらみは盡きじ飛び懸かり、踊り上ッて斬るほどに、歩みの板に斬り付け、門外さして駈け出づれば、御陣俄に震動し、「すは夜討ちこそ入りたり」と、上を下へぞ返しける。斯かる所に武藏の國、太樂の平馬の丞」と名乘ッて出で、「もの〳〵しや曾我殿原、參り候へ」と云ふ儘に、四尺餘りの大太刀眞向にさし翳し、面もふらずかゝりける。「祐成是に有りや」とて、小柴の陰よりつッと出で、一文字に打ッて懸かる、言葉には似ざりけり。かい振ッて逃げて行く。「まさなう候ふ平馬殿。何處まで」と打つ太刀に、おしつけの外れより、かいかね掛けて斬り込まれ、蹌り〳〵と引きにけり。爰に平馬が姉婿に、「愛甲の三郎」と名乘ッて出た。五郎莞爾と打ち笑みて、「子燕は龍樹の枝に戯れ、白鷺は蘆花の陰に遊ぶ」と、笑ひながら斬り拂へば、弓手の腕打ち落とされ、跡をも見ずして入り

てけり。是を見て安房の國安西の彌七、十郎目がけて渡し合ふ。「さあ知ッたり」と聲を懸け、二打ち三打ち打つ太刀に、高紐の外れより、草摺三間切り落とされ、乾にぞうを轉びしは、不便なりけり淺ましし。淺間の嶽か信濃なる、臼杵の八郎景信、時宗に渡り合ひ、「得たり賢し餘さじ」と、南無阿彌陀佛の拜み打ち。眞向二つに割りつけられ、夕べの露とぞ消えにける。五番に御所のくろ彌五、「此處をば我に任せよ」と、嚴しげに駈け出づる。「請け取りたりや」と祐成、横に拂ふ車斬。四十餘りの髭男、二つになッて見えければ、皆一同に聲を懸け、ぞ贊めにける。哄みも未だ止まざるに、駿河の國岡部の三郎、遠江に原小次郎二疋連れたる唐獅子の、牡丹にすだく如くにて、隙きをあらせず兄弟に、稻妻よりも猶早く、煙を立てて飛んで懸かるを、ひらりと外しちやう〳〵〳〵。蝶の羽づかひ隼が、雉子をあいしとやおとし。刹那の息をも繼がせばこそ。はらり〳〵と薙ぎ倒し、突ッ立ち上がり汗押し拭ふて、暫し息をぞ繼がれける。八番に信濃の國、海野小太郎幸氏。時宗に渡り合ひ、膝口割られて引いて入る。新開の荒四郎、此由を見るよりも、「敵は二人で有りけるに、さもしや方々よ。いで某が討ち留めて、褒美の暇を取らせん」と、小踊りして馳せ向かふ。彼奴が廣言惡ければ、微塵に成さんと兄弟が、飛ぶが如くに斬ッて出る。此勢ひに恐れを爲し、太刀も刀もいらばこそ。小柴垣を押し破り、高這ひして逃けるを、笑はぬ者こそ無かりけれ。其外群らがる兵を、此處に投げ伏せ、彼處に斬り伏せ、兄弟が手に懸けて、五十餘人討たるれば、手負ひは三百八十人。爰に伊豆の國の住人仁田の四郎忠常、祐成に渡り合ひ、仁田は新手

○淺間の嶽　信州に在る山の名。下文「信濃」と出すために同聲の「淺ましし」に直やと續けた。

十郎は、宵よりの疲れ武者、多くの人を斬りければ、太刀鰐元より折れければ、差し添へ拔いて切り結ぶ。少し足たち斗さがり。上手に成ッて十郎殿。仁田下へ追ひおろさんと、走り掛かッて打つ太刀を、仁田さらりと受け流し、柄を突いて横に薙ぐ。十郎の右手の力足、膝の口を差しさげて、ずんと切ッてぞ落としける。弓手の足ばかりにて、半時踊ッて戰ひしが、乾にぞうを轉びける。仁田首を打ち落とす。滿ずる年は二十二。惜しまぬ者こそ無かりけれ。斯くとは知らで時宗は、御所聞近く亂れ入る。爰に御所の五郎丸、衣引き被き居たりしを、女と思ひ侮ッて、闇々と生け擒れ、終に御所に引き出だされ、鷹が岡にて斬られにけり。宵と朝に兄弟は一夜を隔て、富士の裾野の露と消え、名を萬天に上げたりしを、今見るやうに物語り、虎少將がその有り樣、昔賤上下ふしなべて。皆感せぬ者こそ無かりけれ。

第五

その後二の宮の姉御前。母上に近づき、「餘り兄弟を待ち侘び給ふ御姿。見申すも悼ばしく候へば、露の間なりとも御心を、慰め申さん爲にこそ、斯くは計らひ申すなれ。是に在ます方々は、「大磯の虎御前、化粧坂の少將とて、兄弟が思ひ人。形見を持參し給ふが、母の異例と聞き給ひ、斯くいたはらせ候ふ」と、涙と共に口へば、母上聞こし召し、「何方々は聞き及びし、虎少將にて候ふとや。誠に世になき者共を、死後まで不便を加へられ、是まで訪はせ給ふ事、かへすがへすも嬉しけれ。さは云ひながら昨日にも、母も空しくなるならば、今の憂き目は聞かじもの。思へば〳〵方々の、訪ふに憂さ

●第五

○異例　病氣。

の增さり草。葉末の露と消え失せし、元の雫の吾身か」と、また絶え入ッてぞ歎かるる。虎少將も涙に暮れ「御歎きはよる盡きじ。老少不定の界にて、若きも先立つ習ひなり。歎きを止めまし〳〵て、形見の御文御覽じ、暫し慰みましませ」と、彼の品々を奉る。悼はしや母上は、文押し披き、讀まんとはし給へども、こぼるる涙に目が眩れて、文字も定かに見え分かず、「くだりを見給へば、あら不思議や十郎が手跡にて、守り刀は祐若に取らするを書いて有り。「此祐若とは誰が事ぞ」。虎承り、「偖は左樣に候ふかや。耻づかしながら自らに、三歲の若まします事を、手越の伯母が許に、隱し置かれ候ふ」と、涙と共にぞ申さるる。母は夢とも辨へず、十郎が忘記念の有りけるとや。はや疾く〳〵」と身悶えし、唯兄弟が蘇りたる心地して、頓て使ひを立てらるる。乳母抱き來りけり。老母は膝に掻き抱き、「さても〳〵面ざしの、善く祐成に似しものかな。十郎とも時宗とも、此孫一人の樂しみぞや。然こそ最期に祐成が、此子が事こそ思ひけめ。思へば〳〵不便や」と、悶え焦がれて泣き給ふ。されども姉君甲斐〳〵しく、老母に力をつけ參らせ、「何れ由なき御歎き。夫侍ひの家に生まれ、乃に懸かるは習ひなり。これ又親のため譽まれを殘し討たるれば、果報いみじきあやかり者。誠に斯樣の勇ましき、世繼ぎの有れば何事も打ち忘れ、御祝ひましませ」と、諫め給へば虎少將、「又こそ參り候はん」と、古里さしてぞ歸りける。是は偖置き新開の荒四郎五郎九兩人は、朝比奈に追ひ散らされ、耻辱の上に身の大事。如何せんと案じしが、所詮此上は、虎少將を誑ッて、曾我が所緣を相尋ね、一々亡ぼし其後は、朝比奈をも打ち殺し、浮き世を廣く送らんと、兩人謀し合はせつゝ、化粧坂へと急ぎけり。彼處になれば先づ案內乞ふて、頓て座敷へ入りにけり。虎少將思ひ寄らざる事なれば、既に座敷を立たんとす。其時に五郎丸、少將が手を取れば、荒四郎虎が手を取り、「情なし先づ暫く」と引き留む。虎少將是を見て「御用あらば重ねて」と、立ち上がるを引き留め、「それ遊君は風情を元とし、情深きを遊女とす。御身達は引き替へて、世に無き曾我の殿原を、情深きは何事ぞ。今より後は我々を、彼の兄弟と思し召し、情を懸けて給はれ」と、むくつけなる髭男が、愛想なげに申すにぞ、虎少將打ち笑ひ、「兎角の答へ申せばこそ。御心にや障りなん。我等も積もらば腹立たん」と、差し俯いて居たりけり。兩人聞いて、「奇怪なり汝等。是へ來るは別義なし。曾我十郎祐成が一子ある由。上聞に達し、召し捕ッて參れとの、上意を蒙り來りたり。片時も早く出だすべし」と、奥を差して入らんとす。流石女性の事なれば、偽り事とは知らずして、裾や袂に縋り付き、「君の上意は然もあらん。さりながら、死に失せたりとも御披露あり。助けさせ給はれ」と、手を合はせてぞ歎かるゝ。元より實なき事といひ、名にし負ふたる虎少將、然もしとやかに申すにぞ、「然程に思し召すならば、いかでつれなく當たるべき。心易かれ方々。命助くるのみならず、御前宜しく云ひ直し、曾我の家を取り立て參らせん。先づは目出たし盃」と、暫し時をぞ移しける。斯かる折り節鬼王兄弟、虎少將を賴み、曾我古里への形見の品々送りしゆゑ、聞かま欲しく思ひ、化粧坂へ來りしが、此由を見るよりも大きに悅び、偏へに天の與へぞと、義秀方へ使ひを立つる。朝比奈聞くと均しく一息に馳せ來り、大音上げて申すやう、「君を掠むる偽り者。此內に有りと聞く。是非の實否を晴らさんため、

○つれなく　無慈悲に。

小林の朝比奈是まで來りたり。早く出でよ」といふ隙に、鬼王つッと入り、頓て障子を押し開き「五郎丸今は遁れぬ所ぞ」と、素より開こえし大力、「物々しや」と云ふ儘に、弓手右手に掻い摑み、七八間投げ出だす。朝比奈透かさず走り懸かッてむづと組む。兩方劣らぬ大力。金剛力を出だし、此處を最期とせり合ひしは、是や龍虎の戰ひも、斯くやと思ふ氣色なり。斯くする隙に鬼王兄弟、起き上がり、五郎丸に飛び懸かる。朝比奈きッと見て、「不覺なり汝等。流石名を得し義秀が、加勢を頼み討つべきか」と、云ふより早く取ッて伏せ、高手小手に縛しめて、新開尋ねて駈け廻る。あら無殘やな荒四郎。此勢ひに恐れをなし、逃る處のあらずして、邊に有りし長櫃の蓋をあけ、其中へ身を隠す。虎少將「こは幸ひ」と、蓋の上へ乘りかかり、「女なりとて夫の敵。いかでか以ッて餘さん」と、出でんとすれば乘り懸かる。義秀立ち寄ッて、長櫃に繩を懸け「つれ〴〵なりとも新開殿。御前へ連れ行く其内は、驚かでまします」と、五郎丸を引ッ立て、御前を差してぞ上りける。彼の朝比奈が其振る舞ひ。天晴れ剛なる働きやと、貴賤上下押しなべて、皆感ぜぬ者こそ無かりけれ。

●第六

○賺し　たばかッて。

第六

其後朝比奈の三郎は、曾我の祐若虎少將、鬼王兄弟召し具して、御所をさしてぞ上りける。御所になれば義秀謹しんで申すやう、「是は工藤左衛門祐經を討ちし、曾我祐成時宗が妻子にて御座候ふ。然るに新開の荒四郎、御所の五郎丸、此兩人が庵へ參り、君の上意と僞り、是なる悴を召し捕らんと仕り出だし、新開を引き出だし、諸人の中にて面を晒らさせよ」○畏まッて朝比奈、櫃の懸け繩はら〳〵と切り解き、蓋を明くれば新開、飛び出で遁げんとするを、朝比奈取ッて押さへ「此處にても彼處にても、逃げ足早き男かな。白狀せよ」と押しひしぐ。君御覽じ「暫しが間畠山に預け置く。それ〳〵」との御諚にて、頓て御前を引き立つる。朝比奈力及ばず新開を取ッて引ッ立て、彼處へぞうど突き倒せば、袖にて顔を打ち隱し、御前を退出したりけり。斯くて君の御諚には「曾我兄弟が振る舞ひ。今汝が仁義の程、天晴れ無双の者共かな。即ち先祖の本領なれば、宇佐美くつみ河津三ヶ所、祐若に得さする」と、安堵の御判を下さる〻。○道の道たる御政道、有り難き次第なり。此事御臺聞こし召し、仰せ出だされけるやうは、「誠に遊君白拍子、僞り多しと聞きつるが、今更彼等が有り樣賢女とや云はん」。女郎の戀ひ路のしな最懐かしく思し召し、君へ御訴訟なされつゝ、「往古遊女の有り樣を、學うで見せよ」と御諚ある。兩女が顔を打ちあかめ、今は昔に馴れ衣。かへすゞ〳〵も耻づかしし。幾度辭退申せども、數々の御所望ゆゑ、御受けを申し立ちければ、御所の御前に町つくり、數多の遊女を召し集め、「既に用意をしたりけり。「いざ〳〵名殘の調子を」と、虎少將が調べにて、拍子を揃へて奏でけれ。斯くて御暇給はりて、親子伴なひ立ち歸り、富貴の家と榮えけり。千秋萬歳愛でたきと、貴賤上下押しなべて、皆感ぜぬ者こそ無かりけれ。

○白拍子　昔しの妓女の舞ひ即ち「男舞ひ」○此所では轉じて其舞ひを舞ふ人即ち妓女を指す。
○戀ひ路の品　「品」は事情の義。

り敢ず馳せ參ッて、子細を尋ね候へば、五郎丸理不盡に、打ッて懸かり候ふ故、是非なく搦め捕ッて候ふ。新開これに動轉し、これなる長櫃の中へ隱れ入り候ふを、是まで召し具し候ふなり。兩人を召し出だされ、事の實否を御裁許賜ひ奉る」と、初め終りを言上す。君聞こし召し、「先づ長櫃を取り出だし、新開を引き出だし、諸人の中にて面を晒らさせよ」○畏まッて朝比奈、櫃の懸け繩はら〳〵と切り解き、蓋を明くれば新開、飛び出で遁げんとするを、朝比奈取ッて押さへ「此處にても彼處にても、逃げ足早き男かな。白狀せよ」と押しひしぐ。君御覽じ「暫しが間畠山に預け置く。それ〳〵」との御諚にて、頓て御前を引き立つる。朝比奈力及ばず新開を取ッて引ッ立て、彼處へぞうど突き倒せば、袖にて顔を打ち隱し、御前を退出したりけり。斯くて君の御諚には「曾我兄弟が振る舞ひ。今汝が仁義の程、天晴れ無双の者共かな。即ち先祖の本領なれば、宇佐美くつみ河津三ヶ所、祐若に得さする」と、安堵の御判を下さる〻。○道の道たる御政道、有り難き次第なり。此事御臺聞こし召し、仰せ出だされけるやうは、「誠に遊君白拍子、僞り多しと聞きつるが、今更彼等が有り樣賢女とや云はん」。女郎の戀ひ路のしな最懐かしく思し召し、君へ御訴訟なされつゝ、「往古遊女の有り樣を、學うで見せよ」と御諚ある。兩女が顔を打ちあかめ、今は昔に馴れ衣。かへすゞ〳〵も耻づかしし。幾度辭退申せども、數々の御所望ゆゑ、御受けを申し立ちければ、御所の御前に町つくり、數多の遊女を召し集め、「既に用意をしたりけり。「いざ〳〵名殘の調子を」と、虎少將が調べにて、拍子を揃へて奏でけれ。斯くて御暇給はりて、親子伴なひ立ち歸り、富貴の家と榮えけり。千秋萬歳愛でたきと、貴賤上下押しなべて、皆感ぜぬ者こそ無かりけれ。

○白拍子　昔しの妓女の舞ひ即ち「男舞ひ」○此所では轉じて其舞ひを舞ふ人即ち妓女を指す。
○戀ひ路の品　「品」は事情の義。

曾我會稽山

●第一　第一

照し射らする火串の影のねらひ獵り。狗は獸を追ふて殺し、人は其處を指し示す。今諸軍は狡犬なり。蕭何が如き、勝つところを指し示すは、功人なりとの故事の、心を爰に狩り衣。裾野にしばし御宿陣、右大將家の御威勢は、富士より高き鎌倉山。建久四年五月廿八日と、明くるも寅の一天に、虎の御門を開ける。御留守なれども式日の、御禮は御臺所に與奪有り。竹取りの間に出で給へば、和田畠山千葉上總、大老執權の北の方を始めとして、工藤梶原宇都宮、土肥佐々木三浦黨、畏近高家の內室達、其外御譜代由緒有る家の子の妻女まで、夫々の格に任せ、座次を亂さず參列して、廿八日の御禮、一度にあッと拜謁有る。袖の縫ひもの綾錦、高燈臺に輝きて、金泥砂子竹取りの、翁が娘の彩色も、光りを耻づるばかりなり。斜ならざる御氣色にて、「なう方々富士の御狩りの御留守に、幼稚の賴家いひ甲斐なき自ら。各とても女の身。鎌倉を靜謐に、持ち固めしも大將殿、武威愛でたき故ぞかし。あの庭上に列べし御狩りの中の、勝れ物とて送られし、射手の譽まれも顯すため、それ〳〵目錄」と曰へば、中原吉之が妻承り、男文字に和訓を付け、てには巧みに讀んだりけり。「御帳面の第一の、筆も夏毛の麋は、大友の市法師、まだ十五歳の小腕の矢先。中ん就く御褒美たり。番ひ鹿は秩父の六郎、三町五反の尾上を隔て、鏃細かき鹿子まだら、御行籐の料たるべし。牛とも象とも紛がひ

○心を爰に狩り衣　上にある故事の心を「借り」と掛けた。
○寅の一天　午前四時。
○輿奪有り　職の代理をしての義。
○竹取りの翁…「竹取物語」參考。「竹取りの間」の緣で出した形容。
○てには巧みに　助字を正しく。

て、三刀かき切ッたる肋骨。仁田の四郎忠常が、世上の美談に乘ッたる猪。御狩り一の高名なり。長沼五郎が諸腕。さすや岡邊に蓬喰み。呦々と鳴くさは鹿の、角二つに引き裂きて、是を手取りの證據とす。扨は土肥の彌太郎、巖に躓く狼。その喉を踏んで、攪きとめたる一討ちの、力鐵鞭恐ろしき。虎狼より盛長が、組んで刺留めし荒熊と、名は明きらけき月の輪も、浮かんで湖の波走る。番ひ兎の登り坂、駒馳せちがへ長刀に、のせて留めしは小山の判官。皮に疵なく山豬の、眉間の骨を射攝きしは、淺利の與市が神頭の弓勢。足高山に足くらべ、追ひもおふたり廿八町。息の限りを追ッ詰められ、狐は死して岡部の六彌太。是も手取りの高名たり。兒玉太郎が鎗玉に、上げて突きしは飛鳥の業。鷹股早く飛び鹿の、元首射きる安田の三郎。竹の下の孫八左衛門、向かふ猪に矢はたたず。打ち物にて切りとむる。宇佐美の左衛門川越太郎、相馬の小太郎結城友重、土屋平山千葉宇都宮、各矢先の高名あり。外に牡鹿一頭、工藤左衛門祐經、秩父の郎等本多の次郎近經、一の矢二の矢の諍ひ、鹿一疋に矢二筋。祐經太腹本多は草分け、六分の勝ちに倦へども、鹿論未落居せず、二本の矢は射付けの通り、仍て終りに記す者なり。御狩り場の別當和田の義盛判」と讀み上ぐれば、侗侯の女中面々の、殿御の武藝を身の手柄。御臺所も御感嬉の、御前さざめくばかりなり。祐經が妻阿古屋の前進み出で「開き惡き御帳面。秩父の郎等また者の本多輩。我夫祐經と鹿論さへ慮外なるに、本多が六分の勝ちとは義盛の依怙贔負。末世に殘る御記錄。祐經一人射留めしと、書き改め願ひ奉る」と、憚りなく言上す。義盛の北の方巴御前聞きもあへず、「コレ阿古屋殿。本田の次郎近經は、秩父

○諸腕　左右のうで。
○月の輪　熊の胸に在る毛の稱へ。それに「玉兎」の月を言ひ掛けた。
○草分け　鹿の胸前。
○落着せず　裁判の落着が付かぬこと。

の家來と云ひながら、武藏源氏の歷々。軍の場數は御出頭の、工藤殿も及ばず。此度の御狩りにも、假屋奉行夜廻り、御直の御用承り、御近習の御家人並、女房にも御臺所、御對面有るほどの筋目。誰れに恐れ負けて居ん。義盛が依怙とはたり。阿古屋色をかへ、「イヤ昔しは王の孫にもせよ。今は秩父の歩若黨。そもじも昔は朝日將軍、木曾殿のお部屋御臺巴御前。大力の子胤をとらんと、和田の義盛申し請けられ。今は我々同輩、其時々の身の程知らぬ、無用の本田が系圖立て。然も金泥にて工藤左衛門祐經と矢印有り、本田が矢には家名もなき、いたつきの的矢。狩り場の法も知らず慮外千萬の鹿論。御帳面替はるか、本田が名を消さるるか。いつまでもお願ひ」と、額髮押し撫でて、まばゆからぬ張り臂辯口。末座に着きし本田が女房常夏、「コレ阿古屋殿。慮外と云ふは馬の乘り合ひ座敷の高下、盃の前後などの事。偖は戰場にても、目上の敵には太刀打ちも慮外と、後を見せて逃らるるな。弓矢の道不案內で、小差し出た批判。片腹痛し」と嘲笑ふ。「それ〳〵〳〵。慮外といふが其事よ」。「イヤ上をもぞく其方が慮外よ」と、兩方聲もあら木の眞弓、詞鋭に云ひ張りける。御臺所御聲高く、「あれ鎭められよ人々。老中さへ理非を分けぬ鹿論、女の批判及ばぬ事。されば浦の御曹司範頼入道殿。今遁世長袖の身ながら賴朝公の御弟。をりしも在鎌倉こそ幸ひよ。北の丸に請じ、互ひに遺恨なき樣に、中分の扱ひ、御了簡に任すべし。巴宜しう沙法せられよ」と、御辭を立ち給へば、阿古屋つッ立ち、「工藤左衛門祐經と、匹夫下郎の本田と、中分の扱ひとはお恨めしい御臺樣」と、御裳袴に取り付く所を、常夏引きとめ、「匹夫下郎とはおそれ多の口から」。「コレ三ケの庄の主。近江八幡なんど本田ほどの者は、家來に持ッた大名の御前樣。下郎といふが不思議か」。「さ、其大名の御前樣。息の根留めん」と爪紅血走る抓み合ひ、百花亂るる女中の騷ぎ。巴御前ずんと立ち、兩足宙に俵がへし。小脇に抱い込みえいやッと締めたる大力。眉も鬢もばら〳〵。涙鼻息ばかり絶え〴〵なり。「ホウむッちりと抱き心地よい甘さうな肉合ひ。祐經殿の御秘藏が尤も。さりながら、御臺樣の御前で、余り慮外な口が善惡ない。乘り物下馬まで巴が送る。我儘が云ひ度くば、祐經殿歸られて、夫婦圍の私語。無理も我儘も睦言は御勝手。八中で我儘云へば先ッ此如く。痛いか〳〵。痛い目に逢ふぞや」と、締め付け〳〵、「ヤ片荷づつで力に足らぬ。相手の不肖常夏」と、片手に取ッて引き寄せ、橫抱き締めたる弓手の小脇。下髮垂れて薄化粧、二つ頭の顏の色、我顏共に三つ巴。太鼓の御門明六つの、雲ほの〳〵と白猿の、流れは同じ源の、浦の御曹司範頼朝臣、天下の疑がひ晴らさんため、修禪寺にて御出家有り、法名源雄と衣を墨に染めながら、鎌倉殿の御舍弟。世の覺え重けれども、身持ちは輕き籠乘り物、只一僕を侍ひにも、草履よ杖よ呉れ竹の、藪醫に紛がふ風情なり。大名小路の升形より、引き馬に五つ道具。乘り物の戸八文字に開かせ、布袋乘りに乘ッたるは、梶原が近習共、「浦の入道殿の御通り。下馬成さるべきか」と伺ひける。「世捨て坊主になんの下馬」と、顏さし出し坂東聲、「それなるは浦の入道殿な。工藤と本田が扱ひの爲め、北の丸へ御參か。我ら始御留守役の、大名小名相詰め申す。出頭第一の祐經と、倍臣の本田が鹿論は、提灯に釣り鐘。鵜

○いたつき　矢尻の一種。形ちは小さく、底の平になッたもの。射術習錬の時に用ゐる。
○まばゆからぬ　臆せぬ。
○長袖の身　僧。

○相手の不肖　喧嘩の相手になッたから其關係での義。
○升形　武者だまり。

の毛のさきはをも祐經ひける扱ひならば、お爲に能く御座んまい。乘り物やれ。參れ」と傳へて八枚肩。徒歩脚歷やッこらさ。邊を跳ねて刎ね馬の、人を虫ともはい〳〵〳〵。埃蹴かけて通りしは、存外至極の無禮なり。堀りぬき井戸の方より、廿ばかりの若侍ひ、編み笠ぬぎ捨て兩手を土に蹲ふたり。滿殿御覽じ「浪人か主持ちか。此方への會釋ならば、お通りやれ〳〵」と、手を出だし給へども、只「あッあッ」とばかり差し俯き、忍び涙に暮れおたり。滿殿も「斯ばかりの涙怪し」と乘り物を、おりゐの衣立ち寄ッて「いかなる人の何ゆゑに、用有りげなる落涙、見捨て難し」と曰へば、涙に沈む顏打ちあげ、「直に申すも恐れながら、口惜しの世の中や候ふ。殿は忝くも賴朝公の御弟。九郎判官殿諸共に、平家追討の御代官、五萬騎の大將軍。一の谷の大手、生田の森を攻め破り、武功と申し御連枝の、六十餘州に冠たる御身。梶原が末子なんぞ、我は顏の乘り打ち、御無念察し奉る。我等が主人も伊豆相摸に、名を得し者の末なれども、運の變に依ッて一族に父を討たせ、本領は其者の、秣かり場となり果てて、昔の劍錆び浪人、貧しき家には古人疎く、世にも侮づられ、いつ花咲かん埋もれ木の、身の無念存じ合はせて不覺の涙。問はず語りも御耻づかし」と、又涙にぞ咽びける。入道小聲にて「偖は曾我兄弟が下人よな。年月の堪忍さぞ有らん。祐經君の寵に誇り、詔ひを勤めと紛ぎらし世に蔓り、鎌倉武士の風儀を亂す佞臣。ヱ、齒癢し得討たぬな。入道昔の鎧賴ならば、天晴れ力を添へんず物。もどかしさよ」と曰へば、「御覽の上は包むに及ばず。曾我が下人鬼王と申す者。今度の御狩りを武運の時と、兄弟忍び巡りしに、昨日の朝山敵祐經尾越す鹿に目を付け、弓矢番

○はいはいはい　馬を逐ふ聲。蠅とも思はぬの意に聞かせた。

○おりゐの衣　位を讓った者の着る衣服。乘り物を「下り」に掛けた。

○齒癢レ　もどかしく、いらだって感ずる。

ひ退ひ驅けしを、茂みの影より五郎時宗、眞たゞ中をと急きに急いて放つ矢が、敵の竹笠射飜ッて、鹿の草分ずんばと當たり、祐經が矢は太腹。難なく鹿は留まりしが、時宗は隱れなき大力。筈廻り太く矢束も拔群。殊に名乘り家名の印もなく、既に矢詮索に及ぶべかッしを、秩父殿の執權本田の次郎近經、我こそ一の矢射たんなれと、本田と祐經鹿論に取りなし、大事の難は遁れしが、今度の御狩りに討ち漏らさば、何の世にか優曇華の、曾我が天運開くべき。御賢察」とばかり曰ひさして、頭を下げてぞ泣きゐたる。滿殿も涙ぐみ「あッたら勇士共世に埋もるゝ不便や」と、懷中より木札二枚取り出だし、是は北條時政大江の廣元兩印にて、鎌倉殿の御前までも、內意を達する割り符なり。祐經が用心搆へ頼朝を後楯て。尺寸側を去らぬと聞く。兄弟に是を貸す。何處までも恐れなく、鎌倉殿の膝下にて、曠業の敵討ち花やかにして、無念を散ぜよ。必ず穩密〳〵」と別れ給へば、鬼王有り難しとも冥加とも、詞は足らず御厚恩忝け涙包めども、心に漏るる駕籠乘り物。伏し拜み、伏し拜みてぞ別れ行く。北の丸の大廣間「工藤本田が鹿論。滿殿に扱はせ、穩便に濟ますべしと、巴御前承り、鹿を庇に昇きすゆれば、御留守番の大小名、遠侍ひ相詰め、滿殿をこそ待ち受けけれ。梶原平次景高、祐經が一子犬坊丸、郎黨八幡の三郎相具し、御廣間にのさばり出で、八幡の三郎目鼻を顰め「偖々づない大矢。御覽成され景高公。小兵の本田が射たればとて一間も飛ぶ物か。是を射ん者昔ならば鳥の海彌三郎。當代は淺利の與市殿。然らば矢印有る筈。名を書かぬは合點。阿房力の曾我の五郎、時宗と云ふ渇を人。主人祐經一門のはし、毎度の無心合力。何貸せ彼貸せもらかせの、驅り事も人

○及ぶてかッし　を及ぶ處であッたがの義。

○日ひさして　日ひかけて後をば日はず。

○のさばり出で　增長して人を憚らず進み出て。

○づない　方圖が無い。

○もらかせ　「貰へ」を前の語體に

髪用したもの。

○あんばく者　わんばくもの
○捻り餅　身體の一部分を手で捻ること。

○朝腹　朝飯前の空腹。
○六々鱗　三十六鱗の義。鯉にいふ。

食はねば、狩り場で小盗みせんため、紛され入ッたるに疑がひなし。和田殿の不詮穿。兎角梶原殿御父子にかけねば、明白ならず」とそやされ、「オヽサ別は無い。重ねて本田めに射させて見れば、忽ち化けが顯るゝ。此矢は景高預ッた」と、扱かんとすれば、「コレ梶原殿。其矢に指でも觸るが最期。腕を巴が引き抜く」と、腕捲くり脚捲くり、紅梅もるゝ雪の膝ぶし。骨ふと〳〵と煉り絹に、岩を包みし如くなり。悪かりなんと梶原「先づ浦殿が來せて、扱ひの術に依ッての事。ナヲ女の力と音の無い石佛、外の用に使はれぬ。なんの役に立たぬ物」と、御書院にぞ通りける。物に堪へぬ朝比奈の三郎、斯くと聞くより御番所の、拓の棒ひッ提げて、駈け込む所を母飛び懸かり、棒の物打ち確と取り、「ヲヽ、曾我殿原を盗みよ騙りよ。父義盛の不詮義と吐かした奴等、素頓打ち砕く怪我なされな」と捻ぢ上ぐる。「コレヤ打ち砕くほどなれば己は頼まぬ。あんばく者めっ。又捻り餅喰ひたいか」と、片足擧げて眞中より、棒を發矢と踏み折ッたり。「梶原め八幡め。殿り殺して退けん」と、飛んで出づるをむんずと組めば、朝比奈兩手を差し込んで、親子四つ手に取り組んだり。母も母なり子も子なり、汗を貫く頬髭と、風に亂るゝさげ髪の、すべり出でたは母の腹。「今は我等が腹櫓」と、三尺ばかり釣り上ぐる。巴兩足踏み放し、我身を重りに持ち上ぐれば、朝比奈も朝腹に、大力の母倦ぐみ果て、釣り下ろしつ釣り上げしは、龍の氣ざしの六々鱗。沸ッて落つる水の勢。鰭を敲いて龍門の、瀧登りとも謂ッつべく、母刎ね返し一放れ、大の男をひッ擔き、ゑうと落とす其響き、祇園精舎の釣り鐘を、切ッて落とすも斯くやらん。御殿も揺ぐばかりなり。泣き顔にて朝比奈むづ〳〵起きる。胴骨膝に引敷き、「ヱヽ、踈ましの荒者め。親に世話を掻まするな。ァかたむくろに曾我を引き、おのれは最負の引き倒し、文武二道の弓取りぞて、強いばかりが武士でない。又しては切ッての投げてのと、手習ひは否がる、物讀みは嫌ひで、和田の家が嗣がるゝか。ヤア今から手習ひするか」と太股を、ふつ〳〵と抓られて、「あ痛〳〵あ痛手習ひしましょ」。「物讀みするか」。「讀みましょ〳〵。あ痛たた」。「母がいふ事聞かねば又是ぢや」。「あ痛〳〵」。「捻り餅の味忘れな〳〵」と、ふつ〳〵抓り引き起こし、「行義ようして遠侍ひに相詰め、何事有らうとお屏間へ、差し出て慮外したらば又是ぢやぞ。まだ怖い目付き止めぬか。身柱に一灶すゑうか」と、威されてお次ぎへたつ。灸嫌ひの髭男、短慮の病母親の、異見ぞ藥艾なる。程なく「蒲殿御入りぞ、廊下番衆取り次げば、梶原始め大坊八幡出で向かふ。蒲殿暫らく鹿に目をとめにッこと笑ひ、「喃巴御前。實を諍ひ地を爭ふは人間世の欲心。それとは替はりて是は優しき弓矢の藝。其諍ひは君子なりと、孔子も是を譽め給ふ。位爭ひ歌爭ひ、春秋の詠めを爭ひし、雲の上人の風骨にも、劣るまじ心慮さよ優しさよ。爰に一つの物語り。昔の〳〵とッと昔の其昔、大和國天の香久山といふは女山。又畝火山耳無山、此の二山は男山。香久山姫の艶なる形ちに想ひをかけ、我妻にせんいや我こそと、山と山とが妻爭ひ、夜毎に谷峯震動す。出雲の國に在します阿暮の御神、是を扱ひ止めんと、御船を走らせ給ふと聞き、二つの山は中直り、あぼの神は播州印南野に、神ぢゞまり在ます。此三つ山の爭ひ、中の大兄の御歌を、萬葉集には載せられたり。今の世ま

でも美目よき女をお山といふも、此香久山の謂はれなるべし。惣じて物の扱ひには、心なき山の甲斐も有り。況んや文武の工藤本田、入道が扱ひ不足はあらじと。諍ひを親しみの始めにて、上下相和することこそ、源氏長久國家安穩の基なれ」と、御詞に花實を交せ、面白可笑しき御扱ひ。巴悦び小頷き、お次ぎ外様遠侍ひ、聞き傳へ〳〵、「あッ」と感ずるばかりなり。にッこりともせず梶原「イヤ〳〵。第一本田めが體に似ぬ大矢。殊に的矢は業の矢とて、親の敵を射る故實あれども、鹿を射る法は無し。サア矢の主の詮義〳〵」と迫り懸くれば、蒲殿も當話の返答。猶豫して見えけるを、犬坊八幡聲を揃へ、「但し本田が親を鹿に突き殺され、其敵射たるか。何と〳〵」と遣り込むる。お次ぎに朝比奈堪へ兼ね、襖半身出でんとす。母きッと見て、「又な〳〵。捻り餅身柱一灶するぞ」と、睨め付けられて身を縮め、引き込む顔こそ殊勝なれ。蒲殿ちッとも臆せず、「百様知ッて一様知らぬとは御邊が事。的矢を業の矢といへばとて、悪業の業と心得、親の敵を射る事と、故實を一偏に覺えしな。是常に射馴れて矢業よき故、わざの字の聲にて業の矢といふ義なり。鞆故籙に的矢一手入るるは、侍ひ所瀧口の骨法、親の敵に限らず、鳥をも鹿をも射る時有り、長袖と成りたれども、家に生まれ弓馬の道は、入道こそよく知ッたれ。胷はれざる詮議推參なり」と、御氣色變ばッて曰へば、「イヤサ主人祐經を曾我兄弟が、親の敵と狙ふよし。念を入るゝが僻事か」。「オ、さもあればこそ、頼朝の膝下離れず用心する祐經。曾我兄弟に翅は無し。何を知る邊に御前近く忍び入るべき。用心無用」と仰せも果てぬに梶原「イヤ〳〵祐經が出頭を妬み嫉む者多く、曾我を引き御前通路の割り符の札、彼等が手に入るまい物でなし。御身の方にも、彼札二枚受け取ッて置かれしが、散らさず手まへに有るならば、サア只今是にて一見せん」。「ヤア御邊に咎められ、是に倭ふ梶原殿とて、おめ〳〵と出だすべきか。大事の切手、汝等には見せぬ〳〵」。「偖こそ〳〵。見せぬは曲者。曾我に割符を呉れたは必定。推量は違はぬ蒲殿。サア蒲焼殿蒲焼の鰻入道殿。ぬらくら扱けても扱けさせぬ」と、悪口雑言手詰めになれば蒲殿も、無念餘ッて一世の浮沈、急き逆のくくし、心を配ッて控へたる。「コレ梶原。入道が受け取りの割り符紛失せば何とする」。「オ、曾我は伊藤が末、天下の怨敵の引き入れ、能い仕合はせで切腹〳〵」。「ムウ入道が切腹には、冥途の供を召し連るゝが合點か」。「晒落臭い。誰を供に」。「梶原平次景高を。連るるは」と、衣の下の薄氷。一尺二寸抜き討ちに、はッと飛び退く梶原が、烏帽子のまねきを切り落とされ、後の障子蹴破ッて、同じく逃げて犬坊に、續いて逃げる八幡が眉骨、脇つぼまで切り下げられ、うんと反るを取ッて押さへ、胸元を三刀刺し、死骸にどうと腰打ち懸け、一息ついで立ち給へば、お次ぎ外様の騒動、上を下へと返す音。巴御前大音あげ、「蒲の入道殿。子細有ッて八幡の三郎をお手討ち。騒ぐな〳〵。御所へ走り御臺所へ注進申せ。御用なき者此内へ、一人も叶はぬ」と、戸口に立ッて呼ばはりしは、木曾殿の後家、義盛の北の方ぞと物々し。其隙に蒲殿衣脱き捨て歯噛みをなし、「ヱ、打ち物短かく梶原めを、切り損じて口惜し〳〵。八幡藪五十八百人虚敗せしとて、誤る筋は無けれども、割り符の札の御詮議、一度は切らで叶はぬ腹。世に健氣なる曾我がため捨てん命、遁世の身の悦び、導き給へ南無歸依佛」

○ぬらくら　鰻の縁語。彼あ言へば斯う曰ひ、斯う言へば然う曰ひして、手に乘らぬこと。

○犬坊　祐經の子。「行ぬ」を掛けた。

と、小脇に突き立て引き廻し、返す刀の切先咥へ、眞逆様に貫かれ、三十五歳五月闇。短き夢と消え給ふ。御臺所の御使者として重忠の北の方。いてう御前徒跣足にて駈け付け、榛谷の四郎重朝二の宮の太郎安満を召し出し、「榛谷は死骸とも御預け、二の宮は富士野へ早打ち。蒲殿御切腹。曾我兄弟御狩り場に紛れ有るよし。狼藉なき中屹度御詮議遊ばせ」との御口上。畳八つの時切り半時の半時違ふても越度。課怠仰せ付けらるるとの御意。大事のお使ひ早う〳〵」。「畏まり奉る」と駈け出づる、刀の鐺榛谷の四郎確と取ッて引き留め、「こりや待て二の宮。御分は曾我の姉聟。小舅の難義する御使ひ、眞直には得云ふまい。役替へして死骸を受け取れ。富士野へは身が罷る」と、引き戻して駈け出だす。榛谷が鐺二の宮掻い摑んで呵々と笑ひ、「和殿は祐經と相聟。祐經を引く心から此二の宮を疑ふな。似合ふた〳〵。ヤ一門縁者の好みと、御奉公とは各別。ム、疑を晴らして見せん」とぞうと引き据ゑ、床の硯引き寄せ、三行半にさら〳〵去ッて去り状。裏さしの笄、暇の印と巻きこんで、家來の侍ひ呼び寄せ、「宿所に歸り女共、三世の縁の切れ目なりと申し渡せ。富士野のお使ひ曾我と他人の二の宮太郎」と云ひ捨てて駈け出だす。袴腰むんずと抱き止め。「人に心を許させんと、さッぱり立て受け取れぬ。御使ひは榛谷の四郎重朝が乞ひ受ける。是非に遣らぬ」と引き止めたり。「ヱ、面倒心急き五つの時に程もなし。二十里に餘る道、三時切りの早打ち、天狗の羽をも借りたい所。時刻延ばして二の宮に、腹切らせん企みよな。腕ぶし斬り放す奴なれや、互ひに御用辧る身。騒動の上の騒動、命は助ける愛放せ」と、捨ぢても押しても榛谷少し力増し縋り付いて動かせず。

お次ぎに朝比奈身を揉んで、歯痒く間疎く遣り戸口より身を半分、齒噛みを爲しても母の怖さ。ずッと引き込みによッと出してはすッと引ッ込み、業を涌かして睨む顔。巴御前きッと見て、「やれ朝比奈。ちやッと來て働け〳〵。許す〳〵」。「ヲ、まッかせ」と踊り出で、「母の御免ぢや忝し」とつッと寄り、榛谷が両腕取ッて捻ぢ上げ、「サア、お往やれ二の宮」。「急用のお使ひ。物申すも暇惜し」と、云ひ捨て駈け出し走り行く。「二の宮を遣るからは、我等に何の云ひ分。爰を放せ朝比奈」。「ヲ、二の宮は時切れ、おのれを宥すも時切れ。知行濟しの米櫃、飯櫃かけはんがい。片手に足らぬ中は空との明きはんがい。御時分能からう朝比奈が、握り拳の握り飯。喰ふて見よ」とゆふ空の、霞みに落つる鐘の聲。ごんと鳴ればぐわんと喰らはせ、又ごんと鳴るくわんと打る。三つ四つ五つ頭の頭で數ふる拍子取り。序に初夜後夜晨鐘入り相寂滅爲樂。跡はひらく天窓の骨砕けて、百八盆の窪、撮んで小庭へぞうと投げ、「思へば〳〵梶原め。釣り髭の釣り鐘面。打り砕かいで殘念至極。よし〳〵今は逃すとも、我見込んだは鱒百倍。一度はとらで置くべきか」と、日數を泳ぐ生死の海。淺瀬は波も朝比奈が、待ち來る寄せ來る磯の波。ぞう〳〵。ぞろ〳〵と踏み鳴らす、女波男波の足はやく、鰭を並べてひともつれ。共に御所へぞ參りける。

第二

片割の千木や内外の曇りなき、空も五月の二十八日、式日の御祝儀に、二の宮太郎安清出仕の留守の間には、夫に代はる武士の妻、心の障り身の不淨、手水の水に灌ぎすて、袋棚より取り出だし、紐解く

○かけはんがい「かけはんだい」を「はんがや（榛谷）」に云ひ掛けた。「かけはんだい」は飯櫃の一種。
○明きはんがい「明きはんだい」同じく「はんがや（榛谷）」を云ひ掛けた。「明きはんだい」は空になッた飯櫃。
○百八盆の窪　百八煩惱に云ひ掛けた。「盆の窪」は頭の眞中の窪んだ處の稱へ。
○鰐百倍　鰐に見込まれると大抵取られるが、我は其百倍ほどに見込ん

で居るとの義。此鰐の縁で以下總べて水に關係した物から形容を取ッた。

○女波男波　小波大波の義。男女に聞かせた。

○鰭を並べて「袖を連ねて」の意を魚に擬へての形容。

●第二

○片割ざの千木　上古の屋づくり。今は神社に用ゐる。きりむねの端の材と峰の角から組み合はせて空へ出し、其一角を殺いたもの。

大聖不動の尊像、五月なり緣日なりと、床に移せば女子共、供へのお神酒お鏡に、向かふ心の眞直ぐなる、冥慮ぞ暗に有り難き。二の宮の姉御前、心靜かに合掌し、「夫の武運長久御狩りの御留主預かりて大切の役目。禍の無いやうに、取り別け弟曾我の祐成五郎時宗。一萬箱王と申せし時、不動を工藤と聞き違へ、勿躰なくも尊像を、切り奉らんとまで、思ひ込んだる親の敵、工藤左衛門祐經を、首尾よう討たせたび給へ」と、只一筋の念願は、感應嘸と著し。家來白崎八平次遽ただしく、「且那より火急の御用。參りつけねど御居間へ」と、御免も乞はず大息ついて畏る。女房驚き「何の御用か氣遣はし。御口上は」と問ひければ、「何れも同じ御奉公とは申しながら、斯かる御使ひ身に取ッての大難」と、卷き込む暇の印の笄、一通を差し出だせば、開いて見るや見もわかず、はら〳〵涙の顏振り上げ、「お身も息才御武運も長久と、祈りしはたッた今。御出仕の折りまでも、云ひ語らひし數々は、捨て詞か空言か。恨めしの心や」と、卷いては解き讀んでは泣き、去り狀顏に押し當てて、思はずかッぱと身を投げ伏し、聲も惜しまず泣き居たる。有り合ふ腰元下女はした、樣子知らねば泣かれもせず、互ひに顏を見合はせて、溜め息ついたるばかりなり。「コリヤ八平次。何うした事で隙やると、御口上は無かりしか。樣子は知らぬか知ッたらば、聞かせてくれ」と氣を急けば、委細の事は存ぜねども、祐成御兄弟蒲の入道殿に加擔人なされ、賴朝公を討ち奉らん企てと、梶原殿の詞に依ッて、入道殿には御切腹。それ故旦那は御狩り場へ、御注進のお使ひ。八つ切りとの仰せを請け、榛谷と又口論有り、お暇の狀印の笄。渡し申せと仰せより、外には何も存ぜず」と、言はせも敢ず「ムウ聞えた〳〵。

○藤澤、澤邊　同聲の文飾。

○南京すずし「錫の皿」と同聲の文飾。

○樗　栴檀。

安淸殿は最早狩り場へ御座ッたか」。「イエ〳〵御前で口論最中。今出お立ちも存ぜず」と、聞き捨ててずんと立ち、脛高々と帶引き締め、「誰ぞ足早な女子共、長刀持ッて追ッ付けと、云ひ捨てて駈け出だす。各慌て縋り付き、「お里へでは有るまいし、恨み云ひにお出で遊ばすは、お道理と云ひながら、殿の御歸り待ち受けて、詫び成さるるが能い筈」と、止むれば振り放し、「退き去りも有る慣らひ。我身の事は兎も角も、其儘狩り場へ遣りましては、今の恨み憂みより、增さッた歎きも有らうかと思ふ故、搔きたぐるほど氣が急く物。まだ〳〵待ッて居られうか。八平次。お留主大事にせい。皆の者共賴むぞ」と、端女一人引き具して、振りかたげたる薙刀の、道を反らせて鳴る鐘の、空四つあがり藤澤や。澤邊の水に富士映る。雪さへ暑き夏の旅。空尻馬も徒人も、蒸しくる雲に雨を乞ひ、一吹きさッとくださるる。涼風價千金と、行き惱む道の傍に、葭簀圍ふて杉葉葺く、淸水堰き入る水車。筧の竹の糸筋に、滴る水の柳蔭、暫しとてこそ旅人の、立ち寄る所天下一、根本仕出しの家と、看板ひいやり氷室山。氷突き出す染め付けの、南京すずし錫の皿。樗折りしく靑楓。楢の葉もりの祟なし。霍亂藥咽にはや、秋風通ふ見世商ひ。主は久上の禪師坊。今度の御狩りに祐成時宗、年來の本意を遂げ、富士野は兄弟が命の露の置き所と、便り密かに寺を出で、御骨なりとも拾はんと、懸け鬢鬘に姿を替へ、十日余り此營み、御狩り場見廻りの諸方の使ひ。大磯通ひ鎌倉の、商人旅人暑を避けて、上り下りの其中に、祐經が家來近江の小藤太、鎌倉への歸るさ。見世に立ち寄り、「コリヤ〳〵亭主。水呉れい」とぞ大柄なる。「やすい事同じくは、心太になされたら、そッちもこッちも後藥。暑氣を去ッ

○心太「ところてん」の異名。氣丈夫の義に掛けた。○勢子を入れ「牧狩り」の縁語。勢を出しの義。

て渇きをとめ、二日酔ひのよろ〳〵も、一膳食へば心太。頼朝公も聞こし召し、大名小名御相伴の御膳料理。前代未聞のところてん。偖ても甘しと舌を牧狩り。随分商ひに勢子を入れ、往き來の人の腰錢を、狩り捕るべしとの御諚にて、見世先に富士を作り、御狩りの體を人形にて、水機關に仕懸けてお目に懸くる。サア只今始まり」と、聲可笑しくて拍子とり、御寮の其日の御賞翫。青葉涼しき心太、おなかよしげに一二膳。白皿受けて召されたり。御相伴には五郎丸。赤縮緬洲手の錦皿。下し給はッて是で喰ふ。價は八十五文が所、燃え立つ腹を冷やりと、四尺八寸の水船、一尺八寸の突出し、十文字に突くままに、白木の丸箸右手の小腕に持ち添へて、酒もすゝし奉る。秩父殿は精進汁、花柚散らして進まれたり。和田の一門九十三膳。代物合はせて三百八十四文なり。千葉小山宇都の宮、いづれも辛子はお嫌ひにて、砂糖大豆の粉のッこ此、この〳〵〳〵膳すゑての暴れ食ひ。皿も錫猪口も錫。箸打つ音がさゞめいて、さしもに廣き富士の裾野に、膳の据ゑ場は無かりける。さるほどに三千人の列卒の者、三日前から仕過ごしの、饌傷は眞反さま。巾着振るひ底を叩いて、是で御免と詫びるも有り、身の憚紅葉色々の、品を並べて人形に、人の氣を汲む水車。水機關も鹽梅よき、舌を廻して語りける。亭主もはッと息つぎに、上下を見廻し、「あれ〳〵〳〵。東から乘り物に網付けて、人足が引いてくる」。「ムウ乘ッた人が笑止や。腸が揉み切れう。ア、急な用さうな。飛ぶは〳〵」と云ふ方より順風の帆懸け船坂を下れる車の如く、えいさ聲して早乘り物。見世前にどうと下ろし、人足に戸を開かせ、乘り手は白布に、胴骨巻いたる仰々しさ。「コリヤ〳〵亭主。鎌倉から富士野へ乘り

○ところてんがうする顔「ところてんは搗かねばならず」の意を含めて、直ぐに「ところてん」の「てん」から「てんがう」する即ち惡顔をする顔付きでに續けた。

物でも馬でも、早打ちは通らぬか。隱さず申せ」といふ。「ッゝ損も德もない事。見たらば何の隱しましよ。早打ちにも遲打ちにも、今朝からはこの乘り物ばかり」。「よいわ〳〵。水一つ」と、振り仰いたる顔と顔。小藤太吃と見付け、「ヤ梶原平次景高公」。「さいふは近江の小藤太な。能い所で行き合ふた。咄す事あり近う寄れ」と、招き寄すれば禪師坊、是ぞ聞及ぶ敵の家來。樣子は聞きたし、どこ皿打ち落とし豆の粉灰に砂まぶれ。「ひら〳〵狩り場に別條ないか。いづがたへ」と問ひければ、「さん候ふ。主人祐經、本田と矢を爭ひし大鹿、鎌倉へと承り。風聞いかが聞いて參れと申し付け、鎌倉へ」と云はせも敢ず。「其鹿ゆゑに祐經殿。降ッて湧いたお仕合はせ。滿の入道にも辯舌を以て腹切らせた。曾我兄弟の奴原も、此筋から罪に落とし、縛り首打つ工面。さりながら氣の毒は二の宮太郎御注進の使ひ。八つ切りに御狩り場へ行く筈。女房を去ッて曾我と緣は切ッたれども、彼を遣ッては兄弟が事、惡うは御前へ申すまい。某先へ駈け抜けて、眞反さまに言上し、曾我の根を絕やさんと、只今狩り場へ行くところ、二の宮がまだ此所を通らぬこそ、重疊〳〵。御邊はあの藤澤寺へ登り、住持に逢ふて申さうは、工藤梶原両人が賴み入り、今日九つの刻限を、八つに打ち替へ給はらば、恩賞せんと賺し込み、彼高所から下を見下ろし、馬でも駕でも早打ちと見るならば、八つ鐘を撞かせよ。其時は我分別有り、若し又住持が否と云はば、片端に引ッ括り、御邊鐘を撞いたがよし。下人も連れて急げやッ」と景高は、心太屋に入りにけり。近江は僕を引き

具して、見上ぐる寺の惣搆へ。數十丈に山聳え、常に參詣稀なれば、偶登る人とても、道は木の根の足だまり。眞砂交りに石高く、赤土露に辷み蹈り、岩角荒き荒男、手を引き腰押しやう〳〵と、門外に吐息つぎ「ゝゝ見ゆるは三穂の松原清見寺、釣り船も漕いで行く。偖涼しいわ氣が晴れるわ。海道ぱ糸引く如く、嶺から見れば麓の人が小さう見える」。下から見るも斯くぞとは、我身を知らぬ愚人共、方丈に案内す。住侶立ち出で對面ある。近江の小藤太愍勤に、しか〳〵の旨相述ぶれば、住僧更に心得ず、「工藤梶原の御頼みとも覺えぬ物かな。鎌倉には鶴が岡の撞き鐘を以ッて、御番諸役の常規とし、當寺の鐘は二十里四方。諸職人諸商人、往來通路の刻限を極はめ、君より寺領頂戴す。私に刻限を違ゆるは、諸民を迷はす大罪。勿躰なし〳〵」と叶ふまじ」と、云はせも敢ず飛び掛かり取ッて捻ぢすゑ、「御出頭の工藤梶原殿のお頼みを聞くまいとは。家來共。坊主めら一人も殘さず引ッ括れ」畏まッて取ッては締め付け捻ぢ倒し、一人も洩らさず猿繋ぎ。「聲立てさすな。一所に追ひ込み錠卸せ」と、引き立て奥へぞ入りにける。嶺は吹きまく青嵐。海道は蹴上げの土煙り。一文字に來る人は、二の宮の姉御前。夫の安清が暇の狀、「三行半分讀む目も闇く、涙絞ッて鉢巻きしめ、恨みを夫に思ひしら柄の薙刀掻い込み、走る道芝照り付いて、火を踏むごとき燒け石原。下女は附き兼ね息切らし、「申し奥樣。ちとお休み。何を申すもお身が有ッての事。目が眩ふ〳〵。息が絶える」と、呼ばはり〳〵行く先に、昇きするゐたる梶原が早乘り物。「サアあれが我夫」と、女房乘り物取り廻し、「コレ太郎殿。コレ安清殿。今朝曉の烏鐘も、一つ枕に聞いた中。何を惡目に離別とは。女の夫に去らるゝは、軍に後見せた同前。削ッても此恥辱は遁れぬ。日影者の曾我が姉、御勘氣の者の末なるとも、朋輩の佞人共に云ひ廻されての去り狀か。いづれの道にも直に返事が聞きたい」と、薙刀持へ立ッたる所に、茶やの床几をそろ〳〵と、梶原平次景高。薙刀の柄をむずと取り、「此乘り物を二の宮と見違へて、おのれと名乘る因果晒し。梶原平次景高を知らぬか」と、呼ばはれば、下人共一度にはらりと取り廻す。「南無三寶人違へ」と、胸は騒げどそらさぬ顏。薙刀を椀き放し、飛退ッて身搆へす。「コリヤ女。佞人の朋輩とは誰が事。サア誰々を指して佞人。惣じて曾我に好みの奴原。世に有る者を妬み嫉む僻み根性。安清の今日のお使ひも、眞直には云ふまいと、某遣ッて急ぐ、御用に對して狼藉者。餘すまじ」と、主從拔き連れ打ッて懸かる。「ヤア夫を出し拔く梶原。薙刀の刃を戴け」と、八雙に振ッて懸かる。上を擧ぶ下女、腰の刀ぬき放し、大勢相手に主從二人、切り結ぶも女業。「こッちへ任せ。是こそ望む心太。商人が手並を見よ」と、山椒の粉擂椒の粉、オッ辛芥子それより辛い韓紅、唐辛の粉を摑み込む。水桶に酢も醤油も掻き交せ〳〵、突き出しを水鉄炮。群がり懸かる雜人原、顏へ廻ッて又しやッぷり。鼻を突き拔く噴嚏咳逆。辛い涙に目玉も飛んで、咽ばひい〳〵火花を散らして防ぎける。口も明かれず眼も眩む。蕎麥切り料理に打ち立てられ、ところてんぞう敗亡し、梶原主從八方散り〳〵逃げ失すれば、「餘さじ遣らじ」と禪師坊。跡を慕ふて追ッ駈ける。「中村宿の方よりも、馬煙り霞みを蹴立て、矢を射る如く乘り來るは、夫の太郎安清殿。サア生きるか死ぬるは此

○方丈　住持。
○住侶　住持の僧侶の義。長老。

○韓紅　此邊同聲「から」で文を飾ッた。「韓紅」は韓から渡ッた紅。色のうるはしい物。此所では唐辛の色を形容した。
○ところてん　「ところてんだう」から「ところてん」から直ぐと同聲を便りに「轉倒」即ち周章の義に續けた。

所。あの馬留めよ」と云ふ程も、家來に乘りぬけ稻妻走り尾筒をゆん手にから卷けば、下女は鹽手をかい握み、止めても止まらず十間餘り、引き摺られても猶放さず、刎ね上がる馬に輪を懸けて、鞍づよに耐へしは、造り付けたる如くなり。安清はッたと白眼んで、二十里を三時切りのお使ひ。仕損じては一期の不覺。耻ぢを知ッたる男子なるぞ。尾龍至極」と乘り出すを、又引き止め鐙に縋り、「情無いぞや二の宮殿。耻ぢを知るは男子ばかりか。去り狀受くる女の身。是に上こす耻辱は無し。二人の弟が豫ての大望。後見は石鉄の楯よりも、頼みに思ふた甲斐も無く、お暇と有るからは、兄弟が事も賴まれぬ。見る影もなき曾我殿原、よしない緣を結びしと、悔やしい顏の色目も見せず、もてなし給ふ心に惚れて添く、起き臥し立ち居一命懸けての宮仕へ。見落としでも有る事か。貧しき曾我の惡目が、今日といふけふ見え初めしか、兄弟への面當てか兄弟を見放す氣か。佗しき身なれども河津が娘。道理が立たねば暇の狀は受け取らぬ」と、馬氈に投げ付き縋り付き、憂さと恨みの諸手綱。絞る涙ぞ哀れなる。安清せいたる顏色にて、ひらりと飛び下り木の根にどッかと腰打ちかけ、暇を吳れた女。詞も交はさぬ筈なれども、今までの好み。聞かずや今朝北の丸にて、曾我兄弟より事起こり、浦の入道殿御切腹。鎌倉の騒ぎとなる。御詮議の筋目に依ッて、兄弟が命の大事となる子細有るにより、密かに老中の耳へも達し、首尾能く事を治めたく、心は先へ飛ぶ折りふし御臺所より、狩り場の御注進八ッ切りとの御詫。願ふ所と有り難く、畏まッてお受け申すところ、榛谷の四郎差し擽ひ、曾我に緣者の此お使ひ心もとなしと、押さへ諍ひしより心づき、北の丸の殿中にて、見事

に去り狀書いたるは、緣者を離れ諸人の疑ひ晴らし、他人の義理合ひばかりを以ッて、思ふやうに曾我が肩を持たんための離別。飽きも飽かれもせぬ妹背の中、此外安清に別心なし。往還驛路に姿を晒し、吠え廻るほど添ひ度くば、元の如く二世も三世も變はらぬ夫婦。然る上は見苦しげに、緣者の依怙贔負罷り成らず。兄弟老母の身の上、どう成ッても擽はぬぞ。必ず我ばし恨むるな」と、云ひ捨てて駈け出だす。「待ッて下され去られまいせう。武士の情の離別とは、夢にも心つくにこそ。去り狀を見てはッと急き、安清嚴と緣切れては、祐成や時宗が、片腕を落とされたも同じ事と、悲しいやら口惜しいやら、一圖の腹に立つばかり。外の譏り無きやうに、他人に成ッて兄弟が、力にとの誠の心。涙が溢れ忝い。譬へ此身には不義あるとなりとも、いかなる疵を付けてなりとも、兄弟の爲ならば、離別してたべ去ッてたべ。暇の狀をたべなう」と、引き止むれば「見苦し。といへば斯くいひ時切りの、御使ひ仕損じ腹切りが見たいなら」。「なう情ない事いふ口で、去ると一口云はれぬか。詫びし言しても夫には、添ひたいが女の習らひ、望みで去らるる淺ましさ。男も女も曾我一家の、是程かたの惡さは」と、包み兼ねたる涙のさまも。下女が日荒き帷子に、涙の玉をふるひけり。安清不便に堪へ兼ね「ヲ、神妙にも聞き分けし、今日より他人の印ぞ」と、受取り渡す名殘りも袖も、ふり切り出づる頭の上、一聲驚く鐘の聲、二の宮はッと指折ッて「三つ四つ五つ六つ七つ八つ。南無三寶早八つか。九つの鐘を何ぞとしてか聞き洩らせる。閑雲鐘を隔つといふ事を忘れしか。富士野へはまだほども有る。刻限違へば榛谷どの口論無下と成り、一生爰に極ッて、曾我の運命我運命、一時に潰きたよな。

日惜しや無念や」と、大地を摑み拳を握り、せきくる涙とゞめても、止め兼ねて見えにける。梶原平次景高、揃ひの足輕數十人まッくろに駈けつけ。「ヤア〳〵二の宮時切れの早打ち。刻限相延び御注進の手筈相違ひ、甚咎輕からず切腹させ、首を富士野へ持參せよと、お留守居中の評定極はまり、檢使は梶原承る。腹を切れ」とだに罵りける。「云ふまでも無く刻限違ふは安清も覺悟。人の腹を借ッても切らぬ、人にも切ッて貰ふまじ。首持參までもなく、賴朝公の御前にて、さッぱりと切ッて上覽に入れる首。御邊などが苦勞にも預からぬ」と、又駈け出だすを「待て〳〵〳〵。腹切りかねる臆病者。家來共引ッつつんで打ち殺せ」。「承る」とひしめけば、女房同じく二の宮にひッ添ふて、打ち合はさんとせし所に、禪師坊いつの間にかは登りけん、藤澤寺の岩頭に大音聲。「是々麁忽なされな。時が逸ふた」と呼ばはれば、與力の下人聲々に、「ヤア面倒なる下主め。住持を始め同宿まで繩は解いて助けをる。投げ殺せ踏み殺せ」と、摑み付くを取ッて引き寄せ、「えい」と擔いで「うん」と投ぐればころ〳〵と、二の宮が足の前、轉び落つるは梶原が揃ひの足輕。「偖こそ」と安清も、上を白眼んで突ッ立ッたり。續いて懸かるを組んづ轉んづ眞遊さまにずでんどう。小首を土に打ちをッて、きやッとばかりに死してけり。小藤太怒ッて「已に負けてよい物か」と、放逸無慚の眞志を張ッてしがみ付く。禪師坊二天四天の感をかッて組み合ひしが、片岸を踏み崩し、中でしまでころび落つれど、兩方放さず放しもせず、さす股に踏ん張ッて、暫く息をぞつぎにける。下には安清姉御前、身を冷やして待ち懸くる。「ヤア來い」と聲を懸け、一揉み二揉み枯木

○與力　加勢。

●第三

を倒す如くにて、梶原が目の前、地響き打ッてぞうと落ちる。透かさず近江を取ッて押さへ、馬乘りに跨がれば、平次景高はッと驚き、なが追ひせば猶氣味惡しと、跡をも見ずして逃げ失せける。二の宮續いて追ひ駈くる。「暫らく〳〵。一大事の御用先。逃げば其儘逃がされよ。なう二の宮殿姉御前」と、鬢鬘掻撫ぐり捨て、「我こそ弟。稚名はおん坊。久上の寺にて法師になり、禪師坊と申す者。樣子は緩々申すべし。梶原が指し圖にて、當山藤澤寺の時の鐘、九つを八つに打ち替へ安清殿に腹切らせんとの企て。空は曇ッて見えねども、まだ日は晝に傾かず。早く狩り場へお出で」と、云へば二の宮はッと嬉しく、「近江は刻限を違へし大罪人。法の如く討ち捨て」と、取ッて引き寄せ首打ち落とし、「これも會我の敵の小枝。暇の印」と投げ出し、一散に駈け出だす。二人も跡を見送りて、泣いて別るる雨雲の、絕え間に漏るる鐘の聲。數へて見れば「二つ三つ四つ七つ八つ、又九つ」と、勇み行き、遠ざかり行く駒の足。戀ひせぬ身にも思ひ知る。飽かぬ別れの曉の、鐘に涙はかるるとも、夫の武運長久と、又逢ふ事を待つ宵の、鐘に契りて別れける。

第三

小男鹿の居る野も山も聲々に、列卒を揃へて狩りにけり。工藤左衛門祐經、打ちませの狩りには、鹿論も事喧しと、便りよき岡邊に場を搆へ、手の者組み子に鹿猿狩らせ、遊君喜瀨川の龜菊と、床几を並べ酒肴前につらね、「ヤア〳〵者共。色有る君が見る物、家でも鹿でも一疋生け取り、龜菊が髮筋に て繋いで見たし。精出せ〳〵。褒美を呉れる」と「畏まッた」と「手取りにせよ」と、我身知らずの猪武

○こけざる　年を經た猿。眞逆さまに「轉け」と掛けた。

者。猪に駈け散らされ、鹿に突かれて吠ゆるも有り、熊と組んで眞逆さまにこけざるが、頰骨搔き裂く血まぶれの、面は猿より赤恥ぢ搔いて迯ぐるも有り、口は手柄のえい〳〵聲。喚き叫んで狩り暮らす。獵のきかぬも時の興。祐經盃を受けながら、「なんと龜菊。諸大名の假屋〳〵、呼ばるゝ傾城白拍子も多からん。身に揚げられたは仕合はせ。猪狩り肴に酒盛りとは、鎌倉殿の御臺所も、叶はぬ榮耀。かほどに思ふ祐經に、廻り樣が然うで無い。そでない〳〵」と寄り添へば、「否々上べばかりの眞實なしとは是此殿。毎夜〳〵龜菊には留守させて、お前は御所の假屋に寢て、つひに寢姿見せもせず、思ふとはしら〳〵しい。鎌倉の奥樣の、關の戸が嚴しいか。奥樣の文をそれ肌に付けてぢや。狩り場では此龜菊が關破り」と、懷に手を指し入るれば、「ハア、拜む〳〵。夢々悋氣の文にて無し。祐經が身に取ッて一つの難義。いで然らば纖悔咄しして聞かせん。定めて大磯の虎、化粧坂の少將が、噂でも聞きつらん。曾我の十郎五郎某を親の敵と、狩り場の群聚に紛ぎれ入ッて狙ふと聞く。安々奴等に呉れる命で無く。身用心の爲君のお側を離れず、夜は御所のお次ぎに寢る其窮屈さ、生まれついた鼾かき。嗜めば咽に窒ッて鼻へは出ず、耳で鼾もかくの仕合はせ。然るに鎌倉に殘し置く女共が、志しの過分さ。氣の働きの利發さ。曾我兄弟が種替りの兄。京の小四郎と云ふ者に、ならずの野良者を賺し、金銀取らせ、曾我の老母が方へ犬に入れて付け置きしが、母は血筋の恩愛に欺され、何事も隱さず曾我が家内。箸のこけた事まで、京の小四郎が内通聞くは皆女共が智謀。此上にまだ悦び。彼老母十死一生の大病にて、死に目に逢はんと兄弟を、呼び戻すとの内通。十郎も

五郎も孝行な奴。聞くと堪らず、最早曾我へ歸りつらん。神明佛陀の守り目深き祐經、疫病の神送ッて、心は武藏野爰は裙野。世間廣く今夜から、どこに寢ても安樂世界」と、語るを聞けば曾我の噂、虎少將の由緣には、我も好みは外ならず、耳に答へて疎ましし。列卒の中より八幡の三郎が弟八幡の四郎、三股角の大鹿、荒繩懸けてひッ縛り、「背胴の元げたる盜人鹿。惣搆への柵をくゞる所を、大勢をり合ひ生け捕ッて候ふ」とひッ据ゆる。其形ち頭胴躰鹿の丸皮にて身を包み、咽の下に人の面。見知りの有る曾我の譜代の團三郎。はッと見る目も濁り江の、沼に漂ふ龜菊が、土にも入りたき心地なり。祐經素より目かど强く、「周の武王は渭濱の獵に、大公望といふ賢臣を生け取り、孔子は魯國の狩りに麒麟を得られし。工藤左衛門祐經は富士の御狩りに、曾我兄弟が下人鬼王が弟、團三郎といふ四つ足を生け捕ッたるわ。武王孔子に劣らぬ某。ヤイ畜類御吟味嚴しき惣搆へ。鹿の皮を被り、忍び入らんとせしは、根ざしたる所存有るよな。眞直に白狀〳〵。僞るに於いては盜賊類になし、見苦しき刑罰に行ふべし。吐せやッ」とぞ睨め付くる。團三郎ちッとも臆せず、「鹿の皮を被り畜生の眞似するほどの不肖の身、見苦しき刑罰を左のみ恥辱とも存ぜず。さりながら、盜賊類に落とされては、浪人の主人兄弟が、惡名も悲しければ、子細包まず語り申さん。祐成時宗は御狩り拜見のため、情け有る大名達の組み下に交り、此狩り場に罷り有る。古鄕に殘す一人の母、老體に俄の大病。時を待つ間の命の中、子供の顏を一目見て、末期の水をも受けたきとの歎き。夜前夜半過ぎに曾我を出で、山川分かたず駈け付いては候へども、慌ただしく不思議立つ頰付きにては、惣木戸の

御番所御咎めを憚り、雜人の屠り捨てたる鹿の皮を身に纏ひ、柵を越えんとせし所を見付けられ、多勢是非なく此有り樣。なうお女郎。各は情有る流れの身。知る人も多かるべし。知る邊も有らば兄弟に、この趣きを告げ傳へ、今はの母に親子の對面。臨終の望み叶へば身の功德ともなり申さん。エ、團三郎が一生の奉公を仕損せし」と、血走ッたる兩眼に、涙をはら〳〵とぞ流しける。「ムウ老母の病氣に付、兄弟を呼び戻すとは此方に、割り符のあふ事僞りならず。其外尋ぬる子細有り。所詮鎌倉殿御前にて吠えさせよ」と、ひッ立てんとする所に五郎時宗、何としてか見付けけん。坂を下りに駈け來り、列卒の兵五六人ひッ摑んで、手鞠の如く打ち付け〳〵、團三郎が繩も皮も引きちぎり、八幡の四郎をはたと蹴倒し、どうと踏まへ、梢も搖るぐ大音にて、「鹿の皮被きし人を、鹿と見るは愚の眼力。曾我の五郎時宗は、形は人にて魂の鹿をよッく見る。鹿こそ通れ十郎殿。をり合ひ給へ」と呼ばはれば、祐成續いて走り付き、「兄弟揃ふて珍しき對面」と、太刀の柄に手を懸くれば、祐經が郎黨「主を討たすな餘すな」と、二重三重に懸け隔て、ひッ包んで立ち騷ぐ。團三郎割ッて入り、「ア、〳〵旦那麁忽なされな。今日のお命團三郎が預かる。御一生の大事のお使ひ。古鄕の御老母一昨日の夕暮れより俄の御病氣。次第に重り只今も計られず。千に一つも御本復有るまじき御覺悟、今生の名殘、兄弟に一目對面せん。萬事を振り捨て立ち歸れ。是に背かば時宗は舊の如く、十郎諸共生々世々の勘當と、絶え〴〵弱る御聲を、聞き捨てて駈け付けし」と、聞くよりはッと力も落ち、兄弟目と目を見合はせて、寢ぬに夢見る心地なり。「ア、御思案所でなし。京の小四郎の不所存人さへひッ添

ふて看病。此人にお二人が、孝行劣り給ひては、冥途までの御恨み。天の冥加も恐ろしゝ。祐經殿に和を乞ふて、お立ち〳〵」と勸むれば、祐經大きに力を得、「是々兄弟。父の河津は流れ矢に當たりしとも、俣野の五郎が討ッたりとも、分明ならぬ親の敵。差し當てて祐經を狙ふとな。よし〳〵寂しげに云ひ分けはすまじいぞ。サア打ち懸けよ。切り懸けよ。音に聞くほどにも無し。怯れたか曾我殿原」と、足元見たる廣言。五郎堪らず「神妙候ふ祐經」と、踊り出づるを押し止め、「母の便りを何と聞く。狂亂か弟」。「いや〳〵〳〵微塵粉はひになればとて、敵に聲を懸けられ、悄々立ッては姓の恥辱。放されよ十郎殿」。「ヤイ身の譽まれも恥ぢも捨て、娑婆と冥途の父母を悅せ奉らんと、幼少より今日まで兄弟が念願。はや忘れしか時宗」。「ハヽア然うぢや。エ、殘念至極。口惜しい祐成殿」。「無念な時宗。淺ましき曾我の運命や」と、涙の齒ぎり身を振るはし、握りひしぐ太刀の柄、拔きかけ〳〵はッし〳〵と鍔打ちは、鎺切羽も一時に碎け散るべう見えてけり。龜菊手に汗握りしが、禿の時より善し惡しの、事に揉まれて驚かず、しやんと立ッて「申しお二人樣。顏を赤めてなんぞいの。たんと無念さうに見えるぞえ。里通ひなされしほどにも無い。是がなんの恥ぢぞいの。謂はれぬ差し出か知らねども、他事ない虎さま少將樣。龜菊が一座に居て、うッかりと見ていたかと、思はんすも氣の毒な。お侍ひの義に迫まるも、浮き世の戀ひに身を碎くも、命懸けるは同じ事。假令ば酒の意趣有る中、二日心か公用か、醉ふてはならぬ首尾もある。其足元を見て張り合ひ懸けての平强ひ。得て是に手を取るわいな。そこらを千疋繫いで、恥ぢをかくが手柄の基。さあ飲み伏せたと油

○鎺　鍔の上下に在ッて鍔元を固める金具。
○切羽　鍔の兩面、柄と鞘とに當たる部分に添へる金具。
○假令ば酒の意趣云云　例ながらの名句。廓の酒に擬へて敵討ちに就いて助言した。是は詁經にはそれと曉

られず、兄弟には分かるやうに書き爲したもの。
○飲み伏せた　此言葉の裏に「兄弟を曾我へ歸らせた」の意を含む。
○奈落の底まで飲み伏せ　裏に「殺して」の意を含む。
○止めの盃一獻さいて　裏に「止めを一太刀刺し通して」の意を含む。
○去りながら…いきついた　粘綿に瞞られまいための用意周到。
○外道月毛、波羅門栗毛　共ゝ馬の名。

斷させ、心を緩す門立ちか。思ひ懸けなき朝込み、ずッと仕かけ、差し引きならぬ手詰の盃。腕を捻ぢ上げ首を押さへ、つぎかけ〳〵奈落の底まで飲み伏せ、引き起こして止めの盃一獻さいて、しやんと取る。是を本望本酒の手柄と云ふわいな。さりながら此菊も、いつぞや山下宿で三日三夜。和田さんの大よせに、朝比奈さんの無理酒には、誓文とんといきついた」と、笑ふて其座を寛げしは、物に馴れたる仕なしなり。此詞に兄弟差し詰まッたる氣を開き「母の痛はり心ならず、參會は重ねて」と、立たんとすれば「暫く〳〵。孝行のほど感じ入る。祐經も一つ家の端、外のやうには思はず。本海道は遠ければ、山路の近道急ぎのため。某が秘藏の名馬、狩り場まで引かせしを、兄弟に餞けせん。外道月毛婆羅門栗毛、是へ〳〵」。「あッ」と答へて引き出だす。其丈八寸餘り、肉十分にふし高く、腔齊に口こはく、乘り入れもせぬ野髪の馬。一樣の鞍皆具。遣り繩追ひ繩口取り繩。つらを振ば六人の、舍人もよろめき引ッ立てられ、前脚かいて齒をたたき、人を嚇して鼻あらし、鼠より洩るる眼の光り。角なき鬼の如くなり。兄弟急度眼配せし、必定此馬に駈け落とさせ、殺すか不具か恥ぢかかせん謀。辭退せば猶恥辱と、祐成會釋し「天晴れ御馬候ふ。かかる名馬を申し受け涙人の我々飼ひも舍人も不足なれば、路次の間借用」と、外道月毛を引き寄せ、乘らんとするに寄せつけず。鞍に繪れば鞍そばへ、前へ寄ればすッくと立ち、後へ廻れば跳ね散らし、踏み立て蹴立て高嘶き。乘せんづ氣色は無かりけり。「南無三寶ま〳〵に大敵、後に母の臨命終。一代一度の身の大事、弓馬の氏神鶴が岡。當所には富士淺間、箱根兩所駒形權現。分身は百和龍王右鵜王左鵜王。本地大聖文殊菩薩のし

○立ちざまくつわづら。
○大口を呆れ「あき〈開〉」と掛けた。
○むず折れ　急に折れること。

しの駒。御手の如意は轡となり、不動明王の縛の繩手綱に變じ給へや」と、自救の偈を繰りかけ〳〵。轡の立ちざまむんずと握んで搖らりと乘るに恐れなく、頭を乘れて身を伏せし、佛神力を有り難き。時宗嬉しく蛇に綱付けても乘らん物を、婆羅門栗毛の口によれば跳ねあがり、棹立ち尻込みあたりを蹴立つる馬煙り。つッと入ッて太腹をさけて退けとはッたと蹴る。左しもの惡馬もよろ〳〵〳〵。ひるむ所を引き寄せ、ひらりと打ち乘ッて、兄弟鐙ふんばッて、轡を並べ扣ゆれば、祐經案に相違して、只うッかりと大口を、呆れ果ててぞ見えにける。祐成勇めば時宗きほひ、「ヤア〳〵國三郎。汝は是より秩父殿和田殿。其外の方々へ、一禮申して假屋を仕舞へ。サア來い五郎」つ「いざ御座れ。十郎殿」と、一鞭くれて乘り出すも、日脚も早き午未。我身の運も上刻と、八卦占かた八つの響く、鐘に誘はれ風誘ふ、朽ち木の櫻春過ぎて、又何の世の花をだに、待つに甲斐なき曾我の里。痛はしや母上は、河津に別れし夕より、二十餘年の物思ひ、貧しき上に世を忍ぶ、兄弟の子の成人を、急ぐは親の老いと死を、急ぐと知らで身に積もる。雪折れ松のむずをれに、俄病まひの萬死の床。樂しみは似ぬ孫晨が、藁屋の紙帳漏りくる風。そよと寢返り息つぎも、今を限りと聞こえけり。折りしも大磯の虎化粧坂の少將、狩り場の留守のお見舞ひと、見捨て難なく留まりて、さま〴〵心を盡くせども、馴染みなき身は病人の、お氣扱ひと差し扣へ、國三郎は富士野の使ひ、二の宮へ人を走らせても、夜明けより夫婦ながら、留守とばかりに否應もなし。うつにも舞ふにも京の小四郎、紙張によりては鼻いき伺ひ、「まだ歸らぬか祐成時宗。偖も遲し」と表に出でては南を見やり、足を空に駈け廻り、「是

○紙帳のつま　紙

々二人の女中。我等は現在母の腹より出でたれども、五郎十郎とは種替はり。殊に久しく通路もせず、漸々此比來懸かッて、出來し顔の孝行だては、兄弟衆の思はく世間ともに譯立たず、名染みなければ、兩人は嫁と云ふに頭振られず、年寄られても女ごゝし、遠慮なしに頼み入る。第一が臨終の勤め〳〵」と云ふに付き、「偖ははや此世の頼みも切れたか」と、心細さの胸詰まらして、紙帳越しに口差し寄せ、「追ッ付け御兄弟お歸りに間もあるまじ。それ迄も先づ一筋に、後生の事をお心に、お忘れなされな南無阿彌陀」と、涙に濁る聲の色。母上息も苦しげに、「さればよ老いの病まひの床。後生忘るるにはあらねども、臨終の一念に接聚の光明を期し、十念の枕のうへに、聖衆の來迎を待つ事も、この世の念を拂ひ捨て、一心亂れぬ上にこそ、本願にも逢ふべけれ。我子の絆に羈まれて、暗より暗に迷ふ身は、三尊の來迎より、懐しの祐成や。廿五の菩薩より床しの時宗や。過ちでもしたるか。心元なやあら遲や」と、物ごしも早弱々と、子故に惱む狩り場の雉。おのが命は忘れけり。夕暮れ毎に兄弟を、待ち馴れしには彌増して、虎少將が氣も急かれ、心も空に日は傾く。「ヤアあの鳴る鐘は早七つ。なぜに遲い」と走り出で、表に立てば内氣遣ひ、内には心落ちつかず、門の出入り幾度か、鐘の數々繁かりし。仇は返ッて情の馬、曾我兄弟が孝の鞭。切所難所の六里半、只一時に駈けさせ馬を道に乘り捨て、つッと通れば虎少將、「そりやこそお歸り。なう申し御病氣頼みすくなく、斯ういふ間も危い」と聞くや悲しく胸騒ぎ、「ヤ小四郎殿。深切の看病忝し」と、挨拶一禮そこ〳〵の、足音靜かに床近く、紙帳のつまに手を添へて、「祐成歸りて候ふ」。「時宗歸りて候ふ」。「御心は如何

ぞや。なぜ御藥は參らせぬ。北條殿より給はりし、奇妙の藥是に有り、我々不便と思し召さば、此藥召し上がられ、一日も御命延へてたべ母上」と、涙を隱し申しける。「何兄弟が歸りしとや。近う寄れ此方寄れ」と、紙帳のつまより兄弟が、手首を確と取る手もゆらぐ玉の緒に、まだ力有る物ごしにて、「虎御前少將。はれ〳〵と、此紙帳取ッてたべ。早う〳〵」と曰へば「あい〳〵〳〵」。返事する間も老人は、いとゞ心も短き釣り手。手もむすぼれて、急げば廻る「あら戀陶しや」と、押し退け出づる母の顏。目の中惱に色合ひも、常に變はらぬ息ざしに、病人よりは側の人、はッと心ぞ煩ひける。母は怒りの目に涙。「ヤイ兄弟。嚴しげに北條殿の御藥何にぜう。母が病まひとは、呼び返さんための空言。假令ば他人でも。友達知音の大病死病と聞く時は、萬事を捨てて馳け付ける是が人情、世に住む習ひ珍しからず。母が末期と驚いて、即時に歸るを孝行とばし思ふか。嘸や外の用とて母が呼ぶには歸るまい。殊に今度の御狩りの供は、工藤左衛門祐經を、討たん爲の謀反とな。五郎めは勘當宥して昨日今日、此意見は幾度か、色を替へ品を替へて云ひ盡くし、今更同じ事いふには及ばぬ忘れはせじ。兄が勸めたか弟が勸めたか。合點の行かぬ五郎めが頬魂。初めの氣が直らぬな。當時祐經は一國の大名、何百騎といふ大將。そも御事等に討たれうか。一僕連れるか連れぬ身を、祐經方のあふれ者、忍び討ちに打ッたるとて、其時誰れを恨むるぞ。云ふも愚河津殿は、坂東一の勇者。兩國懸けし大名なれども、奥野の狩りの飯り足、欺し矢は詮方なく、命を失しなひ給ひたる、父の最期を手本にして、昔思へば老いの身の、此比子供の狩り場の留守。あられう物か推量して、母も親の

内ならば、可愛と少しは思ひやれ。母が此病まひといふも僞りの誠ぞや。五臓六腑の病まひならで、病まひは無しと思ふかや。雨風の氣に當たり。物の祟りの病まひには、療治も有り藥も有る。子ゆゑの闇の病まひには、唐高麗の名醫をよせ、萬巻の醫書を探がしても、藥の方はよも有るまじ。藥にもなるも二人の子。病まひになるも二人の子。起き臥し立ち居明け暮れに、病まひと成ッて痛めんよりも、鴆毒と成ッて一思ひに、殺してしまへ兄弟」と、かッぱと臥して泣き給へば、祐成時宗虎少將。「こは勿體なき御詞」と、疊に頭を打ち付けて、沈み入ッたる連れ涙。無智無慚の小四郎が、義理にも泣くぞ道理なる。祐成袖を絞り兼ね、「御教訓と申し、御不便余ッての御恨み。暫しが中御心を苦しめし段後悔恐れ入り候ふ。敵を討ッて命を捨つるも父の孝養。母を悦ばせ申さんため、御譏嫌損なひ命を捨てて益もなし。祐成に於いては敵討ちの事、ふッつと思ひ切ッたるが、五郎いかに」とありければ、不肖〳〵に佛頂頬。「ヘヘ生きるとも死ぬるとも、一所と云ひ交はした、兄貴の分別聾はるからは、獨物にも狂はれまい。どうなりと勝手次第、お返事なされ」と尖り聲。「あれ〳〵。あれこそ母が病まひの神。元の如く勘當」と曰へば、虎少將。「ヱ、悪い聲付き。同じ物の云ひやうで、ああ畏ッたといなんどりと、お受けは成らぬことかは」と、諫めても猶頬癖。祐成大聲上げ、「母上のお命の障り。御勘當に戀りぬか」と、呵られてびッくりし、「口でまだ〳〵申さんより、誓文のため只今御前で金うたう」。「オ、尤も。いざ金打」と、兄弟刀拔き寛げ、打ち合はんとせし所を、母手に縋り押し止め、「オ、出來したり〳〵。生ひ先祝ふ若者共。金打はせぬ事ぞ。其眞實を見るからは、最早心も落

○佛頂頬　不承知の時の脹れッ面。

ち付いたり。嬉し〳〵。今こそ母が藥となりし二人の子。元服させて此方の痞へが下りた」と、悦びの笑ひ顔さへ哀れなり。「惣じて若き男子に、妻子と云ふ繩を早く持たせねば身持ちを輕く、命を塵とも思はぬ物。虎御前や少將とは、深き契約有りこそせめ。押し出して自らが、嫁と呼ばねば定まらず。娶る時は必ず父母に申すと、禮記とかやにも有ると聞く。今夜是にて祝言の盃。取り囃し祝ふてたべ」と、枕の文匣に疊み置く直垂二領。「是は兄弟が、爰はの晴れと嗜みし、一世一度の妹背結び。二人の嫁御。衣紋風よく着せ給へ。狹くともあの部屋を、嫁入御殿になそらへ、肴は悦ぶ打ち鮑。折りしも二の宮の姉が呉れたる小樽をも、心で結ぶ蝶花形。母は持佛の前に寢て、河津殿の位牌諸共に、ざざんざの聲聞かせてたも。ヤア京の小四郎。おのれは方々寄る方多し。今夜は歸ッて重ねて來い。あれ日も暮れかかる。里の迎ひも來ぬさき、兄役に祐成夫婦部屋へ〳〵」。「あッ」と云へども立ち兼ねて、耻ぢて赤らむ横顔を、差し込む虎が袖の下。「是は〳〵大人氣ない。上様のお世話に成る事か。手管の逢ふ夜思ひ出し、手ばしかう遣らんせ」と、手を取り替はし入る振りを、五郎見やッて「偖も兄貴あつい和郎。こちや成らぬ。ヲ、耻づかし」と、俯向きて疊に喰ひ付き身を縮むむ。「是申し少將が、若うて嬶御の思ひやう、嫂に劣ッたと、姑御の思し召しも迷惑。ヤアござんせ」と引立つれば「ィャこちや否ぢや」。「否と云ふて濟むものか」。「それでも母ぢや人の見てぢや物」。「あれ彼方向かしやんした」。否ぢや〳〵も否ならぬ、閨に引き摺り入り相の、鐘睦じき夕べなり。月なき宵の雨曇り、京の小四郎部屋の體を伺へば、今宵ばかりはたッぷりと、燈心太き燈し火の、影に廻

○上標　祐成の母を指す。

○あつい和郎　女に迷ッて熱心に爲ッた人の義。

らす盃に、可笑しや何を目的にて、「八千代を結ぶ夫婦の縁。親子の縁の縺れ合ひからむ岩根のさざれ松。濱松の音はざざんざ。千箱の玉」とぞ謠ひける。小四郎が思ふ壺「甘し〳〵。假令〻兄弟鬼神でも、母と女房に斯う羈し打たれては、腓骨立たずの腰抜け。祐經公一代の厄拂ひ。此足で注進し、御褒美は何で有らう。知行で有らうか。若し金銀を下されたら。小商ひまだるい。どんと小判にかからう。口に金の舌を宛めてぞ出でにける。揚げ屋の空嘯き山里に、けふは蚊遣りに燻べ替へ、二つ並べし羅ものの、蚊やも紙張と所帶めく。内は裏なき浮き世産。心を延ぶる種ならじ。漢宮の床の上に、契りを千年の鴛に譬へ、愛の莚の上には、快潤たる母の詞、恐れざるにはあらねども、時宗が年月の、念力やはか今宵を過ごさんと、少將を醉ひ臥させ、出づる紙張の戰ぎにも、祐成の目や醒めんと、心締めたる高からげ、母の紀念と直垂れ抱い込み、身を潛めたる差し足は、我身ながらも野狐の、罠を窺ふ有り樣なり。云ひ合はせねど同じ心に祐成が、虎を酒に寢いらせて、今生に有りてこそ母の恨みも有るべけれ。今宵限りの命ぞと、直垂れ身に添へ、拔き足に、燈し火暗き人影を、弟は兄とも知らず、兄は又弟とも知らで、互ひに忍び足ちらと見付けてつツと寄り「時宗か」。「十郎殿か」。「音高し〳〵。彼の一大事を今宵と思ひ定めしな。我とても其通り。よッく兄弟が心の斯くまで合ふ事は。本望遂げんは手の内なり。兎につけ角につけ、痛しき婦は母上。悦び寢入りの御枕。嬉しき夢かな見給ふらん。醒めての後の御歎き。今見る樣に悲しや」と、奥を見遣りて兄弟が、忍び涙ぞ哀れなる。祐成涙を止め「孫ては今宵假屋にて、心靜かに書き置きし、形見も遺さんと思ひしが、是より宙を駈けるとも、富士野へ着かば夜半も過ぎ、なか〳〵思ふ外なるべし。歎きの中の御慰み。一筆殘さん」『尤も』と、床の硯を引き寄せて、料紙取る間も有らばこそ。恨みなとてぞ書きつくる。紙帳に涙拭へどや、乳房咥へし昔より、二十餘年の身の思ひ。悲しさも嬉しさも、書き綴りゆく藻鹽草。心餘れど盡くされぬ。祐成は兎もすれば虎が情の忍びがき。時宗が筆の運びには、箱根の別當の御事。母の御不興宥され申し、俱不戴天の敵を討ち、名を後代にあげん事。偏へに母の御慈悲とぞ、其外同じすさみにて、今日賜はる由乘れは、最期に着し冥途まで、母上に添ふ心地にて、父尊靈に逢ひ奉らん有り難さよ。脫き捨てし着ならし衣、形見と御覽下さるべし。弓と鞘は二の宮殿。机に殘せし萬葉集法華經は時宗が、八年讀誦し手に觸れし。姉御前になでし數々の、念佛申す手枕の、移り香しめて忘るなよ。鞍と鐙は鬼王團三郎にとらするなり。我々が身に替はり、母上の宮仕へ賴む事は是一つ。建久四年五月閏。天は暗しと申せども、思ひは晴るる下旬八日。祐成判時宗判と書き止め、からり〳〵と筆を捨て、聲をも立てず泣き居たり。名殘は何時か盡きすべき。短夜や更けぬらん。「いざこい五郎」と先だてば、續いて出づる時宗が、大力の踏む足に、年經る家の落ち樣を、がばと踏み拔き、ぞうと落つる其響き、障子の扇ざは〳〵〳〵。紙帳の騷ぎに目を醒まし、「ヤア十郎樣がおはせぬぞ」。「五郎樣もござらぬぞ」。「表よ」。「奥よ」と立ち騷ぐ。見付けられては惡しかりなん。やり過して跡より拔けんと頷き合ひ、荒れたる庭の萩薄、

引ッ被いてぞ隠れ居る。「なう此紙帳の書き置き。偖は今宵討ち死にとや。たッた今結びの盃し
て、直に離れてあられうか。上様のお歎きお腹立ち。追ッ付いて留めて見て、到底は共に死ぬる分」
と、帯引き締め裾短、稜かいからげ走り出んとする所に、奥より母上箒追ッ取り、用捨も波の皺腕も、
共に折れよと打ち立て〳〵、「ヤレ思ひ切りの無い奴」とて、はたと打ち、「未練者」とて丁と打つ。「里
にては流れの身、爰にては武士の妻。夫の親の敵討ち、母が目顔を忍んでも、共に見たて出してこ
そ、弓取りの女房なれ」と打ち敲き〳〵、「母は寝ても寝いらず、書置きするを物合ひより、見て泣く
涙はいかばかり。そこを耐へた親心、思ひやれや」とばかりにて、箒をからりと投げ捨てて、轉び伏
して泣き給へば、垣越しに聞く兄弟。宵には似ざる御心、又もや御意の變はるかと、立ちも離れぬ夜
の蟬。取り付く露の崩れ垣。忍び音になく哀れさよ。二人の女かき暮れて、「敵討ちを曲事と、御呵
りの間もなく、止むる我等をお咎めは、狼狽へて猶氣が迷ふ。合點の上で諸共に、思ひ切れなら切り
たい」と、恨み顔にて口説き泣く。母君いとど目も開かれず、口は廻らず心は急く。「子細も云はず
杖棒當てて耻づかしい。昔しを知らぬ人々の、不審なも道理。兄弟の子供が五つや三つの頃より、
父を討たせ無念なと、思ひ込うだる魂。成人に随ひ増さりこそすれ醒へさぬ、弓矢取る身の念力。
母が止めて止まらうか。それ知りながら可愛そに、死に目に逢ふと驚かせ、惑はせ、邪魔を入れて呼
び戻す、其邪魔は誰がさすぞ。恨めしや妾が腹がした、京の小四郎といふ、種替はりの大悪人。慾に
耽り縹に付き、敵祐經が家の子同前に身を寄せ、此頃爰へ入り來り、有る事無い事犬に成ッて喚き出

○妾が腹がした　我腹から生まれた。
○縹に付き　身分に因ッて待遇を殊にし、身柄の善い方に傾いてとの成句。
○ねび者　物事に念を入れて爲る性質の人。

だし、内通すれば用心し討つべき手透き間もなきと聞く。病ひと偽り呼び戻し、慘う憂ふ呵りしは、
悪人の兄めに聞かせんため。彼奴めに聞かするは祐經に聞かせ、油斷させてやす〳〵と、討たせん
爲の親の慈悲。心碎くは如何ばかり。一萬と云ひし時よりも、兄十郎はねび者にて、騒忽せぬ生ま
れ付き。箱王の時より五郎は氣がさ者、すはと云へば氣が隼る。腕の骨のかたまるまで、人にも油
斷させんため、出家にすると箱根へ登し置いたるに、元服したる咎ぞとて、此頃までの勘當は、是も
敵に肌許させ、本望を遂げさせんと、勘當も親の慈悲。父の爲に捨つる命、惜しまぬ子には孝の道有
り義も有り、討ち死にすると知りつつも、勧める母は何の道。恨めしの身の上や。助かれといふ情
は有れど、死ねといふ慈悲は無し。親の死にを歎かぬ不孝の子は多けれど、孝行の子の討ち死にを、
厭はぬ母は我ばかり。若き子供を先立て、跡にさがる冥途の道。夫の河津殿へ言ひ譯は何とせん」
と、涙の限り聲限り、口説き給へば虎少將も絶え入るばかり。母の愛心兄弟が身に應へ、胸に染み、
悲しき詮方遣る方なく、伏し拜みては泣き沈み、歎き入りては伏し拜み、思ひ隔つる破れ垣。いとど
涙に朽ちぬべし。「不便や可愛や兄弟が、よしなき母にからまれ、嘸や道を急ぐらめ。さりながら、
現世の望み叶ひなば、來世はなほ頼み有り、箱王を出家にせん。袈裟衣まで營みて、佛に契約申し
たる、其言葉を違へじと、かはりに母が出家して、その袈裟衣身を放さず、これ見よや嫁達」と、上の
單を脱ぎかくれば、下は墨染め五條袈裟。一度にあッと手を合はす、庭と上とに四人の願ひ。四弘
誓願不可有り難き。「子を先立ててのの弔ひは、逆さま事とて其子に罰の當たるとや。身は箱王が替は

りにて、今日より我こそ箱王法師。十郎は我兄、五郎は返ッて我親ぞや。いざ虎御前少將。初夜の勤めの比なれば、親五郎殿兄十郎殿の菩提を祈らん持佛へ」と、泣く〳〵誘ふ御姿。兄弟此世の暇乞ひ。名殘をしかの狩り場へと、急ぐ足さへ跡へ引く。立ち留まりても面かげを、中に隔つる小萩垣。物越もはや聞かせじと、耳驚かす初夜の鐘。諸行無常を今までは、余所に聞きしも我身の上、母は我子の上に聞く。一つ響きを別れ路の、涙々に聞き分けて、又逢ふ夜なき親と子の、袖の露こそ重たけれ。

第四　虎少將道行

夫戀ふ鹿の身の果ても、戀ひの文書く筆と成る。有りて甲斐なき老いの身は、死して體の置き所、同じ裾野と志し、馬に任する道知るべ。是は若駒乘手は老いの、姑獨嫁二人。踏みも習はぬ双鐙。流石夜道の力とや、油煙も細き提灯に、足元ばかり照らさせて、しをれ出づるぞ哀れなる。先はいづくと詠むれど、富士さへ見えぬ闇の夜の、今宵一夜は十五夜の、月にぞ替へま星の影、ちら〳〵ちら〳〵螢火か。いや兄弟の亡き魂よ。結び止めんと下がへの、褄吹きかへす夜嵐に、はッと消えては狐火の、我と吾が身を迷はする。雲より上の一聲や。又二聲や。三聲とだにも啼き捨てて、いづち行くらんやよや待て。汝よ冥途の鳥ならば、死出の山路に關据ゑて、先立つ我子留めよかし。心覺えの道程も、ゆん手は秩父の山おろし。松の響きか磯打つ波か。晝なら三保か清見寺。鐘かう〳〵とほの聞こえ、猶も心ぞ急がるる。きらめく露の玉澤村。闇はあやなし梅澤村。ふた村過ぎて行き狂ふ、

○袖の露　涙。

●第四

○替へま星の影　「替へまほし」即ち替へても貰ひたいとの義から直ぐと同聲の「星」に掛けた。

○下がへの褄　着物の下まへ。

○冥途の鳥　時鳥の異名を死出の田長などといふ處から、此鳥を呼ぶ稱へ。

○ほの聞こえ　仄に聞こえること。

○玉澤村、梅澤村　共に同聲の文飾。一方は「露の玉」と續け、他は「闇はあやなし梅の花」といふ古歌の句から取ッた。

○蹴上げ　鞠の縁語。

○行きなづみ　「なづむ」は澁滯する義。歩みを止める。

○續ぎ穗梅　梅又は他の木を切り、其端の皮を少しばかり割いて、其間に他の梅の新芽を刺し、割いた皮で蔽ひ、それで生長した梅の木。

駒の蹴上げの鞠子川。衣紋流しの〻、曲もなや此駒の、道の街に行きなづみ、打てどもあふれども、など進まぬぞ歩まぬぞ。あはれ一足に千里もがなと、こがるるとは思ひ知らぬか白月毛の、駒に恨みの涙の鞭、打つに甲斐こそ無かりけれ。いやなう駒に科は無し。此の別れこそ大磯道。夕暮れごとにお二人が、しやんと召されて通ひ路の、戀ひの知邊の馴れ〳〵し。今宵はそれに引き替はり、乘り手も道も替はるとは、知らで止まる可愛さよ。御兄弟の御形見、今一度里の方へと押し向けて、引き立て見れば不思議やな。舊の如くに歩み行く。引き戻せば立ち止まり、慕ふは誰ぞ我夫。我子よ主の憂き別れ。共に悲しむ優しやと、鞍の前輪に縋り付き、歎けば共に聞き入れて、耳を伏せ尾を垂れて、人諸共に泣く涙。おのが毛色も染めぬべし。歎くな駒にせい付けて、「はい、しい」。足柄越えは風荒く、露を蒔畫の箱根山。今行く道もつひに行く、塞の河原のいつとても、大人童の隔なく、罪は重たし迷ひは深し、何が菩提の道となる。懺悔〳〵〳〵懺悔え。何が菩提の道となる。さんげ〳〵〳〵〳〵え。色にそみ又香に愛でて、拾ひ洩らせる後世の種。闇の闇路を如何にせん。照らせ三島の宮所。御燈の光りしん〳〵と、心も清き瑞籬に、馬上の母は手を合はせ、祈る願ひの百千々を、いはで心に駒急ぐ。老い木の松はつれなくて、初咲き櫻續ぎ穗梅。盛りの花の嫁達の、身には如何なる神無月。五月の雨の何の間に、涙の時雨染め手綱、絞れど乾く隙ぞ無き。出で行く人に後れじと、笠取り敢ず杖取らず、常の姿を其儘に、今來て見れば旅衣。裾野も近く成りにけり。星さへ見せぬ松林、下は野澤のちり〳〵水。裾は茨が綻ばし、足は草履が抗や切り株小石原。一寸先は暗のうた

○草履が杭や　足は草履に食はれ即ち草履ずれが出來ての意を「杭」の字に言ひ掛けた。

てや小提灯。細蠟燭もほの闇く、駒の躓き氣遣はし。御狩り場も早程近し。是から二人がお手を引き、「いざ徐々お歩ひ」と、抱き下ろすも下ろさるも、よろめきながら下り立ちて、「なう嫁達乘ッてさへ草臥れる、我身で思ひ遣らるる。最う何時ぞ。心のわくせきする故か、鐘は四つやら夜半やら、聞き捨てて數へもせず、更けた樣に覺ゆるに、狩り場の方に物音は聞こえずや。兄弟が生き死にも、誰れか聞かせん便りなや」と、歩みもやらず立ち給ふ。「お道理や然りながら、我々が妹分、喜瀬川の龜菊と申す者。祐經が氣に入ッて、狩り場へも呼ばれし故、御兄弟の御事を、身に引き締めて賴みしが、若けれども龜菊は、侍ひまさりの氣性といひ、義理強いは傾城の習ひ。よもや如才は致すまじ。憐れかし龜菊に、逢ひたい事や」といふ中に、草の葉越しにちらつく火影。あたりを照らして見えければ、「そりやこそ事よ。ア、氣遣ひ。一走り往て見て來うか。跡も危なしあれ〳〵」と、心ばかりを碎く間に、次第に近づく提灯に、女交りの笑ひ聲。「エ、氣遣ひない〳〵。皆廓の駕舁共。假屋〳〵へ呼ばれた女郎衆の戻りと見た。若しあの中に龜菊の居やるか。いざ待ち合はせて問ふて見よ。母君は先づ暫し」と、草の繁みに隱し置き、小提灯の眞切りしめし、待つとも知らでざざめきて、一節謠ふ聲のあや。「三年以前の皐月闇。鴫立澤の歸るさに、禿こさんか誰れやらが、螢を取ッて遊びなば、面白かろでは有るまえか」と、醉ひを涼めし夜半の風。今の氣色に吹き送る。駕舁が癖は駕でふり、螢は光る淺瀬川。「跨げぢや」。「まッかせ」。乘り物の、乘り手は知れた提灯に、上と下とは石だたみ。中に二重の松川菱、喜瀬川の三浦とて年前の太夫。大彌太殿とは深い中。これも狩り場へ呼び

○三本傘　紋所の名。
○雪折れ竹　紋所の名。
○松の中　遊君の中でのの義。
○いたら貝　紋所の名。貝の縁で岩崎樣と出した。
○舞ふたる鶴　紋所の名。即ち舞ひ鶴。
○花咲き　遊君の名。
○竹に雀　仙臺侯の紋所。それ故、仙臺屋の陸奥と續けた。
○幸ひ菱　紋所の名。
○せはし夏草　「せはしなく」の語を其時の時候の夏草に掛けた。
○わくせき草　「せはし夏草」に對しての語。翁の癖

寄せられ、しげれ松山羨ましい。「跡から見ゆるは誰ぞえの」。問はれて駕の簾より、招く扇や開き扇は朝霧樣。「狩り場の露でしッぽりと、濡れさんしたの〳〵。ぬれた印の三本傘。雪折れ竹は奥州樣」。「五十餘人の松の中、手管の上手め見たぞ遣らぬぞ」。「オ、いや惡口云ふは誰れぞいの」。「問はれて云ふはむの字ながら、虎でござんす」。「少將ぢや」。「珍しい。問ふに及ばぬさし合ひくらず。中よしの姉妹御の假屋へか。龜菊樣とも一座して、御噂たら〳〵。近い内逢はうぞえ。先づおさらば」と道を早めてそれそこへ、いたら貝は岩崎樣。網の手は菅原殿。舞ふたる鶴は茨木やの左門殿。龜甲は輪違ひ屋の花咲きが、一座の座配逢ふ夜の分け。大一大萬大吉と、我を折り烏帽子立て烏帽子。白一文字黑一文字屋の山の井殿。竹に雀は仙臺屋の陸奥殿。遣り手は露の幸ひ菱。醒むる眠りの梅ばッちり。並んで二つ提灯は大和屋の唐土。名も高橋の紋所。二人が心相籠で、追ひ〳〵に舁き來る。急かるる心に虎少將、詞を掛けねば答へもなく、過ぎ行く跡から龜菊が、印は紛がひも嵐吹く、紅葉流しの紋提灯。「コレ龜菊殿。虎少將ぢや物問はう。乘り物暫し」と止むれば、「待ッてたも駕の衆」と、忙し中をせはし夏草。わくせき草にぞおろしける。「なう逢ひたかッた二人樣」。「此方とても其通り。して御兄弟のお身の上はどうぞいの」。「さればいな。云ふても〳〵。御運の弱い御兄弟、御袋樣の御病氣とて、俄に曾我へお歸り、京の小四郎とやらが内通、何やかやで祐經とんと心を許し、もう樂ぢや今宵から、假屋に足を伸ばして御狩り中は、緩りと酒盛りしよとの前巧み。是はよい首尾御逗留の間には、どこぞで本望遂げさせましよと、心力の有りし所、今日晝過ぎ八つがしら鎌

で、此例は多くある。「まばくさき」と同義に用ゐた埋め草！

○八つがしら　午後一時頃。

○入り譯　關係。

○跡りの崩れ　混雜の體の例。

○今宵八つ　午前二時。

○やくたいの有る事か　厄體も無い即ち意氣地は無いとの義。

○別れんす　遊女の語。別れますとの義。

○其中え　「え」は感歎詞。「いづれ其中に御目に懸かりましやう」の義を略して曰ッた遊女の語。

○しどけ中は　「しどけなく」の語から直ぐ半分の義の「なかば」に續けた。

○くりはま　「はまぐり」の轉倒。物

倉より、二の宮の太郎殿と云ふ人早打ちのお使ひ。頼朝樣の弟滿殿とやらが、腹切らんしたといの。是も御兄弟に付いて、入り譯有ッてぢやげな。それで假屋〳〵の騒動。跡りの崩れぢやと思はんせ。それ故頼朝樣も今宵八つにお立ち、鎌倉へお歸り、若し雨が三粒でも降れば、明日五つにお立ちが延びる筈。降ッても照ッてもお先手は、八つ立ちとのお觸れ。荷を締めるやら何やらやくたいの有る事か。私らがやうに、假屋〳〵へ呼ばれた女郎衆、俄に里へ戻さるる。此有り樣見て下んせ。抱へるやうに思ふても、御運の悪るい御兄弟。お知り人に成らねどもお袋樣もお愛しい。此方さん達お二人の、心が察し遣られて、私や涙がこぼれる。さりながら悔い〳〵と思はんすな。來らぬ時節は是非が無い。私も運が悪いは。まあ二三日狩り場に居れば、白兎の子貰ふ物、何も時節と思はんせ。最う別れんす其中え」と、大事の咄しひッ摘まみ、しどけ中ばに云ひさして、駕を早めて急ぎ行く。母君堪へ兼ね轉び出で、「龜菊とやらんの咄し聞きました。オ、和女衆も悲しい筈。母が心も推量あれ。云ふ事なす事ぐりはまに成り、曾我の運存へて、幾何の憂き目を重ね見ん。命ながきは恥多し。嫁御さらば」と守り刀を逆手に抜き持ち、「南無阿彌陀佛」と稱名の、聲より早く飛び掛かり振ぎ放し、「胴慾な御袋樣。命を捨てて御兄弟の、お爲に成る事ならば、二人が命惜しまうか。望みさへ叶はぬに、母御に自害させまし、不孝の罪は子に報い、一生御連は開けまい。御兄弟が愛しくば、思ひ直して給はれ」と、縋り歎けばわッと泣き、「死んで憂き事聞くまいとは、子を思はぬに似たれども、母が身にも成ッて見や。子供の爲にと病まひを作り、思ひ設けし母が慈悲は仇と成り、雨さへ降

事のふまに行く事即ち翻譯する事の稱へ。

らねばお立ちは今宵八つ立ちとや。顔振る間も有る事か。假屋〳〵の騒がしきに、若し近寄ッて見咎められ、盜賊なりと搦められ、却ッて憂き目に逢はうかと、案ずる程身も震はれ、自害せずとも死に兼ねまい。頼朝公の鎌倉入りを止むるは雨ばかり。アレ〳〵星も見々と、雲の一筋あらばこそ。何故雨が降るものぞ。降らずば望みは叶ふまい。五月雨は五月の雨。ひと日過ぐれば六月よ。今宵は二十八日の、五月の雨はなど降らぬ。月日に僞りましますかと、勿體なや天道まで、恨み申すも此母が、命のつれない故ぞかし。空目して死なせたも。及物だもれ」と縋り付き、其手を重に抱き付き、三人一所に顔見合はせ、思はずわッと聲を上げ、悶え焦がれて歎きしが、「少將樣何と思し召す。雨さへ降れば明日五つの御立ちとや。其間には御兄弟、御本望は必定。お二人の名を下すも。名を上げるも雨一つ。夫を慕ひ石に成ッたる女も有る。身こそ賤しき流れの女と成りたれども、一念は誰に劣らうぞ。天道地神龍神も、流れの女は守るまじとの誓ひもなし。命にかへて天道へ、雨を祈る志頼もしき志し思ひ込うだる念力、天道納受なからんや。我も共に」と立ち給へば、虎御前中に立ち、心の疑ひ夏草を、結んで帶と禮拜し、眼を閉ざし心中に、「南無や三島の大明神。傷へ聞く古曾部の能因法師。苗代水にせき下ろせ。天くだります神ならば神と、詠せし歌は國土の爲め。日の本照らす日の御神も、雨寶童子の御名は普き。天の下谷めて隙ねし大和歌。例もふり〳〵雨乞ひの、小野の小町も女なり、我も又女なり。三十一文字は隙ねずと、妾が僞り無き心。百首千首の和歌と成ッて、感

應の雨を降し、願ひを叶へ在しませ。日頃信じ奉る、普門品の天龍八部。阿修羅。迦樓羅緊那羅摩喉羅。其外南海下界の龍神。二人の願女が一身の、血を絞ッて雨となし、夫の大望母の歎きを止め給へ。慈悲妙大雲。樹甘露法雨。怖畏軍陣中。念彼觀音力」と、虎少將が小指を喰ひ裂き、流るる涙諸共に、袖に浸して蒼空に散らし、一身五體に汗を流し、足を蹲て肝膽碎き、天を禮し地を拜し、祈る心ぞ無殘なる。諸天も感應過たず、晴天忽ち常闇と、蒼空に閃く電光り。足高山に雲覆ひ、涙の雨を誘ひ來て、俄に降りくる雨の脚、篠を亂すが如くなり。八ヶ嬉しさ有り難さ。濡るるも厭ず伏し拜み〳〵。御本望の末頼もしく、袂を母に打ち覆ひ、狩り場の方へ焦がれ行く。されば五月二十八日に、今の世までも降る雨を、虎が涙や少將の、夜の雨とも名に高き、富士の裾野の御狩りの御遊。鎌倉の騒動にて、急ぎ歸御有るべしとの、時刻も雨に事延びて、假屋の騒ぎもいつしかに、辻の篝も影薄く晝の疲れの手枕に、短き夜半を鐘の聲、夢より夢を結びける。時節よしと曾我殿原。鬼王兄弟を古郷へ返し、出で立つ祐成が裝束は、母上より給はりし秋の野に草盡くし縫ふたる、練り貫きの單へ衣、村千鳥の直垂れの、袖を結んで肩にかけ、黒鞘まきの太刀を佩き、竹の子笠に紐強く、上に下部の青合羽。陣松明に道照らさせ、先に進めば五郎時宗、是も母より給はッたる、白綾に鶴の丸縫ふたる袷。揚げ羽の蝶の直垂れ、赤木の柄の腰ざし。別當より給はッたる。源氏重代友切り丸肩に打ちかけ紙合羽。しめたる笠の怯れじと、跡に續いて出で立ッたり。「いかに時宗。母の御恩を徒らに、今宵敵を討たずんば、不幸といひ世の人口。生きたる甲斐も有るまじきに、天の惠みか降る雨に、御

○練り貫き　經を生絲、緯を練り絲で織ッた絹布。儀式の時に用ゐる。

寮の御立ちは延引す。狩り場の用意も事靜まる。殊には浦の入道嚴。貸し給はッたる此割り符。頼朝公の膝元へも、通路自由と聞くなれば、祐經を討つは案の内。假屋には定めて遊女數多有るべきぞ。罪作りに手な負はせそ。雨はいつも降りながら、今宵の雨ぞ身には染む。討ち死にせしと聞こえなば、思ひ切ッたる御心にも、母の歎きは如何ばかり。悲しさよ」と涙ぐむ。「仰せにや及ぶべき。祐經は籠中の鳥網代の魚。やはか洩らし候ふべき。恐らくは此時宗、天魔波旬に出合ふとも、ちッとも怯まぬ魂。今宵の雨は身に掛かり、ぞッこん徹ッてわぢ〳〵と、物悲しう罷りなる。敵に出合ひ働かば、所々の死を遂げんも計られず。最期の盃一つ飲うで給はれ」と、腰に付けたる懸け鳥帽子に、降りくる雨を受け溜めて、祐成が手に渡せば「なう七度結びて兄となり、六度契りて弟と成るとも傳へ聞く。死に替はり生き替はり、兄弟の縁は切るまじ」と、さらりと飲して指しければ、時宗とッて押し戴き、「兄は親にて候へば、母うへの御盃も左に籠もり、天の甘露仙家の醤し。此酒に勝らんや」と、受けては飲み〳〵、降りくる雨は恩愛の、親と妻との血の涙。親子夫婦の血を飲むと、思ひ知らぬぞ哀れなる。五月雨の一頻をだゆみて、空さりげなく晴々と、北斗の光り鮮かに晴れ渡れば、安西の彌七郎新開の荒四郎。旅裝束に下部を引き具し、雨も晴れて候ふぞ。君は明日五つの御發駕。先手は追ッ付けお立ちの御用意」と、呼ばはらせ打ッて通る。兄弟はッと顔見合はせ、「此騒ぎに亂れ入り、討ッて本望達せん」と、袖摺違へ駈け通る。「コリヤ〳〵。何奴なれば御假屋の傍近く、斷りもなく忍び行く。馬盜人か盜賊か。それ搦めよ」とひしめけば、祐成騒かず、「イヤ苦しからず。

○天魔波旬　惡魔外道。

○仙家の醤　美味の例の形容。

○をだゆみて　小やみに搖ッて。

鎌倉より祐經殿へ密々の御用の使ひ。咎め立てして旁〳〵が、所領の仇ばし爲給ふな。疑はしくば見られよ」と、首に掛けたる通路の割り符。「是見られよ」と指し出だす。兩人びッくり詞を替へ、「存せぬ事とて雜言申せし御免有れ。新開安西咎めたりとは、祐經殿へは必ず沙法なしに賴み入る。假屋へは此辻を左へきれ、行き當たりの大搆へ。いざ御通り候へ」と、馬龍愚懃の空輕薄。結句敵の引き入れを、仕濟まし顏にぞ別れける。兄弟通るる鰐の口、虎の威を借る此割り符。蒲殿の御恩ぞと、御寮の假屋の傍近く、忍び入ること危けれ。左右の假屋騷ぎ立ち、「お先手は發足の御囑れ有り、合羽は取り置き腰錢を取り落とすな。馬よ鞍よ」と葬けば、兄弟彌氣も急かれ、「祐經が假屋とても、さぞ有らん。是迄忍びし甲斐もなく、此雨の降り止む事、神明にも見放され、よッく武運に盡きしか」と、拳を握り齒を鳴らし、虛空を白眼んで立ッたる所に、秩父の執權本田の次郎近經、小具足に身をかため、本陣の夜廻りしてけるが、曾我殿原と見るよりも、近々と歩みくる。兄弟誰ぞと咎むれば、「波に搖らるる沖津船。知邊の磯は此方だ」と、囁く聲に祐成はッと嬉しく、「重忠公の御情。又は御身の御懇情。此度に限らねども、御禮申す事もなく、禮儀知らずとや思されん。今宵年來の大望達せんと存する所、俄に雨晴れ假屋〳〵は出足の用意。此騷ぎには覺束なし。此儘歸ッて何時の時をか期すべき。無二無三に切り込んで、兄弟屍を晒らす所存。重忠公へ一生積もる御禮は、貴殿の執り成し賴み入る」と云ひければ、兄弟が耳に口を寄せ、「氣遣ひばし玄給ふな。祐經は明日君の御馬の御供。それ故假屋も寢靜まる。こなた〳〵。靜に」と、道の案内の杖柱。嬉しさ類ひは無かりけり。「是こそ祐經が臥床なり。心靜に本意を遂げ、會稽の恥ぢを雪がれよ」と、最念比の詞に縋り、殿より密に拜借申せしかど、御切腹の跡なれば、返辨申さんやうも無し。吾々が死骸にあれば、蒲殿こそ御勘氣の、伊藤が末の曾我に組みし、反逆の族よと、死後の虛名に御骸を瀆さん事。御恩を却ッて仇にて報ずる道理。近經殿に預け置く。然るべく賴み存ずる」と、二枚の小札を手に渡せば、「尤じ。今暫らくと存ずれども、役目なれば知らぬ顏。弓矢の禮儀これまで」と本田は假屋に入りにけり。今は何をか期すべきと、兄弟合羽かなぐり捨て、本田が敎へし敵の假屋は是なりと、木戸駒寄せを飛び越え跳ね越え、兄弟にッこと打ち笑ひ、天にも上る心地にて、難なく臥床に討ッて入る。次ぎに伏したる宿直の侍ひ、足音に目を覺まし、「すは盜人よ」と呼ばはッて、逃げ出づる。假屋〳〵に聞き付けて「ソリヤ盜人よ。御立ちよ」と、騷ぎの上に又混亂。相圖響かす大鼓鉦。かん〳〵どん〳〵どん〳〵。右往左往にもてかへす。其隙に兄弟は、敵工藤祐經を、思の儘に討ち負せ、門外に走り出で、袂を絞ッて喉を濕し、勢ひ猛に立ッたりし、心の內こそ嬉しけれ。「ヱ、心地よい時宗。年月の思ひに較ぶれば、敵を討つは易かりしな。餘り嬉しさ心急いて忘れしが。祐經に止め刺しつるか」と問ひければ、「あれほどに切る上は、なんの仔細か候ふべき」。「いや然は無し。跡にて實檢有らん時、敵

○波に搖らるる沖津船　曾我兄弟を呼び掛けた譬へ（の句。
○知る邊の磯　祐經の寢所を指す。
○かなぐり捨て　ムッと引き退け取り捨てて。

○又雨が延びて來た　御立ちが降る慌てて發した間違ひの語。又雨が降ッて來たから御立ちが延びるとの義。

○靱　矢を入れる具。

を討ちは討ッたれども、止めを刺さぬは狼狽へたりと云はれんは、骸の上の耻辱ぞかし。五郎如何に」と有りければ、「尤も」と打ち頷き、誰をか恐れ忍ぶべき。のッさ〳〵假屋の歩み板。ぐわッた〳〵踏み鳴らして引返し、障子襖はら〳〵と蹴放し、祐經が死骸にどうと跨り、「能く聞け祐經。一念の嗔恚に依ッて敵となり味方となり、六根の罪障消滅し、不退の彼岸に到れよ」と、腰の指し添へひん拔き、「そも此刀は箱根にて、初めて見參したる時、得させたる赤木の小刀。御邊元の主なれば、鉄の味は知ッつらん。只今返す受け取れ」と、右手の耳の下よりも、ゆん手へ通れと刺すほどに、耳と口とを一蓮托生。南無阿彌陀佛と回向して、元の所へ立ち歸るに、手指す者さへ無かりけり。祐成待ち受け、「落ちば此儘落つべけれども、隱れ忍んで一生を、暮らさんは生きたる甲斐は有るまじ。一足にても逃ぐるとは弓矢の耻辱。殊更吾々故に御生害有る蒲殿の御恩。御供申さで叶はぬ命。浪人の吾々が、錆太刀と、奉公日の出の殿ばらが、刄を試して討ち死にせん」。「尤も」と、二人等しく大音聲、「伊豆の國の住人伊藤次郎祐親が孫。河津の三郎が二人の子、曾我の十郎祐成、同く五郎時宗。親の敵工藤左衛門祐經を討ち留めたり。頼朝公の御内に弓取りは無きか。折り合ひて打ち止めよ」と呼ばはッて、邊を睨んで扣へたり。闇さは暗し雨は降る。假屋〳〵に「すは夜討ち」と、弓一挺太刀一口に、五人三人取り附いて、我よ人よと奪ひあひ、繋ぎ馬に鞭打ッて、遲しとあせる所も有り、鎧ひに辷り兜に躓き、小手を臑當て草鞋を笠、上を下へと犇めけば、御馬屋の德竹大聲上げ、「物の白黑も見えざるに、松明出だせ」と呼ばはれば、二千軒の假屋より箙靱簑竹笠、傘帚に至まで、火を付

○ござめり「ござるめり」の約。「ムんなれ」と同義。
○無かッし所　無かりし時。

けて投げ出だせば、裾野の暗は忽に、百千の朝日影、一度に照らす如くなり。騷ぎの中より名乘り掛け〳〵、切ッて出づれば兄弟は、小柴垣を小楯に取り、入れ替へ〳〵名乘り替へ、火花を散らして雨交り、揉み立て〳〵戰ひける。腕首斬られて引くも有り、頰先肩先尻こぶた。弓手の太股馬手の足首。矢場に切られて死するも有り、されども兄弟薄手も負はず、血氣に進む時宗は、假屋の人種絶やさんと、御所の間近く切ッて入る。祐成は柴垣の影に息をぞ休めける。假屋〳〵の松明も、降りくる雨に打ち消され、東西暗き小蔭より、緋威の鎧ひ着て、二尺餘りの打ち刀。三尺五寸の太刀横たへ、四十足らずの武者一人、のッさ〳〵と動ぎ出で、「抑是は先年上意を蒙り、富士の人穴に入ッて地獄の底まで名を顯し、此度の狩り倉には虎より猛き猪を乘り留め、日本無双と譽れを一天に輝かす、仁田の四郎忠常とは我事。物々し曾我殿原。思ふ敵は祐經一人。木葉武者五十百切ッたるとて、何の益か有る。仁田の四郎が手に懸かり、御勘氣の者の末孫と、獄門の耻ぢが受けたくば、いざ來いやッとぞ罵しッたる。「オ、よい敵ござめり。仁田なればとて、必ず勝つにも極まらず。人穴の地獄の鬼、猪、なんど相手にしたとは違ふべし。十郎祐成手並を見よ」と打ッて懸かる。「エ、無分別者是非なし」と、閃く太刀影雨夜の星。電火を飛ばして切り結ぶ。更に勝負も無かッし所に、花やかに鎧ふたる武者一人、坂東聲を打ち揚げ、「あら穢らはし。我名を盜む曲者高名を貪るか。伊豆國の住人仁田の四郎忠常とは我事、見參せん」と呼ばはッたり。祐成飛び退り、「六十餘州は廣けれども、頼朝の幕下に、仁田ならで武士は無きか。あら仰々し。瘦せ浪人獨か二人討たんとて、彼も仁田是も仁田、に

た〳〵しき表裏者。二人共に餘さじ物」と、打ッて懸かる。「ヤア跡から出て仁田とは人眞似か。祐成は討たせじ」と、懸け隔たれば揉い潜り、打ち付くれば懸け隔て、祐成獨に仁田は二人。入り亂れて揉み合ひしが、陽に開いて打つ太刀を、後の仁田が陰に閉ぢ、受け流して裾を薙ぐ、祐成が馬手の高股、膝口掛けて切り落とされ、弓手ばかりの片足立、二打ち三打ち打ちつかひも、百手を碎く氣も弱り、犬居にどうと轉びしが「弟の時宗はいづくにぞ。祐成こそ討たれたれ。死出の山にて待つべきぞ。云ふ事も是まで。ヤアいづれなりとも首を打て。臆したるか」と聲懸くる。「ィヤ討ち手の實否紛ぎらはしく、黄泉の障りも悼しし。誠の仁田が面を見せ、名字盜みを面縛させん。松明出だせ」と呼ばはれば、忠常が下部共提灯取ッて差しあぐる。仁田と仁田が顔さし合はせ、「ヤア二の宮。以前仁田と名乘りつるは御邊よな。偖淺ましや。ヤイ兎死すれば狐是を悲しむとは、同じ類に禍の、來らん事を悼む故、元絲者の端くれ。御咎めの飛ばしる掛からん事を痛み、祐成を討ッて一味せぬ心の云ひ譯とは、はて能い思案。女房を離別せしは、他人に成ッて兄弟が、力とならん心底。尤も斯く有るべき事と感心せしに、偖は立身の爲の離別か。御分別〳〵。よしなき仁田呼ばはりが奇怪さ。思はず駈け合はせ、あッたら若者を手に懸けし殘念さよ」と、大きに怒ッて耻ぢしむる。二の宮から〳〵と笑ひ「獼猴が帝釋天を嘲るとやら。おのれが足らざるを以て、人の大智を計らんとして、却ッて愚智が顯はるる。二の宮が曾我を討たんと思はば、けふまで何の待つべきぞ。なまなか功有る男子と思ひ、名字を借ッて打ッ散らし、某他人に成ッたる德。天下晴れて匿へ置き、時節を待ッて世に出

○にたにたしき表裏者　仁田の類聲で「似た」と續けた。能くも似た反對の心の者共の意。

○飛ばしる　飛ばし散り。影響。

ださんと手を取ッて、引かぬばかりにあしらへども、祐成退却かねば詮方なし。手柄はしたく怖くは有り、二の宮が聲を後楯に駈け合はせ、溢幸ひ指果報。あッたら若者を、思はず討ッて殘念なとは、義を知ッた武士の云ふ事。猪に乘ッて高名はせも敢ず、「ヤア小鼻をしとめんとする程の不仁もの。武士の情は存じも由るまい。祐成が首は御邊急ぎ討ッて手柄にせい」。「ィヤ人に貰ふて手柄にする安清ならず。御邊討ッて手柄にせい」。「イヤ二の宮討て」。「仁田討て」。「二の宮討て」と、責めかけられ「オ、小鼻の曾我を討つ刀。二の宮は持ち合はせず、是で討てれば御邊討て」と、祐成と切り合はせし、太刀をからりと投げ出だす。忠常おッ取り提灯に透かして見れば、こは如何に物打ちより刀先まで刃を石にて打ち潰し、打ちみしやいだる樋同然。「ム、最前より此太刀にて討つ眞似したるか。ァッ、頼もしとも優しとも、弓矢取る身の手本ぞや。雜言御免二の宮殿」。「それこそ互。惡口御免仁田殿。和殿の如く情有る、友を持ッたる五郎十郎」。「御分の如く誠有る、緣者を持ッたる曾我殿原」。「一生花實も唉かざりし」「天運の拙さよ」と、二人不覺の落涙に、鎧の袖をぞ絞りける。今を限りの祐成起き直り、「緣者と申すも元は他人の二の宮殿。好しみなき仁田殿。御芳志は五百生。生き替はり死に替はるとも忘るまじ。御手に懸かり討たるる事、祐成はなんばう果報の者。首討ッてたべ。疾く〳〵」と、いへども二人涙に暮れ、差し俯いて居る所に、御所の方より聲々に「曾我の五郎時宗、御前近く亂れ入り、御所の五郎丸が組みとめ、御假屋安穩なり」と、呼ばはる聲に祐成、「あれ聞き給へ。時宗は召し捕られしとや。祐成が

○打ちみしやいだる　ぶッ潰した。

最期いかにと案ずべし。疾く首討ッて兄が最期清かりしと、悦ばせて給べ仁田殿。頼み入る。南無阿彌陀佛彌陀佛」と、首差し伸べて目を閉づる。「名ざしの上は承る。御心易かれ」と、太刀抜き持ッて後に廻り、振り上ぐれば、祐成が首は前にぞ遠方に、はや曉の八つの鐘。鳥も啼く〳〵人も泣く。音をなく千鳥の直垂に、首よ涙よ包みても、洩れて名高き富士の嶽。曾我兄弟が會稽山。骸は裾野に埋めども、譽れは三穂の松の風。他の國まで吹き傳へ、昔語りを今の世の、人の眠りを覺ましける。

●第五

第五

運關三百六十輪。天運三千六百周。頼朝卿の武運に和し、御狩りの御遊建久四年五月二十八日、晝夜十二時に事終り、同廿九日の雞鳴梶原平次景高、朝比奈の三郎義秀、御迎ひとして參上す。鎌倉還御の御供揃ひ、廣庇に出で給へば、秩父北條和田岡崎、何れもお供の出で立ちにて、伺候有る。因幡守大江の廣元、奏狀訴狀口書き等、數通御前に持參し、「是は御狩り中諸人の願ひ訴へ、諸檢使の覺え等にて御座候ふ。鎌倉へ歸御有ッて、御裁許有るべく候ふや。但し今朝聞こし召し、上げらるべうもや」と伺へば、御察聞こし召され、「鎌倉へ歸ッては留主中の訴へも多からん。狩り場の間の事共は、只今是にて沙汰せんず。廣元讀まれよ」との御詞にて、逐一にこそ讀んだりける。五月二十八日曾我兄弟亂入の刻、御家人手負の檢使竹下孫八左衛門、同安田の三郎見分の覺え。一平具の平馬之丞、頬先深疵。但し右の方なれば逃げ疵の事。一愛甲の三郎弓手の腕馬手の肩後疵二ヶ所。一安西

の彌七郎右の橫腹深手。腸ずだ〳〵に切り、存命不定に相見え申し候ふ。一臼杵の八郎頭を割られ、即座に討ち死に。一新開の荒四郎小柴垣を破り逃げ候ふ砌、竹のひッ刺ぎにて左の腹突き潰し申し候ふ。但し自身の怪我の由口上」。次ぎを讀まんとする所を、頼朝「暫らく〳〵。悉く聞くに及ばず。鬼神なればとて、兄弟二人に見苦しき働き。譬へ薄手かすり手負ふせたりとも、討ち留め組み留めずんば、高名に有るべからず。末代の批判、諸家の耻ぢを殘すに似たり」。御前に於て是を引き裂き燒き捨てらる。大智のほどぞ尤もなる。次ぎの一通押し開き、「伊豆國の住人、仁田四郎忠常、恐れながら言上。一二の宮太郎安清。專ら忠義を存じ、曾我兄弟が緣者たるを恐れ、女房を離別致し、猶以て祐成所存を察し、己が名を隱し、某が假名を致し、祐成を喰ひ留め申し候ふ刻、橫合ひより折り合ひ首を取り申し候ふ。某此度の高名は、全く二の宮高名にて御座候ふ。此旨御披露願ひ奉り候ふ以上月日」。頼朝大きに感じ給ひ、鎌倉の早打ち時を違へず、重々神妙の仕形。親殺し主殺しの外、其家に崇る法は無し、女房も以前の如く相具し、兄弟が老母介抱等、少しも憚るべからず。老中此旨沙汰せられよ。偖仁田の四郎が高名は、今に始めぬ事ながら、譽れを他に讓ッて身を謙だる勇者。感じても餘り有り。恩賞は鎌倉にて斗らふべし。次ぎは〳〵」と曰ば「恐れながら言上。拙僧義は藤澤寺の住持。瑞阿上人と申す者にて御座候ふ。今晝時分工藤左衛門祐經殿家來、近江の小藤太と申す仁參られ、「梶原平次景高殿仰せに候ふ間、日中九つの鐘を差し置き、八つに撞き申すべき旨申され候ふ故、叶ひ難きよし申し候へば、拙僧を初め寺僧共殘らず搦め、自身鐘を撞き、近在隣鄉

刻限混亂仕り候ふ。後日の御咎めを恐れ、言上仕り候ふ以上月日」。頼朝大きに御氣色損じ、「仕持が訴へに限らず。隱し目付けの者共宵に耳へ達したり。滿の入道が切腹も相手は景高と聞く。鎌倉に於て急度詮義相遂ぐべし。それまでは和田の義盛に預け置くぞ」と曰ひも果てぬに、平次景高「此義は段々申し譯」と云ふ所を、朝比奈の三郎義秀、小腕を取ッて捻ぢすゑ、「云ひ分けあらば追ッての事。今日から親父が預かりぢや。北の丸で榛谷が、朝食の相伴に、己が頬をはり殘して殘念」と、四つ五つ敲りこかし、羽掻締めに引ッ縛り、家來が手にぞ渡しける。廣元一通又取り上げ、「曾我兄弟が種替りの兄、京の小四郎恐れながら言上。右祐成時宗兼々の企て承り及び、數度意見に及び候へども許容なく、御狩り場の狼籍至極。上を憚からざる次第恐れ入り存じ奉り候ふ。是に依ッて老母幷に大磯の虎、化粧坂の少將と申す遊女。兄弟一味の者共、以上三人搦め置き申し候ふ。私同心仕らざる所聞こし召し分けられ、御褒美頂戴仕り候はば、有り難く存じ奉るべく候ふ以上」。君御顔色損じ、「悪い京の小四郎が訴狀。能く當代を詮義暗しと見立てしな。兄弟が力に成るほど無くとも、祐經が内通の犬と成ッて、老母が方へ入り込みしと云ふ事。頼朝聞かで有るべきか。言語同斷諸人の見せしめ。老母二人の遊女急いで繩を許し、取ッ手の者共彼奴召し取り來れ」。畏ッて罷り立たんとする所を、朝比奈の三郎又つッと出で、「何の彼奴に取り手の者。我等に仰せ付けられかし」。「ォ、兎も角も」。「否し」と立ち出でしが立ち戻り、「若し異義に及ばば摑み殺して捨て申さんか」。「ィヤ〳〵問ふべき仔細有り。殺す事は無用〳〵」。「はッ」と答へ立ち出でしが又立ち歸り、「然らば死なぬほどに骨々ほッき〳〵捻ぢ折ッて參るべきか。「ォ、其段は兎も角も」と曰へば「ィ否いの。コリヤ面白からうぞ」と、小踊りしてご入りにける。

○見せしめ懲戒。

聲もいかがなり、相殘る訴へは鎌倉にて聞くべきぞ。先づ時宗を引き出だせ。一旦對面せん」とぞ仰せける。お次ぎに扣へし御所の五郎丸、「時宗が繩引き立て、御白洲に引きすゑ、「兄弟狼籍の餘り、此者御寢所近く切り入り、「御命危かりし所、某難なく組み留めて候ふ」と、嚴しげに言上す。五郎威丈高に成り、「ヤア御尋ねも無き口上だて。時宗言上する事有り。耳を澄まして能く聞け」と、御前の方を振り仰き、「恐れ多き申し條にて候へども、弓馬の家に生まれて、親の敵を討ち候ふ事、僻事とも狼籍とも、よも御不審は候ふまじ。只今召し出だされしは、御所の假屋へ切り入りし御咎め候ふな。時宗も好む所には候はねど、折り合ふ兵頭はりに逃げ足强く、一人も手に立つ者候はず。御所の内にはよき武者ぞ宿直爲つらん。功有る武士に出合ひ、討ち死にせばやと奥深く切り入り候ふ所に、偖々當代のきれ物は、化物と功成る武士。いぜん我君討ッて出でさせ給ふ音。年にも足らぬ大友の一法師が、御物の具に絆ッて、曾我兄弟鬼神なればとて、御手を下されんは源氏の御恥辱。殿原に仰せ付けられ候へと、諫言申すを遙かに聞き、殊勝しや優しや。滿石大友の家の惣領。哀れ此一法師が手に渡り、討ち死にせばやと存ずる所、是なる五郎丸薄衣被き、取ッたと云ふて確かと抱き付きし、頭付きは童なり、是こそ一法師ござめれ。望む所と嬉しく易々と搦められ。今の千悔萬悔。なのれとだに知ッたらば、蹴殺して捨てん物。よし〳〵申して詮なき事。疾く〳〵首を召さるべし」と、

詞涼しく言上す。五郎丸聞きも敢ず、「ヤア生まれた跡の早め薬。口ばかりの廣言云ふな〳〵。既に我手に入ッたる時、一代一世の力を出し、振ぎ放さんと足手をもがき、許せ〳〵と大聲上げて吠えたれども、びッくりとも動かせず、取ッて引き締め繩掛けたを忘れたか。よしない口を聞く手間で、念佛申せ」と冷笑ふ。五郎くつ〳〵と吹き出し、「心有ッて懸かッた繩。おのれが力で懸けたとは、體より口の廣い奴。迚も死なんづ命。よしない力身なれども、時宗が僞りと君の思し召し、諸大名のさげしみも無念なり。おのれが力に搦められぬ證據。是見よ」と、筋骨に氣を込め、一搖り搖ッて「えいやうん」と、はッたる高手小手の繩、ふッつ〳〵と切れたるは、三歳の童が、盤心切るより易かりける。飛び掛かッて五郎丸を、膝の下に取ッて引き伏せ、「ヤア夜前おのれが力にて、搦めたが定ならば、ま一度御前で搦めよ」と、胴骨の膝節にて、ひしげて退けと押しければ、聲は出でず兩眼に、溢す涙は雨やさめ。油を絞める如くなり。斯かる所へ朝比奈の三郎、小猫を提げたる如くにて、京の小四郎が細首攫んで駈け來り、御前にどうと打ち付くる。頼朝御覽じ、「己は親兄弟に逆らひ、敵に組みせし無道者。此世に祐經が居ぬからは、未來へ參ッて奉公せい。それ〳〵眼」と曰へば、時宗謹しんで頭をさげ、「明きらかなる御政道。先だちし祐成、さぞ有り難く存ずべし。さりながら、胤こそ替はれ兄は兄。命召されんをまぎ〳〵と、見ていんる不仁の至り。助命願ひ奉る」と、思ひ込んで言上す。「時宗に免じ命は許すぞ」刺りこぱッて追ひ拂へ」。「承る」と朝比奈、「刺刀も刃物の內。おのれに當てるは穢らはし。義秀が手刺刀戴け」と、髪くる〳〵と手にから巻き、一引きぐッと「あ痛

○さげしみ　輕蔑。

たた」。「す、痛い等。一引きが千僧供養、二引きが萬人の物笑ひ、鳥の毛を引く芥子の花も、ぐずんぼろ坊主。ねッたい坊主鉢坊主。是がお寺の長助」と、笑ふてこそは追ひ立てける。時宗五郎丸を引き起こし、三間ばかり取ッて投げ、「申すことも是限り。今生に用なき男。寄ッて繩掛けられよ」と、後手に成ッて待ちければ、雜式共はや繩持ッて立ちかかる。「ア、暫し〳〵」と御聲を懸け給ひ、「日本無双の兄弟。助け置きたき者なれども、兄祐成が討たれし上は、助かれといふともよも助からじ。頼朝が父義朝を討ッたる、長田の庄司めが首討ッたる時の嬉しさは、平家の一門の首百千にもかへざりし。彼等が今日の心の喜び。命の何か惜しからん。國の憲法是非も無し。鷹が岡へ引き出だし、今生の暇取らせよ。さりながら、一騎當千の兵、雜兵に繩掛けさせんは、弓矢の冥加も恐れ有り、頼朝が繩掛けん」と、忝くも御大將、白洲に飛びおり、眞紅の總打ッたる、御鎧の總巻き取て押したぐり、「頼朝が右の手には西三十三ヶ國、左の手には東三十三ヶ國、六十餘州の力を以て懸けたる繩ぞ。恨むるな」と、御聲の內よりも、時宗わッと聲を上げ、「なう伺候の大名小名、秋津島を海にうけ、斯かる情の御詞を聞くべきか。父河津の精靈先立ち〳〵祐成も、いかばかり喜び奉らん。あはれ今一度生まれ替はり、御馬の先にて討ち死にし、此御愚報じたや。三寶佛陀も憐みたまへ」と、聲を揚げて泣きければ、滿座の諸武士感涙し、鬼を欺く朝比奈も、「義ましや時宗。報果ものよ時宗。有り難の我君や」と、すすり上げ〳〵、涙の中の喜びは、道理とこそ聞こえけれ。「和田秩父千葉上總。

心あらん者共は、縄に手をかけ結縁せよ」。「御立ちぞう」と呼ばはれば、御門に扣へし虎少將。母を誘ひ走り入り、君を禮し時宗が、縄に縋りて喜び泣き。門にお馬のいばふ聲、假屋の木戸も明七つ。谷七郷の鎌倉へ、愛でたく還御成されける。今日一日の十二時、今日一日の十二時。つもり積もツて百千年。盡きせぬ源氏の繁昌こそ、民安全の國土なれ。

○結縁せよ　佛道に緣を結べとの意。

本朝三國誌

●第一　第一

小節を規る者は榮名をなす事なく、少しき恥ぢをにくむ者は、大功を立つる事あたはずといへり。狗を屠りし樊噲が刀は、「楚兵七十萬の鉾先を挫き、漂母が惠みし韓信が飢は、漢家四百年の民を賑はす。ためしを爰に日の本や。百纏あまりの皇が御代、天下弓馬の棟梁、正二位右大臣、平の朝臣春長公、近江の國に居城ある。御嬢子城之介春忠君、王城の守護として、洛陽東三條に御とのづくり、爻子東西に立ち分かれ、君を補佐し民を撫育ましませば、上下の覺え前代に超え、勅使御下向有るべき由、御馳走の設けこまやかに、御坐の間には御手づからの生花とて、名花を求め給ひしかば、惟任判官光秀、眞柴肥前の大領久吉、三輪五郎別當高重、島田前司勝李承り、遠山遠來の木草の珍花、思ひ〳〵の花桶花筒、御緣前にぞならべける。大將御覽じ、いづれも心よく咲いたり見ごと〳〵。なかんづく第一番に、惟任判官と札付し白梅、今五月の末には尤も珍らし。然りながら、梅は諸木の始めに咲いてまッさきがくる花。おくれて跡にさがるとは、武家の忌み詞。賞翫ならず。其外百合牡丹藤芍藥、當季他季珍花。いづれおろかは無けれども、勅使は花の都人、もてなしに餘情うすし。末坐に金の瓢箪、夕顏の蔓一房入ッたるは、札の通眞柴久吉が物好きな。おもしろし〳〵。五條あたりの軒のつま、しろくさけるはと、云ひし物語りの風情。我此城を小家と卑下し、勅使を光源氏にたと

○ためしを爰に日の本や　爰に「引く」と聞かせた。
○ものづくり　家がまへ。

○才覺あげて夕顔の　機轉の利くことは勝げて賞すべき事であるとの義。あげて「言ふ」と掛けた。

へし心、出かしたり久吉」と、甚だ御感有る所に、はや勅使御入りと申し上ぐれば、「直に是を」と瓢簞を、手づから床になほさるゝ。今に始めぬ久吉の、才覺あげて夕顔の、花さへ時の面目なり。勅使三條前の内大臣殿、上段の座に付き給ひ、「扨も蒙古國の夷日本をうかがひ、安藝周防の沖に船をかけ、國民をなやます由、西國四國の注進に因ッて、子息城之介春忠を召され、討ッ手の御沙汰有りといへども、小野のお通といふ女の色に溺れ、晝夜の酒宴東山の花見、嵯峨北山の遊覽などゝ、武將の身を忘れ、虚病をかまへ參内を怠り、我儘放埒の行跡。父春長は我子の善惡知らざるか。急度意見を加ふべしとの宣旨なり」と、曰へば、春長公謹んで、「蒙古の賊船征伐の事、さッそく軍兵を差し向け候ふべし。又嫡子城之介不行跡の次第、言語同斷の不義者。春長直に罷りのぼり、折檻をとげ、震襟を安んじ奉らす。先づ御休息有るべし」と、三輪島田御馳走役。設けの座敷に請ぜらる。大將甚だ急かせ給ひ、「勅使の歸洛に續いて我も上洛し、城之介めが不行義急度糺すべし。蒙古誅罰の大將軍は眞柴久吉。此瓢簞を向後汝が馬印に取らするぞ。惟任判官も手ぜいを卒し、久吉に隨ひ上知をまもり、明日未明に發向せよ」と曰へば、久吉瓢簞頂戴し、「蒙古の賊兵何百萬騎有りといふとも、久吉片手を動かさば、微塵粉灰に討ち亡ぼし、凱陣踵をめぐらすべからず。はや御遑と言上ある。惟任つッと出で、「こは情なき御諚や候ふ。某年輩と申し、丹波一國を給はり、先祖代々弓馬の家、何に衰ッて久吉に隨ひ、下知を請け申すべき。御寵愛にて御床に置かれし、夕顔は畠に生じ、土百性の脚にかくる、花の中の草履取り。百合ぼたん梅花などは、氏素性正しき花の中の國大名。草履摑みの夕

○ねすり言　奸言。

○非太刀　非難。

○しやつ　罵ッて呼ぶ語。あいつ。

○角前髪　昔しの少年の者の取ッた前髪。

○うひ　「うひ奴」の略。「奇特」ぐらゐの程度で譽めた語。

顔に、座をこされし耻辱。花物いはねば御恨みは申さねども、花も無念は有る道理。いはんや武士の身。耻辱なきやうの上意願ひ奉る」と、久吉を尻目にかけ、憚りなく言上す。大將大きに御立腹まし〳〵、「おのれ人がましく、耻ぢといふ事知ッたるな。夕顔を花の草履とりとは、久吉をそねむねすり言。いふまでも無し。かれは松下嘉平次といふ、小身者の草履取り、我に仕へ武功忠功他にすぐれ、播州一國の主と成ッたるは、歴代の國大名にまさッて、うぬらが中々及ばぬ譽まれ。只今勅使のおほせ。嫡子城之介色におぼれ、放埒の身持ち。親の目に見えざるかとの宣旨、春長が一生の耻辱。此耻辱は惟任うぬが業。彼の女は久吉が古主松下嘉平次が娘。美人の聞こえ有るを以て、おのれが養ひ娘とし、小野のお通と名付け、城之介に近づけ、諫言すべき年輩身がらにて、若き主人の心を狂はし、一言一句人に非太刀をうたれぬ春長、耻辱の勅諚蒙るは、おのれ一人の所爲。ヱ、にッくい奴め。誰れか有る、ソレしやつ面はれ。はれ〳〵」と曰へども、お詰めの人々目を見合はせ、手を出す人も無し。「次ぎに誰も人は無きか。惟任が面はれ〳〵」と、しきッて御聲高ければ、三の間に伺候せし、久吉の供小性、加藤虎之助正清十八歳、勇猛不敵の角前髪をどり出で、「上意なるぞ」と握りこぶし眞甲に七つ八つ。四五寸打ちさく額口、面目涙ながるゝ血、とゞめ兼ねたるばかりなり。「うい若い者出かした〳〵。ヤイ惟任。西國の討ッ手を免す。身が上洛の留主をせい」と、勅使の間に入り給へば、伺候の人々息をつめ、皆手に汗をぞ握りける。久吉正清をはたと瞰んで、「上意なればとて何萬人か有る人。いはれぬおのれがさし出者。此科代には今度の出陣供叶はず、留主をせい」とま

○御隔心　心を置くこと。遠慮することゝ。

かり付け、「なう惟任殿。君御隔心の外樣大名には、中々なされぬ事。能く〳〵お心やすきまゝ、親の子を打つ同前。數年の御恩に恨みを忘れ、愈忠勤をはげまれば、君も御後悔。誰れか尤もと存ぜざらん。少しも恥辱ならぬ事。必ず御氣にかけらるな」と、挨拶あれば打ちうなづき、「思し召しよッての御異見。先づ御禮申す。君に差し上げ置いたる身命。ぶたれてもはられても、我身で無ければお恨みとも存ぜず。ぶち殺されれば君の御損。口惜しき事さら〳〵無し。さりながら、此惟任は御自分なぞゝ事かはり、一門緣者皆歷々。從弟の末にも草履摑み無ければ、親類の歷々共が、さぞ無念に存ぜん」と、にが口のあて詞。久吉大口あいて打ち笑ひ、「御一門の歷々衆。何のごくに立たぬ事。もろこし漢の張良は、黃石公が沓を取ッて履かせし。張良は石公が草履取り。その張良に續く者四百餘州に無かりし。我等も松下嘉平次が草履取りの久吉。忠節武勇續く者無ければ、日本の張良とは此眞柴久吉。歷々の一門一家。さら〳〵羨ましう存ぜず」と、一言に勝ちを取り、持ッて立ッたる瓢箪より、駒を出だすは張華老。是は三國名將の、譽まれを出だす馬印。名高き御代ぞ道廣き、廣小路を退出する。惟任が馬の向かふより、嫡子左馬五郎光成、郎等開田彥六、四王天又九郎、進士八郎馬の先に立ちへだて、左馬五郎聲をいからし、「父は何時の間に臆病神が付いたるぞ。上意なればとて、久吉が召し仕ひわッぱに面をはられ、おめ〳〵生きて歸らんとは恨めしゝ。城内に切り入り、大將ぐるめに打ち果たさん」と、轡をつかんで引き返す。「やれ待て。さはぞの事光秀が知るまいか。今日の恥辱は子孫鬱昌の吉左右。仔細は宿所で語るべし。そこを放せ」と打たんとす。郎等共口々に、「手ぬるし〳〵。若日那の御一分、吾々も侍ひ立たず。御所存あらば是にて承らん」と、馬にすがッて苛ッたり。「ム、頼もしゝ。語ッて安堵させうず」と、おり立ッて片かげに、泥障を時の敷き革や。供の人馬を遠ざけ、郎子主從額を集め、「汝等大方色にも見つらん。三年此方天下を望む思ひ立ち。松下嘉平次は小身の浪人なれども、眞柴久吉が古主。かれが威を押さへん爲、松下を一味の第一に運判させ、娘お通をやしなひ取ッて城之介にあてがひ、あれ見よ色に耽り弓矢を忘れ、長袖同前となしたる計略。なんと〳〵。されども成りあがりの久吉めが猿智惠、某が病ひなりしが、時節は有る物。蒙古の夷討ッ手として、明日未明西國へ出陣。春長は城之介異見のため、明後日京のぼり、旅舘は例の如く、清水か本能寺。ひッ續いて攻めのぼり、京着の息もさせず、堀もなき寺の塀一重。一刻に踏み破り、大將の首は手裏に有り、まだ〳〵究竟の仕合はせ。城之介は來月二日、お通が懷妊の祝義、又は心なぐさめ愛宕にて夏の花見。五色の絹にて櫻花をつくり、金襴錦の慢幕。酒宴亂舞のだて盡くしある催し。見物にのぼれとお通が方より便り有る。武運の幸ひ此時。左馬五郎は開田進士を相具し、あたご山に押しよせ、城之介を討ち取れ。四王天は遠巻きして、鐵砲つるべよ。春長は身が請け取り、今日殿中にて、頬をはられし恨みを、面にたつれば欲を放れし義兵の軍。味方の勝ちは必定」とさゝやけば、各打ちうなづき、左馬五郎勇みをなし、「某父の名代と申し立て、酒肴菓子折りなど美々しくしつらひ、愛宕山にのぼり、谷々に人數を隱し、城之介殿に醉ひを勸め、彼の山の名にあふ土器投げにて、谷嶺の相圖を定め、音に聞こゆる魔所なれば、天狗のとがめと奇計

○爲がち　したい三昧。同聲の「かち路」即ち徒歩の語を直ぐと續けて文飾とした。

○處體　なり振り。「曾根崎心中」にも「處體くづをれあゝ恥づかしの」と有ッた。

をめぐらし、女ばら恐れさわぐ紛ぎれ、大將にむずと組んで刺し通すに、やはか仕損じ申すべき」。「ア、壁に耳ひそかに〳〵。宿所にて手配りせん。サア來い〳〵。愛宕はそれがし信仰の山。かねて願ひをかけ置き、奉納せし連歌の發句。そも時は今五月の空。天が下しる瑞相ぞ」と勇みてのぼる。あたご花見に袖をひかれた。是も愛宕の御利生かの面白や。夏を二たび春忠公、吉野を移す造り花。愛宕の木々に咲かせ匂はせ、錦につゝみ綾を敷き、お供も女ばかりにて、男まぜずの櫻狩り。をのゝお通の出で立ちばへ、だてと戀ひとは爲がちかち路の山ぶみや。お手を引き合ふてえい〳〵、えいさッさ。さッさ坂中坂の上。所々の花むしろ。はや御酒宴も數々の、幕しぼらせて御覽有る。鐵の鳥居の陛を、雲かと見ればかゞすげ笠の、やれこの、紅のくけ紐のや是これ〳〵。愛宕參りに花一つ給もや。袂のしぼり染めぬき。廿ばかりの、歳も模樣も揃ひのゆかた。處體腰付き肩にしきみの、御祈禱の札。ヤイノ。見れば其日の、やッこりや〳〵〳〵、きたうと成る〳〵。なれ〳〵しくも呼びかけて、名所を問へば立ちどまり、指をさしてぞ語りける。あれ東にそびえ見えたるは、我立つ杣の比叡山。みやこの富士とも、または名だかき鷲の峰とも申すなり。もろこしの四明の洞を移し、一念三千の氣を顯はして、三千人の衆徒を置き、王城の鬼門を守り、惡魔を拂ふ利劍かや。きらゝと見ゆるきらゝ坂。如意がだけ、りくろ谷の、流れは白河に響きて、高野花園やせれうしつ原。やせ大原ふりさけ見れば、北に鞍馬やみぞろ池。山時鳥の一ひと聲を、松が崎より二の瀬に續く。二の瀬續きの市原や。小野の小町も君がため、ひろふこのみは何々ぞ。いちゐかしゐ馬手葉椎大小。柑子金柑

○嵯峨饅頭　小野の阿通。愛宕に對していふ。

○折り　雅物の「折り詰め」。

○さし合ひ來るな　他の諸大名を貶して舅を譽めた處から、それを聞

窓の梅。園の桃。人丸のかきほの柿。山の邊のさゝさゝ栗くりくり返す。名所〳〵は多けれど、あたご粽のじッと締まッた御二人中、見れば妬ましおさらばと、色を持たせて行く振りは、是も名所の内ぞかし。一ぱい譏嫌の春忠君、「弓矢八幡。顏は見えねどすげ笠姿。たまらぬ〳〵。なんとお通。是へ呼うで盃が頂きたい。ゆるせ〳〵」。「エ、にくう野でも山でも色には御目が早い、其代はりにつめッてやろ」と、懷に手を入れて、脇ばらをふッつり、「あいたゝた」。「是でもか〳〵」。「あいたゝた」。「是でも盃したいか」。「オ、あのすげ笠ゆゑなら、少々痛さはこらへる」と立ち寄ッて、「なう御娘達。あたご粽も皮を取らねば旨味は知れね。直に〳〵」と取り付く笠の、「ア、恥づかし」と顏をそむける「鬢の匂ひや蟬鬢のかゝり、どうもならぬ。ちまき樣いッそかはぐち賞翫」と、腰をじッと抱きしめ〳〵、笠の内に顏さし入れ、「ヤア、腰元の柳めか。跡なは正木」。「わたしは杣木」。「お通樣のお指圖で、殿樣をだましのため、此出立ち」と、一度に笠を取りければ、「偖もおはまり〳〵」と、お通の君の高笑ひ。「エ、口へもいらぬ粽ゆゑ、つめられて痛い目した。いはれぬ愛宕粽より、たべ付けた嵯峨饅頭、むッくりさすッて貰はう」と、詫び言痴話言御たはふれ。一入興をぞ增しにける。時分をはからひ左馬五郎、折りを舁かせ登山し、「愚父判官申し付け。御遊覽のお伽に參上仕る。時ならぬ櫻の御作意。花の木影に女中のお酌。先づ落ち付きの一盃喉が鳴り候ふ」と、打ち柔ぐれば「是は深切。諸大名多けれども、譏る者ばかり。さすが舅殿。サアお通。さし合ひ來るな。小舅相手に盃〻若やがせ」と、うつゝなげなる御有り樣。お通萬に心づき、「いや〳〵今朝からたんと過ぎました。

いて差し支へとなる諸大名は來て呉れるなとの義。酒に醉ッて他愛の無い體を寫すための句。

○くづをれる　がッかりする。

○けも無い　毫も見た事は無いとの義。「土器」と同聲で、婦人の陰毛の無いの事を稱へる處から「毛も無い」と曰ッた。前の句に「こちとを投げるぢや無いかや」と曰ひしも其心での誤解を示したもの。

兄さま、必ず上げて下さんすな。どうでも御身がくづをれる。餘のお慰み遊ばせ」と、大事にかくれば左馬五郎、「誠によッぽどお色もよし。然あらば當山の一景かはらけ投げ。則ち此折りに金銀の土器用意仕る。あの幕の影より此谷へひらり〳〵。群れゐる鳥の舞ふ如く、投げて御目に懸けうか」。「是はよい御慰み。所望〳〵」。「さらば拙者が手づま御覽に入れん」と、たかみに折りを舅きあぐれば、腰元衆もざゞめいて、「かはらけ投げとはァ、こは。こちとを投げるぢや無いかや」。「ァ、つがもない。扨はそなたはまだ見ずか」。「けも無い〳〵。かはらけ投げ、今が始め」と、見あげ見おろし吹きおろす、愛宕颪に嵯峨かはらけが乘ッて、ふうわりふは〳〵〳〵。おるゝ雲雀や蝶の舞ひ。天津羽衣舞ひの袂か。ひら〳〵〳〵。雪のふゞきの如くなり。相圖の印鈴を付いたる朱ぬりの笠。風にひらめきかゞめけば、岩陰木陰一同に、螺を吹き立て責め太皷。木の根を鳴らし礫打ち、眼にさへぎる天狗の形、此處に顯れ彼處に消え、數千人の聲として、一度にどッと笑ひしは、山も崩るゝばかりなり。お通を始め女中はッと魂ぎれば、大將少しもさわぎ給はず、魔所には必ず有るならひ。先づ清瀧まで」と、おりさせ給ふ向かふより、ぐわらり〳〵と打つ礫。戻れば前より後より、雨霰と打ちかくる。天狗つぶてにすくめられ、太刀も刀も叶はねば、「無念〳〵」と春忠公。あきれはてゝ立ち給ふ。左馬五郎走せ歸り「只事ならぬ山の暴れ。誠や愛宕權現は、懷姙の女を忌み給ふ由。お通が參詣と申し、酒肉に山をけがされし、太郎坊の祟り。泣いても悔やんでも返らず。ェ、是非も無し。日本の武將右大臣春長公の若君、天狗にさかれ、木の枝にかけられ、御名を流し給はんより、御

切腹〳〵。左馬五郎御介錯」と、束に手をかけ立ちよれば「ャおくれたか左馬五郎。われ父と一所に、比叡山根來山の魔所へ、馬を入れ合戰せしに、いッかな天狗も面出しせず。今更天狗礫うたれしとて、腹切るたはけや有るべき。太郎坊でも次郎坊でも、羽ぶし切り折り鼻柱ゆがめて呉れん。女子共預けた。召しつれて先へ歸れ。お通歸れ」と曰へども、「いや〳〵たとへ天狗の爪にかけ、身は八つ裂きになるとも、お傍は離れぬ。これ兄さま、天狗でも惡魔でも、主君のお命にかはるが武士。何に恐れて御切腹とは、太郎坊より五郎坊といふ、天狗殿が恐ろしい」と、兄が顏に目を放さず。「ム、尤も〳〵。然らば某月の輪山の樵路より、先を拂ッて御供せん。先づ案内を」と岨を傳ふて下りしが、猶も響く貝太皷、坂をのぼりに韋駄天走り。八町三所足もためず飛んで來るは、加藤虎之助正清、御前に大息つき、大殿春長公君放埒の御行義御異見のため、夜前御上着の所、惟任判官逆心にて、御旅舘の寺に押し寄せ不意の合戰。多勢に無勢御家人殘らず討死にし、御自身御手をおろされ、敵あまた討ちとめ射とめ給へども、つひに叶はず。御腹めされ候ふ」と、申しもあへぬに春忠公、はッとばかりに仰天有り「ェ、飼ひかふ犬はまだしも、灰猫めに手をくはれたる口惜しや。汝が主の久吉は何とした」。「さればこそ御運の末。主人久吉は蒙古の討手として、先月下旬中國表に發向。我等留守に殘り、惟任打ッて上りしと、聞くより慕ひ追ッかけしに、半時おくれ手にはづれ、漸煙の中にかけ入り、御首ひろひ奉る」と、腰に付けたる弓袋より、御首御前に指し上ぐれば、しさッて額を地に付けて、絶え入るばかりの御涙。「逆臣時節うかがふも、城之介が心の不淨、不孝の罪。何と申し開く

べき。ヱ、恩を知らぬ惟任の畜生め。人間と御覽ぜし御めがね違ひし。無念や」と、土をつかみ石を取ッて噛み碎き、いかりの雨眼つらぬく涙。照る日の前の夕立に、雹のまじれる如くなり。お通涙を押しのごひ、「よしなき人に養はれ、親子となれば自も敵の末。切りとめられよ正清殿」と、縋り付くをつきのけ、「女一人何時打つも安い事。胎内にはお主有り御せんぎを見屆くるが道々。ふもとに軍兵取りまいたり。御油斷有るな」といふ所に、時をどッとつくりかけ、左馬五郎まッさき立ッて責めのぼる。「ヤア待ち受けたり。眞柴肥前の大領久吉が郎等、加藤虎之助正清、殿中にて惟任が頬をくはせし若者。悴が頬も切り割らん」と、大せいを左右に受け、ばッくだし追ひのぼし、花に嵐の愛宕山、猪の暴るゝが如くなり。君も御身をしッかとかため、「是お通。御首預けた。雜人に取らるゝな」と、打ッて出でんとし給ふ所へ、誰が放つとも白作の、矢一つ來ッて弓手の高股、羽ぶくらせめてずッぱとあたれば小膝を突き、ぬき捨つる矢口より、流るゝ血は瀧なッて、立ちあがるに踏みためす。「ヱ、よッく武運に盡きたるな。城之介が生害只今。お通介錯〳〵」と、座を組み給へば、「進七八郎」と名乘ッて一文字に打ちかくる。「さしッたり」とゆん手を指しのべ、小がひな取ッて膝の下にどうと引ッ敷き、「おのれ最期の供せよ」と、三刀四刀指し通し〳〵、返す刀を御膳先にがばと突き立て引き廻し、「ヤァお通。首を〳〵」と曰へども、前後涙に氣も亂れ、うろたへ廻る其隙に、岩影より左馬五郎、飛びかゝッて御首、水もたまらず打ち落とし、髻を摑んで立ちあがれば、正清はるかに「ヤァ畜類め。御首を渡さうか」と、走り來るいきほひ、「こりやならぬ」と首投げ捨て、神前さして逃げのぼ

る。かけよッて「これ〳〵お通。御親子の御首、御臺所の御手に渡し、身の安否を定められよ。はや疾く〳〵」と敎訓し、「左馬五郎めを一討ち」と追かけ廻る谷陰や、異類異形の大天狗「つかみさけ引きさけ」とおめき叫んで顯れたり。正清石壇の眞中にふんばだかり、「ハヽめづらしい天狗の巢おろし。當山の名にしおふ太郎坊か次郎坊か。くらま山の僧正坊。比叡山のひら〳〵ひらやよかは坊。麓に山王さるの頬の眞赤頬もみぢ坊。筑紫に彦山ぶせん坊か。四國に白嶺こんぴら坊か。飯綱の三郎三尺坊。大山のはうき坊か。はねをむしッて羽ばうき坊。鉢坊。腕も脚も打ち落としずんぼろ坊にしてくれん。サア天狗達ござれ〳〵」とのゝしッたる。壇の左右に開田左馬五郎、ふろしは立てじと扣ゆれば、上には正清眼をくばり、振りさばく大前髪、しゝ頭と狛犬の、いがみ合ひとも云ッつべし。頭の上より天狗共、かさにかゝッて追ッ取りまく。「誠の天狗は人間の鼻つまむ」と、片手を延べて片端に、引き抜き抜き裂くばかりぬき鼻。きん中の大男、もと首つかんでえいと指し上げ、一振り振ッて谷へひらりと投げ込んだり。開田すきをうかゞひ組みとめんと這ひあがる。ぞうとふみ付け石壇に、蹈み付け〳〵かうべ微塵に踏み碎き、のッさ〳〵下るゝを見て、「こは叶はじ」と左馬五郎、恐れて遁ぐるを飛びかゝッて、かんづか取ッて打ちふせ、しッかと踏まへ、「主君の罰愛宕の罰、天狗の罰も思ひ知れ。久吉に告げ知らせ、判官を討つ事、十日は過ぐべからず。親が冥途のさきがけせよ」と、ふッつとねぢきる、首は愛宕の爲の爪にかけまくも、神を拜して宙を飛ぶ、中國ふねの追ひ風より、うすゐうしや矢よ

○勝たう、加藤共に同聲の文飾。

●第二

○蘭奢　蘭奢侍の略。初め聖武帝が東大寺の黄熟香といふ香に名づけたもの。或は蘭麝の誤りであらうか？蘭麝は蘭花と麝香との香の稱へ。

○有爲生死の坂井　坂井は人の姓。界を言ひ掛けた。「有爲生死」は此浮き世の中での生き死にとの義。

○ししえの薙刀

りも早し千里の騅。名馬の子には名馬あり、勇將の下に勇士有り。人より人の種つきず、無量無邊の人の中。斯かる主君かゝる郎等、一騎當千百萬騎の。敵にも勝たう、蛇にも勝たう、鬼にも加藤虎之助。千里に武勇を響かせり。

第二

琴の歌聲も頻迦の鳥の聲。越天樂の調べは、琴路に落つるかりがね。夜半樂の梅が香に、柳花宴も懷かし。引き鳴らし秘曲を盡くさせ給ひたる、御臺所の御爪音。所こそあれ追ッ手の櫓、下には都の早飛脚。惟任判官逆心にて、春長御父子御生害。敵當城を襲ひ大軍攻め近づく由、急を告ぐること櫛の齒を挽く如く、御留守の諸武士是を押さへんと上方表へ打ッて出で、鎧よ馬よとひしめく中、御臺所は櫓の上、蘭奢くゆらせ腰元二人に歌三味線。お手づからの琴の曲。「時も時折りも折り、今日しも琴を引くとは、ひよんな事や」とつぶやきける。うたふも舞ふも忽に、修羅の巷と立ちかはる。有爲生死の坂井越中の前司が妻。夫はきのふ都にて、君諸共に討ち死にと、菊に紅葉のしげ鐵物打ッたる鎧ひ。七間つゞきの草摺り長く、妹背の契り頼み有る、波に鴛鴦の佩ひ立ちし、寄りくる敵と一勝負。最期は爰ぞお城枕に髮枕解いてさばき髮。鉢まきもるゝ目元より、涙に洗ふ薄化粧。しゝえの薙刀振りかたげ、駒よせ近くぞ進みける。負けまじ物と打ち續く碁石頭に白黑の糸毛の鎧ひ。濱千鳥のすそかな物、花紫の上帶を、結ッて締めたる柳の腰は細くとも、心はふとき女武者。きのふまでは土方十郎が妻。けふより後家と成ッたれば、太刀の鞘さへ身にあはぬ、兵庫鎖の粢鍔、あ

○すんなりすなりと

○冥途の鳥　お供をして冥途へ行ッたとの意から續けた語。時鳥の異名。其縁で縅の色を卯の花と出した。

○にしき革　革を紫色に、文を白く染め出した物。「錦を着て故郷に歸る」との句に基いた。

しをながに結びさげ、細柄の薙刀かい込うで、すんなりすなりと歩み來る。同じくすゝどき武者振りは、是も夫菅のやは、君のお供の冥途の鳥。卯の花縅の腹卷きに、金作の陣刀。金絲銀絲とんばう結び。總角たかに着なしたる、袖印に地藏の梵字。此世にては勝ちいくさ。未來の案内、迷ふな迷はじ六道の、辻は縱横十文字の、鎗横たへて足もとも、今日の命もかろ〴〵と、會釋こぼれて出づる月、桂男も手に取らず、名ばかり餘所に森の蘭丸に許嫁、其人は早本來の故郷に歸る。にしき革の物の具。同じ毛の袖草摺り。冠りの板より芝打ちまで、金具に打ッたる忍ぶ草。忍び音もせぬ妻ごめの、野邊の薄とぬきみだる。長刀かたげ出でたるは、死出の嫁入と見えにけり。打ち連れ出づるは櫻木の源五が女房。夫の名にふ手向の花。小櫻縅の胴丸に、から綾くらみの弓籠手をさし、十王頭の脚當てを、閻魔の廳にあゆみ行く、道の知るべと出で立ッたり。其外御馬廻り諸籏本、道朋茶道にる至まで、討ち死にの人の妻女達、夫諸共妻諸共、誰か此世に殘るべき。是ぞ三途の川瀬ぞと、本丸の堀際に鎧ひの袖をつらねしは、物々しくも哀れなり。おの〳〵耳をそばだて、「なんと皆樣。此騷動に時ならぬ琴の調べ。そもいかなるたはけ者」と、櫓をきッと見あぐれば、御臺所の御遊興。これは〳〵とばかりにて、あきれ果てたる目に涙、「お連れ合ひさま若殿樣。一方ならぬお歎き。冥途のお供申せし夫のため、吊軍思ひ立つ、吾々が有り樣、不便とも思されず、賴もしからぬ嬉しうない。未練な御主と同じ城に籠もり、犬死にせんより門外に敵を待ち受け、思ひ〳〵に切り死にし、面々の夫に、御臺所の不心中、毀り咄しに死出の山路を慰まん。一寸も爰は動かじ」と、ゆりかけ〳〵

よろひづき、踏み揃へたる女中の足は柔らかに、心は岩より堅かりけり。海道筋に馬煙り。すはや敵ぞと待ちかくれば、然は無くして眞柴肥前の大領久吉、緋威の袖を汗にひたし、汗馬に息も吳れず八千餘騎、追ッ手先に大息つぎ、「女中の出で立ち神妙〳〵。我君不慮の大變にあたり給ふ段、聞くとひとしく蒙古の軍艘外海へ追ひ散らし、一時に馳せ參ずる所、敵はや勢多を越ゆると聞き、龍華越より先へ廻ッて只今參陣。御城に楯こもり、卽時に惟任が首を刎ね、亡君御父子の冥闇を照らし、鬱憤を散ぜん事一戰の內に有り、此旨御臺所へ言上あれ」と曰へば、女中各力を得、「吾々が連れ合ひも都にて討ち死に、涙ながらの弔ひ軍と、心ばかりの女わざ。殊に大將と賴む御臺樣は、天魔の見入れか、あれ彼の門櫓に御簾をかけ、きやらをたき琴三味線での御遊興。これへ敵を引き受け、揚げ屋で軍するやうでは勝負も氣遣ひ。エ、無念〳〵」と嚙がみをなせば、橫手を打ッて、「ヱ、扨は御臺所の爪音か。アヲアたのもし〳〵。天晴れ春長公の御臺所にてましますな。かほど根深く仕込んだる逆臣、女まじりの無人數にて、力軍叶ふまじとの御了簡、諸葛孔明か司馬仲達を欺むきし謀。天然孔明が心にかなひ給ふ、御臺所の琴の音は、百萬騎の軍兵にも優ッたり。此所において氣遣ひなし。某は後の山の手に、人數を伏せて待つべし。大手の門をくわッと開き、塵掃き拂ひ、寄せくる敵に聞の聲を合はするな。靜まり返ッて敵を十分におびき入れ、其時門をはたと打ッて。相圖の時をぞッと上げよ。某搦手より起こッてはさみたて、打つならば、惟任が髭首は久吉が腰に付けた物。必ず城中の勢の多少を積もらるな」と、つまり〳〵に下知をなし、山路に馬を早めらる。女中案に相違し、「琴

○つまりつまり隅隅。

○浮き世に早く秋風の　浮き世から飽きられての意。此時は未だ夏であるのに「秋風」の語を用ゐたのは「早く」の意を含めるためか？

を彈いて大敵を防ぐとは如何なる軍法。侮ッて油斷する敵の頰、琴の爪で掻きむしらふと云ふ事か。とうに知ッたら省爪を、のばさう物」とたはふれて、寄せ來る敵を今や〳〵と待ちかくる。浮き世に早く秋風の、小野のお通は只一人。春長御父子の御首を、小袖引き裂き引き包み、太刀に結ひ付け荷ひ持つ。重きが上に胎內の、忘れがたみの五月に、おなじ思ひも片荷づる、君がなさけの我親に、恨みも積もる雪ならで、涙に袖を拂へとや。志賀の山こえ末遠き、北近江路を遙々と、御城下に忍び着きけるが、御門の內には鎧ひ武者行き違ひ、籠城の支度しきりなり。「ヤ、よい時節。我も城にこもッて、爰で屍を曝らさんもの」と、ずッと通れば女中達、「ヤうさんな風俗。敵方の忍びか吟味せよ」と、各〳〵門に立ちふさがり「なのれ〳〵」と咎められ、頰かぶり取ッてのけ、「いやお氣遣ひな者で無し。若君城之介樣にみやづかへ申せし、小野のお通と申す者、思ひも寄らぬ俄事。あへないお腹めされし時、同じ道にと思ひしが、身にやどして五月の御子孫の扉を大事にかけ、あめ〳〵となが らへ、せめて此二つのお首のお供して、御最期の悲しさ御物語り申したく、百千の劍の中遁れ凌ぎ參りし事、御臺さまへ」とばかりにて、かッぱと臥して泣きゐたり。「偖は聞き及ぶお通殿。此時節吾々が、心得にても通されず、上の御意を待ち給へ」と、菅の屋の內室二つの御首異き抱き、我夫の首はいづくにと、思へば胸もせきのぼる、櫓の內には御臺所聲をばかりの御歎。涙は御簾の隙間より、漏りくる雨の如くなり。やゝ有ッてみすの卷きあげさせ、腫れたる目もと押しかくし、「聞き及ぶお通とは城之介が妾よな。大將も侍ひも、已矢取る身のならひ、變ずる運は力無し、御事が持參するからは、

首は三つの筈なるに、二つばかりは心得ず。但しは道にて落とせしか。今一つの首を見ぬ中は、城中へは叶はぬぞ。歸れ〳〵」と曰へば、「ア、お詞とも覺えず。お二人のお主樣ならで、何のよしみに誰が首をか」と、申しもあへぬに「いや〳〵〳〵。見せいで叶はぬ首が有る。二人の主君に腹切らせし、謀反人は重恩の家來、惟任判官光秀。そちは誰ぞ。主を殺せし八逆罪の惟任が娘よ。女なれ共敵の子は敵なり、城中へは思ひも寄らず、重ねて惟任が首ひッさげて來るならば、其時こそ我嫁、胎内の子は城之介が嫡子、春長公と自が惣領孫。さもなき間は敵の娘。武家に生まれてかほどの事、辨へぬ不覺の女。とく〳〵歸れ」と御氣色。甚だけしからず。お通悲しさ胸にしみ、「ゆかりの末まで御にくしみ御恨み。御尤もともお道理とも、申しあぐるも恐れながら、誠の親は遠江の國、松下嘉平次と申す者。惟任は假の養ひ親。露ほども恩愛の親しみ無く、離るればあかの他人、主殺しの大惡人。名を聞くもうるさいもの。親子とは穢らはしや。お情におそばへ召してたべ。只御慈悲」と手を合はせ、又さめ〴〵と泣きゐたり。「いや〳〵養ひにもせよ假にもせよ。親よ子よと名づけし、緣切ッたる印なき中は、敵の娘。紛ぎれなし。つれなしとばし思ふな。重恩の下人めに、夫と子とを殺されし恨み、思ひ流すに流されず。一味徒黨の内なりとも、御事が手にかけ討ッて來い。緣を切ッたる印とせん。義を知らぬ女。あれ去なせ〳〵」と、御捨て詞にが〳〵しく、御簾さッと下るゝを見て、女中達も聲々に、「御譏嫌そこねる去なッしやれ〳〵」と、いひ捨て〳〵皆城内に入りければ、お通一人が突き出し者。「エ、お氣づよい曲もない。惟任に恨みは御臺樣に劣らばこそ。二世かけて愛し可愛の城之介樣を殺されし恨みは、髮筋を一筋づゝ引きむしッても盡きせねど、我君をさへ殺す惟任め。女の手に叶はうか。腹なお子のお命に、さはりさへ有るまいなら、爰で死にたい。お通は爰で死にたい。親里は遠國たゞずみもない世の中に、子の愛しいばッかりに、命一つを捨てかねて、お首にさへ別るゝか。ま一度お首が拜みたい。お首を見せて給べなう」と、行きては返り歩みては、泣きしみつきて行く方も、泣く〳〵別れたつ雲に、とゞろき近づくせめ皷。寄せ手の大勢一面に充滿し、鯨波をどッとぞ上げたりける。城に時をも合はせず門押し開き洒掃し、櫓の玉垂れ高々と、色をこめたる琴の曲。大將を始め諸軍勢けでん顔。判官が甥武知駒之進進み出で、「少しもためらふ所で無し。寄せ手を迷はさんため、智略らしく甘えて見せるばかし事。つゞけや者共先陣は武知駒之進」と、乘り込む所を判官おさへて「いや〳〵。恐るゝには德有り、あなどるには損有り、乘りこんで不覺をとるな。是におり敷き敵の變をうかゝふべし。兵共必ず女の色にうかさるゝな。琴三味線にのするとも乘るまいぞ」と、旗立てさせて床几にかゝり、城を瞰んで扣へたり。御臺所は目もやり給はず。敵の心を蘆かせし、咸陽宮の琴の音を覺し召し出だされ、柱を律に立ちかへて、七尺の屏風を越えしからもゝ、落つる物。梅有るその花なゝつやつ、こゝのつといきんいと十、いとしさを、絲にそむるか。しらべに戀ひの色が出る。花紫と濃い紅の、色より深いは戀ひの色、業平男行平男。それより敵めは善い男、手をつくし品つくす、琴の秘曲によせ手の兵。大將始め氣を奪はれ、魂ぬかしうッかりひよん。岩木さへ引く手によりくる。心を今ぞつくし琴。エイソリヤ引かれて來れば名もた

ゝぬ。岡崎づきん羅綾の袂、ひかれて通へば名も立たね。笛には雄鹿、寄り來る雄鹿。うかれて踊れ、うかれて踊れ。うかれてをゞれば名も立たぬ。うかれうかされ、大將組兵そゝり立ち、馬もじやゝ〳〵ふむしゝをゞり、覺えず知らず城中に踊り入る所を、追手の門をはたとしめ、ゞッと作る相圖の時、搦め手に久吉八千餘騎。時を合はせおめいて出づれば度を失しなひ、にげは無ければうろたへて、爰にかゞみ彼處に走り、討たるゝ者こそ多かりけれ。武知やゝらにかけあがり、御臺所に打ちかくる切ッ先、琴をもッて受け給へば、まッ二つに切りわッたる琴に、仕込みし三尺二寸、取るよりはやく武知がまッかう梨割りに、切れも切れたり不動國行。げに道理とは是なりけり。味方の聲々「大將惟任めが見えぬぞ。さがせ〳〵」とひしめけば、いづくに我身を埋め水門。たすかりがたき石垣に、水ぬきのつぎ樋をはう〳〵くゞる殿、二たび母の胎内さがし、今生まれ出る心地にて、命のつぎめと這ひ出づる。櫓々に是を見て、「あれ水道から拔けるは」と呼ばはれば、扨こそと門のくわんの木開く音。なむ三寶と飛んで出で、堀の水底草の底。拔けつ隱れつ行く方知らず落ちてけり。久吉公はがみをなし、「たとへ翼を生じても胴ばかり飛ばゝ飛べ。惟任が首は我物。明日まで附けては置くまじ」と、軍兵を七手に分け、揉みにもうでぞ追ひ追はれ、近江路を一刻に、先爰までは粟津の原。木曾の昔も氣味わるく、逃げ足早くはしり井の、關山よりHは暮れて、山科の山寄せを、在所づたひの畠道、藪垣生き垣まがひ道、行きては跡へ〳〵と、小栗栖の里に行き迷ひ、さすがの惟任うッとりと、睫毛よはれし心地にて、忙然として立ちけるが、此邊は醍醐炭山、百性一揆とは物。花山の

○うごろもち「むぐらもち」の古言。

方へ落ちやうか。牛の尾の方へかゝると、思案もさぎつく目にちろつく、燈の光りはヤ庵室さうな。そろ〳〵と一睡し、足も息も休めんと、戸口に立ち寄り「卒爾ながら落人をさがす者、朋輩を出しぬきの拔けがけ、暫時の休息賴み入る」と案內す。九十ばかりのあるじ打ちゑはぶき、「易い事〳〵。翁もとは弓箭の身。いかで余所に見申さん。物閑なる奥の一間。あれへ〳〵」と他事なき詞。「御芳志千萬忝し。若し跡より尋ね來る者有るとも、必ず沙汰なし。罷り通る。御免あれ」と奥にいれば、洞床に香花をそなへ、「若君城の介春忠卿の御影、生けるがごとき新筆の、一軸を懸け置きたり。「ヤア是は扨。此人に腹きらせ、十日立つか立たぬに、繪像をかけしは只ならぬ由緒有る親父め。ふか〳〵と逗留し、盲鳥の網にかゝる如く、不覺の死をとげんか」と、思へばぞゝがみ盆の窪つかみ立て、「是御亭主。夜明けも近づく。お暇申す。御懇志過分。お禮は重ねて〳〵」と、出でんとすれば立ちふさがり、「身こそ老いたれ我ものゝふ。賴み入るとの詞にめで、翁が聞まで見せつるに、すげなく出でて歸るとて、歸さうか。但し翁がもてなしに、不足ばし有ッての事か」。「勿躰ないなんの不足。行く先あてなく何百里行かうも知れぬ身。是非お暇」と立ち出づれば、「いや歸さぬ」とはッたと睨や」と又奥にかけ入れば、繪像疑じて誠の姿春忠卿。怒のかんばせ恨みの息ざし。四つの眼光やいむ面も變はり、鬢髭の白雪とけてうば玉の、闇の錦のひたゝれは、主君右大臣春長公。「ヤおそろしかねの、爆きちるに異ならず、怨念恐怒の御聲あらく、「いかに忘れし。我重恩汝にあたへし國郡。今我ための修羅の巷。土は清劍山は鐵城。千町の田に取る早苗。數百町に耕す田子の、五穀雜穀、

汝にあたへし我めぐみ。いかに我身の怨敵、地獄の化鳥の餌飼ひとなんぬ。恩を知らざる畜生道の犬追ふ物。思ひしれ〳〵。見よや見よ」、恚りの眸、忿りのいきつき。はがみは車輪のきしるが如く、追ひ轟かし踏みとゞろく。「主從三世の縁も逆まく、まッさかさまに流るゝは、三途の川の亂杭さかも木。いせきと成ッて今爰にとゞめたり。おかけしざび矢の修羅の當の矢。受けて見よやッ」と忿りの御聲は、百千のはたゝがみ頭の上に落つるかと、五躰わなゝき皮肉にこたへ「ゆるさせ給へ赦し給へ」と、かッばとまろべば燈火と、共に消え行く庵室の、主君と見えしは畦の立ち木。數にこだまのつゝほりと、酔ひ覺めの如く立ちあがり。「ヱ、無念な。落人と成りたれば、狐共になぶらるゝ。おのれ夜の中に山畤を越え、本國に付き旗をあげ、久吉冠者めをまッ此如く、ぼッつめんは今の事」と、南をさして行く先より、數百の松明「落人探せ」と呼ばはる聲々。南無三寶と跡へ戻れば北山科の郷民、松明提灯走りちる。さッちへ落ちん細道一つの畔くづれ。まへは深田後はくらき高數垣。村々の松明藪の内を馳せちがひ、草をわかッて駈け廻り、ひッそぎ竹鎗し〻突き鎗、垣越のめッた突き。目鼻の先をぬんぬッと、藪から棒に仕込んだる牛箸鎗の鼠突き。あたまの上足の股、前後左右ずんずッと。よけん方なく身をひやす。百姓一揆は欲第一、「鎗先がかな物にからりとあたらばぐッと突け、具足を剝いで取る徳」と、口々にわめく聲。〻具足を着るも身の用心。脱いで命をのがれんと、上帶といて高紐ちぎり、袴ふみぬぐ左右の籠手取ッて捨て、じゆばん一重のづんぱう武者。畦道を四つ這ひに、身をちゞめ退く所、つッとのびたる竹鎗に、弓手の脇腹ずッぱと疲かれ、うんとの

○ごんぼう武者　臭劣武者。

る氣を押しこめ、聲を立てじとこたへたり。「こりや〳〵何やら突いたぞ手ごたへした」と又突き出す。素鎗の鑓首むづとつかんで立ちあがり、なんなく鎗をたぐり取る。「そりや人こそ」と爰かしこ。垣を乘り越し切りやぶり、四方に起ッて鎗ぶすま。「〻土百姓めら推參なり」と、はねつ拂ッつ手を盡くしてぞ防げども、大勢の亂れ突き、手も足もいはゞこそ、數ケ所の疵に眼もくらみ、ふか田にかッばと踏みこんだり。起きなほるもねば土の、泥ふかく踏みとめなく、脚も胴もたゞよひながら、「吾にも聞くらん、惟任判官光秀。百性の竹鎗に命を落とすは末代の恥辱。なさけに腹をきらせよ」と、呼ばはれども聞き分けず、「主殺しの見せしめ」と、上よりかかる千本鎗。下は惟任一本立ち。膝ぶしに泥をこぎ、突き合ひ打ち合ひ、土を投げ合ひ摑み合ひ、武士の最期の土軍。名を埋むべき印なり。斯くと聞くより眞柴久吉。勇んで打ッたる鞭あぶみ、「出かした〳〵百姓共。人間ならぬ畜生。太刀かたなには懸けられず」と、鎗の石突き追ッ取りのべ「主君の敵天下の仇。思ひ知れ」と胸板を、五つ六つ、泥中に息たえて、うき身をしづむ泥の海。天罰のほどぞ淺ましき。「からだは日の岡峠にて、逆磔にかくべし」と、熊手にかけてえいさらえい。えいさら永代末代に、大逆不忠の名を流し、久吉公は永き世に、忠孝の名武勇の名、七つの道四つの海、八島の外にはびこるも、天の誠を秤として、一世に開く武運の花。木の下影と天が下。皆此君にぞ靡きける。

第三

帆江の水上鰯をうかぶるも、楚に入ッて千尋の風波をあぐるとかや。眞柴肥前の大領久吉公、賤

の奴隷より起こツて、武功潮の涌くが如く、高名曦の昇るに等しく、亡君春長公の怨敵、惟任判官を討ちほろぼし、自然天下も掌にし、威風に靡く民草の、伏見の里の御在城、帝都を守護しましませば、諸大名の出仕、諸旗本の禁番、御小姓お側衆花をかざし紅葉を折り、御伽の人々も御前に詰めの茶の湯の宗匠。花の本の連歌師や、神祇釋教懇ひ無常。ふす山何かの御挨拶。かる口の名にし負ふ曾呂利が出でてお話しに、上松大夫がさしあふぎ、春日大夫が引きあふぎ。あふぎ〳〵にほん手に入る名將の、さながら虎に翅有る、御威勢こそ雄雄しけれ。出頭の奥小姓羽川算三郎、思ひ切ッたる顔色も、淺黄の上下白衣の出立ち。枝も葉色もあからみ枯れたる、一木の松御前にかきすゑ、「此鉢の木は常世の松の實植ゑ、杵頭の宮の神主獻上の名木。御秘藏あッて拙者に預け置かれし所、斯くの如く一夜の中に枯れ木と成る段不念の至り、不重寶千萬申し上ぐべき詞も無し。此上の御哀愍切腹願ひ奉る」と、首を下ぐれば、近衆外樣遠侍ひ「是は〳〵不吉の左右。すは算三お手討ち」と、各々眉をひそむれば、大領大きに笑はせ給ひ、「扨々小氣な若い者。松より大事は人の命。たとへば典藥共が、予が病氣を療治して、本腹無きとて切腹せば、奉公する醫者一人も有るまし。況や非常の草木。一夜に枯れ一時にしぼむは、預かり手の咎ならず。是式に腹切ッて、身が馬の先にて討ち死にせんずる命二つ持ッたるか。若氣〳〵、遠慮なく奉公せよ」と、寛仁大度の御詞。御傍去らずの咄しの曾呂利つッと出で「此松の枯るゝとはやれ〳〵愛でたし〳〵。小姓衆お覗。御祝儀に一首仕らん」と、はや御讖嫌に大高檀紙、九十九三の定家やう、さら〳〵〳〵書くと御前に指し上げて、「御秘藏の常

○若氣若氣　少年の血氣に揣ッて思慮が淺いとの義。

○大高檀紙　檀紙の一種。地は白く厚く、松の皮に似た皺が有り、備中から産する。御讖嫌に「合ふ」と掛けた。

○ちはやふる神代も…　此歌は「千早ふる神代も聞かぬ龍田川からくれなゐに水くゝるとは」の古歌をもじッた物。「から藏にして」は藏の中の米を堅しくしての義。

○けはけはし　目立つ。

世の松は枯れにけり」と讀みあぐれば、「扨ても詠みたり祝ふたり。曾呂利が口は輕けれど、四海を呑んでせばからぬ、大將軍の大腹中。萬々歳も一のみに、お愛でたや」とぞ壽きける。御讖嫌其だ麗しく、「曾呂利が名歌今に限らず。不淨を拂ふ妙文たり。褒美呉れん。坊主望め」と曰へば、「あたまのきり〳〵から爪先まで皆殿樣の御恩賞。外に望み何も無し。さりながら御意を背くは却ッて慮外。御祝儀の印まで、紙袋にたッた一杯お米拜領〳〵」。「扨欲の無い奴。疾く〳〵袋の用意せよ」。「有りがたし」と罷り立ち、「休息部屋に走り入り、かねて用意やしたりけん。五間に長さ十四間の、紙帳の四すみをお徒衆に持たせ、御前に畏る。大將を始めお伽の人々「是はいかに」と不審顏。「ハヽ大きうても紙袋は紙袋。是を二の丸のお米藏に打ちかぶせ、お約束の外は申さず。袋一杯一藏有りたけ。欲の無い曾呂利が拜領」と、一禮すればどよみをつくり、君も與に入り給ひ、「ついでに一首仕れ」。「あッ」とこたへて、「ちはやふる神代も聞かぬ紙袋、から藏にして米つめるとは」、「出かした〳〵。其の歌は立田の川。已ぼすッぱの皮なり」と、御戯れに伺候の諸武士、ざゝめき笑ひ賑ひけり。白書院の御奏者罷り出で、「遠州濱名の住人、松下嘉平次と申す浪人らしき男、直に言上の義候ふ由にて、御式臺まで參上。いかが挨拶致すべきや」と伺ひける。「ム、松下嘉平次。久吉が珍客。これへ通せ對面せん。當番の諸役人小姓共禮義亂すな。我も威儀を改めん」と簾中に入り給へば、石田、木多、吉良、石川、木むら、淺野、丹羽、片桐、國主城主きら星の如く列座有り、晴れがましくもけばけばし。昔の劍さび浪人。ひがむ心は上見ぬ鷲。尾羽

○屠羽打ちかれし　幕の縁語。見すぼらしい義。
○ちぎれ草鞋の土ながら掃き白洲をのッさのッさ　白洲の奇麗に掃除してある所へ土足でのさ〳〵上ッての義。
○出んす所　出ゴへき筈なるに。
○かッつくばひ「つくばひ」の意を誤めた語。

打ちかれも旅出立ち。ちぎれ草鞋の土足ぞッかと腰掛け、殿中びく〳〵大聲上げ。「ヤア草履摑みの兵吉め何處に有る。扶持をくれ召し使ひし主人、松下嘉平次が聲、よも忘れじ。よッく聞け。先年己に桶皮の胴丸求め來れど、手渡ししたる金子七兩よこ取りし、此嘉平次は春長公の御勘氣。世に無し者と見限ッて欠け落ちし、己は春長公へ奉公。眞柴肥前の大領なぞと、名乘るさへ胸わるきに、只今松下と聞くならば、門外へ迎ひにも出んす所、しやらくさい翠簾の中。眞柴ともいへ大領とも曰はばいへ、松下が爲には草履取りの兵吉奴○。罷り出て三拜しろ」と、土足をぐッと踏みのばし、御簾をにらんでわめく聲、滿座の諸侯耳を病ましめ額をさげ、谷めん詞も無かりしが、物に堪へぬ加藤虎の介「ヤア憚りなり松下。龍は泥水に蟄して一陽の至るを待つ。武士は逆運の時をかんがみて卑賤に屈す。以前は以前今は今。己れが家に暫らく御足を休められ、めくさり金の御用に立つ事冥加至極とかッつくばい、土にくい付き敬ふ筈。時節を知らぬうッけ者。雜言はくえらぼね、切りさげて呉れんず」と、そりを返して罵ッたり。松下から〳〵と笑ひ「ヤア釣りを盜む者は誅せられ、國を盜む者は侯となるとは兵吉めが事。惟任が無叛にて、春長公御父子御生害を幸ひに、若君春忠公の御利を身にやせし女。有るとも無しとも知らぬ顏。朝廷をかすめ高位高官にのぼり、權威を以て下を隨へ、おのれと武將に押しなり、天下を盜む兵吉の大盜人。それに隨ふ諂ひ侍ひ。弓取りの道は吸ふても見まい。罷りしされ」とねめつくる。「さ、諂ひ者の切ッ先、さび浪人のはぼね、立つか立たぬか受けて見るか」とひしめく所、御出でなりと呼

○糠味噌汁の花梅華皮「梅華皮」は刀の鞘を包んだ鮫皮の皮。糠味噌汁との關係は
○柄糸切れて漣や　柄に結んだ組み糸が綻びて漣の打ッて居るやう爲ッて居るとの義。
○すねはだかりし　我意を張ッて突ッ立ッて居たの義。「はだかり」は「立ちはだかり」の「はだかり」。
○わんぱう　奴の衣服。

ばはる聲、さしもに勇む虎之介、列座はッと頭を下げ、一度に「しい」と平伏す。御簾かかぐる御座の間を、見あぐればこはいかに、大將の御有り樣、烏帽子ひたたれいつの間に、紺のだい無し角に吉の字一つ紋。裃三のづまて二合半。しながらの草履取り、伺候の歷々興さめ顏。すねはたばりし松下も、はッと明いたる臆ぼね、くひ違ひてぞ見えにける。やゝあッて大將。上段を下りさせ給ひ、「床しう候ふ松下殿。天が下に肩を並ぶる者なき久吉が、貴殿とは今以主從の名を削らぬ故、いにしへの姿に成ッての對面。耻づる所更に無し。金子を取り逃げ欠け落ちとの憎しみ尤もながら、大功は細瑾を顧みず。久吉大運いたらずば、金子は愚かたとへ塵芥一筋も、天道盜ませ置くべきか。御宿所へ馬を馳せ古への恩を謝し、日影の御身を引き立て申すべき所、つきつめたる心せばき氣質を能く存じ、時節を伺ひ延引す。しかるに久吉野心をはさみ、天下を盜み取ッたりとの惡口恐ろし〳〵。氏神の御罰を受け、弓箭の冥加に盡きん。天下に於いて望み無し。主君の敵惟任めを、一時に討つは討ッたれども、御男子にも女子にも、守り立つべき御子無く、大內の守護天下の政事、久吉かりに關白。國家兵馬の權を取り、諸將の上に座するも私ならず。天運のしからしむる所。只恨めしきは世の變化。數年心を六十余州に配り、鎧かぶとを脫ぐ間なく、股は馬上にすれ爛れ、骨身をくだく數か度の軍戰そも誰が爲。天下一統主君の御代、御子孫萬歲と勵みし事も一夜の夢。拙なき御運は詮方なし。此わんぱうは兵吉に、貴殿よりの御しきせ、箱に納め月々の、朔日毎に頂戴す。此脇指も其時の切り米にて拵へ、是も古主

の賜、我家の髭切膝丸、友切丸とも身を放さず。かほど主君を慕ふ身が、亡君の御代を奪ふべきか。武勇にも智謀にも、叶はぬ物は人界の、世の盛衰」とばかりにて、勇氣冴えたる両眼に、落つる涙は白玉を、亂し散らせる如くなり。松下のだけ高に成り、「春長公の御代を繼がせん、御子孫無しとは嘘つきめ。正しく若君春忠公の、御種を懐姙したる女有り。尋ねもとめ平産なさしめ、御家督にはなせ立てぬぞ」。「ヽ、懐姙の女とは、惟任が養子わどのゝ實子。小野のお通よな。それにこそ某さま〴〵心を盡くせども、みだい所御憤り深く、胎内の子は孫なれども、宿せし母は敵の養子、世繼ぎにせん事思ひもよらず。若し逆臣一味の餘類にても、お通が手にかけ首取ッて來らば、敵の縁の切れる印。平産の子を世繼ぎに定むべしとの仰せ。力及ばず」と曰ひも切らせず、「ムウ聞こえたり。敵惟任に組みせし無叛の張本一人有り。お通にかれを討たすべきが、胎内の御子をしかと御世に立つべきな」。「ヽヽ念に及ばず。亡君尊靈も照覽あれ。御男子ならば勿論、女子ならば貴族の御方むこに取り、家督に立て申さんが、お通の有りか御存じか」。「エ、誓言過分〴〵」。此上に何あらん。お通は則ち我方に忍ばせ置く。惟任一味の敵の首、提げさせて送るべし。よし涙人の花咲かぬ、身は朽ち木ともならばなれ、娘に御不便頼み入る。兵吉殿いにしへの、よしみ〴〵」と涙ぐむ。大領御手を打ッて、「何お通は貴宅にとや。珍重〴〵」。胎内に主君ましまします。誰れとも曰はず某直に御迎ひに參り、敵の首をも彼地にて請け取り申さん。久吉が癖斯様の事には、炊水をすゝッても手延びに爲したる試し無し。只今すぐに發足せん。留守は石田本多木村大野評定にて、政務は四奉行さたすべし。松下

殿いざ御立ち」と白洲に飛びおり、書院のからなし追ひ取ッて、一振り振り出す手の内に、握り治むる六十餘州。下馬さき供さき玄關前、踵踏んづけ、「ない〴〵〴〵」。旦那お立ち」と直さるゝ、加藤虎之助御袖を扣へ、「禁裏仙洞供奉の外、松下づれがお供とは慮外千萬。お馬ひけお輿參れ」とひしめけば、「何さ〴〵」。主人の供は家來の役。身が供は又汝等せい。旦那いざお立ちなされて然るべう、ごわりますでごわりまする」とつくばへば、彼奴もさる者草鞋ぬぎ捨て、「兵吉草履」。「ない〴〵〴〵」。旦那一僕一僕は、跡につれたる百萬騎。だい笠おッ立てろ。弓鎗引き大鳥毛、是天下取り草履取り。手をふる腰ふる鈴鹿山。こゝて行く方も遠江、濱名の郷へと行く水に、ぎんぎさんけ六根罪障、おしめに八大金剛童子。一にらいはい南無歸命。富士は淺間大菩薩。さッと一杓二しやく三杓みしめ繩、引く間の池の池水に、曉ごとに祈願の聲、夫の松下嘉平次殿、七難即滅武運長久。娘お通男子誕生安穩と、垢離の數さへ百八度。ゆたかに氷柱朝あらし。身に染み〴〵と念誦有る。娘のお通着物かたげ聲高く、「申し〴〵母樣申し。火にあたッてさへ身も凍る、ゆかた一重で池水をうとましや〴〵。湯垢離も心は同じ事。それでお身も續かうか。お小袖召して最うお歸り」と立ちよれば、「いや〴〵是が神の御奉公。まあ〴〵下女の竹でも來しやらいで。おなかにやゝを宿しては、寐起き立ちゐが猶大事。此引く間が池水には、朝日の出るたび毎に駿河の富士の影映る。立身出世を望む者、七日が間池水に垢離を取り、一心に願ひを懸くれば、富士千丈に同じく、諸願成就と昔よりの云ひ傳へ。其方は初の子大事の孫。安々と男子平産し、天下の世繼ぎになし給へと、七日の大願

○天下取り、草履取り　共に同聲の文飾。
○鈴鹿山　所謂鈴鹿の關の在ッた所。「鈴」の縁語」なる」から續けた文飾。
○さんざさんけ「さんげさんげ」の訛りか？
○おしめ　○みしめ繩「み」は敬語。しめなは。「三杓」と同聲の文飾。下の「引く間の池」に「引く」を掛けた。
○染み染みと　充分心を傾けて。此語に「染み渡る」義を言ひ掛けた。

今日六日、嘉平次殿も其爲の伏見上り。眞柴肥前の大領といふては日本の大老。直の訴訟は大切の事なれど、さすが昔のよしみ、むごう辛うもよも云ふまじ。願成就は疑ひ無い。そなたも信心召されや」と、語ればかたじけ涙ぐみ、「ほんに道をいはゞ今頃は、輿車にも載せます筈。我身ばかりか胎内のお子までお世話にかけ、難行荒行の大願。結句冥加恐ろしい。煩ふて下さんすな。ム、此手の冷える事わいの」と、母の両手を懐に、締むる肌は薄けれど、心だてこそ眞綿なれ。「あれ〳〵朝日の光り。追ッ付け此池水に、富士山もお映りなさるべし。共に拜まん此方へ」と、親子立ち寄り水の面。「幾重の峰を隔て來て、映るや富士の面影は、誰が鉋もて削りなしたる姿の山。代々の歌人の眺めの種。『形は鹽尻のやうになん』と傳へしも、水に映れば逆さまに、開き扇を見るやうに、めでたし〳〵末ひろがり。願成就の驗ぞ」と、伏し拜み〳〵、次第に昇る日影につれ、山の姿も傾けば、「又明日こそ」と手を引いて打ちつれ住み處に立ち歸る。下女は待ち兼ね走り出で、「なうお歸りか。御太義さまや御寒かろ。奥の火爐に火も入れて置く。太股までぬッと踏みこんで、何處も彼もおあたり爲されませ。御茶も只今入ればな」と、心を汲んで取りさばく。譜代が名さへ竹なれば、氣立ても直に正直に、何に心を奥までも、伴なひてこそ入りにけれ。妻子に運ぶ足早く、夜を日についで松下嘉平次、本國に立ち歸る。久吉の供廻り、宿々に宿らせ、我家の門に驛馬乘り捨て、「兵吉も嘸くたびれ。すぐに奥へと申さんが、先づ妻子下女などにも、和殿が心底言ひ聞かせ、挨拶不都合無きやうに、首尾調へて逢せ申さん。暫らく是に」といひ捨てて、内に入りければ、久吉内外見廻して、「爰ぞ我明け

○來しやらいで　來させも爲ず。
○やや　京阪の方言。赤子の義。
○道をいはば　順道よ行けば。
○末ひろがり　扇の古言。蓮が末に行ッて開くとの義。
○何に心を奥までも…　日頃から正直で、何一つ心を置いて心配する事は無い處から奥の間へも一緒に連れて入ッたとの義。

暮れに、箒にかけつ水打ちし、春やむかしの庭の面。梅も柳も立ちのびて、見紛がふばかり變はれども、變はらぬ物は中の間の、あひの襖の松に鶴。我友鶴と懐かしく、たゝずみ見入り在します。奥より竹が聲高く、「名染み男どりや何處に。生きた死んだの訪ひ音づれもする事か。逢たら恨みの有りたけ」と走り出で、久吉公にすがり付き、「爰な性わる情知らず。世にうき不祥がムらうが、主に恨みかムらうが、わしが色香に引かれても、欠け落ちは爲やらぬ筈。有りし契りを忘れてか。朝夕の喰ひ物萬事、杓子の先での心づかひ。いはずと腹に覺えがあろ。そなたに別れて此かたは、一度も男に肌ふれず、わしが情を忘れずば、部屋へムれ寢て語ろ。息がはづむ」と引き立つる。百萬騎の強敵に、後を見せぬ久吉公、お竹一人に逃げじたく。もてあぐみてぞ見えにける。松下の内室奥より立ち出で、小腰をかゞめ「珍らしや〳〵。お名もかはると聞くけれど、申し馴れたる兵吉殿。むかしの筋目あればこそ。今は天下一人のお大名。此方は日影の浪人。殊に娘お通が出世も取り持ち有る筈とや。頼もしや忝なや。後を知らぬ凡夫の悲しさ、ごくに立たずの野良猿の、猿め〳〵と異名付け、しかり廻し責めつかひ、杖棒あてし事までも、思へば昔が耻づかしい。サア先づ是へお通り。これへ〳〵」と請ずれば、「いや〳〵〳〵是は迷惑。爰が兵吉いにしへの居所」。「ハテそれは此方も迷惑。慮外ながら」と手を取れば、竹が見付けてひんとする、目元にぞッと身ぶるひの、小猫のそばゆる如くにて、疊にいざりつき玉ふ。松下袴かた衣着し出向かひ、「これ〳〵兵吉。久々にて遠路の供、草臥といひ心遣ひ祝着申す。某が寸志ばかりと、少の音物披見せよ」と、懐中の一通立ちはだかッて差

○ごくに立たずの野良猿　厄に立たぬ惰け者との義。「猿」は兵吉の顔が猿に似た處から呼び做したもの。
○そばゆる　戯れる。じやれる。

し出だせば、謹んで受け取り、「御芳志とは先づ拜見」と押し開き、「奉公人請け狀の事。一此兵吉と申す者、生國尾張中村郡、筑阿彌せがれに紛ぎれ御坐無く候ふ。此度御緣を以て、兵吉一生が間不通に差し上げ、草履取り奉公相勤めさせ、身の代として金二歩五百文、慥に受け取り申す所實正也」、殘りは世間たいほうの文言。「あて名は松下嘉平次殿。親判請判拙者が判。まがふ所候はず」と、ずん〳〵に引き裂き捨て、「此請け狀を給はるほ、士從の名を削らん爲な」。「仰せの通り請け狀有る限り我らが家來。返進申せば主從の名は消え、今より高冨久吉公。天下の大老恐れ有り、はあ」と夫婦飛びしさりひれ伏し、敬ひ奉れば、「ゆるす〳〵。手をあげい」と、上坐にぞッかと座し給ふ。武德は藪に咲く梅の、闇にもそれと知られけり。忽ち始めの詞を引きかへ、「いかに嘉平次。我かろ〳〵しく、はる〳〵是へ下る事、惟任一味の首討ッて、渡さんとの契約ゆゑ。敵追討出陣同前。又お通胎内に宿り給ふ、主君の御子御供せんため。此外に用事無し。彼の怨敵とく〳〵お通が手にかけさせよ。落着次第お通をいざなひ、片時も歸洛を急がんず。忘れはせじ」と曰へば、「何條失念候ふべき。爰は見ぐるし奥の間に御座を移され、先づ暫らく御休息。御供いたせ女共」と、女房が案内にて、一間に移し奉り、「松下が一世の譽まれ。御馳走は飽き足らず。ヤイ竹。昔の兵吉あしらひならぬ〳〵。おのれは岡崎の町へ走り、ずんとよい酒あたらしい鯛、鮹なぞ見合はせて買ッて來い。あたひにかまふな〳〵」と、錢投げ出だせば「あい〳〵〳〵」。手樽も足もいそ〳〵と、草履も横にすうわりの、腰をよちらし出でて行く。　內より門の戸はたとしめ。「浪人の身はさびだれど、武藝に心は磨き置く。小筒の鐵炮取り出だし、玉目に過ぎたる胴ぐすり、口藥もつぎかへて、「お通〳〵」と呼びければ、「あッ」といらへて部屋の口、「ヤア、父樣つきもしほも無い。鐵炮何になさるるぞ」。「ヤレ聲高い〳〵。爰へ〳〵」と小隅に招き、母にはくはしくいひつれども、御事に未だ語らず。我々親子が命の大事どッくと聞きや。重々にくいは兵吉め。誕生の御子を御世繼きとぬッぺりとはぬかせども、いかなおのれ天下に望み有るゆゑ、惟任一味の首打ッて渡せなんど、無體をいひ掛けすかし寄せ殺害し、春長公の御子孫を絕やさん所存。此嘉平次が年の功、そこを見付けし請狀破り、肌ゆるさせ打ち殺し、美濃尾張には前君の御恩深く、久吉を嫉む大名多し、かけこんで賴まば御子孫さかえ、御身は天下の御母公。此松下も世に出でんとは思へども、討つとも組むとも我らなどが手に立つ兵吉ならず。ますに手なし。某は座敷に出であしらふ所を、御事は此襖ごしに、あの墨繪の鶴の頭をめあてにうて。ひるむ所を一えぐり、しめ鳥さすより易い事。心得たるか」とささやけば、「ヤア」とばかり父の顏。見上げて涙ぐみけるが、「うたてい事いふて下さんする。兵吉殿を殺せとは僞り。ふすまごしから私に鐵砲打たせ、それにあたッて御前が死なうと云ふ事。母樣への物語り、ちらりと耳へ入りしかど、よもや然うはと思ひしに、勿體ない恐ろしい。定めて尤も至極な、つきッた義理が有りこそせめ。孝行こそ盡くさずとも、鐵砲で親を打つとは、聞くも悲しい身がちぢむ。云ひ出しても下さんすな」と、そぞろふるひの顏ばせに、父もはッと驚きしが、「ヤレ大事の娘に不孝の罪、親が巧んで作らす物か。皆御事が聞きそこなひ。兵吉殺すに僞り無い。それが怖いか武士の娘とも覺えぬ。其腹から

○うたてい事　ひどい事。「うたてい」は「うたてし」の轉。
○つきッた義理　差し迫って引くに引かれぬ義理合ひ。

生まるる子も、大將には成るまい」と、恥ぢしむれば泣き出だし、「ァレ未だ曰はしやんす。元おまへは惟任判官にたらされ、謀反徒黨の連判なされたげな。それを幸ひに私に殺され、身に持ッたやや樣を、御世繼ぎに立てん爲、兵吉殿を同道したと、戻り〳〵の母樣への物語り。此耳へ入りしは神佛のひか〳〵綱。武家の因果は主命にて、親子わかれ合戰する、それも男子の上の事。女子の際にそもやそも。敵の一味なればとて、親を手にかけ殺すとは、武家にも公家にも有る事か。私親子にお命を、下さるる御恩德。あだをろそかには思はねども、是ばかりはお氣に背き、あッとは得申すまい。いかなる高名譽まれとなり、天上の榮花もわしや嫌々。死して下され父樣」と、しぼる涙の片袖に、聲を押さへて泣き口說く、襖戶あけて母立ち出で、「なう聲高い。御前へつつぬけ。今橫になッてお休みや。御目が覺める物しづかに」と、いへども下されず、親殺しにしたいか」と、恨み歎けば、「偖はそなたも聞いてか。さま〴〵にいふても子孫の爲に討ち死にし、命を捨つるは武士の役。おぬしまでが未練なと叱らるゝ、親も道理そもじも愛し。夢に見てさへ一富士の、直に拜みて願ひ事。身に應ぜぬ御罰か」と、親子がすがり泣くを見て、涙こらゆる松下が、しば〳〵目こそ哀れなれ。歎きにお通が臨月の血を狂はせ、產の氣ついて苦しめば、母は慌てうろたへ、「嘉平次殿今生まるゝ。なう腰抱いて婆呼うで。折りふし內に下女もなく、誰れかは味噌も素浪人。手もふる屛風引きかこひ、漸う助け入りにけり。義理と產とに親と子が、生きる瀨か死ぬる瀨の、せきわく方も涙の中、天の岩戶を押し開く、人の面も赤子の初聲。平產かろき屠衣も、心ばかりの綾錦。產衣に引き包み、「是嘉平次殿。お通わこの子誕生。城の介春忠公の、若君に紛ぎれ無し。愛でたうあなた〳〵渡しません」と立ち出づれば、「いや暫らく」と押しとゞめ、涙をうかめ「ェ、いたはしや。母方の惡緣にて、もし春忠公の若君に立たねば、匹夫の丁稚同前、是たかきも賤しきも、弓取りは一言に名をあげ、一言に命を果たすが武士の格。むかしの兵吉と思ふか。御供の人馬は二宿二宿にみち〳〵、六十餘州の大老高富久吉公。千里の馬の尾にとまれば、蠅も千里を行くとかや。故主といふ緣を以て、數ならぬ身も日本に知られたる松下。惟任が一味の張本おお通に討たせよ。ォ、討たせんと、契約せしは伏見の城の千疊敷、諸大名の眞中。今更此詞を引き替へ、きッ斯くの次第にて、娘も得うたず親も死なず、若君ばかり御世に立て給はれと、いかなる面をかぶッてか、面出しては曰ふべきぞ。サァ〳〵お通。大事の若君て、なし子同前に埋もらすは、口惜しと思はぬか。親と思へば切り憎い。直に惟任判官と思ひ、ちよッと刀をあてるまで。跡は自害苦はかけまい」と、するりと抜いて投げ出だせば、「ならあんまりな嘉平次殿。あら血の上に氣をもませ、目でもまふたら何とせう。是は母があづかッた」と、刀を取れば引ッたくり、「母を學ぶ娘の子。其心でそだてし物、道理〳〵。ォお通。助けて親の恥ぢさらすか。殺して親の名を上ぐるか。二つ一つ」とあら聲に、屛風押しやり、「ァ、申し殺しましよ〳〵。機轉なほして下さんせ。さながら刀は宛ら士の娘。嘉平次が子、つひに鐵炮手に取ッて打たずとも、打ちやうは常に見る通り、父が此胸板を目れぬ。その……其の鐵炮で」とばかりにて、又ひれ伏して泣きゐたる。「ォ、出かした。あッぱれ武

○たらされ　欺かれて。
○女子の際に　女の分際で。
○つつぬけ　手に取るやうに聞こえること。
○しばしば目　默きを包んでしばたたく目付き。
○素浪人　浪人を卑しんでいふ語。味噌を「醫らう」と掛けた。

當てにねらひはづすな。見當が一分ちがふ。急くな〳〵」と火繩はさんであてがへば、母はかきくれ泣きしづみ、目もあてやらず身をひやす。父はしさッて胸押しくつろげ、的に成ッてさし向かふ。揚由が矢に啼く猿も、親子の思ひ焦がるゝ火繩。冥途の櫃と切ッたる火ぶた、心迷ひに手も狂ひ、すわらぬ臂を引きしめ〳〵、ねらふ振りにて鐵炮逆手に取りなほし、筒先を我胸に押しあてゝ、引き鐵にぐうと響く大薬。打ちぬくお通があばらに玉を受けとめて、うんとふすぼる餘煙の、煙はあたりにみち〳〵たり。父母是はとばかりにて、助け起こし抱きかゝへ、前後不覺に泣きさけぶ。穐けやぶり久吉公、立ち出で給へば嘉平次驚き、「ヤア、面目なき御目見え」と、刀追ッ取り既に自害と見えけるを、「ヤイ〳〵娘に犬死にさするか」と駈け寄ッて、刀はッたと蹴落とし、「最前より親子の詞、一ゝに聞き分けたり。さすが久吉が放主ほど有り神妙さよ」と、若君を抱き上げ、「天を以て眼とし、地を以て體とし、國民を以し心とし給へ。久吉もり立て後見し、十五歳の春過ぎて秋津洲の大將と仰ぎ奉らん。安堵せよ」と曰へば、各あッと首をさげ、歡きの中の悦び泣き。今はのお通目を開き、「ヲゝ有りがたい事聞きまする。父にかはり數ならぬ、命一つ捨てずば、さもしきおなかに宿せし子。そもや殿樣のお膝の上に抱かれうか。えんせうの火に憐き燻ぼりし、鉛の玉骨に通り、五臟六腑を燒きこがす。今の苦しさは地獄の責めにも劣るまじ。さりながら父樣母樣。悲しんで下さんすな。若君は天下の世繼ぎ。父母はぢい君ばゝ君。此悦ひを思へば、鉄炮の玉では無く、如意寶珠の寶の玉に、命を代へし嬉しさよ。只口惜しきは父上の、謀反徒黨の連判、末世に殘る是一つ」と、

○如意寶珠　楞嚴經にある靈妙な玉。佛說でいふ。

わッと泣いたる血の涙。「此外浮き世に願ひも無く苦しみも無い。ヲゝ私や果報な者ぢや」と、苦痛を包みにこ〳〵と、と笑ひをつくる目も濃みて、舌もこはばるせぐり息。父母正體泣き叫び、鬼神をあざむく御大將、不便の涙言語を絶え、「男になさで殘念や」と、御慈歡こそ哀れなれ。「これ〳〵お通。嘉平次が命にかはり、鐵炮腹切りし上は、手にかけ嘉平次を討ッたる同然。滿判の廻文關所の後。御臺所の御手に有り、委細言上し名判を破り、徒黨の人の名をのぞけば、親があやまり御免の印明きらかなり。未來にて春忠公へ快く、御目見え申し上げよ」と曰へば、夫婦疊に喰い付いて、かたじけ涙千萬行。お通は見上げ手を合はせ、「其お詞が引導にて、もはや佛に成りしもの、父上母上必ず歡いて下さんすな。未來にて春忠樣へ、お物語り申すため、若君樣の顏ばせが、今一目見たけれど、もう目が見えぬ父樣さらば、母樣さらば、若君樣さらばや。南無」とばかりを引く息に、廿ばかりの富士の雪、消えて果敢なく成りにけり。大將二人に力を付け、「歡きは一家の歡きにて、若君の御出世は、一天四海の悦びぞ。富士權現をいのりしとや。扨こそ世界に秀でたる、果報は汝ら一家に有り。道中筋は大名おほく、御乳めのとは心のまゝ。すぐに若君御供して、早歸洛との御催し、開き渡したる濱名の橋、とゞろ〳〵と御供人。門前門内群聚して、いなゝく御馬召しの駒。樣からすぐに若君を、抱き召したる金履輪りん轡の音。一陽の御小姓櫻が步む梅が行く。花の行列手をそろへ、降れさ〳〵、降れ〳〵雪の振り袖や。富士權現の御利生の、「山も武略も三國無双。此世へ生まれ來る果報ゝ娑婆を放れて行く樂しみ。目前生死二つの道、是は一筋東海道。とう〳〵馬次ぎ舟渡し、自由

●第四

（一）じてうが袖
○三つの濱　地名。「見つ」と掛けた。
○難波の名　同聲の文飾。
○氣に大坂　氣に「逢ふ」と掛けた。
○高津　地名。「來う」と掛けた。
○高き屋に…　仁德天皇御製「高き屋に昇りて見れば烟り立つ民の竈も賑ひにけり」から來た句。高津の「高」の緣。
○蘭麝　蘭花と麝香との香。

自在も君が德。千歳を讓る松の葉の、言の葉の德弓矢の德。とくと德との諸羽がひ、唐高麗も羽がいの下、三千年に搏ッて飛ぶ。末代の大鵬此君と、古今に翅をのこしけり。

第四　大將住吉詣で

萬代のためしにぞ引く梓弓、八島の外も治まりて、民ゆたかなる御世とかや。是は高富朝臣久吉なり。我此度異國追討の出陣、神功皇后三韓退治の古例を引き、明神の擁護を祈らんため、住吉四所の宮詣でと志し、伏見の霜に置き別れ、くらのしほ手も風あふり、馬上眞紅の房手綱。朝日を載せてさしかくる。長柄の笠も埋もれて、じてうが袖と一樣に、野山も今朝の白栳や。降りくる雪を打ち拂ひ〳〵、馬に歩みを任せらる。跡に見置いて三つの濱。難波の名のみ代々を經て、當世の氣に大坂と、呼び續けたる町々を、今も高津の高き屋に、のぼりて見ればけぶり立つ、蘭麝の薫りよこをれて、しすゐを流す堀江川、治まれる世の風俗を、引くや手ぐりの釣りの糸。荒布で鯛を釣り、釣ッた夷の大殿を、今宮の森打ち過ぎて、木津や難波の海面に、立つ波を見て綱引きすと、あごと稱ふる網船の、浮いつ沈みつ沈みつ浮いつ、打ちながめ行けば河内なる、生駒ヶ嶽なれや。心いさみの諸あぶみ。いや急げども、末はるばるの旅衣。こつましんけの綿ぐるま。賤が欠を繰りまぜて、里の名を織る木綿機。糸に縒る麻や綜る梭の、しッていちやう〳〵。からりころり唐衣。我も昔は木綿物。着つつ馴れにし緣あれば、今日の錦の旅をしぞ思ふと、たはふれながら行く道の、跡は飛田に立つけぶり。夢か現か亡き人の、印の石に降る雪も、消えて二度あはぬなる、心細道わけ行くや。先には誰れ

○よこをれて　横に折れて靡いての義。
○今宮の森　地名。今「見」と掛けた。
○網引き　網を引いて魚を捕らへること。
○しッていちやう　機を織る體の形容。
○からころり　機を織る時の梭の音の形容。「唐衣」と同聲の文飾。
○心細道　心細くも細道をの義。
○しんしんと　湯の煮え立つ音の形容。

な松原の、森の下枝にすッくりと、嘴と足とは黑くして、身の色こぼす白鷺の、雪に風情を奪はれてかれ〳〵〳〵眠りゐる。のぼる日影に空晴れて、梢に響く沖の風。駒もいばへて足早く、遠里小野や阿部野の原。住吉近く鳴る尾ざき。淡路は海を隔つれど、松の葉ごしに武庫の浦。きてこそ見つれかぶと山。北に向かへば西の宮。山川海岸村里の、名は色々に變はれども、天地の内は押しまろめ、皆久吉がつぼの内、我せんざいの詠ぞと、詞も千代の姫小松。陰に休らひ給ひける。見れば並木の松が根に、風情をつくす茶の設け。自在の竹に節こめて、鑵子の滾りしん〳〵と、炭吹きおこす松の風。あたりは春の心地して、茶杓に積もる雪も無し。かねて定め置かれたる、御本陣堺の住人、小西如清能り出で謹しんで、「藥商賣を營み、住み荒らしたる町人の荒家。御本陣に仰せ付けらる事。生前の冥加末代の面目。御迎ひのため伺公仕る。隨ッて雪中の御なぐさめ。此所に於いて澁茶一服獻上と志し、千の利休が手前を賴み、是まで召し具し候ふ」と、御膝付きを奉れば、「風流の茶の湯滿足せり。飲まうずるは」と座し給へば、「はッ」と譽まれも名にし負ふ、利休は威儀を改めて、やがて御茶を立てにける。「ヤア如清。汝に一人の男子有りしが、さこそ成人しつらんな。召し連れざるか」と有りければ、「御諚の如く十八歳に罷り成り、元服いたさせ彌十郎と名を改め、某が老後の便り、杖柱とも存ぜし所、生藥の商賣を嫌ひ、おのれが力強きを賴み、人を蜆とも蠅虫とも存外の放埒、止むまじき心體を見極わめ、親子の緣切り勘當いたし、いづくに有るも見ず知らず。さりながら、今では一向世話も無く、正眞の樂坊主と」ぞ申しける。「いや〳〵然うで無い。さぼどの功の者ならば

惜しい事。侍ひにして召し遣ひたし。ヤィ如清勘當ゆるせ〳〵。親より子のよい芋ほり坊主」と、笑ひて與に入り給ふ。御詞のすきを窺ひ、利休御茶を奉れば、御機嫌ます〳〵飲みほし給ひ、「茶と申し手前といひ、過分〳〵。此茶碗は高麗のこもがいな。ヤッ面白し〳〵。久吉が出陣高麗を手に取り、一飲みに飲んだるは。軍の勝利疑ひ無し。傳へ聞く蘇子瞻、雨によッて喜雨亭を作りし例し有り、此所に茶店をしつらひ、殿下茶屋と名付け、往來の旅人に一腹の茶を與へ、今日の悦びを末代諸人に、あやからせよ」と御詫有り、今末の代に至るまで、流れを汲んで在名まで、殿下茶屋と名乘る事、此悦びに因るとかや。松の葉でしにえいさッさ、波を押し切り早船の、陸地まぢかく漕ぎ寄せて、加藤虎之介正清は、堤ごしに息を切り、御前に畏まり「御先手軍勢の手わけ、舟用意悪く相調ひ、御出陣の刻限を、御うかがひ」と延べければ、「オ、早速の働き手柄〳〵。就いては三韓の地理帝都の繪圖を持ッたる者、堺の町人に有りと聞く。尋ね出だせ」と曰へば、小西如清承り、「御尋ねまでも侯はず、島谷道可と申す者、商賣の爲彼地へ渡海し、三韓の繪圖所持仕ッて侯ひしが、去んぬる頃病死いたし、一人の娘老母の養育心にまかせず、領城奉公に身を賣ッて、則ちもりの色里に、小磯と申し侯ふ由。彼れに便ッて詮義いたし、繪圖を取ッて歸るべし。繪圖正清是より彼色里に立ちこえ、領城を買ひ望みに任せ恩賞をあたへ、繪圖だに我手に入らば、時をうつさず出陣せん。先手の軍兵悉く、兼ねて沙汰し置く如く、肥前の國まではや出船」と曰へば、正清仰せを蒙りて、本の渚に立ち歸り、相圖の大鼓打ち立つる。待ち設けたる

數千の兵船すは相圖よとひしめいて、觜螺吹きぬき舟印、兵具ひッしと飾り立て、順風に帆を引き上げ〳〵、取り楫かも楫波をわけ、ようそろ揃ひし帆は弓なりに、三羽の征矢を射る如く沖を遥に乘り出だす。大將御機嫌斜ならず、猶神明のみてくらに、船路の擁護を祈らんと、和光の光り住吉のみやゐに詣で、もみの布團にひとり寢は嫌よ。君と野原の草枕。千代を一夜に百夜さも、語り明かしつ寢あかして、あかぬ色の道し有る、爰も情の名にし負ふ、里はちもりに幾萬人、ひぞり大盡粹な客。夜毎日毎に大騒ぎ、堺の浦の名に響く、波の寄せ來る如くなり。加藤虎之介正清、此里に小磯といふ女郎が、繪圖を持ッたる由尋ね極はめ、ひそかに所望し歸らんと、ちもりめ堅よこ行き戻り、爰ぞ揚げ屋と音に聞く、高島屋が門外に「誰ぞ頼まん」と案内乞ふ。折りふし亭主表に立ち出で「是は〳〵。夜の編み笠腰まき羽織。大體の粋さまで無い。ヤァお通り」と曰ひければ、「某は田舍者。此里に小磯といふお傾城が有る由御意得たい。呼ぶ事は成るまいか」。「お易い事。さりながら、全盛の太夫さま。賣ッてゐるも存せねど、是非御所望なら貰ひましよ。コリャ女子共。小磯さまつかんで來い。早う〳〵。あたまからお一人はしッぽりがお好きさうな。二階座敷へお供せい。盃もて行け煙草盆、盆の下くすべるな。お伽に城部呼んで來い。ヤ寄り合ひの序ながら身が參らう。後程お目にかゝらん」と、挨拶そこ〳〵出でて行く。松の中にも唐松の、日本にまれな品かたち。小磯といへる太夫職。曉露の秋草に、日影きらめく花の顔。つかみからげのきぬ〴〵は、明日の逢瀨の八文字。禿が對の提灯に、全盛ひかる道中の、今宵もかはらぬ揚屋町。高四が軒場にこがれよる、跡にぞん〳〵知

○つかんで來い　御連れ申して來いとの義。

○引き舟　元祿時代の流行語。下等の娼妓。

○出入りずき　喧嘩口論の好きなこと。

○ほらほら　裾のちらちら捲くれる體の形容。

○脛あらは　捲くれて脛も見えるとの義。

らせの太鼓。「喧嘩よ出あへ」とわめく聲。引き舟やり手びッくりし、「あれ〳〵喧嘩が爰へくる。太夫さん。サア お急ぎ〳〵」。「アよいわいの。まあ待ちや。喧嘩なら又かの樣ぢや無いかいの」と、一足づつに立ちどまり、いて見まほしき風情なり。案にたがはず喧嘩は小西彌十郎。おやの勘當商賣に、かへて自慢の力づよ。不便や微塵こッぱいに、相手の遁げたを幸ひと、小磯が來よと呼ぶ文に、任せて跡を慕ひ來る。小磯見付け走り寄り、「うとましや又喧嘩ぢやの。夜毎日毎に色品かへ、喧嘩やめてと願へども、露ほども聞き入れない。聞けば親御の御館へは、上樣がお付きと有り、願ふても無い首尾。御勘當のおわび言、わたくし爲たい」と云ひければ、「勘當のわび言なら置いて來れ。なまじびに詫び言し、勘當を赦されては、後の身持ちがむつかしい。まだ五年も十年も、投げたり踏んだりくらはしたり、飽いたら其時詫び言しよ。親は勘當出入りずき彌十郎。氣に入らずば念頃きれ。外の男にしかへい〳〵。あらいやの詫び言や」と、聞き捨ててかけ出だす。肩に縋ッて、「遣らぬ〳〵。いふが無理か。來る夜も〳〵喧嘩といへば彌十郎。出入りといへば小西めに、投げられたの、いや踏んだ叩いたのと、聞く度々に氣も消えて、案じるは如何ばかり。小袖のゆきたけ袖下、いやらしい茶筌髮。是が堺のお歷々、小西といはるる形かいな。外の男にしかへいとは、胴慾な事いはんすの。今宵の客は高島屋。初對面の人なれど、其詞聞くからは、目の前で帶紐といて寐て見せう。來て見くされ」と引き立つる女力も立つ腹の、小褄ほら〳〵脛あらは。行くも心のせきのぼる、高島屋にこそ入りにける。花車出向かひ、「そりやこそお出で。小磯樣。お客は二階に待ちかねて。サア おあがり」といひければ、「コレ花車さん。此お人必ず去なして下んすな」と、耳に口よせ「これの。ム、斯うぢや賴む」とささやけば、「こんだ〳〵。預りました」と彌十郎を、暫し待たせて奥座敷。小磯は花車が引いて行く。表二階に居流れて、次第にめぐる盃の、夜半に近く更けにける。下には小西彌十郎。「今宵の客と寢て見せう」の、小磯が詞耳に殘り、心配ッて見あぐれば、障子に映る影法師と、共にもれくる客の聲、「これ〳〵花車とやら云ふ女子衆。お傾城に急な無心が有る。下へおりてお呉りやれ」と、つかうどに云ひければ、「そりや遣り手衆お床。女子共屛風引け、ちとお休み」と有りべかかり、花車は二階を下りにけり。小西は下に氣を揉んで、「扨こそ寢るわ。寐くさるか」と、階子の中身をひそめ、二階の物音立ちぎけば、女はしッぱり打ちとけ聲、「其お詞に僞りなくば、是は守りに入れ置いて、肌身も放さぬ物なれど、進ぜませう」と、聞くよりはッと彌十郎。「守りにかけしは身が起證。にッくい女め。踏んごんでひねり殺さうか」と、耳を濟ませば、「何事も我にまかされよ。向後くるわを引き取り、歷々の奥樣いやでは有るまい。嬉しいか」。「アかたじけなうムんす」と聞くより早く、「もう腹わたが煮えかへる。ヤイ女め間男め。小磯が男小西彌十郎。踏ん込まうか是へ出るか」と、跡先知らずの無法無體。「ア、情なや又おこッた。必ず爰へ來まいぞ」と、あがり口にかけふさがる、小磯が帶を引ッつかみ、「オ、おこッた是見よ」、引きずりおろしどうと引きすゑ、「よう己が起請をやッたな。御禮申す」とがばと踏み、「歷々の奥樣にならう。是でも成るか」とどうど踏み、島田ほどけて亂れ髮。小枕かうがいごた〳〵に、櫛の齒亂す如くなり。小磯むッくと起きなほり、「れうじな事

曰はしやんすな。二階のお客は加藤虎の介様といふ侍ぢやぞ。外の男と寢るほどなら、今まで勤めして居やうか。小磯が心忘れてか。コレ私が父様から譲り請けた、高麗國の繪圖を上げたらば、何なりと望みを叶へやうと、上意を請けてお出でなされた。わしや望みは何にも無い。こな様世に立ッて添いたいばッかり。其望みが叶ふての。こな様を侍ひにし、奥様になるが嬉しさに、親の形見の肌身も放さぬ、高麗の繪圖をあなたへ上げた。コリヤ誰がため皆此方の爲。踏みたかなんぼなと踏ましやんせ。大事ない。其かはりに心なほして下され」と、宵より積もる思ひの數。一度にわッと聲を上げ、はら〳〵泣いて口説きける。「いふな〳〵。其繪圖を上げて立身するほどならば、なぜ己に呉れぬ。殊に虎の介開き及うだ、強い自慢で立てるけな。ちと己もお見舞ひ申し、直に繪圖を取ッて來う」と、すッくと立てば「いや遣らぬ」とすがり付く。見返りもせずはたと蹴る。はづみを打ッて炬燵の櫓ひッくり返ッて灰まぶれ。蒲團に纏はれ立ちあがらず、「階子をあがるも懐手、障子をはたと蹴落として、加藤が前にふんばだかり、「ヤイ虎の介とやら野良の介とやら。小磯が持ッた高麗の繪圖を貰ふて、己を侍ひにして呉れうと曰ふげな。忝ない有りがたい。虎之介様いやぢや置きをれ。此彌十郎立てるといふ事知ッてわよ。一生に人頼みせぬ男。其繪圖おこせ直にさし上げ、己が手に己が大名になる。渡さぬか。渡さにや取るぞよ。此手が貽内へちよッと這入ると、息のとまるが一時」と、腕まくりして罵りける。「ハヽヽ〳〵ハヽヽ〳〵ハヽヽ〳〵

本は己樣も手にあまッて折りにくかろ。さとりと云ふは爰の事。久吉公へみやづかへ、大名になる事も、まづ此煙管の如くにて、こな樣一人でいかぬ〳〵。朋輩達と心を合はせ、力を合はせての働きは、十四五本のきせる同前折りにくい。わづかに細き煙管さへ、互の力合はぬ時は、一本も折れぬとの。此理が合點參らぬか。天下のお爲めお身のため。互のお中むつまじう、力を合はせ心を合はせ、お立身あれなう」と、煙管の細き吸ひ口に、後の大事も見通され、二人も雁首かたふけて、といき吹き出すばかりなり。小西はッと膽に染み、「ナウ正清殿。繪圖を御前へ指し上げられ、物その數に候はねど、彌十郎も異國の御供。加藤小西と高麗國に、名を止むるほどの高名は、御自分我らが心を一致するばかり。頼み入る」と述べければ、「一騎當千とは和殿の事。すぐに御前へ同道せば、君も大悦疑ひ無し。小西加藤が心を合はするほどならば、異國の合戰人手にはよもかけじ。此繪圖お手に入る上は、明日則ち御出陣。お腰があいた小西殿。此刀お差しなされ。貴殿も一腰、我も以前は一腰の、土百姓から此仕合はせ。主君のむかしも又一腰。三人ながら一腰づゝ、人に越したる手がらせん。小いそ殿。お遣申す」。「女房さらば」。「ァござれ」。「いざ御供」と立ち出つる。「待ッて下んせ。嬉しい〳〵。いざ御門出祝はん」と、扇追ッ取り立ちあがり、「もろこし遠く出舟の〳〵。百里千里も虎の介さん一飛びに、敵の靡き從がふ事、小西吹く風武勇の風。やがて目出たう凱陣」と、あふぎ立てて〳〵、名殘の拍子時のわか。治まり靡く時なれや。一天四海の内のみか人の國まで日本の、譽まれを末世に殘しけり。

第五

高富朝臣久吉公、異國の合戰勝利を得、三韓大王日本の、御下知に從ばんとの血判。敵の誠、取り持たせ歸洛有り、洛東に耳塚を築かせ、殊に春長御父子菩提の爲め、盧舍那佛の御建立成就し、今日供養の大吉日、御代長久のいさをしなり。此度異國の合戰淨瑠璃五段につゞらせ、瀧野澤澄りやうけんぎやうの節付け、大佛の前に人形舞臺をしつらい、あやつり役人御小姓衆たるべしとの仰せにて、御堂の左右に御幾敷をしつらい、華麗を盡くす御座の結搆、一盞に相調ひ、小西如清、鞘師の曾呂利千の利休三人は、久吉公の御咄し伽、お興に先立ち入り來り、利休あたりを見廻し、「なう如清老。曾呂利は吾々より先へ參られしか」。「爰元へはまだ見えられぬ。御覽なされ。あの塚は唐人の耳塚」。「扨大きい佛の。なう如清。此大佛のそばでは、杓子がみゝかきに見えるといふ。尤も佛を見た目ですッきり人形ぢや」。「ほんにこなたも人形ぢや。是は〳〵」と笑ひける、後堂より鞘師の曾呂利、傘一本煙草盆引ッさげ、佛の手の上むずと座し、「なんぼ後生がようても、佛の手の上に寢はらばふて、煙草呑む者おれ一人」と、所も名におふ大佛きせる、煙り輪を吹き雲をふく。「是々曾呂利。もはや御成りに間も有るまい。早うおりられ〳〵」といひければ、「重ねてはならぬ事。ついでに御身の内拜見。其用意いたした」と、傘ひッさげ風ぬきの御戸の内へぞ入りにける。俄にどゞろく輿車御佛詣と呼ばはれば、如清利休は氣の毒顏、「曾呂利なう。そろり〳〵」と呼ぶ所に、曾呂利はそろ〳〵みぐしの内、見廻り〳〵ぬッとさし出す笠の、いたゞきあたまの鉢。「爰

●第五

○すッきり　てッきり。まるで。

はどの穴鼻の穴。ハア、廣し〳〵。此鼻で佛がくソさめ爲されたら、大佛八丁土風がはッとひらく傘に、どッとあてたる一はづみ、佛の鼻を吹き出され、枝をはなれし櫻花、一もみ二もみふは〳〵〳〵。笠をちからに身をちぢめ、大坐の前におり立ッたり。二人立ちより、「なう〳〵怪我は爲されぬか。上々もはや棧敷へお入りなされた。こなたへ」と、打ちつれ御前へ出でにける。御臺所御代繼き丸、御棧敷に渡御あれば、三人の御伽衆、金銀珠玉をちりばめし、手すり舞臺を組み立つる。其役々の御小姓衆。役付きの人形手ごとに持ッて樂屋入り。貴賤群集の諸見物、袖を連ねて……。

○手すり舞臺　手すりの有る舞臺。

●男神宮皇后

◎上之卷

御前あやつり

男神宮皇后　五段續きを三段に約め勤申候

付り　異國の鯱は小西がむしり肴

上之卷

江遠くして水數〳〵流がれ、天晴れて雁轉飛ぶ、故山千里高麗國、遼東大王と申し奉り、ゆゆしき帝在します。第一の臣下李郎耶碩郎耶兄弟を召され、「扨も大日本の武將高富久吉、我國毎年の貢ぎ物を怠たる事を忿り、日本の兵船數萬艘、釜山浦の磯近くよすると聞く。入れたてては叶ふまじ。いかに沐海潜。汝水練を得たる大力の兵士、かれを毒魚のかたちに作ッて海に入れ、大將の乘ッたる舟を覆へせ」と、日本の敵を一のみの、高麗茶碗のわれ勝ちに、軍の用意を船よそひ。かくて日本の御先手、大船三千六百艘、中船小船一萬五千七百艘、ともづな切ッて出で汐の、波に朝日をすすがせて、

○高麗茶碗のわれ勝ちに　高麗茶碗は高麗の兵に聞かせた。茶碗の縁で、「われがちに（吾勝＝破れ勝）」と出した。

○眞魚簪　魚を料理する時の箸。

◎中之卷

◎大王道行

灰汁で洗ひし蛇の目の印金銀の幣帛を、此追ひ風に千早ふる、神通丸は加藤が船。聲帆に上げて棹の歌。かねて植え置く住吉の、松はのんえいそりや、枝もさかゆる葉もしげる、異國退治の武將の威勢ぞ逞しき。爰に一際事すぐれ、鬼のかいなの舟印。白帆に住吉大神宮と、金泥にて打ッたるは、小西彌十郎が不敵丸。拔けがけの先乘りせんと、こもがいを目掛けて走らせしが、風も吹かぬに海上逆まき、一丈あまりの鯱顯れ、劍のひれをふり上げ〳〵、船をゆり上げゆりおろすは、危かりける次第なり。小西きッと見、大手をのべて搔いつかみ、舟ばたに引きあぐれば、皮はすッぱり高麗人。沐海潜といふ者。「あますまじい」切ッてかかる。搔いくぐッて引ッつかみ、「ぶゑんの鯱、眞魚簪いらずの手料理」と、首ふッつとねぢ切り、「異國のしやちほこ取ッたるは、すぐに城を取る心。おせや〳〵」と押し立てて、跡なが先の一番船。異國本朝まれものやと、感せぬ者こそ無かりけれ。

中之卷

山青く、山白くして雲來去す。人たのしみ人愁ふ。世上の變化力なく、遼東大王都を日本に切りとられ、平安道に落ちのび給へば、李郎耶兄弟追ッ付き奉り、「とくねぎの城責め取られ、柱と賴みし牧司はんぎやんも行き方知らず。高麗一國に玉躰を、寄せらるべき方も無し。かゞなみの方へ落ちさせ給ひ、大明を御賴み有るべし。臣ら敵を追ひはらひ、跡より追ッ付き奉らん。はやとく〳〵」と奏しける。大王御衣に御涙をかけながら、しをれ出でさせ給ひける。御有り樣こそ……。

大王道行

日の本も異國も同じ鳥の跡。文字に書かねば詞には、聞きわけがたく聞き知らず、御いたはしや大王は、平安道を立ち出でて、あぼすとうげの夜の道、袂も裾もるてるうて、すんふく茶菅の笠かたむけて、しをれ出でさせ給ひける。びしやらほろみぞ哀れなる。昨日は雲井の住まひして、女御后にかしづかれ、じり〳〵ちくすい引きかへて、うる山ヶ嶽しん〳〵と、たゞ月獨りあこがれて、雲に棹さす蜑小舟。れんの〳〵と引く網の、目にもたまらぬてれめんす。是から島の事とへば答へも波の白濱に、ねむる鷗やふにす鳥。汝もいづくを宿りとや。野飼ひの牛を引きつれて、樵歌牧笛かすかなる、杖つく〳〵と聲きけば、風阮來雨阮來、君音信不來、花開愁不開、泪滿東洋海、ひはりふひやふはいほ〳〵。梅の下ふし風かをる、片しく袖に夜を重ね、夢も果敢無やひすなんざん。晝は人目のほりよきちいさま、さんぷとしやの旅衣。玉の腰帶はんな色。けゞすのぎや〳〵のほうたらほ、さいろすりはや行く程に、いんのやほるかや早過ぎて、音に聞えしかゞなみの、こんさんちやにぞ着き給ふ。兎にも角にもかの大王の心の中、實に世の中の物哀れはこれなり。只これなるはど皆感ぜぬ者こそ無かりけり。

○はんな色　花色。瑠千鳥を「はんな千鳥」といふ類。
○けげすの…

下之巻

高麗の猛將牧司はんぎやん、きッちうの岡に陣を張り、一子木梅を近付け、「日本の陣中にかけ入り、加藤の鬼しやぐわん、小西の荒者を討ち取らん。續けや〳〵者共」と、寄せ手の陣に割ッて入り、おめき叫けんで戰ひける。木梅大の鋒引ッさげ、「かゝれや〳〵」と呼ばはッたり。日本の陣より後藤

力王丸、年積もッて十八歳。「軍は斯うこそする物」と、木梅にわたり合ひ、飛鳥のかけり虎はしり、手を盡くしてぞ戰ひける。小太刀になれたる日本武者。木梅が首打ち落とし、しんづ〳〵と入りにける。大將牧司恐りをなし、八角の鐵棒水車にふり廻し、あたる者を幸ひに、八方無盡に打ちひしげば、小西彌十郎飛びかゝッて、ひッつかんでぐうと投げ、背骨を踏まへ首を掻かんとせし所へ、加藤正清遼東大王をいけどり、一散にかけ來る。丹後守てるふさ大勢引き具し、「如何に大王。そのかみ神功皇后の、先例を守り給はゞ、命を助けん」と曰へば、大王冠を地に付け、「子々孫々に至るまで、永く日本の奴と成り、貢ぎ物を献じ、御下知を守り申すべし。命を助け給はれ」と、誠を盡くし申さるゝ。「ゝ、珍重〳〵。虜り分捕りの首耳をそぎ、耳塚をきづかるべし」と、詞も未だ終らぬに、高麗人を引き寄せ〳〵、かたはし耳をそいでけり。加藤小西牧司が兩足両方へ引ッばッて、「ヤアえい〳〵」。二つにさッと鰻を裂くより易かりけり。御機嫌より久公吉扇を上げ、「ゝ、愛でたい〳〵。出來た〳〵。是へ〳〵」と御詑有り、手ん手に人形さしあげて、御前に畏まる。高麗日本一時に、見るなり聞くなり、淨るりあやつり。これ治まれる我君の、惠み有る代の民安樂。五穀豐饒萬々歳。動かぬ國こそ久しけれ。

傾城反魂香

上の巻

素きを後と花の雪〳〵。野山や春を書くらん。聞きに北野の時鳥、初音を啼きし其昔。清涼殿に立られし、跳ね馬の障子の繪、夜毎に出でて萩の戸の、萩を喰ひしも金岡が、筆の嗜みの跡絶えず、傳はる家や畫工の譽まれ。狩野四郎次郎元信、丹青の器量古今に長じ、心ばへ能き男ぶり。親の繪筆の彩色に、生まれつきたる美男なり。頃は文龜の彌生の空、天滿天神の告げ有ッて、越前の國氣比の浦へと旅羽織。我は笠きて大小の、柄にも袋煙草筒。丁稚が越の白山も、去年の絲のかへる山。山のいたゞき青々と、雲に映らふ月代の、湯尾峠の孫じやくし。盛りこぼしたる花重ね。かさね〳〵も旅籠屋が、情もあつき烟鍋の、敦賀の濱にぞ着き給ふ。四郎二郎一僕を招き、「ヤイ雅樂の介。外の弟子にも隱し此所に、下りし事餘の儀にあらず。近江の國の大名、六角左京の太夫賴賢殿と申すは、佐々木源氏の旗頭、高島の館とて、系圖所領竝びなき大將なるが、將軍家の御意を受け、本朝名木の松の繪本を集めらる。然るに奥州武隈の松と云ふ名木は、往古能因法師さへ、跡なくなりしと詠みたれば、名のみ殘ッて知る人無し。我是を書き顯し、譽まれを得させ給はれと、天神天滿を祈りし所に、武隈の松を見んと思はゞ、越前の國氣比の濱邊に行くべしと、あらたに靈夢を蒙れども、それは陸奥爰は越路。何を知邊に尋ぬべき。哀れ里人の來れかし。物問はん」とぞ呼ばはる〳〵。「所の者の御用とは、都人にて有りげに候ふ。御尋ね有りたきとは何事にてはし御座候ふ」。「御覽の如く都の者。天神の敎へに依ッて、松を尋ぬる子細有り、此所にこそ名高き松の候ふらめ。敎へ〳〵て給はり候へ」とよ。「是は思ひも寄らぬ事を承る物かな。此北國にてお尋ね有らうならば、越前布越前綿、若しは實盛の生國なれば、お供の奴の髭にぬる、油墨などのお尋ねも有るべきに、名高い松とは流石優しき都人。先づ當國の名木は、西行が鹽こしの松、あそふの松若が物見の松、金が崎には義貞の腰掛け松、山のを山松庭の御庭松、門には門松酒には濱松、肥えたる肥え松捨ぢたは捨ぢ松。わり松たい松ぬッぽり松。我らが息子に岩松長松と申す絲子も有り。庄屋の名は松兵衛、若い時には相撲取り。赤松ぶちわッたやうに御座有りしが、今老い松になられて力も元より下り松。腰も屈んでおざり松〳〵と、所の人は呼び候ふ。ヤア誠に天神の御告げと有るに思ひ當たッた。當所敦賀の町に、名高き松御座候ふ。是ぞ京にも類無しと、心を懸ぬ人も無き、色よき松の候ふが、若し左樣の松にては御座なく候ふが」。「實にや往き來も慕ふとは、疑ひも無く我等が尋ぬる名木よ。急いで見せて給はれかし」。「いつも夕暮れ毎には、此所へ現はれ出で給ひ候 ○ヤア〳〵はや那へ御出で候ふ。我等はお暇給はり候ふべし。御逗留の間御用の事は承り候ふべし」。「頼み申し候はん」。「心得申して候ふ」。高き名の松の門立たちなれて、人待つ顔の暮れなれ。誰れをかも知る人にせん此廟の、松となりしも親の爲、賣られ買はれて北國の、土けの賤の里なれど、よねの育ちは上田の、水損なしの太夫職。名を遠山と呼ばれしも、人に登れの戀ひの坂、おろ

○柄にも袋煙草筒 柄に袋を「着せる」と掛けた。
○丁稚が越の白山 越の白山は加賀の白山。雪が降ッて白くなッて居る義を含む。丁稚が。
○情もあつき烟鍋の「あつき」は情と烟とに掛かる。鍋の縁で下に「敦賀の濱」と續けた。
(一)聞に北野 聞きに「來た」と掛けた。北野は地名。

○誰れをかも… 百人一首の歌「誰れをかも知る人にせん高砂の松も昔

し歩みの道中は、花の立ち木の其儘に、ぬめり出でたる如くなり。雅樂の介「是申し。美事な者が夫そこへ夫〳〵」といへば四郎二郎、「ヤアなんと。松が見えたか現はれたか寫し留めんと」ふッと立ち、女郎にはたと行き當たり、「是は扨松かと思ふてはまッた。眞の松を尋ねて見ん。丁稚こい」と行き違ふ、袖を扣へて「是れ申し。此遠國の我々と、京の廓の松樣達と、比べさんすが不覺の至り。しかし不粹なお方には、松と見られて嬉しう無し。杉と云はれて腹立たず、桑の木とも痩とも、こなさあに似合ふた、あほふの木ぢも見さんせ」と、無駄言なしの云ひ捨ては、田舍妓とて笑はれず、「ま、御讒嫌そこねし御尤も。實に〳〵松とは太夫さまも。我等はわるう心得て、不重寶な御挨拶。眞平〳〵お詫言。是を御緣に御知人に成りましたし。下拙事は狩野の四郎二郎、元信と申すわづかの繪書き。さる御方より武隈の松の圖を仕れとの仰せ。すなはち天滿天神の夢想に任せ、此所にて名有る松と尋ねしを、太夫ざまとの取りちがへ、是は斯うも有らう事。御了簡ついでにお交際もあまたなり。願のかなふ便りも有らば、御世話頼み奉る」と、思ひ入ッてぞ語らるる。女郎はッと顏を眺め、「扨は狩野の四郎二郎、元信樣とは　身の上か。耻ぢを包むも時に寄る。何を秘さんわし事は、土佐の將監光信が娘なるが、父は一歳勅勘うけ、今浪人の憂き渡世。此身に沈むは申さずとも、推して泣いて下さんせ。扨武隈の松の圖は、土佐の家の秘傳の繪本。漏らす事は叶はねども、夕不思議や天神樣の夢の告げ。狩野と云ふ繪師下るべし。武隈の松を傳授せよ。父が出世の種ならんと、見たはさざ〳〵まさ夢」と、語りもあへぬに四郎二郎、感心感涙肝にそみ、天を禮し地を拜し。懷中の繪筆繪

し の友ならなくに」から來た句。
○よねの育ち　「よね」は妓の義。同壘の「よね（米）に通はせて下に「上田」及び「水損」などと出し、妓の上等で客が絕えぬ事に聞かせた。
○ぬめり出でたる如く　ずッて來るやうなの義。
○松樣　遊君。

○扈ひましよ　一寸體を借して呉れとの義。

絹をひろげ、「ヤア遊ばせ。御傳授頼む」と悦びける。「いかにも傳へ申さんが、親の免しもなき中に、筆取る事は如何なり。ア、何とせん。實に思ひ付いたり。あの御供の人の立ち姿を、松の立ち木になぞらへ、笠を枝葉の笠となし、ここにて學び見せ申さん。それにて寫し留め給へ。是れそこな奴樣。爰へ〳〵んせ雇ひましよ」。「ない〳〵〳〵〳〵」。手ふる頭ふる年ふる松の、松根によッて腰つきも、千年の統寫せしは作意なりけり。「先づ哥人の見たてには、一本松を二木とも、三木とつらねし言の葉の、それは老の木の松が枝なれや、寫す若木の、奴の〳〵〳〵、此膝のふし松のふし。前へ地摺りの下枝に、ぬッと出だせし片足は、盧外千萬千貫枝。筆捨て枝や久かたの、天津乙女のかたくま枝や。腰掛け枝の三蓋松。月にさはらぬ枝々の、さゞれ小枝の松かげを。ヤア沖こぐ船の帆のほの見えて。さす腕には壽福の枝、をさむる手には不老の枝、たれて雪見のひかへの枝。是々これ〳〵。ずッと伸びたる流しの枝」。松は非情のものだにも、傳へし心の色はなを、宛ら青々條々として、松の生き木のいき〳〵と、若やぎ立つる其風情。狩野の一點違ひなく、書きつらねたる筆勢。何れを寫し繪何れを立枝、紛がひつべうぞ見えにける。「元信家の幸甚たり。早速歸り本懷とげ、此報恩には御身の上、父御の事も請け取り申す。萬のお禮は本國より」と、立ち歸るを「是申し。神の告げに任せしからは、恩には懸けず末かけて、情を思し召すならば、必外に內儀樣、持ッてばし下んすな。奴殿頼みます」。「何が扨〳〵。天神樣より太夫樣。追ッ付けお二人連理の松。中に立ッたる此松は、島臺持ッての取り結び。千年萬年萬々年。とお付きひッ付き松脂の、離れぬ中」とぞ壽きし。されば江州高島の

館、左京の大夫頼賢卿、參勤の上洛有り、執權不破入道道犬、同嫡子不破伴左衛門宗末、國を預かる留守居なり。御家の繪書き長谷部の雲谷遽ただしく、入道親子が前に手をつかね「近頃過言に候へども、某事は雪舟のてき傳として、代々の御扶持人。此高島のお館にて、繪筆を取ッて誰れ人か、拙者が上に付き申さん。然るに此度狩野とやらん申す二才。武隈の松を書きしとて、過分の恩賞を下され、古參を踏み付け御前にはびこり、剩へ今日は、奥方へ召され姫君樣より、お料理を下さるゝと承る。殿樣の御留守誰が殘しての推參。御家老の仰せ一國に違背申す者は無し。きッとお仕置き然るべし」とぞ支へける。道犬頷き「つッと寄れ雲谷。惣じて此四郎二郎めは、相役名古屋山三が取り持ちにて召し出された。山三は元來お小姓立。前髪の酒林で、殿を醉はせし男傾城。口ばしの黃な小雀が、家老並につらなり、威をふるふ其山三めを甲にきて、のさばりまはる四郎二郎、我々親子が瞰眼めども、事とも思はぬ奇怪さ。其方とても同前たり。又乙の姫君銀杏の前は、御愛子なれども脇腹ゆゑ、御臺所を憚り給ひ、田上郡七百町の御朱印を付けられ、京都有德の町人か、由緒有る御家中へも、下されんとの御内意ゆゑ、某嫁に申し請け、此伴左衛門に繰組みし、七百町を主づかんと、當てはめて置いた物、姫君狩野めに心を通はし、今日密々祝言有りと、奥目付けより聞きたれども、御意と有れば詮方無し。御在京の其間は、山三めも留守なれば、彼奴が方人する者なし。少にても過りを、隨分見出だせ聞き出だせ。慮外をせば打ち殺せ。御留守の間國中は、某がさばきなり。此不破といふ鷹が見いれて、あまりほとは有らせまい。試して見たい新刀は無いか。一の胴か二の胴

○のさばりまはる　增長を極はめる。

か。望んで置け」と云ひければ、雲谷甚だ笑壺に入り「政道正しき御家老樣。お屋形のしん柱」と、追從だら〳〵見苦しし。斯くとは知らず四郎二郎を仰せ付けられ、持參仕り候ふ。御取り次ぎ頼み奉る」と、云へども入道伴左衛門、じろりと見たるばかりにて、返答もせず睨め付ける。「ァヽしれ者よ。そばには雲谷。いかさま我に手を取らするたくみ有り。立ち歸るも不覺なり。幸ひ〳〵奥へ通路の鈴の綱。ふりはへひけば鈴の音、おうと答ふる女の聲。宮內卿とて中老の局立ち出で「ヤア狩野殿か。姫君樣の御待ちかね。お直の御用も有るとのお事。ヤア〳〵此方へ」と有りければ、畏ッて四郎二郎、入らんとすれば伴左衛門、聲をかけ「待て〳〵〳〵。お家の掟を知らずんば、なぜ物頭には伺はぬ。知ッて背くか不屆き千萬。上より御免なき時に「及物を帶し奥方へ參る事禁制との御條目。あれ大小拔いで引きずり出せ。當番〳〵」と呼ばれば、宮內卿「いや是は私ならず。姫君樣より殿樣へ御伺ひ。則京より名古屋山三殿の指圖にて「奥へ召さるる四郎二郎。なんのお咎めムらう」と、云へども更に聞き入れず「お留守を預かる家老の耳へ、承らぬ御意なれば、殿の御意でも叶はぬ事。それ伴左衛門拔いで取れ」。「まッかせ」と立ちあがる。四郎二郎も身がまへして縋らば切らんず眼ざし。左右なくも寄りつかず「ヤア、渡せ〳〵」と詞でおどすばかりなり。時に奥よりお腰元つか〳〵と出で、「是々いづれも。お姫樣より御意が有る。四郎二郎殿には直に御用の事あれども、丸腰で無ければ奥へ通さぬ御法度と有れば、是非に叶はず姫君樣、此所へ御出でとの仰せなり。四郎二郎は御用人。其外の男のぶん、雲谷は言ふに及

ばず、御家老殿を始め、御前へは叶はぬ。皆お廣間へ立ちませい〳〵」との權柄さ。道夫親子無念ながらつッと立ッて。「サア雲谷姫君の御前へは、男たる者罷り出でず。男でも無い奴原に、侍のじぎ無用の沙汰」と、四郎二郎に刀のこじり。打ちあて〳〵袴の裾。踏みたゝくッてにらみ付け、お次ぎの間にぞ出でにける。「御留守と云ひ女中の邊、なほ穩便に事ともせず、御好みの掛け物梅に淡雪雉山鳥。仕ッて候ふ」と、紐を解いて懸けければ、「此由披露致さんに。サア先づゆるりとお茶進ぜや」と、局は奥に「あい〳〵」と、愛想らしき聲々の、男の側へ寄る事は、常に梨地の煙草盆、落雁かすてら羊羹より、菓子盆はこぶ腰元の、饅頭肌ぞ懐かしき。物に臆せぬ男なれども、女中の色に目うつりして、氣を取られたる折りふし、十八九なるわきつめの、後結びも格別に、銚子盃前に置き、しとやかに手をついて「私はお姫様お髪上げ、藤袴と申す者。しみ〴〵お咄し致しませいとの御事ぞや。御存じの通り、お妾腹の御姫様。御臺様への憚りにて、大名高家のお望みなく、心次第縁次第と、田上郡七百町。御朱印握ッて殿好み。情ないは其許様。いつぞやより色々と、お乳の人お局、口の酸いほどお勸めても、どうでもお請け無いとの事。お愛しや姫君は、余りの事に戀ひこがれ。私をお寢間へ召し、ヤイ藤袴。切めての事にそちなりと、四郎二郎と名を付けて、心ゆかしに抱いて寢よ。そちもおれを抱きしめて、姫可愛いと云ふて呉れと、もがき言がお愛しさ。とんと下紐打ち解けて、寢るほど抱くほど締めるほど、二人の心せくばかり。どちぞ男に成りたいと、云ふても泣いても叶ばぬこそ。なう大名の手業にも、有るべき道具の足らぬのは、ひよんな物とておむづかる。自にいなせの返事、

○常に梨地　「梨地」は金銀の斑を梨の皮の斑のやうに置いた蒔繪。常に「無し」と掛けた。
○饅頭肌　肥った肌あひ。柔らかさうに見える肌との義。前の菓子の縁で出した。
○心ゆかし　「心やすめ」などの意。本義そぞろに床しく思はれる義では此所には通ぜぬ。
○もがき言　あくがれての口上。
○いなせ　否か應かの義。

聞き切り參れとのお使ひ。私も一分立つやうに、お返事なされ」と逃べにける。元信額を疊に付け、「冥加に余る仕合はせながら、度々お返事申す如く、諸朋輩のそねみと申し、慾心に紛きるる事世間のあざけり。よし御譏嫌に違ひ、改易仰せ付けらるるとて、御恨み候ふまじ。御請けとては成りがたし。能きやうに御取りなし、頼み入る」とぞいひ切りたる。「ヽヽにべもなう埒あいた。如何にとしても上つ方へ、左樣な慮外申されまじ。少し物に品付けて、始めより約束の女房有りと申しなば、お胸の晴るる事も有る。さりながら、其女房は何者と、ごをつかるる念の爲、今ここで私と夫婦かためのさして、とッと前から藤袴と契約有りと申さば、いかな主でも大名でも、此道ばかりは先が先。此談合はどう御ざんしよ」。「オヽ幸ひ望む所。サア盃仕らう」。「いや〳〵いや〳〵。我とても假には「誓文〳〵。繪筆をとらぬ法もあれ。斯うぢや〳〵」と抱だき付き、いや。佛神掛けての女夫ぞや」。「近頃嬉しい盃。是祝言の盃」と、一つ受けて元信に、妻の盃頂く作法。儀式はかたうど四海波。腰元中が謠ひつれ、奥よりお局島臺に、七百町の御朱印箱、姫君樣の御祝言。三國一とぞ祝ひける。四郎二郎合點ゆかず、逃げんとするを抱だきとめ、「藤袴とは假名ぞや。自こそは銀杏の前。誓文だての盃、いやは成らぬ」と曰へば、「いや我らの名ざしは藤袴。外に妻は是なし」と、尚いなばれば腰元衆。「そんなら本の藤袴。早う〳〵」と呼び出だす。お茶の間のきりから、五十餘りの厚化粧。三平二滿の口紅し、なだれ懸かる會釋顏。「是がなんの藤袴。しやちこわい皮袴」と、ぞッと笑ひぞやくや紛され、盡きせぬ妹背となり給ふ。斯かる所へ不破伴左衛門宗末雲谷を伴なひ、遠慮もなかの義。

く座上にずッかと直り、「是四郎二郎。汝如何なる野心にかお屋形を調伏し、亡さんとの存念有る。きッと詮議を遂ぐべき旨父道犬が下知。申し譯仕るか。直に繩をかけうか」と、はや繩たぐッて見せかけけり。四郎二郎些とも騒がず、「せめて形の有る事には申し譯も有るべし。御屋形調伏とは此方の云譯より、先づ御咎めの證據承らん」とぞ答へける。雲谷下座より「こりや〳〵證據は某よ。惣じて繪書きの秘密にて、繪をかいて調伏する事。人は知らじと思へども、此雲谷が見付けた。此掛け繪は和主が筆。梅に山鳥雪に雉。抑當家は高嶋の御屋形と號す。山偏に鳥と書いては、嶋とよむ文字なり。梅の梢に山鳥の、高々と留まりしは、是高嶋にあらずや。雉にほろゝの聲有ッて、雪はふるとの心有り。讀みくだせば高嶋亡ぶる調伏。狩野とは狩りの野と書けり。姫君と心を合はせ、屋形を亡ぼし、一國をおのれが狩場の、野原にせんずる表相。重罪遁れず繩かゝれ」と、取り付く所をひッばづし、胸板はたと蹴たほす間に、飛びかゝる伴左衛門が眞向、刀の柄にてはッしと打ち、直ぐに扱かんとする所を、隱し置いたる取ッ手の者。十手八方鉄鞭を、ぶち立て〳〵捻ぢふせて、高手小手にいましめ、黒書院の床柱に、思ふさまに縛り付け、「姫君の御朱印を、奪ひ取れ」と群らがるを、女中手々に枕鎗、長刀にて引ッつゝみ、圍ひ防げば餘さじと、奥を差してぞ追ひつめける。腰掛けに扣へし雅樂介、斯くと聞くよりたまられず、かけ廻ッても奥方の、勝手は知らず中口の、あけずの門碎けてのけと扉をたゝき、狩野の四郎二郎元信が弟子、雅樂介之信と云ふ草履取り。主といひ師匠なり。死ぬる道なら共に死なん。高が繪書きの丁稚づれ、怖い事も有るまい。相手の首取る分の事。

開けよ明けよと貫の木も、折るるばかりに踏みたゝき、鳥居立ちにぞ跨かッたる。元信内より「雅樂介か滿足した。身に過まりなき上に、慮外をして姫君の、御身のあやまち氣遣はし。歸れ〳〵」と呼ばはれば「ヲゝ慮外と云ふも事による。明けずば踏んで踏み破る」と、喚き散らせば雲谷不破、「雅樂之介を打ち殺せ」と、引ッ返して門の貫木。はづす所を、つけ入りに雲谷が小額ずッはと切り下げたり。「あいたし」と跳りあがり、二人扱きつれ打ちかくる。彼方へ追ひ詰め此方へ支へ、城下をさして切り出づる。四郎二郎地闘太踏んで、「ヱ、俟人共。むざ〳〵とは死ぬまい。親より傳し一心の繪筆はこゝぞと觀念し、右の肩に齒を立ッて、ふッつ〳〵と喰ひ破り。口に我身の血を含み、襖戸に吹きかけ〳〵、口にて虎をぞ書いたりける。電もくらいの眼の光り。怒り毛怒り符怒り爪。千里も駈けん勢ひなり。道犬は姫君の行く方尋ね廻りしが、「先づ繪書きめから仕まはん」と、太刀を抜かんせし所に、俄に吹き來る風さわぎ。繪にかく虎は形を現じ、牙をならして哮かゝる。道犬も強力者、組み止めんといどみあふ。虎は猛ッて爪をとぎ、邊を蹴たてゝ揉み合ひしが、「元より不思儀の猛獸、道犬が襟髪ひッ咥へ、打ちかたげくるり〳〵、くる〳〵〳〵くるり〳〵と持ッて廻り、一振りふッて投げければ、塀を打ち越し敷き石に、頬をすッてぞ打ち付けける。虎は勇んで元信の、縛めを噛み切り、背を差むけてそばへたり。元信頓て心付き、袴の股立ちしぼり上げ、ひらりとこそは乗ッたりけれ。虎は千里の足早く、風に嘯く身もかろく、追ひ來る敵を追ひ散らし駈けちらし、堀も築地も跳り越え、飛びこえ駿ね越へ驅けり行く。豊干禪師が四すの虎。李將軍は虎をくむ。繪にかく虎

を動かすは、古今一人乘ッたも一人。天下一人一筆の、譽まれは世にぞ殘りける。げに獸君の一靈。山野にはびこり、草木を踏み折り。田畠を荒す事なゝめならず、近鄕の百姓聲々に、「三井寺の後なら、藤の尾までは見届けた。此山科の藪かけへ、逃げこんだに極はまッた。皮に疵を付けずに毆き殺せぶち殺せ」と、取り〳〵喚き評諚す。庵の內より棒ついて、小提燈提げたる男。「ヤ、何者ぢや人の軒。打ての殺せのとは、うさんなり」とぞ咎めける。「いや是は矢橋粟津の百姓共。此頃しがらき山から虎が出て暴れる故、隣鄕が云ひ合はせ、此藪へ追ひ込んだ。搜させて下され」と口々に呼ばはれば、侍ひあざ笑ひ「やい。虎と云ふ獸が日本に出た例なし。十方もない事。夜盜押し入りの手引きか。此庵を誰れとか思ふ。土佐の將監光信と云ふ繪師。子細有ッて先年勅勘を蒙り、此所に逼塞し、將監年は寄ッたれども、某は門弟修理之介正澄と云ふ者。油斷はせぬ」と、棒ふり廻しいさかふ聲。將監夫婦障子を明け、「聞いた〳〵。天地の間に生ずる物、有るまいとも極はめがたし。諸共搜せ」と鎗熊手、ひッ提げ〳〵えい〳〵聲。松明ふッて狩り立てる。一むら竹の下蔭に、「そりやこそ物よ」と火を上ぐれば、暴れにあれたる猛虎の形。人に恐るゝ氣色なく、背をたはめてぞ休み居る。將監横手を打ちて、「あら不思議や顏輝の筆の、竹に虎の筆勢に、少しも紛がふ所無し。是は誠の虎にあらず。名筆の繪に魂入ッて、顯はれ出でしに極はまッたり。然も新筆、今是程に書かんず人は、狩野祐勢が嫡子、四郎二郎元信ならでは覺え無し。いづれにもせよ證據には足跡有るまい」。「物は試し」と百姓共、若草わけて尋ぬれども、虎の足形あらざれば、「書き手も書き手目利きも目利はき。

代未聞の名人や」と、心なき土民等も、拜むばかりに信をなす。修理之介七足退ッて師匠を拜し、「ア、有りがたや此虎を見て、繪の道の悟りを開き候ふ其しるし。我筆先にてあの虎を、消し失しなひ申すべし。名字名乘をさづけ、御免しを受け度く候ふ」と、懇望あれば將監悅び、「オ、今日より土佐の光澄と名づくべし」と、印可の筆をあたふれば、修理はいたゞき墨を染め、虎の順にさし、當四五間間をきながら、筆引く方に從ッて、頭前脚後脚、胴より尾先に至るまで、次第に消えて失せけるは、神變術ともいひッべし。百姓共舌をまき、「子孫までの咄しの種。なうあの上手な繪書き殿に、よいお山を十人ほど書いてもらひ、金儲けがしたい」と云へば、一人が聞いて、「オ、〳〵冬年お目に懸かッたら、借錢乞ひの帳面を、爰から消してもらはうもの。お暇申す」と打ち笑ひ、在所〳〵へ歸りけり。ここに土佐の末弟、浮世又平重起と云ふ繪書きあり。生まれ付いて口吃り、言舌明きらかならざるうへ、家貧しくて身代は、薄き紙子の火打ち箱。朝夕の煙りさへ、一度を二度に追ひ分けや。大津のはづれに店がりして、妻は繪のく夫は畵く、筆の軸さへ細元手。上り下りの旅人の、童すかしの土產物。三錢五錢の商ひに、命も錢も繋ぎしが、日影の師匠を重んじて、半道餘りを夫婦づれ、よな〳〵見舞ふぞ殊勝なる。夫はなまなか目禮ばかり。夫房傍から通主して、「まだ是はお寢りませぬ。誠にめッきりと暖かに、日も永うなりまして、世間は花見の遊山のと、ざわ〳〵さわ〳〵致しまする。此方は山影御罕人の、お徒然をいさめのため、嫁菜のひたしに豆腐の煮染め、ささえでも致しまして、關寺か高觀音へお供して、春めく人でも見せませうと、女夫申して居ますれども、心で思ふたばッかり、

○童すかし　小供だまし。
○通主して　通辨しての義。代はッて口を利くとの意。
○ざわざわさわさわ　ぞろぞろ出かけて氣も浮かれて騷ぐ體の形容。
○ささえ　酒を入

れる竹筒。
○立ちやくみ　立ってばかり居ること。
○つべこべつべこべと　何だ角だとの義。
○背をつき　背中を後から突っついて。

道者時分で見世は忙し、洗濯物はつかへる、仕事ははかいかず。日がな一日立ちずくみ。何をするやら野良くらと、急げばまはる瀬田鰻。只今膳所からもらひまして、繰り貫き水の大津酒。ゆめ〳〵しう厶りますれども、此春からお仕合はせ直ッて、鰻の穴から出るやうに、御世にお出でなされませほんにつべこべ〳〵と、私が云ふ事ばッかし。此方の人の吃りを私がしやべりと、入り合はせたらよい比な、女夫が一組み出來ませう。ヲヽおはもじや」と笑ひける。北の方聞き給ひ、「オヽようこそ覚ふてたもッた。今宵は奇妙な事有ッて、修理は名字を免され、土佐の光澄と名乗るぞよ。其方もあやかり給へ」とあれば。又平時節と女房を、先へ押し出し背をつき、我身も手をつき頭をさげ、訴訟有りげに見えければ、女房心へ進み出で、「誠に道すがら、百姓衆の咄しを聞き、身は貧なり不具なり。弟弟子に土佐を名乗らせ、兄弟子はうかさへた瓢箪の、ぶら〳〵生きても甲斐なしと、身をもんでの無念がり。尤もとも憐れとも、連れ添ふ我等の心の中。申すも涙がこぼれまする。奥様までは申せしが、お直の願ひは此時節。今生の思ひ出、死しての跡の石塔にも、俗名土佐の又平と、御一言のお免しは、師匠のお慈悲」とばかりにて、涙に咽び入りければ、又平も手を合はせ、将監を三拝し、疊に咽び付き泣きゐたり。将監素より氣短く、「ヤア又しては〳〵。叶はぬ事を吃りめが。こりや此将監は、禁中の絵所、小栗と筆の爭ひにて、勅勘の身と成ッたるぞ。今でも小栗に従へば、富貴の身と榮ゆれども、一人の娘に君傾城の勤めをさせ、子を賣ッてくふほどの、貧苦を凌ぐは何故ぞ。土佐の名字を惜しむにあらずや。修理は只今大

功有り。己に何の功が有る。琴棊書畫は晴れの藝。貴人高位の御座近く參るは繪師。物も得いはぬ吃りぬが推參千萬。似合ふたやうに大津繪書いて世をわたれ。茶でも呑んで立ち歸れ」と、愛想なく〳〵又平も、我咽ぶえを掻きむしり、口に手を入れ舌をつめッて泣きけるは、理り見えて不便なり。時に藪の内よりも「將監殿。光信殿」と呼ばはッて痛手おふたる若者、椽先によろぼひ立ち、「狩野の弟子雅樂之介御見忘れ候ふか」。「實にも〳〵雅樂の介先づ此方へ」と座敷に入れ、「承れば四郎二郎殿。雲谷不破が惡逆にて、難に逢ひ給ふ段々具に聞き、氣遣はし」と有りければ「さん候ふ。某も供仕り雲谷と戰ひ、かやうに深手を負ひ候ふ。頼み切ッたる名古屋山三殿は在京。元信危く候ひしが、漸くのがれ落ちうせたると承る。こゝに難儀の候ふは、姫君銀杏の前元信を憐み、七百町の御朱印を持ッて落ち給ひしを、敵奪ふて下のだいごに隠れし由、二度姫君屋形へうつし、御朱印奪ひ返さでは、永く繪師の瑕瑾なり。某手負ひの身は叶はず。御加勢頼み申さん爲、忍び參り候ふ」と、語りもあへぬに將監「皆聞くまでに及ばず。狩野と土佐は一家同前、力に成ッて參らせん。されども彼奴らと太刀打ちは、いッかな〳〵叶ふまじ。姫君にも負傷あらん。どうぞ辯舌のよき人に、御屋形の御意といはせ、誑ッて取り返す分別がムらう。何れも云ふてお見やれ」と、額に小皺頬杖つき、し女房を、引きのけてつッと出で、師匠の前に双手をつき、唾を飲みこんで「此討手には拙……拙者

が參り、姫君も……ござう……御朱印も……うう〳〵〳〵……うば……奪ひ取ッて歸りましよ」。將監きッと見、「ヤア面倒な吃りめ。思案なかばに邪魔いるゝ。そこ立ッてうせぬか」と、叱られてもおぢるにこそ。「イヤ膝とも談合と申す。口こそ不自由なれ。心も腕も天下に怖い者がない。拙者か分別出だし。叶ぬ時はゑん正すけさだ。あッちへ遣るか此方へ取るか、首がけの博奕。命の相場が一分五厘。浮世又平と名乘ッては、親もない子もない身がら一心。命は掃き溜めの芥。名は須彌山と つりがへ、悴の時から舊功なし、命にかへて申し上ぐるも、師匠の名字を繼ぎたい望みばッかり。拙者めを遣はされて下されませ。申し申し。さりとては御承引無いか。吃りで無くば斯うは有るまい。エヽ〳〵〳〵恨めしい喉笛を、掻き破ッて退けたい女房共。さりとは情ないお師匠ぢや」と、聲をあげてぞ泣き居たる。將監なほも聞き入れなく、「不具の癖の述懷涙不吉千萬。相手に成ッては果てしなし。皆々修理の介。御邊向かッて思案をめぐらし、奪ひ返し來られよ」。「畏まッた」と云ふより早く、刀ぽッこみ立ち出づる。又平むんずと抱き留めて「まま……まん……まん……待ッてくれ。師匠こそ情なくとも、弟子兄弟の情ぢや。此又平を遣ッてくれ。殿とも言はぬ。すゝす……すッ〳〵……すり樣」。「こりや又平。某やたけに思ふても、師の命は力なし。こゝを放せ」。「イヽ〳〵や。ゝ〳〵〳〵放さぬ」。「放さねば拔いて突くぞ」。「つ……つ……つき……こゝ〳〵〳〵殺せ。はゝゝゝゝゝ放しやせぬぞ」。修理之介もてあつかひ、「放せ〳〵」と捻ぢ合ふたり。將監夫婦聲を懸け「放せ〳〵」と留むれども、耳にも更に聞き入れず。女房取り付き、「あれお師匠樣の御意が

○つりがへ　つり合ふこと。

有る。おとなしの氣遣ひや」ともぎ放せば、女房を取ッて投げ、はたと睨て睨み付け、己までが氣遣ひとは。ゑゝ女房さへ侮るか。不具は何の因果ぞや」と、ぞうと座を組み疊をうッて、聲も惜しまず歎きける、心ぞ思ひやられたる。將監重ねて「汝能く合點せよ。繪の道の功によッて、土佐の名字をついでこそ、手拘とも云ふべけれ、武道の功に繪書きの名字。讓るべき子細なし。成らぬ〳〵」と云ひ切り給へば、女房居直り、「サア又平殿。覺悟さッしやれ。今生の望みは切れたぞや。此手水鉢を石塔と定め、此方の繪像を書きとゞめ、此場で自害し、其跡の證り號を待つばかり」と、硯引きよせ墨すれば、又下顎き筆を染め、石面に差しむかひ、「是生涯の名殘の繪。姿は苦に朽つるとも、名は石魂に留まれ」と、我が姿を我筆の、念力や徹しけん、厚さ尺余の御影石。裏へ透ッて筆の勢。墨も消えず兩方より、一度に書きたる如くなり。將監大きに驚き給ひ、「異國の王羲之趙子昂が、石に入り木に入るも、和書に於いて例なし。師に優ッたる書工ぞや。浮世又平を引きかへ、土佐の又平光起と名乘るべし。此勢ひに乘ッて、姫君御朱印諸共に、取り返せ」と有りければ、「はッ」とばかりに又平は、忝しとも口吃り、禮より外は涙にくれ、踊り上がり飛びあがり、嬉し泣きこそ道理なれ。將監夫婦悦び、「心切にて志し厚けれども、敵に向かッて問答せん事、いか有らん」と曰へば、女房聞きもあへず、「常々大頭の舞ひを好き、妄語共つれわきにて舞はれしが、節の有る事は少しも吃り申されず」と云ふ。「やれ夫こそは究竟よ。試に一節目出度ふ舞ふて立て」。「あッ」と答へて立ち上がり、古き舞を身の上に、なぞらへてこそ舞ふたりけれ。「さるほどに鎌倉殿。義經の討ッ手に向くべしと

武勇の達者を選ばれし。それは土佐坊是は又、土佐の又平光起が、師匠の御恩を報ぜんと、身にも應せぬ重荷をば、大津の町や追分けの、繪に塗る胡粉は安けれども、名は千金の繪師の家、今墨色を揚げにけり」。斯くて女房勇みをつけ。又もや御意の變わるべき。はや御立ち」と勸める。「ずいしくも申されたり。身こそ墨繪の山水男。紙表具の體なりとも、朽ちて朽ちせぬ金砂子。極彩色に劣らじと勇み進みし威ひは、由々し頼もし我ながら、天晴繪筆の殊勝さよ。唐繪の樊噲張良を、たてについたと思しめせ。お暇申してさらば」とて、打ち立ち出づる威ひは、誠に諸人の繪本ぞと、ずい譽めぬ者こそ無かりけれ。あふ坂のせき曙近き火ようじの、聲高島の屋形には、「六角殿の姫君、行き方見えさせ給はぬとて、旅人の改ため問ひ屋の詮議、土をかへさぬばかりなり。又平は今朝七つ立ち、門出で祝ふ中椀に、例の熱烟三杯ひッかけ、うッ立ッ所に、やでとなき土鬩の、跣足の土に身も顫れ、伏見の方よりよろ〳〵と、「是そこな者。京の道を教へてくれ。草鞋とやら云ふ物をはかせて呉れ」と、詞つきの大柄さ。又平むッと貌に立ちはだかッて返事もせず、女房走り出で「大抵のお方でない。威の備はッた見所有り」とお側に參り、「恐れながらお屋形の姫君樣と見參らす。我々は土佐の將監が弟子、吃の又平と申す繪書きの夫婦。狩野の弟子雅樂の介に頼まれ、お迎ひに參る折りからなり。必ず包ませ給ふな」と、囁けば、嬉しげに、「ゑ、自こそ銀杏の前。道夫雲谷が追ッ手すき間なし。よいやうに頼むぞや」と曰へば、又平土邊に額をすり付け、悦びの色勇みの色。氣を急けばなほ物云はれず、心を仕形の腕まくり。りきみ反り打ち居合ひの眞似、拔き打ち撫で切り拜み打ち。組み合ひ捻ぢ首手にとッて、握り拳の武士氣をあらはし、埴生にかくまへ參らする、夫婦が所存を頼もしき。程なく八町はしりあの、問ひ屋組み頭。組町引き具しおこしかへッて聲々に、「六角殿の姫君、朱印を盜み出で給ひ、御家老より御詮索。裏屋小路も改めよ。別して繪書きは屋捜し有る。八は勿論犬猫も、內を出すな」と、裏口門口はら〳〵と、さしもの又平取りこめられ、狩り場の鹿の如くなり。不破の伴左衛門長谷部の雲谷、着込みの兵百騎ばかり。むら立ち來ッて家々に、押し入り〳〵捜しける。又平一期の浮沈ぞ」と、女房諸共姫君を押し圍ひ、隣をがばと蹴破ッて、ぐッて抜けたる壁あつき、氷のやうなる大刀物、さし出す音を片はしから「きゝゝゝゝゝゝ切りならべん」と、壁に添ふてぞつッ立ッたり。雲谷聲をかけ「ヤア〳〵是ぞ音に聞く。土佐が弟子吃の又平めが住み家なり。敵きこぼッて捜して見よ」。「承る」と一番手「捕ッた〳〵。捕ッた〳〵」とどッと寄せしが、しどろになッて引き返し「なう怖や。すさまじや。何かは知らず家內には、人大勢みち〳〵て、或は奴の形も有り、又は若衆女も有り、人間ばかりか猿野猪鷲角鷹。爪を研ぎたて眼を怒らし、寄り付かるる事で無し。なう〳〵いやゝ」と身ぶるいし、舌を捲いてぞ恐れける。「何を吐す狼狽へ者。人三人とも住まれぬ荒屋、何者が有るべきぞ。察する所、見世に張ッたる三文繪を、生き物と見違へしか。怖いと思ふ心から、眼が眩んだ腰抜け共。それ〳〵蒜をこゞ放せ。ぬるい〳〵」と下知すれば、「鳶口ひッ懸け「えいや〳〵」と、難なく見世を放しけり。內を見れば不思議やな。云ひしに違ひも荒奴の影とも、わかず幻とも、まだほのぐらき曉の、鳥毛の鎗さき揃へしは、土佐が魂寫し繪の、精靈

○大津の町「負ふ」と掛けた。

○火ようじ「火あやふし」の異。「火の用心」の義。

○やでとなき「やんごとなき」の轉。貴い。

○とぼとぼと　よろぼひ歩む體の形容。
○とぼつく　よろつく。よろゆく。
○打ッてんげり　「打ちてけり」と同義。
○かず枕　「波枕」と同聲の文飾。

なりとも知らばこそ。我も〳〵と驅け向かひ、打てども突けども手に取られぬ。「露の命を君にくれべい」と、染めしだいなし嫌ひなし。相手えらばず防ぎたり。雲谷が弟子長谷部の等嚴「數にも足らぬかす奴。我に任せと捲りかゝれば、片肌ぬいだる立て髮男。大盃をひらり〳〵と閃めかし、眉間にふッたる唐芥子。オ、から。オ、からからにしき。黑白も別かず引ッかへす。師匠の雲谷堪りかね、「片端より打ちみしやぎ、手なみを見せん」と飛んでかゝる。優しや優者の女わざにはきどく頭巾。藤のしなえをおッ取りのべ、引んまとふてはたと打つ。しとゝ打つをひらりとはづし、受けつほどいつあさ衣の玉襷。かひ〳〵しき若き法師の現れ出で、勇みかゝれる有り樣は、なみや鯰の瓢覃〳〵。持ッてひらいて鉢叩き。叩けばすべり、打てばすべり。ぬらり〳〵と手に堪らず、倦みはてゝぞ支へたる。不破が郎等犬上團八。「そこ退き給へ人々」と、打ッて出づるや現の闇の、座頭一人とぼ〳〵と、とぼつく杖をふり上げ〳〵、盲目打ちに打ッてんげり。「餘さじ物」と續いてかゝる。團八が弟犬上三八。二八ばかりの小人、枕がへしの曲枕。おッ取り〳〵、ばらり〳〵はら〳〵〳〵。うつ波枕かず枕、枕がさねに打ち亂れ、散り〴〵にこそ引いたりけれ。伴左衛門怒りをなし、「手にも足らぬ雜人ばら。しや何ごとか有るべき。武士の刀の鹽梅見よ」と、眞一文字にかけたりけり。あら凄じやこはいかに。形は沙門頭は鬼神。鬼の念佛嚙みくだく、牙を鳴らし角をふり、向かふ者の眞向。撞木を持ッて叩き鐘、くわん〳〵〳〵〳〵〳〵。耳にこたへ骨に染み、進みかねてはひき足も、鵯荒鷹鷲角鷹。一度にさッと飛び來り、むらがる勢を八方へ、追ッ立て蹴立てつゝきた

●中の卷

て〳〵、翼の嵐夜明けの風。鷲の聲々逢坂の、夕告げ鳥に白々と、白み渡れば白紙に、有りし形は彩色の、繪に寫りたる筆の精、天骨の妙とも云ッつべし。又平勇んで女房の袖を引き、物は云ひたし心進んで舌まはらず、只ゥ〳〵とばかりなり。「エ、爰な人敵が詰めかけ事急な。廻らぬ舌を言はれぬ事まひで〳〵」と言ひければ、「オ、それよ〳〵氣がついた。今目前の不思議を見よ。我らが手柄で更になし。土佐の名字を繼だる故。師匠の恩の有りがたさよ。敵の中へ駈け入ッて、命限りに追ひ散らさん」と、大勢にわッていり、西から東北から南。くもでかくなは十文字、割りたて追んまはし、さん〳〵に切り立てられ、さしもの軍兵堪りかね、八方へ遁げ散ッて、殘る者こそ無かりけれ。「さあしてやッた此上は、コ、〳〵爰には片時も叶ふまじ。都の方へ」と姫君を、オ、〳〵〳〵逢坂山の時鳥、まだ初聲の口は吃り、心は鐵石かなおとがひに、勝ッた優れた越えた峠は日の岡の、石原草原足もしどろにゞ〳〵〳〵。吃り廻ッてのゝ〳〵〳〵登りける。

中の卷

里は都の坤なり。通ひても通ひ足らぬぞ三筋町。西の洞院中道寺。右衛門が馬塲の一方口、未だ大門の遲櫻。忍びて開け一ばん門の東がしらむ。どん〳〵と打ッたる太鼓の番太、「何者やら大門口に、切られてゐる」と呼ばはる聲に、忘八揚屋茶屋駕舁、廓の年寄り立ち合ひ見れば、年頃卅ばかり究竟の侍ひ。二つ重ねの白無垢、白茶宇に縫ひ紋紅裏に、源氏雲の裾くゝみ、南蠻ごろの大小。對の金鍔毛彫は波に山王祭り七所。御物蒔繪の印籠。天川珊瑚珠は然もなくて、大疵五ヶ所肝先に、と

○手を引き舟　「手を引き」から直ぐと「引き舟」に續けた。「引き舟」は下等の娼妓の義。

ゞめ有りと委細に書き付け。官領所へ訴たへさせ、死骸を圍ふ横はしご。二階から女郎買ひ手、遣手のかめは首のばし、松は寢ほれた顔出だし、まだおき〳〵の禿共、つね彌いく代と手を引き舟も走りきて、塀にくらかけ木に取り付き、「かをる樣あれ見さんせ。吉野樣の大膽な。掃き溜め山へ上ッて、海老の皮で足突かんすな」。「突いたら大事か。切られて死ぬる人さへ有る」と、あだ口々の喧しさ。「あの切られてゐる人は、葛城樣の大盡。不破の伴樣に似たぢやないか」。「ほんに然うぢや伴樣に極はまッた。サア伴左衛門が切られた」と、京童の物見だけく、手負ひ見がてら傾城見に、群聚は押しも分けられず。すはや撿使と人を拂ひ、官領の雜式供人引き具し、死骸を解いて疵改め、「江州高島の執權、不破の伴左衛門に極はまッたり。扨此者の買ふたる傾城は何と云ふ。意趣有る者の覺えは無きか。口論などは無かりしか。眞直に申せ。當分隱して後日に知れなば、曲事なり」とぞ仰せける。年寄り罷り出で、「上林の葛城と申す太夫を、千二百兩にて請け出さるゝ筈の所、名古屋山三と申す浪人衆と葛城と、行く末深い約束とて、談合成りかね申せし故、兩方意趣を含み居られしが、是ならで覺え候はず」と、詳かにぞ云ひ分くる。雜式一々口書きし、「名古屋山三は浪人なれども元は伴左と朋輩。かた〴〵大事の詮議なり。先づ葛城が遣り手を呼べ。遣り手出ませ」と呼ぶ聲に、玉は臆病年寄りなり。「やら恐ろしや私が出て何といはふ。縛られたら何うせうぞ。なう悲しや目がまふた。氣付けは無いか」と泣き居たる。「是では埒が明くまい。どれぞ氣轉な遣り手衆を、賴んで見ん」と云ふ内に、「出ませ〳〵」と頻の使ひ。「ェイ思ひ付いた。一文字屋の和國に付いてゐる。みや

○すすどげなうて智慧まんまん　鋭い氣は無くて智慧ば充分に有る。
○おしよぼからげ　今いふ「ぢんぢんばしをり」。
○言ひ損なふたら大事か　言ひ損ねたからとて何うなるものかとの義。
○氣隨者　我儘者。

と云ふ遣り手は越前の敦賀で、遠山と呼ばれた全盛の太夫。戀ひ故今はあの體。すゝどげなうて智惠まん〳〵。閻魔の廳でも云ひぬける。此みやを賴まふ。あれ〳〵彼處へ大福帳かたげて來るは、みやぢや無いか」といふ所へ、おしよばからげの忙がしげに、「皆さん是にムります。まあ〳〵けうとい事が出來まして、御苦勞でムんす」と云ひ捨て通るを、「是々おみや撿使の衆、葛城が遣り手を召さるれども、玉は愚鈍で臆病なり。何をお問ひなされうやら、云ひ敎へて濟まぬ事。廓中の賴みぢや。葛城が遣り手に成ッて出て、請け返答をしてたも。恩に受けう」と云ひければ、「あの死骸の傍へ出る事か。ァ、ゑづ。さりながら嫌と云ふも子細らし。言ひ損なふたら大事か。口に任せて遣ッてくれう。てんほのかは」とぞ出でにける。雜式鉄鞭よこたへ、「おのれは葛城が遣り手めか。用有ッて召し出すに何として遲なはる。横着者氣隨者」と、かさをかけてぞ叱らるる。「ァ、彼のさんわいの。頭から叱らんす。なんの氣隨でごあんしよ。十二人の太夫樣を、一人して廻せば、べんけい遣り手が忙がしさ。口說の中を押し隔て、打ち物業にて叶ふまじと、日に幾度の詫言やら。よるの身持ちは揚げ屋の吸ひ物同前。ちよッちよと座敷へ出る度に、一杯づづも飲む酒に、ぶら〳〵眠りのいき倒れ、朝から晩まで緋の袴。花色繻子の巾着も、中は秋の夜の長紐さげた、鍵の穴から天を覗けばほの〴〵明け。妓樣達の身じまひ、風呂の手洗水の髮洗ひの、鍋よ杓子よ臼よ杵よ。正月しまへば節句朔日。今日は二日の拂ひ日なり。炙もすゑたしうはら辰もも背中に腹。商賣には換へられず、皮切りこらへて出る心。其樣に言はんすな。廓は諸國の立て合ひ。常住切ッてのはッての。是程の

喧嘩はお茶のこ〳〵茶の子ぞや。ァ、仰山な」と笑ひける。雑式怒ッて「いやさ己が身の上は問はず。此伴左衛門千二百両にて、葛城を請け出すとな。傾城は賣り物、直段極はまる上からは、名古屋山三が障碍いふても叶はぬ筈。然るを違亂に及ぶとは、汝め等がもがりと覺えたり。切り手も知らいで叶はぬ筈。眞直に申せ」と、詞あらく問ひかくる。少しも臆せず會釋して、「御意の通り賣り物とは申しながら、神佛の奉加と同じ事で、銀出しながら拜まするは、恐らく世界に傾城ばッかり。買ふてくれるが嬉しいとて、親がかりやお主持ちの、戀ひ路の闇の一寸先、見へぬ所を傍から見て、買人のお身も慮たらず、女郎ものぼさぬやうに、舵を取るが引き舟の、目のさやはずすが遣り手の役。大事にかける證據には、世間に心中十あれば、廓に一つ有るか無し。伴左様は御大身。お銀に不足も有るまいが。御主人のお耳に立ち、お身のがいとも成る時は、御一門の評議にのり、人を剝ぐの欺すのと、おつる所は廓の難。爰の意氣をたてるが色里のたしなみ。身請けの談合破れたも、伴左様のお身の上、大事に思ふ上の事でムんす。道で切られさんしたは、そこまでは存じませぬ。定めし死にとも有るまいし、尤も遁げても見さんしよし、そこに如才も有るまいが、先の相手が強いか、身の取りまはしのわるさか知らんでやんす」と答へける。撿使の人々もてあつかひ「能いわ〳〵もう默れ。一時に詮議成りがたし。死骸を酒にひたし置き、後日の評定たるべし。それ〳〵」とて役人供。桶しつらひ死骸を納め、酒汲み入れて縄がらみ籠屋へやれと舁き上げたり。雑式重ねて「年寄り〳〵。商賣なれば傾城には搆ひなし。さりながら夜前よりの買ひ手共、事濟むまで名所を、一々に書き留

○のぼさぬやう　のぼりつめて熟くなること。

めよ。こりや遣り手め。重ねての詮議には、水をくれる用心せよ」と、赫して立てどもおぢもせず「ァイ置かんせ。銀くれる遣り手に水くれるとは惡ごうな」と、笑ひを機に云ひしらけ、先を拂ひて立ち歸る。權威を見せて突き鳴らす、鐵棒の音三味線に、引きかはりたる三筋町。戀ひの市場となまめかし。名古屋山三春平は、通ひ馴れにし六條の、道には石がいくつ有るまで、よみ覺えたる一貫町の、茶屋が蔓賣のよしやよし。里になげうつ命ぞと、大門口の與右衛門も、門番には二代の後胤。平の供して口輕く、舞鶴屋にぞ入りにける。亭主傳三を始めとし、數多の女郎遣り手まで、「是は〳〵。樣子はお聞きなされうが、先づ四五日もお出でなされぬがよい筈。日頃意趣有る伴左衛門、切り手は名古屋山三ぢやと、何處ともなしの取り沙汰。葛城樣のお案じ、我ら夫婦の氣遣ひ。此おみやが辨舌で、今日はずらりと遣りましたが、伴左衛門が死骸を奈良漬けにして後日の詮議。殊にお客の名所書き記せとのいひ付け。お身に覺えが無うてから、詮議なんぎも喧しい。お前を外樣へつくばはせて、此傳三が立ちませぬ。帳面に留めぬ間に、先づお歸り」と云ひければ、「いや傳三さうで無い。お手前こそ念比。廓中女郎衆へ、苦勞をかけた此山三が、詮索にあふ悲しやと、屈んでゐるほどならば、里通ひも妓交りも、あたまから爲ぬがよし。先づ和國樣からお禮申す。大事の遣り手をお貸しなされ忝い。扨みやの働き志し。詞の禮はいふほど古い。三千石とッた山三が、手をついて頭を下げる。額に千石雨の手に二千石、主人の外一生に、此式作法はみや一人。是が禮ぞ」と手をつけば、「ァ、勿體ない。なんのお禮が入りませう。ちよッと葛樣に逢はせて、去なせましたい物ぢやが、私が

○詮議まんざ　唯吟味の意。「詮議」の「詮」の音が「千」に通ふところから「萬」と出して續けた輕口。「公事宮しても」などと同じ例。

いけば目に立つ。和國樣一筆進ぜて下さんせ」。「いや文もいかゞぢや。私らが直に誘ふて、遊びに出る貌で、連れまして來ませう。サア皆ござんせ」と、座敷をこそは立ちにけれ。「然らば爰は人も來る。二階へお通りなされ」といへば、「ヤレ何が怖うて隱れうぞ。伴左衛門を切ッたるは、誰れとか思ふ此山三が、手にかけ打ッて捨てたるぞ。葛城が意趣は僅の事彼めと朋輩たりし時、狩野四郎二郎を身が取り持ちにて、奉公に出だせし所に、伴左衛門親子雲谷と云ふ繪師を引き、御在京のお供の留守、無實をいひかけ乃傷に及び、四郎二郎は行き方知れず。あまッさへ外戚腹の姫君銀杏の前、四郎二郎に心をかけ、御祝言有る筈を、障げ入れて狼籍し、某までも讒奏し、浪人の身と成りたれば、重々の意恨有り、殊に四郎二郎は隱れもなき名筆。大內繪所の官にも進む身を、某しひて國に留め、難儀をかけて見て居られず、姫君と夫婦になし、四郎二郎に、如何なる仇をか爲すべきと、傾城の意趣を幸ひに、討ッて捨てたる伴左衛門。知れて切腹するばかり。四郎二郎故に捨てん命、聊か惜しいと思ふにこそ。武家に生まれた不肖には、大門口で立ち腹切り、新造衆や禿共、芝居でするよな事して見せう。ヤア葛城はどうぢやの。亭主謠へ」と三味線の、天柱に貌をすゞかひ身。糸の音色も目の色も、人を切ッたる躰は無く、亭主は結句色違へ「ヲ先づお咄しは入らぬ物。內外の者共必ず仇口聞くまいぞ」と、わな〳〵慄ひ手酌にて、滅多に呑んでぞ居たりける。みやも聞くより驚きて「扨は我二世までと、思ひこうだる四郎二郎樣に、斯くまで深き恩を見せ、お命をも捨てんとは、ァ、頼もしや忝や。我こそと名乘ッて一禮いはうか。いや〳〵姫君

○齒切り　齒ぎしみ。

とやらへ、聞こえては御祝言の邪魔ぞと、遠ざけらるゝは知れた事。只余所ながら彼のお方の爲に成り、お命を助けるこそ、我夫への奉公」と、思ひ定めて「是傳三さま。お侍ひの覺悟の上を、女子の了簡推參な事ながら、あのさんに腹きらせ、恩を受けた四郎二郎。何國の浦で聞き付けても、よもや生きては居られまい。人の所縁は知れぬ物。どれからどれへどう續きて、誰が悲しみとならうやら、山三樣のお身の難。脫るゝ工面は有るまいか。思案は今でゐるぞや」と、よそをいふのも夫の事。案じて余る涙の色。胸撫でおろすも道理なり。「ヤ、わが身がいふ通り。おッ取ッて廓の迷惑。お仕置きには法が有る。腹切りたいとおッしやッても、よう曖かに見苦しいざいに、粟田口下からどうも量られぬ」と、云へば山三はッとして、「ァ、よい所へ氣が付いた。三味線所で無いわいの。相手は主持ち此方は浪人。あばれ者にしなされ、木兎の留ッたやうに、獄門なぞに曝らされては、先祖一家の恥辱。今さッぱりと腹切ッても、其段からは死骸まで、彌恥ぢは重う成る。ヱ、主持たぬ身の無念さよ」と、齒切りをしてぞ涙ぐむ。みやは聞くほど我男の、身に逼りくる悲しさの、「どうぞよい分別して、進ぜて下され頼みます」と、身に引きかけて歎く躰。亭主暫らく思案し、「是々よい仕樣有り。爰へよりや」と小聲に成り、「是をついでに葛城樣を、とんと請け出し、奥樣に定める時に、親方とはだを合はせ、手形の日付けをどッと跡の月にして、外樣へは借宅見たての其間、廓に少し逗留分。すれば疾うから御夫婦と云ふものよ。昨日まで伴左衛門が口說いた狀文、握ッてからは密夫の證據證かなり。女敵討ちは天下のおゆるし。千人切ッても切り德。此分別はどう有らう」。みやは悅び「ヲ、

○泣くをしよざい　手持ち不沙汰で無いやうに泣いて居るとの義。

できた〳〵。目出度い〳〵智恵者め」と、煽ぎ立つれば、「ア、むしやうに目出度がるまい。當分請け出すお銀がない。若しお腰の物をそれまでの、質物に遣はされば、私が加判で太夫様を、たッた今門を出して見せませうが、お侍ひにお腰の物とは、なうおみや何うも申しかねるわいの」。「ハテおぬしのお身ばかりか。不便になさるゝ四郎二郎まで、命を助かる事なれば、御了簡あそばしませ」と、手を合はせるやら歎くやら、山三も共に涙をうかめ、「オ、〳〵何が扨〳〵。皆の衆に苦勞をさせ、何しに否と云はうぞ。近頃過分千萬。コレ是は重代の左文字。二千五百貫の折り紙有り。惜ししとは思はねども、七才の時より今日まで、ついに脇差一本で、他所に居た事知らぬ身が、刀の冥加に盡きたか」と、涙は雨や鮫鞘の、脇差ばかりで奥に入る。後姿を見おくりて、「おいとしや〳〵。傳三様どうぞ首尾して下さんせ。まきぞへが入るならば、私が繻子の帶も有る。八丈の袷もムんす」と、歎けば共に泣き聲の、「オ、奇特によう曰やッた。己も男ぢや氣遣ひすな。女房を惣嫁に賣ッてなりと、埒を明けぬといふ事は」、ないて出づるぞ頼もしき。みやが憂き身の憂き思ひ。口でいはねば氣につかへ、目に流るゝは百分一。胸に涙のとゞこほり、「山三様に骨折るも、男の心の悲しみを、思ひやり手となッたる者の、ぞんざいで成られうか。戀ひがこうじて遠山が、此體になッたとは。知らぬか聞かぬか男めが、何所に居るやら死んだやら」、梨も礫もうッとりと煙草飲んでも、煙管より喉がとほらぬ薄煙り。人の見ぬ間に思ふほど、泣くを玄よざいか味氣なや。内を首尾して葛城は、走ッて來るより駈け上がり、「みや殿爰にか。いかい世話であッたげな。忝いぞや。土になッても忘れはしま

ひ替へれば泣くより他の事は無いとの意。

○どうぶくらに　最中に。
○あた　感歎詞。
○したたるい　なまめかしい。

せぬ。己が心を察してたも。ほんに〳〵物日なかに痩せたわいな。此方は今は何の苦もなうて樂であろ。遣り手の身は羨ましい。山様は奥にかの。ちよッと逢ふて來うぞや。後に〳〵」と云ひ捨てゝ、行くを見るにも猶涙。「つらいぞ憂いぞといふ中にも、男を傍へ引きつけては、憂きを凌ぐも力が有る。此身には苦も有るまいとや。明け暮れつきあふ人目にさへ、樂なやうに見えるもの。遠國隔てた男氣に、思ひやりのない事は、無理ともいはれず去りとては、切て在り所が聞きたい」と、聲を立てねばないじやくり。氣も沈み入る時しもあれ、心細げな皷弓の聲。あはれ催す相の山、我に涙を添へよとや。「夕朝の鐘の聲、寂滅爲樂と響けども、聞いて驚く人も無し」。「通りや。只の時さへ相の山聞けば、哀れで涙が溢れる。悲しゆて成らぬどうぶくらに、あた聞きともない。通りや〳〵」と、いひて涙を押し拭ふ、「野邊よりあなたの友とては、血脉一つに珠數一連、これが冥途の友となる」。「ア、したたるい。手の隙がない。通りや〳〵」といふ聲に、心に苦のない新造禿。ばら〳〵と走り出で、「てちら好きぢや相の山。聞いて泣きたい所望〳〵」と立ちかかる。「エ、意地のわるい子供ぢや。それほど何が泣きたい事。やッて去なそ」と巾着の、紐を解いて取り出だす。錢は一錢二世の緣、切れてもきれぬ笠の中、泣き沈みたる顔見れば、戀ひし床しの四郎二郎。互ひに「はあ〳〵」とばかりに、目くれ心はしみ〳〵と、抱き付きたうもあたりには、禿が目元小ざかしく、堪へるだけと包めども、咽せびふくろび泣きぬたり。「ア、去なせましたらよい物か。まちッと哀れな心を謠ふて、聞かせてくださんせ」。「あッ」と涙にするささら、皷弓の弦も細き聲、「定めなき世に捨てられて、

身の寂滅が知らせたく、文は書けぞも便りなし。獨寢ざめの友となる」。折りしも二階奥座敷「こいよ〳〵」と手を叩く。「あい〳〵〳〵」と禿ども、立寢ざめの友となる」。折りしも二階奥座敷「こいよ〳〵」と手を叩く。「あい〳〵〳〵」と禿ども、立つ間遲しと走りより、「是斯うした事もあらうかと、憂き命をも捨てなんだ。よう顏見せて下んせ」と、縋れば男も抱き締め、涙の外は聲もなし。「なう戀ひしいの懷しいのとは、大抵戀ひ路の慣らひぞや。それをとんと打ちこして、主親方にも背きしゆゑ、奈良伏見まで賣り渡され、今此京で遣り手となり、花の都も我身には、鬼界が島に住む心。胼凍瘡に苦しみても、手足の苦勞は成りもせう、心を痛めるばかりおやない。力業にも才覺にも、かなはぬ物は逢ひたいと、思ふて遣る瀬が無かった」と、あまえ口説くぞ不便なる。四郎二郎も盡きせぬ涙。「オ、道理〳〵いとほしや。たび〳〵文でも云ふ通り、和女の蔭にて大事の繪を書き譽まれを取り、契約違へず身請をせうと、思ふ間に不慮の事をも、命が有るといふばかり。恩をきた名古屋山三我ら故の浪人。行く先も〳〵、目出度いと云ふ字は書きやうも忘れて、今は扇圖の繪あしや、釜の下繪に露命を繋ぎ、大津で問へば奈良にといふ、難波で聞けば伏見とやら。是は采女雅樂の介、二人の弟子の介抱で、九四年目に顏を見て、嬉しい事はぞこへやら。己と云ふ者ないならば、疾うによい仕合はせ。前垂かぎは下げまいと、親御の事まで思はれて、生きた心はせぬぞ」とて、男泣きに泣きければ、「さう打ち明けて下んすが、ほん〳〵の御眞實。私はいッそ親の事、思ふ所へいかなんだ。私に罰が當たらずば、當たる者は有るまい」と、口説き立つれば四郎二郎、二人の弟子も共涙。ささらの竹も古の、紫竹に染むるばかりなり。稍有ッ

て四郎二郎「先づいふべきは名古屋山三春平、此所にて不破の伴左衛門を討ッて、詮議に遇ふ由、洛中の是沙汰。意恨のもとは某故、聞き捨て置かれぬ挨拶。廓の說はどうぞ」といへば、「されば、ア、詳しい事も聞きました。山三樣にする世話は、此方さんへの奉公と、さま〴〵心を碎いて、何の波風ないやうに、十の物が九つ追ッ付き、埒が明く筈で、あれ奥におやわいな」。「是は大慶。先づ通ッて對面せう」。「ィヤ〳〵待たんせ。そりやならぬ。こな樣を尋ね出し、姫君と夫婦にせねば侍ひが廢たるると、今も今云ふた人に、逢はずといんで下さんせ」。「エ、愚痴な事ばかり。我故に一命を、果たさうといふ山三ぢや無いか。逢はずに歸ッて八外の名を取れか。げしう逢はせまいなれば、爰で腹を切らうか」と、脇差に手をかくる。「ア、死なんせでは無いわいの。外に奥樣持つまいといふ、誓文立ッて逢はんせ」。「オ、姫君は扨置き、たとへ餅屋のお福でも、山姥と祝言するとても、山三が詞を一たん立てずに置かれうか。エ、世間見たやうにもない。氣が狹いぞや」と恥ぢしむる。「世間は唐土まで知ッても、氣は武藏野はど廣うても、大事の男を人には添はさぬ。山三樣にあふて、四郎二郎が女房は、此みやで厶んすと、罷り出て斷らう」。「オ、云ひたくばいや。詞の中に脇指を、此腹へ突きこむ。ァゝどうぞ〳〵」と詰められて、泣くより外は何をいふも大切さ。「そんならいふまい。息才で居て下んせ。さりながら、どうぞ言ひ拔けて見て下んせ」と、まだぐど〳〵の忍び泣き。「尤も〳〵男のつら役。斯ういふとて、なんの如才が有る物ぞ。弟子衆こちへ」と涙ながら、奥へ行く間も惜しまれて、「是采女さま雅樂さま。祝言の咄しが出たら、言ひ消して下さんせ」と、賴む返事の否

應は、涙に紛ぎらし入りにけり。心元なさあぶなさに、心騒ぎて落ち着かず。穢の際にさし足し、立ち聞きすれば伴左衛門を討ちとめた物語り。「ア、嬉しや、女房事は出ぬさうな。最ちッと聞かう。あの耳語は何ぢや知らぬ。聞きたいまで」と耳をよせ、「ア、悲しや。連れて歸って姫君と、女夫にせうと曰ひくさる。こちの男が利口さうに、此方の詞は背きませぬと、吐しづらは何事ぢや。エ、聞くまい物を腹が立つ」と、耳をふさいつ立ちつ居つ、身をもみ歎くぞ哀れなる。舞鶴屋の傳三郎、遣り手引き舟下男。いきりきッて大聲あげ、「こりや〳〵。葛城様の身請けさらりッと埒明いた。あとの三月二日に暇をやるとの一札。王様の御綸旨より、高直な物握ッた。乘り物の戸をぐわらりと明けて、今でも大門お出でなされ」と喚く聲に、八々悦び走り出で「ア、〳〵お手がら〳〵。酒呑童子の首より取りにくい事。主もたぬ身は爰が過分。手を引きあふて門を出て、名古屋山三と葛城と、後々までの咄しを殘さう。ヤア亭主近付きになッて置きや。狩野の四郎二郎元信、廻り逢はうばかりに、互ひの苦勞は知る通り、身は葛城を請け出す。四郎二郎は大名の、お姫様をほり出す。祝言の夜は勝手へ見きや。扨みやの禮は今は申さぬ。前垂れ鎧を捨てさせ、武家か公家か町人か望み次第に、數ならねども拙者が親分。先づ姫君の祝言には、侍ひ女郎に頼まう」と、勇みかけても投げ首に、目も泣きはらして返事もせず、堪へ兼ねてつッと出で、云はんとするを四郎二郎、柄に成をかけ腹をさすれば手を合はせ、泣く〳〵退されぞなほ默られず、思ひきッて曰はんとす。四郎二郎胸をしあけ、既にかうよと見せかくる。「ア、〳〵申し四郎二郎様私や何にも申しませぬ。御息才で姫君と、夫婦にな

ッて下さんせ」と、わッと叫び伏しければ、共にせきくる四郎二郎「ヤ、よい合點〳〵。廊の乘は涙もろく、目出度い事にも泣きたがる。身請けする女郎乘に、名殘惜しいは尤もながら、他國へ行かず死にはせず、追ッ付け逢はう泣きやるな」と、外にいふさへ包みかね、目はうろ〳〵となりにけり。「サアお乘り物が參ッた。早うお出でなされませ」。「いや〳〵乘り物ふるい」と立ち出づれば、一家の太夫天神かこひ「葛城様さらばや。さらばでムんす」。「門まで送れ跡賑かし。うッたり舞ふたり舞鶴屋、傳三が萬うけ込んだ。置きみやげを遣り手衆、お春お夏」と勇めども、みやが心はあきがらの、腰の巾着ぶら〳〵と、物寂しげにぞ見えにける。花の三月はや過ぎて、娘の年も廿ざを。いつの間にかは長持ちに、桐の葉茂る嫁入月。銀杏の前の御祝言、名古屋山三のはからひにて、四郎二郎元信を、北野の社人に假座敷。名古屋が家の子世繼瀬兵衛興添へにて、供女中の出で立ちや。地黒地淺黄紅ひはだ、右近の馬場にぞ着き給ふ。並木の櫻くれかゝり、まだ人貌も白無垢着たる、若き女の横合ひより、嫁入の供先押しわり〳〵、打つも敲くも事ともせず、しッかと縋ッて引くほどに、乘り物の戸は碎けて放れ、姫君あッと叫び給ふを、瀬兵衛刀の反りを打ち、六尺徒士衆押ッ取り廻し、「そこを放せ放さずば、擲ち殺せ捻ぢ殺せ」と、口々に呼ばはれば、姫君制して「ア、獸ッて居や。かまやるな。嫁入する身に女のざいで、只の事とは思はぬ。四郎二郎殿の妾か、但し時の戯れに、末では妻にせうなどと、男の當座まに合ひを、一筋な心から、其恨みであらうの。吾が身に知らぬ事ながら、殿を持つ役なれば聞くまいとは曰はぬ。道理

さへ立つ事で、負ける道なら負けもせう。又筋もない道いッて見や。我にも手も有り足も有る。銀杏の前が理不盡と、いはれては大人氣ない。相手むかひにして置きや。ヤァなんぞ聞かう」と、口は陸路をわけながら、胸はしどろの山坂や。顔は躑躅の如くなり。女溜め息顔をあげ「ア、流石でムんすな。其美くしい出やうには、斯う取ッた胸倉を、放しやうに困ッた。我とても中々狼籍する氣は微塵も無く、お乘り物に縋ッて歎きを申し、お情をうけうと、七本松から跡先に、是まで窺ひ參りしが、あたまのかかりがどうも無く、思はず慮外致せしなり。ぎやう〳〵しい白無垢着たは、討ち果たしての何のといふ、おどしでも見せでもない。思ふ願ひが叶はずば、西所川原か舟岡へ、直に飛ばうと思ふ氣で、私がための修羅出立ち。高いも低いも女子には、大なれ小なれ此氣はあれど、いはぬで持ッた世の中。色に出さぬを謹愼と、心で心を叱ッて見ても、いかなる慾も放れうが、男によくは得離れぬ。さりとては汚ない。氣恥づかしゆムる」と聲をあげ、譯をもいはず泣きゐたり。瀬兵衛を始め女房達、御祝言の時刻ちがよ。道行ばかり曰はずとも、いる事ばかり申せ〳〵」と責めければ「ヲ、御尤も〳〵。私は土佐の將監が娘。稚名はお光、親の憂き瀬に身をうり、越前の敦賀で遠山と申せし流れの者。四郎二郎殿とは故有ッて、起請一筆書かねをも、釘かすがひより離れぬ中。身も持ち崩し方々をうろたへ、今は六條三筋町、上林が內みやと云ふ、流れの身より淺ましい、遣り手はしても己やれ。一度は狩野の元信が、內儀といはれう〳〵と、四年が間の氣の張り弓、はッたりと弦きれて、泣くにも力あらばこそ。無理とも損とも、餘り無法な事ながら、永らは入らぬ一七日、「今宵の嫁入を下されば、跡はお前と萬萬年、七日添ふて別れて後は、此世の生き顔見せまいし、たとへ死んでも彼の人の、未來の廻向は受けますまい。最う此跡は申しませぬ」と、涙を流し手を合はせ、伏し轉ぶこそ哀れなれ。姫君呆れて在せしが、「聞けば笑止悼はしや。否と云へば大體胴慾者と曰はれうず。心得たといふてから、迷惑するは我一人。新枕はどう斯うと、きほひかかッて行く嫁入。道から貸して歸るとは、咄しにも聞かぬ事。こちや義理ずくめになッたか」と、聲を上げて泣き給ふ。道理の、上の道理なり。やや有ッて涙をおさへ「ム、よし〳〵合點した。和女が其思ひからは、男も心にかかる筈。二人の緣の離れぬ中へ、嫁入して可笑しう無い。蓙もかけごも打ち明けたこそ女夫なれ。男を貸してやるほどに、互ひの心を晴らして給も。さりながら、餘りかけごを明け過ごし、底抜きやッたらこちや聞かぬ」と、涙ながらに曰へば、「ア、有りがたや」と遠山は、姫の膝にいだき付き、「貸すお心より借る心、御推量遊ばせ」と、泣き聲よそに飛び梅の、神も憐み給ふべし。「ヤア迎もなら早いがよし。元信は兼ねてより、傾城好きと聞きし故、此小袖を見や。廓模樣に言ひ付けた。是着ていきや」と桂襠脫いで、「七日といふもいま〳〵し。來月一はい貸すぞや」。「ア、お志しは有りがたけけを、終に別るる此身なり。然らば七々四十九日が中は、私が妻と思しめせ。此分で死んだらば、定めし男の餓鬼道へ、墮ちませう」と。泣く〳〵たてば姫君、「さういふて皆呪ひ乾しやんな。そこぞ少しは殘してたも。こちは是から腰元つれて步ふて戻る。あの乘り物で皆供しや」と、歸るさを見て遠山は、「姫君樣の情ほど、我身の罪は重うなる。借る時の地藏菩薩に捨てられ、返す時の閻魔の廳へ

○見どほし　透見。

う云ふて脫れう」と、涙をかこふ神垣や、神も佛も見ぬほしに、酸いも甘いも梅青む、北野の假屋に嫁取りの、嫁の手道具御厨子鏡臺、うちみだれ箱、葛籠かひ桶挾箱。長刀持たせて遣り手のみやが來るとは思ひがけも無い。其心底の届きし事、姫君の情といひ、かた〳〵獸しがたければ、門弟雅樂之介、采女隼人大學なんど宗徒の弟子共、すべよくまかなひ春平にも内意を得、表向は「銀杏の前、御入り有りし」と披露すれば、方々の音物樽よ肴よ巻き物よ。太刀折り紙の馬代銀、五拾目がけの蠟燭の、明けぬ暮れぬと賑ひて、今日五日目のあさ上下。雜煮のこく餅子持ち筋、つき〳〵しくぞ見えにける。其日もやう〳〵傾く頃、「名古屋山三春平、お見舞ひ申す」と案内有る。雅樂の介出でむかひ、「先づ以て此度は、姫君樣丁簡うつくしく、おみやも念晴れ、元信心も落ち付き申す事、皆是貴公の御蔭門弟中も添く、悦び存じ候ふ」と、何れも禮をなしにける。「是は迷惑。元信爲めと存すれば、各同前の大慶。今日は五日目。五百八十の餅を搗いて、里歸りといふ事緣邊の式法なれども、親元は遠所祝ふて我らが宅へ呼びたいと、葛城も申すが、ちよッと尋ねて見たい」とあれば、雅樂の介打ち笑ひ「ヤ尋ぬるに及ばず。頓て別るゝ日切りの女夫。寢いる間も惜しいとて、顔と顔とを突き合はせ、頭もふらぬしたゝるさ。里歸りは扨置き、臺所へも出られませぬ」。「夫はさやうな喰ひつきやう。さうして互ひに飽かせたら、跡の爲めには珍重。元信筆は達者なり。一日一夜に半年の、仕事は出來やう」と笑ゝる。斯かる所に無紋の色に淺黄の上下。編笠取ッて入るを見れば、舞鶴屋の傳三郎。出口の與右衛門打ちしをれたる風情なり。名古屋を始め門弟中與さめて、「是傳三。あんまりそれは粹

○骨佛　死佛。

過ぎた。聞かぬといふ事有るまい。葬禮の戻りに祝言の家へ、立ち寄るは無禮すぎたふだうけ。笑ひしない。歸れ〳〵」と苦々しく叱られ、鼻打ちかみて目を擦り〳〵、「姫君樣の御祝言と、遠慮致して見ましたが、わきから沙汰が有ッては、お恨みの程もいかゞと、女房が心を付けまして、今日七日め の墓參り。ついでながらのお知らせ。常々氣だてが結構で、おみやとはいはず佛々と申したに、あッたら佛を厄體も無い。骨佛にしてのけた」と、さめ〴〵とぞ泣きゐたり。人々更に誠とせず、「酒に醉ふたか狂氣か。みやは少し樣子有ッて姫君に換はり、四郎二郎と祝言し、五日前より奥に夫婦ならんでおや。たはけた事吐すまい」。「ヤ私をたはけに爲さるゝか。七日前に死んだ人が、五日前に來るものか。蓮臺寺專譽樣の御引導、舟岡山で灰になし、和國樣をはじめ女郎衆から名代に、禿共が灰寄せ、五輪まで立てたもの。なんの偽り申しませう」と、眞顔にいへば人々も、ぞッと怖氣も立ち寄りて、「して眞實か。どうして死なれた事ぞ」といへば、「眞實かとはいとしぼげに、常が癪持ちぶら〳〵とはしながら、一日と寢られた事もない人が、いつぞや葛城樣身請けの晩から、頭痛すると て引き込んで、それから枕上がらず、次第に重ッてくる程に、お客衆のひき〳〵で、柳原の法印さま半井の御典藥。幸ひと和國樣へ對馬の客から參ッた朝鮮人參。尾張大根見るやうなを、きざみもせず丸口。人參のふろふきを、一期の見はじめ。人參でも鐵砲でも、いかな咽を通すにこそ。最う無いに極はまッて私を呼びよせ、今までは隱した。遠山といふた昔から、四郎二郎樣と夫婦の契約し、目出度ふ願ひ叶ふたら、女夫づれで熊野參りを致さうと願ひをかけ、此笠の紐も手づから絆けまし

た。これを着て四郎二郎様、熊野へ参ッて下され。死しても心は連れ立たう。書き置きもしたいが、口でさへ盡くされぬ、筆には中々廻らぬと、目をほッちりと開いて、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と、七八遍は聞きました。なう肝心の時には、念佛といふ物も、何のごくに立ちませぬ。南無阿彌さへすう〳〵、陀佛さへ遣らずに、轉りとッて行きました」と、喚と叫べば人々も、扨は定よと手を打ッて、皆々袖をぞ絞らるゝ。名古屋も呆れられしが、「疑ひもなく夫にひかるゝ魂魄、假に形を見せけるぞや」さもあれ樣子を尋ぬる爲め、「腰元衆〳〵」呼びければ。「あい」と答へて奥より出づる。「なんとおみやは讒嫌はよいか」と問ひければ。「ア、讒嫌よう、にこ〳〵笑ふてムんする。さりながら、志し有りとて、酒も魚も口へ寄せず、爐の香の煙り絶やすな。煙絶ゆれば爰にある事ならぬとて、お寢間の内は抹香で、ふすぼります」といひければ、「して四郎二郎はどうしてぞ」。「ア、さればおみや樣の頼みで、お寢間の襖に熊野山の、繪を遊ばいてムんする」。「扨はみやの幽靈疑ふ所もない」とあれば、腰元驚き「ア、怖や。なう知らいで傍に居ました」と、膝の傍に這ひ寄りて、身を屈むこそ道理なれ。雅樂の介心を決せんと思ひ、「さもあれ狹野干の業も有り。誠の死したるまぼろしは、形あれども髪映らずと承る。某參り直に逢ふて笠を渡し、灯火をたて實否を試し申すべし。かた〳〵は小庭より、障子の影を御覽あれ。假令怪しい事有りとも、必ずわッといふまいぞ。何が恐い事有る」と、誰れも口では夕暮れや。小氣味のわるき雛が本、軒に數數の餅つきも、其前垂の名殘かと、心細くも佇ずめり。雅樂の介何心なき調子にて、「是は暗いお座敷。みや樣はそれにか。火を灯したらよう

ムらう」と云ふ聲す。「ア、さればいな。心の迷ふた身の上、闇に闇を重ぬるつらさ。晴らして欲しや」と夕顔の、黄昏照らす行燈の、障子に映るを能く見れば、元信は元の人體にて、女の影は五輪とみやが物ごしばかり。人間の地水火風の風もろき、木の葉に結ぶ陽炎の、露の姿ぞ哀れなる。四郎二郎はらう〳〵と、勞れ詫びたる如くなり。雅樂の介猶訝しく、「此菅笠は里の便りに參りしが、何に入る事ぞ」と云へば、「なう嬉しや〳〵。ほんに是が欲しかッた。私が熊野を信ずる事。敦賀では遠山、三國での名は勝山、伏見へ賣られて淺香山、山と云ふ字を三度つき、それ故に木つぢでは三ッ山と付けられし。思へば熊野三ッのお山の名を穢し、牛王の咎めも恐ろしく、お主と一所にして下さらば、連れだちお禮に詣でませう、と笠の紐まで絡げ置きし。追ッ付け別るる身なれども、一日でも斯う添ふからは、願ひは叶ふた同前。神佛に嘘はないと、此襖戸にお山の繪圖を頼みまし、參ッた心で拜まんと、思ふ所へこの笠は、ぞうした便りに來た事ぞ。余の事は何もいはずかし。又の便りに傳三殿へ、假令いかなる事有りとも、四郎二郎樣へ歎きの惡かる事などは、知らせまして下さんすなと、よう言ひ届けて下さんせ」と、苦の下まで我夫、悼はる心ぞ不便なる。「ア女夫連れで參りませう。此方さまは勝手へいて、後夜の鐘の鳴るまで、念佛きらして下さんすな。似合ふたか知らぬと、笠打ち被たる五輪の影。五つの假の夢現。余所の事ではなく〳〵も、元の座敷へ人々は、宗旨〳〵の手向け草。題目眞言念佛の、廻向に更くるも……

三熊野かげろふ姿

「あら惜しやあたら夜や。夫婦の中に咲く花も、一夜の夢の眺めとは、知らぬ男の悼はしや」と、泣く
より外の事は無し。昔の朝の化粧に、髪にたいたり裾にとめ、そよとふくさの色風も、今焼香に立つ
煙り。反魂香と燻ゆるかや。香爐の灰の灰寄せも、順をいふたら此方さんを、われこそあらめ逆さ
まの、水の流れの身のならひ。ところ〴〵の死に水を、誰れに取られん淺ましと、よそにいひなす言
の葉を、世に亡き人とはそも知らず、ァ、いま〳〵し。老木の末の思ひ置きはよし無やな。こちもそ
なたも若松の、千代の盃ざんざ。濱松の音。七本松の七本を、女は卒塔婆に數ふれど、男は今日の
七五三。嫁入事せし戯れも、今は誠と嬉しげに、手を引きあふて笑ひ顔。我は朝顔しほみゆく、花の
上なる露とは知らぬ果敢なさよ。月は缺けても三つの山。婆娑の便りは片便宜。文も屆かず言傳て
も、いはで心の熊野路や。照手の姫のやつれ草。常陸小はぎも夫故。身を旅籠屋の水たなの、はし
に目鼻のかきあみを、夫とは更に白糸の、繰はきたなきつち車。心は物に狂はねど、姿を物にくるは
せて、ひけや〳〵此車。えいさらさら〳〵笹の葉に、死出の旅路の後世の友。一引き引けば千僧供
養。二引き引けば萬能の、藥のゆもとて聞くからに、四百四病は消えもせん。骨になッても癒ちぬ
は、私がそ様を戀ひやまひ。戀はる心を案じては、神の御名さへぞッとする。飛鳥の社濱の宮。王
子〳〵は九十九所。百に成ッても思ひなき世は和歌の浦。梢にかゝる藤代や。岩代峠汐見坂。書
き寫す繪は殘るとも、我は殘らぬ身と聞けば、愛しやさこそ我夫の、涙にくれて筆捨て松の、再は袖
にみつしほの、新宮の宮居かう〳〵と、出島による磯の浪。岸打つ波は普陀落や。那智は千手觀

○三つの山　即ち三熊野の山。「滿つ」に掛けた。

○さらさら、笹同聲の文飾。

世音。古へ花山の法皇の、后の別れを戀ひ慕ひ、十善の御身をすて、高野西國熊野へ三度、後生前生
の宿願かけて、發心門に入る人は神や受くらん。御本社の誠證殿の階を、おりて下りて待ちうけ
悦び給ふとかや。我はいかなる罪業の。其因緣の十二社を、廻る輪廻を離れねば、疑ひ深き音無河。
流れのつみをかけて見る。ごうの秤のおもりには、それさへ輕き磐石の、岩田川にぞ着きにける。
垂跡和光の方便にや、名所〳〵宮立ちまで、顯はれ動き見えければ、元信信心肝に染み、我識く筆と
も思はれず目をふさぎ、「南無日本第一大靈驗。三所權現」と伏し拜み、頭をあげて目を開けば、南無
三寶。先に立ッたる我妻は、眞逆樣に天を踏み、兩手を運んで歩み行く。はッと驚き「是なう淺ま
の姿やな。誠や人の物語り、死したる人の熊野詣では、或ひは逆さま後向き、生きたる人には戀はる
と聞く。立ち居に付いて宵より、心にかゝる事有りしが、扨は和女は死んだか」と、溢し初めたる涙
より、盡きぬ歎きと成りにけり。「恥づかしや心には、陸地を歩むと思へども、逆に見えけるかや。
四十九日が其中は、婆娑の縁に結ぼほれ、姿を見せて契りも物を、妹脊の中に怖氣立ち、愛想も盡き
ばいかゞせん。戀はる姿のつゝましや。逢ひ見る事も是限り」と、泣く聲ばかり身を絞る。涙の霧
や戀慕の霞。迷々朦々朧々として、見えつ隱れつ灯火の、油煙に紛れ失せにけり。元信五體をかッ
ばと投げ、「よし雨露に朽ち果てし、骸骨なりとも抱き留め、肌身に添へん夫婦の友。何に恐氣の有
るべきぞ。現世の逢ふ瀬かなはずば、又に死して此世を去り、極樂諸天はおろかの事。假令へ地獄
の底までも、誘へ伴なへ連れ立て」と、座敷のくまく〳〵扉風押し退け障子を開き、「やれ遠山は何方に

○遣り戸　遣り手と同聲の文飾。上の「我妻と」の語に「妻戸」と云ひ掛けた其戸の縁で出した。「妻戸」は左右に引く戸。「遣り戸」は溝が有ッて引くやうになッて居る戸。

ぞ。みやはいづくに我妻」と、明くる遣り戸に遣り手の形。現はれ見えしぞ哀れなる。何時慣はしの世渡りや。阿波の鳴門は超ゆるとも、此浮き舟の浮き流れ、何と遣り手の身ぞつらき。まふの忍び路關となり、文の通ひのさかも木に、人の思ひは戒しめながら、我身は包む戀ひ衣。赤前垂れの火焔に焦がれ、三途八難の惡趣にだす、苦しみの涙目を眩まし、生死を分かぬ迷ひの雲。所々に名を變へて、かず〳〵色を飾りし報い、身體一つが五つに分かれ、五輪五行の苦をうくる。如何なる世にか脫かれんと、叫び憑く袂の影。艷色あでなる二人の遊女。左右に別れ見えたるぞや。「是こそは其はじめ、白粉紅花に粧ほひし、後世の道には遠山が、あだの情の釣り針に、人を敦賀のうき姿。松と言はれし松が枝は、四大のもとの木に歸るなり。次ぎに三國へかひ流されて、姉女郎や朋輩に、賣り負けまいぞ勝山と、名をかへ風を變へけるも、戀ひに我をはるがまんの山。麓の塵のちりひぢの、土にかへすを御らんぜ」と、夕月出づる如くにて、後に高くあらはれしは、「流れ漂よふ川竹の、伏見に來ての淺香山。流石所も極樂を、願へと告ぐる擅木町。安養世界の夜見世には、灯すべき灯し火なく、吹き消す風も吹かすして、一心の火をもとの火に、返す間の影ぞかし。前に立ッたる花すゝき、はの〳〵見えしまぼろしは、木辻の町の三つ山と、呼ばれし時の面影が、今は名のみに奈良坂や。この手彼の手の枕の酒、みぞれ霰と隔つれど、解くれば同じかすり井の、水をかりなる戲れも、遂に迷ひのみせきにからみ、木は執心の斧にくだかれ、土は逢ふ夜の壁とへだゝり、火は又三世の縁を焼く。四大の四句を此身一つに重ね重ねて、空より出でて空に入る、報いも罪も色も情も、迷ふも悟るも待つ夜の鐘も、別れの鳥の聲々までも、地水火風の五つの玉の緒、只一筋に結びあひたる姿なるぞや。

なう〳〵。惜しみても猶惜しまるゝ。名殘も綠もつひに行く、道ならばいざ伴なはん。とは思へども夫の命ながゝれと、祈る心もさま〴〵に、皆忘執のあだ夢と、さめざめもろき涙の露の、玉の臺の床の內、蓮堤の蓮片しきて、永き契りを待つやや。待たんしるしはこれ。此一間卒塔婆永離三惡道。南無や三熊野本地の三尊。迎へ給へや導き給へ」、唱ふる聲は伏せ屋に殘ッて、形は見えず消えにけり。信元抱き留めんと、縋りつけば影もなく、うんと仰向に目くるめき、忽ち息切れ絕え入りしを。名古屋揚げ屋門弟等驚き騷ぎ、藥さき〳〵呼び助け、やう〳〵一間に休めけり。夜もほの〴〵と明け行く頃、管領の雜式不破の道犬、長谷部の雲谷誘引し、伴左衛門が酒漬けの、死骸を舁かせやや〳〵と亂れ入り、「此所に名古屋山三春平や有る。官領よりの御下知有り、對面せん」と呼ばはッたり。名古屋遲々せず出でむかへば、雜式鉄鞭引き鳴らし、「不破の伴左衛門をお手前が、手にかけし事紛ぎれなき上、父道犬願ひによッて、吟味を遂げらるる處、盜賊の罪逃れがたく、曲事に行なはるる條、召し捕り來れとの御錠、尋常に繩にかかられよ」とぞ仰せける。名古屋少しも騷がず、「懷中より。忘八の手形數通の文を取り出だし「斯樣の愚蒙の返答は、申すも似合はぬ事ながら、片口の御裁斷、如何にしても輕々し。これ此手形を御らんぜ。葛城事は三月二日に親方が暇を取り、拙者が本妻。借宅見たての間、揚げ屋に預け置きし所、伴左衛門數通の艷書。斯くの通り不義者の妻敵なり。此方より願ひを申し、親道犬をも罪科に沈めんと存ぜし折りから、却ッて我らを召し捕れとは、定めて

それは各の聞き違へ。夫なる道犬か、雲谷が事でがなムらう。遁げも走りもせぬ男。聞き直してお出でなされよ」と、大様にこそ答へけれ。道犬つッと出で、「汚ない〳〵こりや山三。悴伴左衛門蔦城を請け出す手付けとして、金子五百両懐中せり。妻敵討ちは聞こえたが、なぜ金子は盗んだ。惣じて盗みと云ふ物も、盗む時はうまい事。顕れた時は辛い苦い物ぢやげな。ヤアなんと、脱るる所は有るまい」と、證據なき云ひ分ながら、名古屋も相手は死人なり。何を證の云ひ譯と、苦〳〵しくぞ見えにける。四郎二郎斯くと聞くより飛んで出で、「いや〳〵兎角の評議は御無用。盗人ならば盗人。切り取りならば切り取り。科人は狩野の元信。縄は百筋千筋でも、お掛けなされ」と大小脱いで、投げ出ださんとする所を、名古屋押さえて「暫らく〳〵。御心底忝い。去りながら、それまでに及ばぬ事。平に〳〵」と推し留め、「是道犬。某盗人でない。申し譯が立つならば、己又侍ひに盗人といひかけした、其科はなんとする」。時に雲谷進み出で、「ヤサ山三。盗人でない云ひ譯たてば、命を助かる其方が仕合はせよ。道犬公は一子を殺され金子を取られ。何の過り有るべき」と、いはせも果てず「ヤうぬらが存ずる詮議にあらずっ お屋形にては一つ間へさへ入らざりしを忘れたか雲谷。此詮索相濟んで、己奴も遁がさぬ用心せよ」と、睨み付くれば道犬、「山三〳〵。脇道へすべらすやない。五百両の金子を身に付けた伴左衛門。切りは切ッたが銀は知らぬと云ふとても言はせうか。盗人で無いならば、云ひ譯せよ」と詰めかくる。「オヽ言ひ譯はして見せん。其跡は合點か」。「ヤ先づ云ひ譯から聞かんす」と、せりあへば雑式「是々名古屋。問答までも無し其爲の我々。人にこそよれ両

○脇道へはすべらすまい　餘事に渡らせるなとの義。

方共に弓馬の身がら。盗賊といひかけ分明ならぬ訴訟。且は上を掠むる越度。云ひ分けたたば道犬は、存分に許らふべし。又盗賊に極はまらば下知の如く、お手前に縄をかけ申す」と理非明らかに述べらるる。名古屋勇んで罷り出で「名古屋山三春平は、外の事は不重寶。傾城の買ひやうと、人切るやうは大名人。恐らく宗匠ござんなれ。それ〳〵伴左衛門が死骸を是へ出されよ」。「心得たり」と役人共、封切りはぎ酒漬けの、死骸は更に色變はらず、只其時の如くなり。名古屋絞のそば取ッてちか〳〵と寄り、彼を討ち〳〵は先月廿日、曉月の時鳥、名乗りかけしは欺さぬ證據。向かふ疵に切り伏せ、とゞめを刺さんとのッかゝり、胸押し開けば、懐中に金子有り。此儘置いては誠の盗人。來ッて捜し取らんは必定。時には山三が盗みしと、後日の難を察せし故、鳩尾さきを刺ッて、金子は彼奴が身體の内、肺の臓に押し込んだり。五臓の中にも肺はかね、同氣もとめて朽ちもとろけもよも爲まじ。いで見せん」と手を伸し、ぐッと入れ、朱に染みたる鈍子の財布。引きずり出して「是見たか。是でも山三が盗人か。弓矢取る身の仕方を見よ」と、道犬にはッたと投げ付け、死骸を踏まへつゝ立てば、雑式を始めとして、元信其外門弟等、「出來た〳〵。あッぱれ〳〵御分別。後學なり」と勇みをなす。道犬は言句も出ず、雲谷はひるまぬ貌、「相手の言ひ譯たつからは、此方は、切られ損。お歸りなされ」と立つ所を、二人の雑式飛びかゝり、鐵棒ふり上げ打つほどに、面も眉間も打ち裂かれ、胴骨砕くるばかりなり。頓て繩をかけさせ、「道犬親子は世間流布の重罪。上を犯す科といひ、只今の始末諸人の見せしめ。親子諸共獄門に曝らさるべし。それ〳〵死骸の首をうて」。承ッて下

○七百町　御朱印附きで七百町の持參との義。
○墨筆　畫師の緣語。知行に「住み」と掛けた。
○くま筆　畫の暈取りをする筆。
○泥引き筆　金泥銀泥を引くための筆。
○夏毛　鹿の毛の夏の半過ぎに、黃色になッて斑の出た頃の稱へ。ならび「無い」と掛けた。
●下の卷

郎共、搔き首にして髻をからげ、道犬が首にかけさせ、「扨雲谷は當座の慮外。罪の輕重如何あらん」と有りけれども、元信春平詞をそろへ「元は彼奴が惡逆。騷動の始めなり。古主の屋形に訴へ、長袖なれば流罪に行なひ申したし」。「尤も〳〵。二人共に牢屋へやれ」と、引き立つれども脛立たず、「ヱ、卑怯者歩まずば、任せて桶にうち入れて、生きながらの酒びたし。地獄の鬼の中じきざい」と、戲れ笑ひ歸らるゝ。悅ぶ中にも元信は、憂へに沈む那智の瀧。亂るゝ色を勇めんと、謠へや謠へ雅樂の介。其外の門弟中、憂ひは憂ひ祝義は祝義、未來の嫁入は一七日。現世の嫁は七百町。ながく知行に墨筆や。家を彩色く繪具筆。くま筆わら筆泥引き筆。その筆先に金銀も、湧きて和泉のつぼのゐん。ならび夏毛の狩野の筆。末世の寶となりにけり。

下の卷

凡そ繪の道には六つの法有り、長康張僧陸探の三人を、異朝の三祖と學びきて、和國に筆の色をます、狩野の四郎二郎元信、天然彩墨の妙手を得て、後柏原後奈良の院正親町の帝、三代四代の聖朝に仕へ、祝髮の後越前の法眼、玉川齊永仙と號し、末世の今に至るまで、古法眼と賞歎するは、此元信の筆とかや。既に大永七年新帝、大嘗會悠基主基の御屛風を書き、從四位の下越前の守に補任せられ、多數の門弟上下の供人、肩をいからす山科や、土住の將監光信の、山庄に案內せられける。將監夫婦出で向かひ、「今宮祿に秀で給ふを見るに付き、娘が事のみ忘れがたなふ候ふ」と詞に先立つ涙なり。「仰せの如く某とても、彼の人を先立て、世に交る所存なけれども、將監殿を世に立てんと、惜しから

ぬ世も捨てかね申せし所に、次第〳〵に登庸し、大嘗會の御屛風を仕り、叙爵に至る朝恩の上、貴公の勅勘訴訟叶ひ、向後一家の結びをなし、相並んで繪所の門を開くべしとの、宣旨を蒙ふり參りたり。親御達を世にたてなば、草葉の蔭の娘御の、一つの迷ひも晴るべきかと、かたの如くに禁中方、願ひ取りなし候ふと、語り給へば將監夫婦、「有り難や忝や。歎きの中の悅びとは、我等が身にて候ふ。貴殿の御ひけいにて勅勘を免さるゝも、一つは娘が光りぞ」と、なほ〳〵落涙せきあへず、斯かる所へ名古屋山三春平、樽肴黃金時服さま〳〵音物持たせ、將監に對面有り、「雲谷不破が不届き故、光信我等両人永々沈輪致せし所、善惡の是非落居し、三人の惡黨死罪流罪の嚴科に處せられ、某も先知に復し候ふ。其節は姫君の御事に付、御じぶんさま〳〵御懇志の趣き。主人御屋形滿足致され、先づ當分お禮申さるゝ印目錄の通り。微少ながら」と述べければ、「御使ひがらと申し、御丁寧なる御事と。迭の禮儀淺からず、暫らく時こそ移りけれ。稍有ッて名古屋、「ヤア承れば娘御遠山。忘八の手前約束の年明けて、今日是へ歸り候ふ由、さぞ〳〵お悅び推量致した」と、いへども人々飮みこまれず、兎角の返答なき所に、供の者共聲々に、「遠山樣早あれまで見えまする。迎ひにお出でなされませ。ありや〳〵振ッてござるは」と、云ふても更に心得ず。死してほど經る遠山が、歸らん樣は涙ながら、立ち出で見やれば屋形の姫君銀杏の前。髢いれずの二つ櫛、鴨の羽なりのはなは袖、供の又平日拆傘。さしづめ香車は女房なり。いつ慣らはしの道中も、心つければ振りやすい。ふれ〳〵雪の遠山が、御影もよもや是爰が、おれが內かとつッと入り、「なう父樣母樣今歸ッたわいな。久しう

て逢ひやした」と、どんと座りし居ずまいは、禿だち見る如くなり。爺は不審晴れず、名古屋は元より合點なれば、「ヲヽいづれもの御不審は尤も〳〵。ながう申せば段々あれども、必竟姫君を將監殿の娘にして、死したる人が二度蘇生られたと覺し召し、元信にめあはせあれ。姫君も一度は大事の命を助けられも爺なれば、斯うなうてから親同前。なまなか儀式だてしては、養子といふで面白なさ。又平夫婦と談合して、血をわけた遠山に、いたしたが我らが趣向。取り組みは御屋形の、御意でムると小短く、辭も聞こえる道もたつ、銀遣ふたるしるしなり。將監夫婦も悦び涙、「少さい時のお光が成人顏。見て嬉しい」と抱き付いてぞ泣き給ふ。名古屋重ねて懷中より一通を取り出し、「是は田上郡七百町の御朱印、永代知行なされ」と頂戴させ、「扨田上郡は給所〳〵の入り組みにて、地わり中々むづかしし。某が父主計の介、天文の暦算に達し、鼠十露盤と云ふものを巧み、積もり物割り物人の聲にしたがッて、十露盤の表明白に顯はるる。是を以て勘へば間づもり知行高。刹那に相濟み申すべし」と有りければ。元信聞き給ひ「それに付き延喜の帝、陸平永貴駒引き錢を鑄させて、民を賑はし給ふ其駒は、晉の韓幹が馬を寫されし。我又其駒の國を傳へ覺えて候へば、駒引き錢を鑄て領內を賑はし申すべし」。是は珍重。然らば善は忙がしや。嫁入り婿入り國入りして、本祝言の儀式は重ねて。先づ〳〵今宵は祝ふて、ざッと目でとうそろべく、そろばん粒に萬代積もるぞ豐なる。年は子の年大黑女夫、力次第に子孫も湧き出る。地からは五穀手からは金が、湧き出で〳〵子々孫々まで、長久榮花の家繁昌は、君が惠みの威德なり。

○善は忙がしや「善は急げ」の俚諺から其場の忙しい有り樣へと云ひ掛けた。
○嫁入り婿入り、國入り　共に同聲の文飾。
○そろべく　上に「さッと」と有る故、尋常に「候ふべく」とは曰はず、是をも省略して「そろべく」とした。其同聲で下に「そろばん」を出した。

國性爺合戰

第一

花飛び蝶驚げども人憂へず、水殿雲廊別に春を置き、曉日よそほひなす千騎の女。紅唇翠黛色をまじへ、土も蘭麝の梅が香や。桃も櫻もとこしへに、花を見せたる南京の、時代ぞ盛り盛んなる。抑〳〵大明十七代、思宗烈皇帝と申し奉るは、光宗皇帝第二の皇子、代々の讓りの糸筋も絕えず亂れぬ青柳と、靡き從ふ四方の國。寶を積んで貢ぎ物、歌舞遊宴に長じ給ひ、玉樓金殿の中には三夫人、九嬪二十七人の世婦、八十一人の女御有り。凡そ三千の容色、顏を悦ばしめ、群臣諸侯媚びを求め、珍物奇觀の獻げ物、二月中旬に瓜を獻ずる棗花なり。爰に三千第一の御寵愛華清夫人、去年の秋より懷姙有ッて、此月御產の當たり月、君の慮感臣下の悦び、聖壽四十に及び給へども、世繼ぎの太子まします。かねて天地の御祈り此度に驗有り、王子誕生疑ひなしと、產殿に名珠美玉を列ね、產衣に越羅蜀錦を裁ち、御產今やと用意有る。中にも大司馬將軍、吳三桂が妻柳歌君、此頃初子を孕産し、殊に男子の乳なればとて、御乳付の役人、其外乳母侍女阿監、役々の官女附き添ひて、掌の上の珊瑚の珠とぞかしづきける。時に崇禎十七年中呂上旬、韃靼國の主順治大王より使を以ッて、虎の皮豹の皮、南海の火浣布、到支國の馬肝石、其外邊國島々の寶、庭上に列べさせ、使者貝勒王謹んで「韃靼國と大明國、往古より威を勵み、國を爭ひ、軍兵を動かし、鉾先を交へ、互に仇を結ぶ事、且つは隣國

(一)系筋、絕えず、亂れぬ、青柳　共に緣語。
○靡き　青柳の緣語。
○越羅　越國產の羅。名所。
○蜀錦　蜀國產の錦。名所。
○火浣布　即ち石綿。

の好しみに違ひ、且つは民の煩ひたり。我が韃靼は大國にて、七珍萬寶くらからずと申せども、女の容餘國に劣ッて候ふ。此大明の帝には、華清夫人とて隱れなき、美人ゐはする由。我が大王戀ひ焦がれ、深く所望に候へば、此方へ送り給はッて、大王の后と仰ぎ、大明韃靼両後親子の因をなし、長く和睦致さんと、かたの如くの御貢ぎ物、數ならねども鎭護大將貝勒王、后御迎ひのため參朝」とこそ奏しけれ。帝を始め卿相雲客「今に始めぬ韃靼の難題。すは諍亂の基ぞ」と、宸襟安からざる所に、第一の臣下右軍將李踏天進み出で「今までは國の恥辱を讀み秘し置き候ふ。去んぬる辛の己の年、北京五穀實らず、萬民饑渴に及びし刻、某密に韃靼を頼み、米粟數百萬石の合力を請ひ、國民を救ひ候いき。其返報に何事にても、韃靼の望み一度は必ず協へんと、堅く契約仕る。君今四海を保ち、民を治め給ふも、一度韃靼の情によッてなり。恩を知らぬは鬼畜に同し。御名殘はさる事なれども、疾く〳〵后を送られ然るべし」とぞ奏聞す。大司馬將軍吳三桂たいろう殿にてどッくと聞き、御階欄干踏みちらし、李踏天が膝元にどうと座し「不便や御邊はいつの間に、畜生の奴とは成りたるぞ。かたじけなくも、大明國は三皇五帝禮樂を興し、孔孟敎へを垂れ給ひ、五常五倫の道今に盛なり。天竺には佛因果を說いて、斷惡修善の道有り、日本には正直ちうぎやうの神明の道有り。韃靼國には道もなく法もなく、飽までに喰ひ暖かに着て、猛き者は上に立ち弱き者は下に付く。善人惡人智者愚者の別ちもなく、畜類同然の北狄。俗よんで畜生國と云ふ。如何に御邊が頼むとて、數百萬石の米穀を合力して、此國を救ひしとは不審し〳〵。民勞れ饑ゑに及ぶは何故ぞ。上によしなき奢りを

勸め、宴樂に實を費やし、民百姓を責めはたり、己が榮花を事とする、其費えを止めたれば、五年や十年民を養ふに、事をかゝぬ大國の德。叡慮も計らず、公卿僉議にも及ばず、懷姙の后を輕々しく、夷の手へ渡さんと云ふ、心底聊心得ず。契約は御邊との相對。上に知ろしめさぬ事。畜生國の貢き物。內裏の汚れ取ッて捨てよ官人共」と、北狄を事ともせず、國の威光を見せたるは、管仲が九度諸侯の會も斯くやらん。韃靼の使ひ貝勒王大きに怒ッて「ヤア〳〵大國小國はともあれ。合力を得て民を養ひし恩も知らず、契約を變ずるは、此大明こそ道もなき法もなき、手に足らぬ畜生國。軍兵を以ッて押し寄せ、帝も后も一くるめ、我大王の履持ちにする事、日を數へて待つべし」と、席を蹴たて立ち歸る。李踏天引き留め「暫らく〳〵。憤り尤も至極せり。某先年貴國の合力を請ふて、一粒も身の爲にせず、國を助けしは忠臣の道なるに、今又約を變じ兵亂を招き、君を苦しめ民を惱まし、剩へ恩を知らぬ畜生國と云はせんは、御代の恥ぢ國の恥ぢ。此度臣が身を捨てて、君を安んじ國の恥ぢを淨むる忠臣の仕業。是見給へ」と小劒逆手に抜き持ち「弓手の眼にぐッと突き立てて、眼蓋を懸けてくるり〳〵とくり出だし、朱に成ッたる睛ひッつかんで、「なう御使者。兩眼は一身の日月、左の眼は陽に屬して日輪なり。片目なければ不具者。一眼をくッて韃靼王に奉る。國の恩を報ずる道を重んじ、義を守る大明の帝の、忠臣の振舞ひ是候ふ」と、笏にするて差し出せば、貝勒王押しいたゞき「ア、天晴れ忠節や候ふ。只今吳三桂の云ひ分にては、いやとも兩國權を爭ひ合戰に及ぶ所、天下の爲に身を捨てゝ、事を治め給ふ事神妙〳〵。忠臣とも賢臣とも申すにも餘り有り。后を迎へ取

ッたるも同前。我大王の敵愾、使ひに立たる某も、面目是に過ぐべからず。早お暇」とぞ奏しける。

敵慮殊にうるはしく、李踏天が眼をくりしは伍子胥が餘風。呉三桂が遠き慮りは范蠡が趣きあり。兩臣まつりごとを糺す我國は、千代萬代も變はるまじ。鞨靼の使ひは早本國に返すべし」と、宴樂殿に入り給ふ。眞に佞臣と忠臣の、面は似たる紛ぎれ者、目きゝを知らぬ南京の、君が榮花ぞ例なき。

爰に帝の御妹、梅檀皇女と申せしは、未だ御年も十六夜の、月の都の宮人の、胤や此世にふる露の、玉をのべたる御姿。管弦の道文の道、文字も働く口すさみ。日本で歌と云ふげなが、男女を和ぐと や。爰にも戀ひの紹介は、戀はらぬものと詩を吟じ、年より老し御心。兄帝の奢りのさま、色にふけり酒宴に誇り、朝政事し給はぬ御意見の種にもと、行儀正しき御身持ち。時の女官召し寄せて、浮き世咄しも囁きの、耳は戀ひする目に睨む。心が伽羅の燒きさしの、思ひ埋みてあかさるゝ。「長生殿の方より出御なり」と呼ばはッて、二十限りの后達二百人、梅と櫻の造枝、百人づゝ片分けて振りかたげ、左右に召し具して入り給ひ、「なう妹君。我れ萬乘の位につき、臣下多き其中に、右軍將李踏天は遂に朕が命に背かず、明け暮れ心を慰むる第一の忠臣。御身に心を懸くると聞く。幸ひ朕が妹聟にせんと思へども、御身更に承引なく、今日までは打ち過ぎたり。然るに此度鞨靼國より、無體の難儀を云ひかけ、既に合戰に及び、國の亂と成るべき所、呉三桂などが忠臣顏、口先の道理は誰れも云ふ事。李踏天が左の眼をくッと宥めし故、使ひも伏して歸ったり。國の爲君の爲身を捨て不具と成る、未代無双の忠臣、賞せずんば有るべからず。是非に朕が妹聟、北京の都を讓らんと約せしが、御

○伍子胥　支那戰國時代呉の夫差の臣。死に臨んで眼を括つて門上へ懸け、國の成行を見やうとした故事。

○范蠡　呉の敵越王の名臣。

身承引有るべしと、此花軍を催せり。賢女立てしてすん〳〵と、素氣なき御身が心を表し、梅花を味方に參らする。朕が味方は櫻花。女官共に戰はせ、櫻が散ッて梅が勝たば御身の心に任すべし。櫻が勝ッて梅花が散らば御身の負けに極まつて、李踏天が妻となす。天道次第線次第。勝つも負くるも風流陣。懸かれや懸かれ」と宣旨有る。下知に從ふ梅櫻、左右に分かッて備へける。勅諚なれば姫宮も、よし力なし去りながら、心にそまぬ妻定め。左右なう引くべきやうは無し。花も我身も咲きかけて、當今の妹梅檀皇女、縁の分け目の晴れ軍。大將軍は我なりと、名乘りも敢ぬかざしの梅。誰が袖ふれし梢には、むれ居る鶯の翼にかけちらす、羽音も斯くやと梅か香も、ふんふん打ち亂れ受けつ流しつ戰ふたり。姫君下知して曰はく、「柳うづまく木影には、風ありと知るべし。弱き枝には苔をもたせ、強に花を開かせよ。うつろふ枝を楷にかへて、互に力を合はすべし」と、花に慣れたる下知に由ッて、叫いて懸かれば花を踏んで、同じく惜しむ色ぞある。唯一文字に頭にさせば、二月の雪と散るもあり。落花狼籍入り亂れ、軍は花をぞ散らしける。豫て帝の仰せによッて、心を合はせし女官たち、梅方わざと打ち負けて、枝も花も折り亂され、むら〳〵ぱッと引きければ、勝つ色見せて櫻花、「ヤア姫宮と李踏天、御縁組みは極はまッたり」と、無數の女官同音に、勝鬨あぐる頻伽の聲、宮中ひゞき渡りしは、千羽鶯百千鳥、囀りかはす如くなり。司馬將軍呉三桂、鎧兜さはやかに出で立ッて、假月の戟會釋もなく振り廻し、梅も櫻もさん〳〵に薙ぎ散らし、御前に畏り、「只今玉座の邊に合戰有りとて、閧の聲殿中にひびき、宮中以の外の騒ぎによッて、物の具かため馳せ參じ候

○弱き枝には云云　花軍に比べて姫の俠骨を示す好文字。

○呉三桂が花軍に加はる所　又是真忠を三桂が示した事の第二。

へば、扨馬鹿らしや、御妹柳檀女と李踏天が縁定めの花軍とは、天地開けて此かた、斯かるたはけた例を聞かず。君知ろしめさずや。一家仁あれば一國仁をおこし、一人貪戾なれば一國亂を起すといへり。上の好む所に從ふは民のならひ。此事を聞きおよび、山がつ士民の嫁取り聟とり、爰にても花軍彼處にても花軍、喧嘩どうしやうの端と成る、花は散ッて打ち物わざ、誠の軍起こらん事、鏡にかけて見る如し。只今にも逆臣おこり、宮中にせめ入り、叫き呼ぶ聞の聲は聞こゆるとも、すは例の花軍と、走せまいる勢もなく、玉體をやみ〳〵と、逆臣の刀にかけん事、勿體なしとも淺ましとも、悔やむに甲斐の有るべきか。其逆臣佞臣とは李踏天が事。君は忘れ給ひしか。御若年の時、鄭芝龍と申す者佞臣を撰け給へと、諫め申すを逆鱗有り、鄭芝龍は追ひ放たれ、今老一官と名をかへ、日本肥前の國、平戸とかやに住まひ致すと承る。鄭芝龍がつたへ聞き、日本まで大明國の御恥辱ならずや。先年大明饑饉の時、李踏天が邪智を以て、諸國の御藏の米を窃み、君に憐みなき故に、おのれ韃靼の合力を受け、民を救ふと云ひなし、國中に散らし與へ、萬民をなづけ謀叛の膚をかためもと、知ろしめされぬ愚さよ。彼が左の眼をくりしは、是ぞ韃靼一味の相圖。御覽候へ南殿の額、大明とは大きに明らか也といふ字訓にて、月日をならべ書きたる文字、此大明は南陽國にして日の國なり。韃靼は北陰國にして月の國。陽にそむくして日に讐へし、左の眼をくッたるは、此大明の日の國を韃靼の手に入れん一味の印。使ひもさとくく其理を悟り、悦んで立ち歸る。精惡奸曲の佞臣、はやく五刑の罪に沈めずんば、聖人出世の此國、忽ち蒙古のいきに落ち、尾をふり皮をかぶらぬばかり、畜類の奴

と成り、天地の怒り宗廟の神祟りをなし、其罪帝の一身に歸せん事、拳を以て大地を打つには外るるとも、吳三桂が此詞は違ふまじ。怨めしの叡慮や」と、泣いつ怒ッつ理をつくし、詞をつくして奏しける。帝大きに逆鱗有り、「物しり顏なる文字の講釋。理を付けて云ふならば、白雪かへッて黑しともいふ義有り。皆李踏天を嫉みの詞。事もなきに甲冑をたいし、朕に近寄る汝こそ逆臣よ」と、立ちかかッて御足にかけ、吳三桂がまつかうを、踏み付け給へば不思議やな、御殿頻りに鳴動して、勅筆の額ゆるぎ出で、大の字の金刀點、明の字の日片、徽墨に碎け散ッたるは、天の告げかと恐ろし。吳三桂猶身を惜しまず、「ヱ、情なや、御眼も暗みしか。御耳も聾ひたるか。大の字の形は一人と書いたる筆畫。一人とは天子帝の御事。其一人の一てん取れば、帝の御身は半身。明の字に偏なければ、日の光りなき國はとこやみ。忝くも此あの額は、御先祖大祖高皇帝、御子孫繁昌御代萬歲を、宸翰をそめ給ふ、宗廟の神の御怒り恐しと思し召せ。道をただして非を改め、御代を保ちましまさば、君になげうつ吳三桂が一命、踏み殺され蹴殺されても厭はばこそ。土ともなれ灰ともなれ、忠臣の道は違へじ」と、御衣にすがり大聲上げ、涙を流し諫めしは、「代々の鏡と聞こえける。斯かる所に四方八面人馬の音、貝鉦鐘らし大鼓を打ち、閧の聲地を動かし、天も傾くばかりなり。思ひ設けし吳三桂、高櫓に駈けあがり、見渡せば山も里も韃靼勢。旗をなびかし弓鐵砲、內裏を取り巻き攻め寄せしは、潮の滿ちくる如くなり、寄せ手の大將貝勒王、庭上に乘り入り大音聲、「そも〳〵我國の主順治大王、此國の后華清夫人に戀慕とは謀略。懷姙の后を召し取り大明の帝の胤を絕やさん爲、李踏天が眼を

くッて一味の印を見せたる故、時を遷さず押し寄せたり。迎も叶はぬ呉三桂。帝も后もからめ取ッて味方にくだり、難波王の臺所につくばい、かし水でもすすッて命をつげ」とぞ呼ばはりける。「ヤア事可笑し百八十年、草木もゆるがぬ明朝を、攻め破らんなんどとは、大海に横たはる鯨を、蟻の狙ふに事ならず。あれ追ひ拂へ〳〵」と、駈け廻ッて下知すれども、我手勢百騎ばかりのかち武者ならで、公家にも武家にも誰れ有ッて、折り合ふ味方のあらざれば、拳しを握ッて立ッたる所に、女房柳歌君水子を肌に抱きながら、后の御手を引き立て「なう口惜しや御運の末。公卿大臣を始め雑人下郎に至るまで、李踏天に一味して、御味方は我々ばかり。無念至極」と切歯をなす。「ア、悔やむな〳〵云ふて益なし。但し后の胎内に、帝の胤をやどし給へば大事の御身。一方を切り抜けて君諸共に、某お供申すべし。其子も爰に捨て置き、お事は一先づ御妹を介抱し、かい道の港をさして、落ちよ〳〵」と云ひければ「心得たり」とかひ〴〵しく、栴檀皇女の御手を引き、金川門の細道を、二人忍びて落ち給ふ。「いで是からは大手の敵を、一當てあてて追ひ散らし、安〳〵落とし奉らん。御座をさらせ給ふな」と、言ひ捨ててかけ出で「明朝第一の臣下、大司馬將軍呉三桂」と名乗りかけ、百騎にたらぬ手勢にて、數百萬騎の蒙古の軍兵わたりたて追ん廻し、無二無三に切り入れば、韃靼勢も餘まさじと、鐵砲石火矢すきまなく、しぎよくを飛ばせて戰ひける。其隙に李踏天弟李海方、玉體近く亂れ入り、帝の御手を兩方よりしッかと取り、后夢ともわきまへず「天罰知らずの大惡人、御恩も冥加も忘れしか」と、趨り給へば「ヲヽ、己とても助けぬ」と、取ッて突きのけ氷の利劍を御胸に指しあつる。君は

怒れる龍眼に、御涙をかけながら、實に及のさびは及より出でて及をくさらし、檜山の火は檜より出でて檜をやく。あだも情も我が身より出づるとは、今こそ思ひ知られれ。鄭芝龍呉三桂が諫めを用ゐず、己等が諂ひにたぶらかされ、國を失ひ身を失ひ、末代に名を流す、口にあまき食物は、腹中に入ッて害をなすと、知らざりし我が愚かさよ。汝らも知る如く、夫人が胎内に十月にあたる我が子有り。誕生も程有るまじ。月日の光りを見せよかし。せめての情」とばかりにて、御涙にぞ暮れ給ふ。「ア、成らぬ〳〵。大事の眼を刮り出したは何のため。忠節でも義理でもない。君に心をゆるさせ韃靼と一味せん爲、眼一つが知行に成る。君の首が國に成る」と取ッて引き寄せ、御首を水もたまらず打ち落とし「ヤア李海方。此首は韃靼王へ送るべし。汝は后をからめ來れ」と、云ひ捨てゝ寄せ手の陣へぞ駈け入りける。司馬將軍呉三桂、敵あまた討ち取り、なんなく一方切りひらき、君を落とし奉らんと立ち歸れば南無三寶、御首もなき尊骸、あけに成ッて臥し給ひ、李海方后をからめ引立てり。「ヤアうまい所へ出合ふたな。我君の弔ひ軍、齋にこそ外れたれ、非時をくはう」と飛びかゝり、李海方がまつかう、二つにさッと切りわッて、后のいましめ切りほどき、涙ながら尊骸をかしなほせば、代々に傳はる御國ゆづり、御即位の印の印綬、御肌にかけられたり。「ヱ、有りがたし是さへ有れば、御誕生の若宮御位心安し」と、鎧の肌に押し入れ、一先づ后を御供せうか。先づ御からだを秘さうか」と、難儀は二つ身は一つ、打ち碎かんと敵の勢、一度にどッと亂れ入る。さしッたりと切り拂ひ、こみ入ればなぐりたと、打ち伏せ薙ふせまくり立て、走り歸ッて「今是れまで事急なり。

御死骸は兎も角も、一大事は御世繼ぎ」と、后の手を引き立て出づれば、此比生まれし我水子、乳房を慕ひわッと泣く。「ヱ、邪魔らしい然りながら、己も我が世繼ぎぞ」と、引きよせて戯の柄に、しッかと結ひ付け「こりや、父が討ち死にするならば、成人して若宮に、忠臣のねつきとなれ。我らが家の木まぶり」と、振りかたげてぞ。落人を切りぞくめんと敵の兵、したひ寄れば踏みとまり、切り捨て打ち捨て引きしほの、かいぞうの港に着きにける。是よりたいす府へ渡らんと、見れども折ふし舟一艘も、渚にそふて立ッたる所に、四方の山々森のかげ、打ちかくる鐵砲はよこざる雨の如くなり呉三桂は寶能き鎧ひ飛びくる玉をうけとめ〳〵、后を覆ひかこへども、運の極はめや胸板に、はッしと當たり玉の緒も、切れてあへなく成り給ふ。呉三桂もはッとばかり、前後にくれて立ッたりしが、「御母后は是非もなし。十善の御子胤を、胎内にてやみ〳〵と、泡となさんも云ひ甲斐なし」とて、劍ぬき持ッて后の肌押しくつろげ、脇腹に押し當て十文字にさき破れば、ちしほの中の初聲は、玉のやうなる男子親王。嬉しも嬉し悲しも悲し、やる方涙に母后の、袖引きちぎり押しつつみ、抱き上げしが「待て暫し、取り巻きたる四方の敵死骸を見付け、若宮を秘し取ッたりと、行く末までさがされては、宮をそだてんやうも無し」と、とッくと思案し、我子引きよせ衣裳をはぎ、宮に打ちかけまゐらせ、劍取りなほし、水子の胸先指し通し〳〵、后の腹に押し入れ「あッぱれ己は果報者。よい時生まれ合はせて、十善天子の御身がはり、出來しをッた出かいた。婆婆の親に心殘すな。親も心は殘らぬぞ」と、云へどもも殘る浮きなごり。鎧ひの袖に若宮を、包む涙にむせ返り、別れ行くこそ哀れなれ。

（二）夫呉三桂は世子、婁柳歌君は王妹梅檀女を聘る所自然らしく〳〵て巧みなる配合。

斯くとは知らず柳歌君、梅檀女をいざなひ、みなと口まで落ちのびしが、前後に敵みち〳〵たり。「ヤア是までぞのがるるだけ」と、繁る薦間をかきわけて、身を忍びてぞ隱れ居る。李踏天が侍ひ大將安大人、手勢引き具しぞッと駈け寄せ、今の鐵砲たしかに后か呉三桂に當たッたと覺えし」と、あたりを見廻し「こりや見よ。后をしとめたは。ヤア腹を切りさき、懷妊の王子まで殺した。忠節立てする呉三桂、主君を捨て名を捨てても命惜しいか。きやつは人前すたッた。此上は彼が妻の柳歌君。梅檀女を尋ぬるばかり、眼をくばれ高名せよ」と、四方に別れ走り行く。中にもがうだつと云ふがむしや者、手柄にせん」と、鎧の上に簑打ちかけ、あまの小舟に竿さして、入り江〳〵を漕き廻り、「此薦の蔭が氣遣ひな」と、押し分くる櫂のさき、柳歌君しッかと取り、力にまかせ跳ね返せば、舟縁を踏みはづし、俯伏にかッばと沈み、浮き揚がらんとする所を、櫂も折れよとたたみかけ、打てば沈み浮かめば打ち、息もつかせず泥龜の、泥を泳ぐが如くにて、水底くぐり打ち失せけり。「ヱ、無用の拔けかけ。殊に舟まで仰せ付けられた。渡りに舟とは此事」と、船中にかくし置いたる劍取ッて横たへ、梅檀女をのせ參らせ、我も乘らんとせし所に、處何より跋ひあがりけん、がうだつ鎧ひも濡れしづく、戟ひッさげて廿騎ばかり、餘すまじと追ひかくる。「ハヽいそがしや御覽ふッて待ちかけたり。がうだつ程なく駈け付け「にッくい女め。櫂でぶッた返報」と、長柄の戟追ッ取りのべて突つかくる。「ヱ、そッちから當てがふた此劍、こッちからも返報」と、切ッて廻れば廿

餘人、女ひとりに切り立てられ、陸にまぎへるあしべの鷗。一羽もたたず討たるも有り、いたでを受けて跳るも有り。柳厭君もがうだつも、數ヶ所の深手朱に成ッて、一村あしを押し分け〳〵、追ひ入り追ひ込み互のまなこに血は入ッたり。前後もわかぬ盲打ち、岸の岩角切ッ先に、雷光石火の命を限り、危かりける有り様なり。がうだつ戟も切り折られ、膝行寄ッてむんずと組み、柳歌君が持ッた る劍、もぎ取らん〳〵と、ねぢ合ふ足を踏みためず、のけさまにかッばと伏す。直ぐに乗ッてのッかかり、指し通し〳〵、首ふッつと掻き切ッて、にッこと笑ひし心の内、嬉しさ類ひ無かりけり。「なう〳〵姫宮様。お身には負傷も無かッたか。舟は其儘そこにか」と、躍ひ寄ッて、「此體では、船中のお供はならぬ。又敵が寄せ來れば、もうぞうも叶はぬ。潮にまかせいづくまでも落ち給へ。沖へ舟の出るまでは、此女が陸にひかへた。敵何萬騎よせたりとも、命限り腕かぎり、去りながら主從二度の對面は、御縁と命ばかりぞや。隨分御無事で〳〵。南無諸天諸佛、別して八大龍神。萬乘の君の姫宮の、御舟を守護し給へや」と、舟ばり取ッておし出だせば、折りしも引きしほの名殘を何と栴檀女、涙しぼるる汐風に、龍神納受の沖つ風。沖をはるかに流れ行く。「あら心やすや嬉しや。よし此うへは生き延びても我身一つ。死んでも誰れを友ちぞより。生死の海は渡れぞも、夫の行の方子の行く方、君が行く方は覺束波の、うき世の海を越えかねし、渡りかねしと云はば云へ、此一心のはやて舟。仁義の櫓櫂武勇の楫は、折ッても折れぬ沖つ波寄くる時の聲か」とて、劍に縋ッてたぢ〳〵〳〵。よろよろ〳〵ぼひ寄る方の、磯山おろし松の風。亂れし髪を掻き上げて、あたりを睨んで立ッたりし、和

漢女の手ほん紙。筆にも寫し傳へけり。

第二　はまづたひ

綿蠻たる黃鳥丘隅にとどまる。人として止まる所に止まらずんば、鳥に如かざるべしとかや。爰に大日本肥前の國、松浦の郡平戸の鄕に、釣りたれ網引き世を渡る、和藤内三官と云ふ若者有り、妻も同じ海士の業。藻にすむ虫の我からと、仲人なしの手枕に、くくり枕とし め合はし、小むつと云へる名にめでて、世を睦まじく暮らしけり。抑この和藤内が父は、もと日本の者ならず、大明國の忠臣、大師大爺鄭芝龍といッし者なりしが、くらき帝を諫めかね、自ら長沙の罪をさけ、此日の本に筑紫の唐の聲をかたぞッて、和藤内三官と名乘り、廿餘年の春も立ち、秋も過ぎ行く十月の、小六月とてあたたかや。備中鍬にめかご提げ、身のすぎはひと夕なぎに、夫婦つれ立ち出でにけり。見渡せば沙頭に印をきがむ鷗、沖洲にすだく浦千鳥、潮の干潟をすき返し、蛤ふんで色々の、かいどり小裾しよぼ〳〵ぬれて、拾ひし貝はなに〳〵ぞ。寄生蟲小螺子蛤子貝。汐吹きあげの簾貝。ちらと見染し姫貝に、一筆書きて遣りたいらぎ口明けて、「はや〳〵笑ふ赤貝に、心よせがい。ァいたら貝。君はすがいと吸ひ付けど、我は蝮の片思ひ。憎やそもじの螺に、喰はせたいぞや蠑螺貝。むすめの花貝、さくらがひ、寢もせで一人赤螺の、誰れを待てとや、人の見るくい忘れ貝。我ふたりねの床ふしは、身に蜆貝いはひ貝。門出よしの螺貝は、悦びの貝とぞ取りにける。中に一つの大蛤、日かげに口を打

●第二　はまづたひ

○綿蠻たる黃鳥云云　詩經にある句。

○此第二から本編の眼目和藤内の出現となる。

○小むつ、むつまじく　共に縁語。

○つくしがた　日の本に「着く」を掛けた。

○蛤、がふな、したしみ、あさり貝、しほふき、すだれ貝、ひめ貝、たいらぎ、あか貝、よせ貝、いたら貝、すがひ、あはび、さるぼう、さゞい貝、花貝、さくら貝、あかにし、みるくい、わすれ貝、とこふし、しゞみ、いはひ貝　共に皆

ちひらき、取る人有りとも白泡の、汐を吹きてもりあげしは、實にや蛤よく氣をはいて、樓臺をなすと云ひしも、斯くやと見とれいる所に、磯のもくづに飛び渡り、あさる羽音おもしろく、おりゐる鴫のきッと見付け、嘴いからし只一啄きと狙ひよる。「ヤア云はれぬ鴫殿、看經もする身で、是がほんの殺生貝。蛤も蛤口をくわッと破戒無慚。飛び付いてから〳〵。つゝく所を貝合ひに、しッかと喰ひしめ動かせず。鴫は俄に興さめ顔、引きつしやくッつ羽たゝきし、頭をふッて岩根によせ、打ちくだかんず鳥の智慧。蛤は砂地の得物、汐の溜まり〳〵引き込まんと、尻下がりに引き入るは、翮を張ッてばッと立ち、一丈ばかりあがれども、つられ落ちては又立ち上がり、ばッと立ッてはころりと落ち、鴫のはねがきもはがき、毛をさか立ッてぞ諍ひける。和藤内つく〴〵見て、備中鍬からりと捨て、「アヽ面白し。雪折れ竹に本來の面目を悟り、ひぢを切ッて祖師の西來意の、輪をひらきしも尤もかな道理かな。我父が敎へによッて、唐土の兵書を學び、本朝古來名將の、合戰勝負の道理を考へ、軍法に心をゆだねしに、今鴫蛤の諍ひによッて、軍法の奥義一時に悟りひらけたり。蛤は貝のかたきを頼んで鴫の來るを知らず、鴫は嘴の鋭きにほこッて蛤の口を閉つるを知らず、貝は放さじ鴫は放れんと、前に氣をはッて後を顧みるに隙なし。爰に望んで我手も濡らさず、二つを一度にひッ攫むに最やすく、蛤貝のかたきも詮なく、鴫の嘴の尖りもつひに其徳なかるべし。是ぞ兩勇たたかはしめて、其虚を討つと云ふ軍法の秘密。唐土には秦の始皇、六國を呑んだる連衡の謀、本朝の太平記を見るに、後醍醐の帝天下に王として蛤の大口ひらきし政取しめなく、相摸入道といふ鴫

海藻、又は海蟲の名。緣語。

○言はれぬ鴫どの　一句非常の滑稽。

○男は鴫と蛤との爭ひを見て天下の機を悟り、女は又それを見て情緒風流を思ふ、男女の着目よくも巧みに描いた。

鎌倉に、羽たたきし、奢りの嘴するどく、吉野ちはやに潮を吹かせ申せしに、楠正成新田義貞二つの貝に嘴を閉ぢせめられ、むしり取ッたる其虚に乘ッてうつぜ貝、蛤共に摑みしはいち物の高氏將軍、武略に長ぜし所なり。誠や父一官の生國は大明韃靼、鴫蛤の國諍ひ。今合戰最中と傳へ聞く。あはれ唐土に渡り、此理を以て彼理を推し、攻め戰ふはどならば、大明韃靼兩國を、一呑みにせん物を」と、目も放さず工夫をこらし、思ひそめたる武士の、一念の末を遂しき。理かな此男子唐土に押し渡り、大明韃靼を平均し、異國本朝に名をあげし、延平王國性爺は、此若者の事なりけり。小むつ遠目に、「なう〳〵もう汐がさいてくる。何をきよろりとしてぞいの」と、走り寄ッて「是は扨。鴫と蛤と口吸ふか。女夫といふ事今知ッた。どうやら犬の樣で見共ない。どりや放して取らせう」と、笄ぬいて口押しわれば、「鴫も悦びあしべを指して、滿ちくる汐に蛤の、則ち隱れしづみけり。

唐土船

「ァ時雨さうな。いざ歸らう」と、見やる洲崎に楫をたゝ、搖られよるは珍しい作りな船。「鯨舟でも無し、唐の茶舟か。何ぢや知らぬ」と舟ぞこ見れば、唐土人と覺しくて、二八餘まりの上臈の、美容の顔柳の眉、袖は涙の汐風に、化粧もはげて面やせて、哀れにも美しく、雨にしをれし初花に、目鼻を付けし如くなり。小むつ小聲になり、「ありや繪にかいてある唐の后。いたづらして流された物ぢやわいの」。「ァ、さうぢや〳〵よい推量。おれは惡う合點して、楊貴妃の幽靈かと思ふて怖かつた。何でも能い女房ぢや無いかいな」。「ム、いやらし。唐の女房が目に付くか。親父樣が始めのやうに

唐にムッて、此方も彼處で生まれたら、あのやうな女房抱いて寢さしやらうが、日本に生まれた因果に、わしがやうな女房持ッて口惜しからうの」。「ハヽヽひよんな事ばかり。なんぼう美しうても唐の女房の、衣裝付きあたま付き、辨才天を見るやうで、勿體なうて氣がはッて、寢られはせぬ」とぞ笑ひける。其隙に上臈濱邊におりて夫婦を招き、「日本人〳〵。なむきやらちよんのふとらやあ〳〵」と有りければ、小むつふッと笑ひ出し、「ありや何といふお經ぢや」と、腹をかかへて可笑しがる。「ヤイ〳〵笑ふな。あれば日本人爰へおぢや。頼みたいと云ふ事」と押しのけて立ち寄れば、上臈涙に暮れながら、「大明ちんしんによふろ、君けんくるめいたかりんかんきう、さいもうすがすんへいするぞもこんたかりんとんな、ありしてけんさんはいろ、とらやあ〳〵」とばかりにて、又さめ〴〵と泣き給へば、小むつは濱邊にころりと臥し、腹筋縮ッて堪へかぬる。和藤内はつね〳〵父が詞の唐韻覺え、「はッ」と手をつき頭を下げ、「うす〳〵うさすはもう、さきがちんぷりかくさんきんないろ、きんにやう〳〵」と手を打ッて、互にしみ〴〵手を取りくみ、悲歎の涙睦まじし。小むつくわッとせき上げ、胸ぐら取ッて「是男。唐人詞聞きたうない。如何にいたづらすればとて、いつの便宜に唐三界、あんまりな稼ぎぢや。やい其處なとらやあや。こッちの大事の男を、ようも〳〵きんにやう〳〵にしたなあ。日本の男の鹽梅は、すふて見る事もなるまい。此鹽梅くふて見よ」と、備中鍬ふり上ぐれば、和藤内ひッたくり、「ヤイ目をあいて吝氣せい。是こそ日比語りし父一官の昔への主君。大明の帝の御妹栴檀皇女。國の亂れにて吹き流され給ふとの御物語り見捨てがたなく悼ましし。直ぐに我家へお供せは、庄屋の斷り代官所の詮議、何のかのと囂しし。とかく親父と談合。おぬしは内へ返ッて早々是へ同道せい。人の見ぬ中早う〳〵」と云ひければ、小むつもはッと手を打ッて、「扨も〳〵おいとしや。同じ日本の内さへも、王位高貴の姫君は、荒い風にも當てぬと聞く。增してや是は見ぬ唐土の、王胤の淺さしき御姿や。所も多きに爰へお舟の寄る事も、主從の御緣深きゆゑ、追ッ付け親父樣呼うで來ませう。ヲヽお愛しのそらやあや。きんにやう〳〵」と涙にくれ、家路にこそに歸りけれ。斯くとは知らず一官夫婦、不思議の瑞夢蒙りしと、當國松浦の住吉に詣で、歸るさの濱づたひ「なう〳〵」と聲をかけて招きよせ、「栴檀皇女亂國を脫れ、御舟是へ流れよる。悼はしき有り樣」と聞きもあへず一官夫婦、「あッ」と頭を地に付けて、「御聞き及びも候はん。某は昔への鄭芝龍と申す者。只今の妻や子は、日本の者にて候へども、舊恩を報せずんば、忠臣の道立つべからず。某こそ年よッたれ、此世悴兵事軍術を嗜み、御覽の如く骨ぶとに生まれ付き、大膽不敵の强力者。今一度大明の御代に飜へし、冥途にましまします先帝の、宸襟を安んじ奉らん。御心やすく思し召せ」と、世に頼もしく申し上ぐれば、皇女御涙にくれ給て、「扨は聞き及びたる鄭芝龍とは御身よの。李踏天が惡逆簒國と心を合はせ、兄帝を失しなひ國をうばひ、妾も既に害せられんとしたりしを、呉三桂夫婦の臣が介抱にて、今日の今まで惜しからぬ、露の命のつれなさを、賴む」とばかり曰ひて、又さめ〴〵と泣き給ひ、互に通ずる詞の末、緣につるれば唐のもの、悔ひの八千たび繰りかへす、昔語りぞ哀れなり。母も袂をしぼりかね、「實に鄭斯樣の事を承らん印にや。今朝曉夫婦かはらぬ夢の告げ、軍

は二千里を出て西に利有りといふ事を、まざ〳〵と見て候ふ。ヤア和藤内。此夢を考へ、君御出世の忠勤を勵むべし。何如に〳〵」と有りければ、和藤内謹んで、「只今某此濱にて、鳴の鳥と蛉、稀代のわざを見受けしより、軍法の蘊奥を悟り開いて候ふ。千里を出て西に利有りとは、大明國は我國より、西に當たッて千里の波濤。軍法の法の字は、散水に去ると書く。散水は水なり、水を去るとは此出汐の水に任せ、早く日本の地を去るべしとの神の告げ。我等が本卦師の卦に當たッて、師は軍の義なり、坤上坎下の卦體、一陽を以ッて衆陰をすぶるといッぱ、我一身を以て數萬騎の、軍兵を從へ保つ大將。今散水のさす潮に、早く日本の地をさッて、南京北京に押し渡り、浮き世にながらへ有るならば、吳三桂と軍慮を合はせ、李踏天が賊徒を亡ぼし、軍勢催し韃靼へ逆よせに押し寄せ、韃靼あたまの芥子坊主、ねぢくびつらぬき追ひ伏せ切り伏せ、御代長久の凱歌を上げん事、和藤内が心魂に徹する所。天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず。吉凶は人によッて日によらず。此儘直に御出船。道すがら島々の夷をかたらひ、案の中なる軍船、御出陣」と勇みしは、「三韓退治の神功皇后。鵬舶に立ちしあらみさきを、今見る如き勢なり。父は大きに感心し、「オ、潔よし賴もし。誠や一粒の花の種は地中に朽ちず、遂に千輪の梢に登るといふ本文。實に一官が子なるぞや。我々夫婦も同船にて御供申すべきが、大勢は目に立ッて、所々の渡海の番所、國のとがめ恐れ有り、夫婦ひそかに藤津の浦より出船すべし。御事は是より乘り出し、便よき小島に姫宮を預け置き、船路をかへて追ッ付けよ。親子が忠心正直の、頭にやどる神風は、船中何の氣遣ひ無し。出合ふ所は

唐土に隱れなき、千里が竹にて相待つべし。急げ〳〵」と姫宮にお暇申し、夫婦は遙に別れ行く。和藤内姫宮の御手を引き、もとの唐船にうつし乘せ參らせ、押し出ださんとする所に、女房息をきッて走り付き、船のとも綱しッかと取り、「ヱ、内には親父樣も母樣も皆お留主。いな事と思ひしに、道理こそ是ぢや物。親子とッくと談合しめ、親御の國からお内義呼び、此小むつを置きざりに、親子夫婦四人連れ、唐へ身體引く氣ぢやの。あんまり酷いつれない。何の見落とし落ちが有る、唐高麗はおろかの事、天竺雲の果てまでも、共に連れんと云ひかはした二人の中、仲人もない挨拶もない、二人が胸と胸とに、起請も誓詞もおさめて有る。なんぼう厭かれた中なりとも、今までの情にせめて同じ舟に乘せ、五里も十里も沖なかの波に沈めて、沙魚や鮫の餌になりとも、夫の手から殺して下され藤内殿」と、舷板を叩き、泣き口說、放さん氣色は無かりけり。「ヱ、大事の門出不吉のはえ面。其處立ちのけ。目に物見せん」と褌ふり上ぐれば、姫宮あわて縋り付き、留め給ふを押しのけ、櫂も折れよと舟端たたき、脅しに打つを「身に受けて、打たれて死ねば本望」と、濱邊にぞうと臥しまろび、姫も惜しまず歎きしが、「ヱ、是でも死なれぬ。ヱ、よし〳〵。今は是まで結構者も事による。此海底に身を沈め、「眞志は嫉妬の大蛇と成ッて、もとの契りは今日の仇。今に思ひ知らせん」と、石を袂に拾ひ入れ、岩ほの肩によぢ登れば、駈けあがッて和藤内抱きとめて、「ヤイこりや粗忽な。心底見付けた。軍なかばの大明國、事太平に治まるまで、姫宮を汝に預け、日本に留め置かんと思へども、筋なき女の心を窺ひ、態とつれなく見やたるぞ。是四百餘州どッりがへの姫宮を、しッかと預け置くか

らは「男の心かはらぬ證據。姫宮に仕へ奉るは、眞に孝行〳〵、夫につかふる百倍ぞや。命にかけて頼み入る。國治まつて迎ひの御舟のお供せよ」と、宥むれば聞き入れて、「此方には氣遣ひせず、隨分無事でゐれや」と、いへども弱る女心。せめて一夜の覺悟もせず、夢見たやうな別れやと、夫の袖に縋り付き、わッとばかりに泣きさけぶ、心の內ぞやるせなき。和藤內も胸ふさがり、至極の思ひに目も暗み、共に心は亂るれど斯くては果てじ、いざさらば〳〵の暇乞ひ、栴檀女も涙ながら「追ッ付け迎ひの輿を待つ。其時伴なひ歸るべし。必ず早う」と曰へば、畏て和藤內、泣く〳〵舟を押し出だす。又とも綱に取り付いて、「云ひ殘せし事の有る。暫らくなう」と引きとむる。「ェ、聞き分けなし」と引き切ッて、舟を深みに漕ぎ出だせば、詮方波に身をひたし、只手を上げて「よなう。舟よ」と呼べど出舟の、かひなき巖に駈け上がり、足をつま立て伸び上がり、見送る影も遠ざかる。唐土の望夫山、吾朝のひれふる山。今の我身の吾が思ひ、石ともなれ山ともなれ。動かじ去らじと掻き口說き、涙限り聲限り、互に寄れば招かれて、姿を隱す汐ぐもり。聲をへだつる沖津波。沖のかもめ磯千鳥泣きこがれてぞ……

千里が竹

別れ行く舟路の末も知らぬ火の、筑紫は雲に埋めども、跡に應護の神風や。千波萬波を押し切ッて、時も違へず親子の舟、唐土の地にも着きにけり。鄭芝龍一官は、古郷へ歸る唐錦。裝束引きかへ妻子に向かひ、「我本國と云ひながら、時遷り代かはり、天下悉く李踏天が引きいれにて、韃靼夷の奴となり、昔の朋友一族とて、誰れを尋ねんやうも無く、司馬將軍吳三桂が、生死の所在も知れざれば、何を以ッて義兵の旗を上げ、何國を一城に楯籠るべき所も無し。然るに某去る天啓五年、此國を立ち退き日本へ渡る時、二歳に成りし娘の子を、乳母が袖に捨て置きしが、其子が母は產み落として當座に死す、斯く云ふ父は八重の汐路の中たえて、いつ父母も知らぬ身が、育てば育つ、草木の雨露の惠みに長ずる如く。天地の父母の助けにや、成人して今吳將軍甘輝といふ大名、一城の主の妻となる由、商人の便りに聞き及ぶ。頼む方は是ばかり。親を慕ふ心有ッて、娘さへ承引せば、鶯の甘輝も安々と頼まるべし。是より路の程百八十里。打ち連れては人も怪しまん。我一人道をかへ、和藤內は母を具し、日本の獵船の吹き流されしと、頓智を以ッて人家に憩ひ追ひ付くべし。是より先は音に聞こゆる千里の竹とて、虎のすむ大藪有り。それを過ぐれば尋陽の江。これ猩々の住み所。風景そびえし高山は赤壁とて、昔東坡が配所ぞや。夫よりは甘輝が在城、獅子が城へは程も無し。其赤壁にて待ち揃へ、萬事を示し合はすべし」と、方角とても白雲の、日影を心覺えにて、東西へこそ別れけれ。教へに任せ和藤內、人家を求め忍ばんと、甲斐〳〵しく母を負ひ、たつきも知らぬ岩がんせき古木の根ぎし瀧津波、飛びこえ跳ねこえ飛鳥の如く急げども、する果てしなき大明國。人里たえて廣々たる、千里が竹に迷ひ入り、和藤內ほうどう我をぬかし、「なう母者人。此脚骨に覺え有り、もう四五十里も來ませうが、人にも猿にもあふ事か。行けば行くほど藪の中。合點たり。方角知らぬ日本人、唐の狐がなぶるよな。魅さば魅せ宿なし旅の行き付き次第。小豆の飯の相伴」と、根笹大竹押

し分け蹈み分け、猶奥深く行く先に、怪しや數萬の人聲せめ鼓、せめ太皷、喇叭、鐘高音をそらし、ひやう〳〵とこそ聞こえけれ。「すは我々を見咎めて、敵の取りまく攻め太皷か。又は狐のなすわざか」と、忙然たる其折りふし、空凄じく風おこり、砂を穿ちぞう〳〵〳〵。竹葉さッと巻き立て〳〵、吹き折る竹は劍の如く、凄ましなんども愚なり。和藤内ちッとも臆せず、「よめたり〳〵。扨は異國の虎狩りな。あの鐘太皷は列卒の者。爰は聞こゆる千里が原、虎嘯ぶけば風起こる。猛獸の所爲と覺えたり。廿四孝の楊香は、孝行の徳によッて、自然と脫れし惡虎の難。其孝行には劣るとも、忠義に勇む我勇力。唐へ渡ッて力始め。神力ます〳〵日本力。及でむかふは大人氣なし。虎はおろか象でも鬼でも一挫ぎ」と、尻ひッからげ身繕ひ。母を圍ふて立ッたるは、西天の獅子王も、恐れつべうぞ見えてけり。案に違はず吹く風と、共に荒れたる猛虎のかたち。藤根に頬をすり付け〳〵、岩角に爪とぎ立て、二八を目がけ嘷みかかるを事ともせず、弓手に捌り馬手に受け、捩ぢッて掛くれば身をかはし、弛めばひらりと乘りうつり、上に成り下に成り、命くらべ根比べ。聲を力にえい〳〵えい。虎の怒り髮怒り聲、山も崩るる如くなり。和藤内も大わらは、虎も半分毛をむしられ、兩方共に息つかれ、石上につッ立てば、虎も岩間に小首をなげ、大息ついたる其響き、風檜吹くが如くなり。母藪かげより走り出で、「ヤア〳〵和藤内。神國に生まれて、神より受けし身體髮膚、畜類に出合ひ力だてして負傷するな。日本の地は離るるとも、神は我身に五十鈴川、太神宮の御秡ひ、納受なるか無からんや」と、肌の守りを渡さるれば、「實に尤も」と押しいただき、虎に指し向けさし上ぐれば、神國じんひの其不思議、猛りに猛る勢ひも、忽ち尾をふせ耳をたれ、じり〳〵と四足を縮め、恐れわなゝき岩洞に隱れ入る。ふづつを摑んで跳ね返し、打ち伏せ〳〵ひるむ所をのッかかり、足下にしッかと踏まへしは、天のぶちごま素盞嗚命の神力天照す、神の威徳ぞ有り難き。斯かる所に列卒の者、群らがり來る其中に、大將と覺しき者大音聲、「ヤア〳〵己奴は何國の風來人。我が高名を妨ぐる。其虎は忝くも、主君右軍將李踏天より、「難題王へ獻上の爲、狩り出だしたる虎なるぞ。早々渡せ。異議に及ばば打ち殺さん。しやぐわん〳〵」と嘲きける。李踏天と聞くよりも、願ふ所と笑壺に入り、「ヤア餓鬼も人數。しほらしい事ほざいたり。身が生國は大日本。風來とは舌長し。然はゞ欲しがる虎ならば、主君と賴む李踏天とやら石花菜とやら、爰へつき出し詫び言させい。直にあふて用も有るさもない內は如何な事、ならぬ〳〵」と睨め付くる。「ヤア物な曰はせそ。討ちとれ」と、一度に劍をはらりと拔く。「心得たり」と守りを、虎の首にかけ、母の傍に引ッ据ゆれば、繋ぎし如くに働かず。さ、心易し」と太刀さしかざし、群らがる中へ割ッて入り、八方むじんにわりたて〳〵撫でまくる。列卒の大將安大人、官人引き具し立ち歸り、「おのれ老いぼれ餘さじ」と、一文字に切り懸かるろ。猶も神明應護の印、神力虎に加はッて、むッくと起きて身慄し、敵に向かひ齒をならし、たけりうなり飛びかかる。「こは叶はじ」と安大人、列卒の者がさいたる劍、かりほこ數鎗手に當たるを幸ひに、なげ付け〳〵打ちかくる。虎は神力自在を得、劍を宙にひッくはへ〳〵、岩に打ち當て微塵になす。刀の光り玉散るあられ、氷を碎くに異ならず。打ち物つくれば官人共、色めきたッて逃げまどふ。

○作者對外自尊の念の篤き此二三句に現れた。

○百忙中例の輕妙な滑稽。

後より和藤内「どッこい遣らぬ」と顯れ出で、安大人がそッ首を摑んで指し上げ、くる〳〵と振り廻し、「えいやッ」と打ち付くれは、岩に熟柿を打つ如く、五體ひしげて失せにける。此勢ひに官人原、跡へ戻れば悪虎の口、先へ行けば和藤内、二王立ちにつッ立ッたり。「ア、申し御勘忍。御免〳〵」と手を合はせ、土に喰ひ付き泣きゐたる。和藤内虎の脊をなでて、「己奴等が小國とて侮る日本人。虎さへ恐がる日本の手並覺えたか。我こそ音に聞こえたる、鄭芝龍老一官がせがれ、九州平戸に成長せし、和藤内とは我事なり。先帝の妹宮栴檀皇女にめぐり合ひ、三世の恩を報せん爲め、父が古郷へ立ち歸り、國の亂を治むるなり。ナア命惜しくば味方につけ。否といへば虎の餌食。否か應か」と詰めかくる。「ナウ何の否でござりましよ。韃靼王に從ふも、李踏天に從ふも命が惜しさ。向後おまへの御家來共。お情頼み奉る」と、地に鼻付けて畏る。「オ、でかした〳〵。さりながら、我が家來になるからは、日本流に月代剃ッて元服させ、名も改めて召し使はん」と、指添の小刀はづさし、是も當座のはや剃刀。母も手々に受け取ッて、並ぶ頭の鉢の水揉むや揉まずに無理むたい、片はし剃るやらこぼつやら、糸びんあつびん剃刀次第。またたく間に剃仕舞ひ、二櫛半のはらけがみ、頭は日本髭は韃靼、身は唐人互に顔を見合はせて、頭ひやつく風引いて、くッさめ〳〵。村さめ〳〵と涙を流すぞ道理なり。親子どッと打ち笑ひ、揃ひも揃ッた供廻り。名も日本に改めて、何左衛門何兵衛太郎次郎十郎まで、面々が國所、かからじに名乘り二行に立ッてほッたてろ」。「承り候ふ」と、お先手の手ふりの衆、ちやぐちう左衛門東浦塞右衛門、呂宋兵衛東京兵衛、暹羅太郎白城次郎、ちやるなん四

○一篇すべて近松屈指の快文字。●第三

郎ほるなん五郎、うんすん六郎すん吉九郎、もうる左衛門、じやが太郎兵衛、さんとめ八郎いぎりす兵衛、今參のお供先。跡に引馬虎班の駒。母を助けて孝行の、名を取り口取り國を取る、譽まれは異國本朝に、踏みまたげたる鞍あぶみ。虎の脊中に打ち乘ッて、威勢を千里に顯せり。

第三

仁ある君も用なき臣は養ふこと能はず。慈有る父も益なき子は愛すること能はず。大和唐土さま〴〵に、道の巷は別るれど、迷はで急ぐ誠の道、赤壁山の麓にて、親子三人巡り合ひ、我が聟とばかり聞き及ぶ、呉將軍甘輝がやかた城、獅子が城にぞ着にける。聞きしに優る要害は、未ださへかへる春の夜の、霜に閃めく軒の瓦、魚虎天に鰭ふりて、石壘高く築き上げたり。堀の水藍に似て、繩を引くが如く、末は廣河に流れ入り、櫻門堅く鎖せり。城内には夜廻りの銅羅の聲喧しく、箭窓に弩隙き間なく、所々に石火矢を仕掛け置き、すはといはば打ち放さん其勢ひ、和國に目馴れぬ要害なり。一官案に相違し、亂世といひ斯かる嚴き城門、事々しく夜中に敲き、聞きもなれぬ舅か日本より、來りしなんといふとも、誠と思ひ取り次ぐ者も有るまじ。たとへ娘が聞いたりとも、二歳で別れ日本へ渡りし父と、如何なる證據をかたるとも、易く城中へ入れん事難かるべし。如何はせんとぞ躡きける。和藤内聞きもあへず、「今更驚く事ならず、一身の外味方なしとは、日本を出づる時より覺悟の前。遂に見ぬ舅よ聟よと、親しみだてして。不覺を取らんより、頼まれうか頼まれぬか一口商ひ、否といはば即座の敵。二歳で別れし娘なれば、我らとも行き合ひ姉。彼奴孝行の心あらば、日本の風も

懐かしく、文の便りも有るべきに、頼まれぬ心底。我竹林の虎狩りに従へし、島夷を軍兵の元手にして、切り靡けるほどならば、五萬や十萬、勢の付くは隙いらず、何の人頼み。此門蹴破り、不孝の姉が首捻お切り、鐺の甘輝と一勝負」と、踊り出づれば母縋り付き押し止め、「其娘御の心入れは知らねども、夫につれて世の中の、儘にならぬは女の習ひ。父とは親子御身とは種ひとつ。他人は自ら一人にて、海山千里を隔てても、繼母といふ名は脱れず、娘の心に親兄弟、戀ひ慕ふまじ物でも無し。其所へ切りこんで日本の、繼母が妬みなりと云はれんは、吾が恥ぢばかりか日本の國の恥ぢ。御身不肖の身を以ッて、韃靼の大敵を攻め破り、大明の御代に返さんと、大義を思ひ立つからは、私の恥ぢを捨てて、吾が身の無念を堪忍し、人を懐け従へ一人の雑兵も、味方に招き入るるこそ、軍法のもとと聞く。増して婿の甘輝は一城の主。一方の大将、是を味方に頼むこと、大方にて成るべきか。心を脩め案内せよ」と制すれば、和藤内門外に大音聲、「呉将軍甘輝公直談申し度き事有り。開門〳〵」と、殿きしは、城中響くばかりなり。番兵の兵士聲々に、「主君甘輝公は大王の召しによッて昨日より出仕有り、いつ御帰りも計られず。御留主といひ夜中といひ、何者なれば直談とは推参至極。いふ事有らば夫から申せ。御帰りの節披露して、取らすべし」とぞ呼ばはりける。一官小聲になり、「いや人傳てに申す事ならず、甘輝公の留主ならば、御内室の女性へ、直に逢ふて申すべし。日本より渡りし者と、申せば合點の有るはず」と、云ひも果てぬに城中騒ぎ、「我々さへ面も拝まぬ御臺所。對面せんとは不敵者。殊に日本人とや。油斷するな」と高提灯、銅羅にやう鉢を打ち立て〳〵、塀の上に

○母は母だけの思案。

は數多の兵、鐵砲の筒先そろへ、石火矢放して打ちみしやげ、火なはよ玉よとひしめきける。奥へ斯くとや聞こえけん、妻の女房櫻門にかけあがり、「ヲヽ騒ぐな〳〵。聞き届けて自らが、それよと聲をかくるまで、鐵砲放すな粗忽すな。ヤウ〳〵門外の人々。呉将軍甘輝が妻、錦祥女とは我事。天下悉く韃靼の大王になびき、世に従ふ我夫も、大王の幕下に属し此の城を預かり、守り嚴しき折りも折り、夫の留主の女房に、逢はんとは心得ず。去りながら、日本と有れば懐かしし。身の上を語られよ。聞かまほしや」と云ふ中にも、若しや我親か。何故尋ね給ふぞと、心もとなさあぶなさに、懐かしさも先立ッて「兵共粗忽すな。むざと鐵砲放すな」と、心遣ひぞ道理なる。一官も始めて見る娘の顔もおぼろ月。涙に曇る聲を上げ、「粗忽の申し事ながら、御身の父は大明の鄭芝龍。母は當座に空しくなり、父は逆鱗被り、日本へ身退く其時は二歳にて、親子名殘のうき別れ、辨へなくとも乳母が噂、物語りにも聞きつらん。我こそ父の鄭芝龍。日本肥前の國平戸の浦に年を經て、今の名は老一官。日本で設けし弟は此男。是なるは今の母。ひそかに語り頼み度き事有ッて、成り果てし此姿。恥ぢを包まず來りしぞ。門を開かせ給べかし』と、染み〳〵口説く詞の末、思ひ當たりて錦祥女、扨は父かと飛びかりて、縋り付きたや顔見たや。心は千々に亂れども、流石一城の主甘輝が妻、下々の見る所涙をおさへて「一々覺え有る事ながら、證據なくては胡亂なり自らが父と云ふ、證據あらば聞かまほし」と、いふより兵、口々に「證據〳〵。證據を出せ〳〵」。「ヲヽ親子と云ふより、別にかはッた證據も無し」。「そりや曲者よ」と鐵砲の、筒先一度にばらりとつッかくる。和藤内かけへだて、「無用の鐵

砲ばんとも。いはせば撫で切りにして呉れん」。「ィヤしやつめ共にのがすな」と、火ぶたを切ッて取りかこみ、「證據〳〵」とせめかけて、既に危く見えけるが、一官兩手を上げて「ァ、是々。證據はそッちに有る筈。一とせ唐土を立ち退く時、成人の後形見にせよと、我形を繪にうつし、乳母に預け置きつるが、老いの姿はかはるとも、面影殘る繪に合はせ、疑ひを晴れ給へ」。「なう其詞がはや證據」と、肌に離さぬ姿繪を、高欄に押し開き、柄付きの鏡取り出だし、月にうつらふ父の顏、鏡の面にちか〳〵と、寫し取ッて引きくらべ、引き合はせて能く〳〵見れば、繪にとゞめしは昔への、面も艶ある綠の鬢。鏡は今の老いやつれ、頭の雪とかはれどゝ、かはらで殘る面影の、目元口元そのまゝに、我影にもさも似たり。父方讓りの額のほくろ、親子の印疑ひ無し。「扨は誠の父上か。なう懷かしや戀ひしや。母は冥途の苦の下、日本とやらんに父上有りとばかりにて、便りを聞かん知る邊も無く、東のはてと聞くからに、明くれば朝日を父ぞと拜み、暮るれば世界の圖をひらき、是は唐土是は日本、父は爰にましますよと、書圖では近いやうなれど、三千餘里の彼方とや。此世の對面思ひ絕え、若しや冥途であふ事もと、死なぬ先から來世を待ち、歎き暮らし泣き明かし、廿年の夜晝は、我身さへつらかりし。よう生きて居て下さッて、父を拜む有りがたや」と、聲を惜しまぬ嬉し泣き。一官はむせ返り、櫻門に縋り付き、見あぐれば見おろして、心あまりて詞無く、盡きぬ涙ぞ哀れなる。武勇にはやる和藤內、母諸共に伏し沈めば、心なき兵も、こぼす涙に鐵砲の、火繩もしめるばかりなり。やゝ有ッて一官「我々是へ來る事、聟の甘輝をひそかに賴み度き一大事。先づ〳〵御身に語るべし。門開

かせて城內へ入れて給べ」。「喃仰せなくとも、是へと申す筈なれども、此國未だ軍なかば、韃靼王の掟にて、親類緣者たりとも、他國者は城內へ、堅く禁制との掟なり。されども是は格別。こりや兵共、如何せん」と有りければ、了簡もなき唐人共、「いや〳〵思ひも寄らぬ事。ならぬ〳〵、きこらい〳〵、びんくわんたさつ、ぶおん〳〵」と、又鐵砲をさしむかへば、人々案に相違して、呆れ果てゝ見えけるが、母進み出で、「尤も〳〵。大王より掟と有れば力なし。さりながら、年よッた此母に、何の用心入るべきぞ。あの女に只一言物語りするばかり。妾一人通してたべ。誠浮き世の情ぞ」と、手を合はせても聞き入れず「いや〳〵、女とて、宥免せよとの仰せは無し。然らば我々了簡して、城內に有る中は、繩をかけて縛り置き、繩付きにして通せば、韃靼王へ聞こえても、主君の云ひ譯我らが身ばれ。急いで繩かかれよ。夫がいやなら、きこらい〳〵びんくわんたさつ。ぶおん〳〵」とねめつくる。和藤內眼をくわッと怒らし、「ヤ毛唐人。己奴らが耳はどこについて何と聞く。忝くも鄭芝龍、一官が女房身が母。姫の爲にも母同前。犬猫を飼ふやうに、繩付けて通さんとは、日本人はどんな事聞いて居ぬ。小むづかしい城內。入らいでも大事ない。ヤァござれ」と引き立つる。母ふり放し、「それ〳〵今いひしを忘れしか。大事を人に賴む身は、幾度か樣々の、憂き目も有り恥ぢも有り、繩はふろか足がせ手がせにかかッても顏ひさへ叶はば、瓦に金をかゆるが如し。小國なれども日本は、男も女も義は捨てず、繩かけ給へ「一官殿」と、恥ぢしめられて力なく、用心の腰繩取り出だし、高手小手に縛り上げ、親子が顏を見合はせて、笑顏をつくる日本の、人の育ちぞ健氣なる。錦祥女も絕えぬか

る、歎きの色を押し包み、「何事も時世にて、國の掟は是非も無し。母淨はみづからが預かる上は氣遣ひ無し。何事か存せねども、御願ひの一通り、お物語り承り、夫甘輝に云ひ聞かせ、何とぞ叶へ參らせん。扨此城の廻りに堀ッたる堀の、水上は、自らが化粧殿の庭より落つる遣り水の、末は黄河の川水と、ながれ入る水筋なり。夫の甘輝が聞き入れて、御願ひ成就せば、白粉といて流すべし。川水白く流るるは、目出度き印と思し召し、勇んで城へ入り給へ。又御願ひ叶はずば、「紅を解いて流すべし。川水赤く流るるは、叶はぬ左右と思し召し、母御前を受け取りに門外まで出で給へ。善惡二つは白妙と、唐紅の川水に、心を付けて御覽ぜよ。然らば〳〵」と夕月に、門の戸をさッと押し開き、伴なふ母は生死の界い。菩提門を引きかへて、是は浮き世の無明門。貫の木ちやうを下ろす音。錦祥女は目もくれて、弱きは唐土女の風。和藤内も一官も、泣かぬか日本武士の風。大手の門の開け閉に、石火矢打つは韃靼風。一つに響く石火矢の、音に聞くさへ遙かなる、夢も通はぬ唐土に、かよへば通ふ親子の縁。思愛の綱結び合ひ、結ぶあやとりの縛り繩、かかる例は異國にも、まれに咲き出す雪の梅。色音はおなじ鶯の、聲にぞ通じ入らざりし。錦祥女は孝行深く、母を奥の一間に移し、二重の褥三重の布團、山海の珍菓名酒を以て、重んじもてなす有り樣は、天上の槃花とも、又高手小手のいましめは、十惡五逆の科人とも、見る目いぶせくいたはしく、樣々に給仕へ。誠の母と勞はりも、心の内こそ殊勝なれ。腰元の待女共よりあつまり、「何と日本の女子見てか。目も鼻も變はらぬが、可笑しひ髮の結ひ樣。かはッた衣裳の縫ひ樣。若い女子もあれであらう。裙も褄もほら

○好對。

〳〵ほら〳〵と、ばッと風が吹いたら、太股まで見えさうな。ァ、耻づかしい事ぢや有るまいか」。「いや〳〵とても女子に生まれるなら、こちや日本の女子に成りたい。何故といや。日本は大きに和らぐ、大和の國といふげな。何と女子の爲には、大きに和らかな、好もしい國ぢや無いかいの」。「ホウ有りがたい國ぢやの」と、眼を細めてぞ頷づきける。錦祥女立ち出で、「是々面白さうに何いふぞ。彼方は自らとは成さぬ中の母上なれば、孝行といひ義理といひ、誠の母より重けれども、國のおきて詮方なく、縛り搦めるお愛しさ。韃靼王へもれ聞こえ、連れ合ひに咎めあらうかと、宥免も成りがたく、難儀といふは我身一つ。いづれも賴む食物も違ふとや。お口にあふ物うかごふて、進ぜて呉れよと曰へば、「いや申し如才も無うお料理も念入り。龍眼肉のお食、お汁は家鴨の油あげ、家のこくせう羊の濱燒、牛のかまぼこ、樣々にして上げても、ないま〳〵しい、そんな物いや〳〵。綉られて手も叶はぬ。つひ握飯をしてくれと御意なさるる。其握飯といふ喰ひ物は何の事やら、どうも合點參らず、皆打ちよッて詮議致せば、日本では相撲取をむすびと申すげな、それゆゑ方々尋ねても、折りしも惡うお齒に合ひそな相撲取りが、切れ物なり」とぞ申しける。表にとどろく馬車、御歸館と呼ばはッて、唐櫃先に舁き入れさせ、優々たる絹笠も、さすが呉將軍甘輝と、名におふ其物體、錦祥女出でむかひ、「何とて早き御退出。御前は何と候ふぞや」。「されば〳〵」。韃靼大王敵國ふかく、過分の御加增、十萬騎の旗頭。散騎將軍の官に任ぜられ、諸侯王の冠り裝束たまはり、大役仰付らるる、家の面目これに過ぎず」と有りければ、「それはお手柄めでたい〳〵。なう家の吉事は重なる物。日

來戀ひしい床しいと、申し暮らせし父上、日本にて設け給ひし母兄弟、頼み度い事有りとて、門外まで來り給へども、お留主といひ屓き國の掟を憚り、男子は皆歸し、母上ばかりを留め置きしが、猶も上の聞こえを恐れ、繩をかけてあれあの、奥の亭にて御馳走は申せども、胎内からぬ母上繩かけし御心底、悲しさよ」とぞ語りける。「ムウ繩かけとはよい了簡。上へ聞こえて云ひ譯有り、隨分もてなせ。いざ先づ我も對面せん。案内申せ」といふ聲の、もれ聞こえてや妻戸の内、「なう錦祥女。甘輝殿のお歸りか。爰は餘り高あがり。妾それへ」と立ち出づる。形はいとど老い木の松の、しめからまれし藤かづら、立ち居苦しき其風情。甘輝見る目もいたはしく、「誠世の中の子といふ者の有ればこそ、山川萬里をこへ給ふ、その甲斐も無きいましめは、時代の掟是非も無し。それ女房お手がいたむか氣を付けよ。優曇花のまれ人。いささか麁略を存ぜず、何事なりとも此甘輝が、身に相應の事ならば、必ず心置かるな」と、世に睦じくもてなせば、老母顔色打ちとけて、「ヲ、頼もしい添い。其詞を聞くからは、何しに心置くべきぞ。頼み入り度き大事、ひそかに語り申したし。是へ〳〵」と小聲に成り、「なう我々此度唐土へ渡りしこと、娘懐しいばかりで無し。去年の初冬肥前の國、松浦が磯と云ふ所へ、大明の帝の御妹楠檀皇女、小船に召され吹き流され、御代を韃靼に奪はれし、御物語り聞とひとしく、父は素より明朝の倍臣、御子の和藤内と申す者、賤しき海士の手業ながら、唐土日本の軍書を學び、韃靼大王を亡ぼし、昔の御代にひるがへし、姫宮を帝位に即けんと、先づ日本に殘し置き、親子三人此唐土へは來たれども、淺ましや草木まで、皆韃靼に隨ひ靡き、大明の味方に志す者一

人も候はず。和藤内が片腕の、味方に頼むは甘輝殿。力をそへて下されかし。偏へに頼み參らする。是が拜む心ぞ」と、額を膝におしさげ〳〵、只一筋の志し。思ひ込うでぞ見えにける。甘輝大きに驚き、「ムウ扨は聞き及ぶ、日本の和藤内と申すは、此錦祥女とは兄弟、鄭子龍一官の子息倭ふな。ヘ、武勇のほど唐土までも隱れ無く。頼もしき思ひ立ち。帝ほろび給ひてより、頼むべき主君無く、韃靼の恩賞かうふり、月日を送る折りから、望む所の御頼み。早速味方と申し度きが、少存ずる旨あれば、急にあッとも申されず。とッくと思案しお返事を」と、いはせも果てず、「アヽそりや御卑怯な詞が逸ふ。是程の一大事、口より出せば世間ぞや。思案の間に漏れ聞こえて、不覺を取り悔やんでもかへらず、お恨みとは思ふまじ。成れ成らざれお返事を、ヤア只今」と責めつくれば、「ムウ急に返答聞きたくば易い事〳〵。いかにも呉將軍甘輝、和藤内が味方なり」と、云ふより早く錦祥女が、胸元取ッて引き寄せ、劒引きぬいで咽ぶえに指し當つる。老母あわてゝ飛びかかり、二人が中へわッて入り、持ッたる手をふみ放し、娘を脊中に押しやり〳〵、仰向にかさなり臥し、大聲上げて、「是情なや何事ぞ。人に物を頼まれては、女房を刺し殺すが、唐土のならひか。心にそまぬ無心を聞くも、女房の繰有るゆゑと、心腹が立ッての事か。但しは狂氣か。偶〳〵始めて來て見たる、母親の目の前で、殺さうとする無法人。日比が思ひ違られた。味方をせずばせぬまでよ。今までと違ふて、親の有る大事の娘。これ恐い事は無い。母にしッかと取り付きや」と、隔ての垣と身を捨てて、かこひ歎けば錦祥女、「夫の心は知らねども、母の情の有りがたさ、貞傷

あそばすな」とばかりにて、共に涙にむせびけり。甘輝飛びしさッて「ォ、御不審御尤も。まッたく某無法にあらず。狂氣にも候はず、昨日韃靼王より某を召し、此比日本より、和藤内といふ名せる者、小僕下劣の身を以ッて、智謀軍術たくましく、韃靼王を傾け大明の世に、雛さんと此土に渡る。かれが討ッ手誰れならんと、數千人の諸侯の中より、此甘輝を選り出だされ、散騎將軍の官に任じ、十萬騎の大將を給はる。和藤内を我妻の兄弟と、今聞くまでは夢にも知らず、彼奴日本に傳へ聞く、楠とやらんが肝膽を出し、朝比奈辨慶とやらんが勇力有るとも、われ又孔明が腸に分け入り、樊會項羽が骨髓をかッて、一戰に追ッて追ひ捲り、和藤内が月代首、ひッさげて來らんと、廣言はきし某が、一太刀も合はせず、矢の一本も放さず、ぬく〳〵と味方せば、呉將軍甘輝が日本の武勇に、聞きおぢする者で無し。女にほだされ緣にひかれ、腰が拔けて弓矢の義を忘れしと、韃靼人の雜口に、かけられんは必定。然れば子孫末孫の恥辱脫れがたし。恩愛不便の妻を害し、女の緣にひかれざる、義信の二字を纏にあて、さッぱりと味方せん爲め。ヤイ錦祥女。留むる母の詞には慈悲心こもる。殺す夫の劍の先には忠孝こもる。親の慈悲と忠孝に命を捨てよ女房」と。理非を飾らぬ勇士の詞。「ォ、聞きわけた。身に叶ふた忠孝。親にもらふた此からだ、孝行のため捨つるは惜しいとも思はぬ」と、母を押しのけつッと寄り、胸押しあくれば引きよせて、見る目危き氷の劍、「なう悲しや」とかけ隔て、押し分けんにも詮方なく、退けんとするに手は叶はず、娘の袖に喰ひ付いて、引き退くれば夫がよる。夫の袖を咥へてひけば、娘は死なんと又立ち寄るを、口に咥へてから猫の、瞞をかゆる如くにて、母は目

○情致千金。寸隙も無い。」

もくれ身も勞れ、わッとばかりにぞうと伏し、前後不覺に見えければ、錦祥女縋り付き、「一生に親知らず。つひに一度の孝行なく、何で愚を送らうぞ。死なせてたべ母上」と、口說き歎けばわッと泣き、「なう悲しい事云ふ人や。殊に御身は娑婆と冥途に親三人。殘り二人の父母は、産みおとした大恩有り。中に一人の此母は、憐みかけず愚も無く、うたてや纖母の名は削ッても削られず、今爰で死なせては、日本の纖母が、三千里隔てたる、唐土の纖子を惡んで、見殺しに殺せしと、我身の恥ぢばかりか、日本を照らす日影も、光りに二つは無けれども、日の本とは日の始め、仁義五常情有る、慈悲專らの神國に、生を受けた此母が、娘ころすを見物し、抑生きて居られうか。願はくば此繩が、日本の神々の注連繩とあらはれ、我を今絞め殺し、屍は異國に晒すとも、魂は日本に道引き給へ」と聲を上げ、道もあり情もあり、哀れもこもる口說き泣き。錦祥女は縋り付き、母の袂の諸涙。甘輝も道理に至極して、そぞろ涙に暮れけるが、稍有ッて甘輝席を打ッて、「ハッア是非も無し力なし。母の承引無き上は、今日より和藤内とは敵對。老母を是にとゞめ置き、人質と思はれんも本意ならず。與車用意して、所を尋ね送り還し參らせよ」。「いや送るまでも無く、此遣り水より黃河まで、よき便りには白粉流し、叶はぬ報せは紅を流す約束にて、迎ひにお出で有る筈。いで紅といて流さん」と、常の一間に入りにけり。母は思ひに掻き暮れて、思ふに違ふ世の中を、立ち歸りて夫や子に、何と語り聞かせん」と、思ひやる方涙の色、紅より先の唐錦。錦祥女は其隙に、瑠璃の鉢に紅とき入れ、是ぞ親と子が渡

ゝゝらぬ錦中絶ゆる、名殘は今ぞと夕波の、泉水にさら〳〵〳〵。落ち瀧津瀬の紅葉と、浮き世の秋をせきくだし、共に染めたる泡沫も、紅くぐる遣り水の、落ちて黄河の流れの末、和藤内は巖頭に、簑打ちかづき座をしめて、赤白二つの川水に、心を付けて水の面。「南無三寶紅が流るゝ。扨は望みは叶はぬ。味方もせぬ甘輝めに、母は預け置かれず」と、踏み出す足の早瀬川。流れをとめて行く先の、堀を飛び越え塀を乗りこへ、籬透い垣踏み破り、甘輝が城の奥の庭泉水にこそ着きにけれ。「先づ母は安穩嬉しや」と飛び上がり、いましめの繩引きちぎり、甘輝が前に立ちはだかり、「呉將軍甘輝といふ、鬚唐人は和主よな。天にも地にもたった一人の母に繩かけたは、己を己と奉ッて、味方に頼まん爲なるに、もッてうすければほうづも無い。味方にならぬは此大將が不足なか。第一女房の縁と云ひ、其方から從ふ筈。サア日本無雙の和藤内が、直に頼む返答せい」と、柄に手をかけつッ立ッたり。「ヲ、女房の縁といへば猶ならぬ。御邊が日本無双なれば、我は唐土稀代の甘輝。女にほだされ味方する勇士にあらず。女房を去る所も無し。病死するまでべん〳〵とも待たれまい。追ひ風次第はや歸れ。但し置き土産に首がおいて往きたいか」「イヤサ日本の土産に己奴が首を」と、兩方抜かんとする所を、錦祥女聲をかけ、「ア、〳〵是なう〳〵。病死を待つまでも無し。只今流せし紅の水上を見給へ」と、衣裝の胸を押し開けば、九寸五分の懐劔、乳の下より肝先まで、横に縫ふて指し通し、朱に染みたる其有り樣、母は是はとばかりにて、かッばと臥して正體なし。和藤内もどうてんし、覺悟を極めし夫さへ、そゝろに驚くばかりなり。錦祥女苦しげに、母上は日本の、國の恥ぢを思し召し、殺すまいと成されるれど、我命を惜しみて親兄弟を貢がずば、唐土の國の恥ぢと、斯うなる上は女に心ひかさるる、人の誹りはよも有るまじ。なう甘輝殿。親兄弟の味方して、力とも成ッてたべ。父にも斯くと告げてたべ。もう物いはせて下さるな。苦しいわいの」とばかりにて、消え〳〵とこそ成りにけれ。甘輝涙を押かくし、「ヤ〳〵。自害を無にはさせまい」と、和藤内が前に頭をさげ、「某先祖は明朝の臣下。進んで味方申すべき身の、女の縁に迷ひしと、俗難を憚りしに、我妻只今死を以ッて義を勸むる上は、心清く御味方大將軍と仰ぎ、諸侯王になぞらへ、御名を改め延平王、國性爺鄭成功と號し、裝束めさせ奉らん」と、武運開くる唐櫃の、二重の錦羅綾の袂、緋の裝束章甫の冠り花紋の沓、珊瑚琥珀の石の帶、莫耶の劔金をみがき、絹笠さッと指しかくれば、十萬餘騎の軍兵をも、憧の幡幡の旗、吹き拔きたて鉾弓鐵砲。鎧の袖を列ねしは、會稽山に越王の、二度出でたる如くなり。母は大聲高笑ひ、「ア、嬉しや本望や。あれを見や錦祥女。御身が命を捨てしゆゑ、親子の本望達したり。親子と思へど天下の本望。此劔は九寸五分なれど、四百餘州を治むる自害。此上に母が存へては、始めの詞盡言と成る。二度日本の國の恥ぢを引き起こす」と、娘の劔を追ッ取ッて、咽喉にがばと突き立つる。人々是はと立ち騒げば、「ア、よるまい〳〵」とはッたと睨み、「なう甘輝國性爺。母や娘の最期をも、必ず歎くな悲しむな。韃靼王は面々が、母の敵妻の敵と、思へば討つに力有り。氣をたるませぬ母の慈悲。此遺言を忘るるな。父一官がおはすれば、親には事を缺くまいぞ。母は死して諫言をなし、父は存らへ敎訓せば、世に不足なき大將軍。浮き世の思ひ出是まで」と、肝のたばねを一

○閑忙往來、翁の特色。

忽ぐり切りさばき、「ヤア錦祥女。此世に心殘らぬか」と「何しに心殘らん」と、いへども殘る夫婦の名殘。親子手を取り引きよせて、國性爺が出で立ちを、見上げ見おろし嬉しげに、笑顔を婆娑の形見にて、一度に息は絶えにけり。鬼をあざむく國性爺、龍虎と勇む吳將軍、涙に眼はくらめども、母の遺言背くまじ、妻の心を破らじと、國性爺は甘輝を耻ぢ、甘輝は又國性爺に耻ぢて、しをるる顏かくす、亡骸おさむ道の邊に、出陣の門出でと、生死二つを一道の、母が遺言釋迦に經、父が庭訓鬼に鉄棒。討てば勝ち攻むれば取る。末代不思議の智仁の勇士、玉有る淵は岸破れず、龍すむ池は水かれず。斯かる勇者の出生す。國々たり君々たる、日本の麒麟是なるはと、異國に武德を輝しけり。

●第四

○小むつ亦自ら勇士の妻。

第四

唐土の便り今やと松浦潟。小むつが宿の明け暮れは、唐の姫宮相ひ住みを、近傍隣家も浮き名立て、唐と日本の汐さかひ、ちくら者かと疑へり。夫も今は國性爺と名を改め、數萬騎の大將軍と聞くからに、我も心の勇み有り、若衆出立ちに姿をかへ、撫で付け髪の大たぶさ。ひすいの大蟬髻ふッさりと、禰宜の息子か會薬賣りか。女とよもや水淺黄の、股引きしめて羽織きて、朱鞘木刀眞紅の下け緒。花の口紅雪の白粉、菅笠ふかく脛高く、足元かろき濱千鳥。濱邊づたひを日參の、驗まつらの住吉や。神前にこそ着きにけれ。じう満ごぐはんと祈誓をかけ、手を合はすると見へけるが、ひらりと抜いたる居合ひの手練、神木の松を相手取り、木刀かざし跳りあがッて聲をかけ、「えいやッたう〳〵えいたう〳〵、えいやッたう」と、上段下段の太刀さばき、かげろう稻妻獅子奮迅、足取り手の内四寸八

●栴檀女道行

寸身の開き、踏み込んで打ち入る身の木刀、古木の松の片枝を、すッぱと切ッて落とせしは、今牛若ともいひつべし。いつの間にか栴檀女、森の影より走り出で「ヤア〳〵小むつ殿。毎日〳〵時を違へず、髮はッた風俗。今日といふ今日跡を慕ふて見付けしが、誰れにならふて此兵法。器用な事や」と曰へば「いや師匠は無けれど夫の打ち太刀。習はうより馴れての事。唐土の便り心元なく、おむかひ舟は參らずとも、お供して渡らんと、此神明へ吉凶を祈り候へば、是見給へ。木刀にて此松の木の、眞劍の如く切れたるは、神納受の印と申し、商船の使船時節も能く候ふ」と、申し上ぐれば「夫は嬉し頼もしも。片時も早く戻してたべ」と、御悦びは淺からず。「御心やすく思しめせ。惣じて此住吉と申すは、船路を守りの御神にて、神宮皇后と申す帝、新羅退治の御時、汐干る玉汐滿つ玉を以て御船を守護し、舟玉神とも申すなり。昔時唐土の白樂天といひし人、日本の智惠をはからんと、此秋津洲に渡り給ひ、目前の景色を取りあへず、せいたい衣を帶びて巖のかたにかかり、白雲帶びに似て山の腰をめぐると、詠じ給へば大明神、卑しき釣魚の翁と現じ、一首の歌の御答へ、苦ごろも着たる巖は然も無くて、きぬ〴〵山の、帶びをするかなと、詠じ給ひ〳〵御歌に、きッと詰まッて樂天は、爰より本土に歸るとかや。國を守りの御神の、其御歌はこけ衣。我身に受けて旅衣。いざ」とて二人打ちつれて、舟路はるけくなりふりや。

栴檀女道行

唐子髷には薩摩櫛、島田髷には唐櫛と、大和唐土打ちまぜて、さしも慣らはぬ旅立ちや。舟と陸とを

行く道は、笠捨てられず懐中に、枕をただ、ただむ夢ただむ、千里を胸にただみ込む、女心の強弓も、男ゆゑにぞ引かれ行く。我は故郷を出づる旅、君は故郷へ戻る旅。二葉に見せて栴檀女、小むつが諫め力にて、大明國へと思ひ立ち、心の内こそはるかなれ、親と妻とを持ちし身は、何か歎きは有り明けの、月さへ同じ月なれど、なう二人見馴れし閨の中、名殘數々大村の、浦の濱風一村雨はさら〳〵と、霽れてもはれぬ我涙。袖につつみて袂に拭ふ。鏡の宮に影をめて、泣かぬと人や見るめの浦。ふりさけ見れば久かたの、日も行く末の空遠く、歸るさ何時ぞ天津かり、誘へや誘へ我夫も、廿五すぢの琴の糸、結び契りし年の數。いざすがかきて箱崎の、松としきかば我も急がん。磯邊傳ひによりもがく、海士の子供の打ち群れて、はじき石なご又長か半。三つ四つ五つ算へては、幼遊びも睦しく、七瀬の淀に行く水も、昔の影やかくれんぼ。鬼のこぬまと謠ひしも、濡れて乾かぬ旅衣。唐土船を松浦川。湊もちかの浦風に、そなたの方を見給へば、磯に手ぐりのくりや川。波にゆらるる釣り舟に、びんつら結ふたる童子一人網はおろさで釣り竿の、いとゆふ〳〵と眠りくる。「なう〳〵おちご。我々は唐土へ渡る者、よからん方まで乘せてだべ」とぞ仰せける。「あら何ともなや。一人は唐土人、一人は筑紫人。女性の身にて唐土へ渡るとは、戀ひしき人の有るやらん。二千里の外古人の心、三五夜中にあらねども、影を漏らさぬ月の舟。とく〳〵召され候へ」と、はや指し寄する水馴れ竿。不思議の縁と打ち乘りて、これが行く方も白波に、なさてのぞけき海の面。續きて見ゆる八十島を、異國の人の家産に、數へてたばせ給へとよ。童子へいたに立ちあがり、海原はるかに指さして、「いかに旅人聞き給へ。先づあれにつづくは鬼界十二の島。五島七島中にもあの白き島の、多く群れ居るは白石か島。此方に煙りの立ち登るは硫黄が島、扨又南に高く霞みかかるはちごの島なり。彼は往古天照神の、住吉の明神に笛ふかせ、舞曲を奏し二神の、遊び給ひし所とて、二神島とは申すなり。なう唐土人とぞ語らるる。語る間に敷島の、はや秋津洲の地を離れ、夫より先の島々の、島かと見れば雲の峯、山かと見れば空の海。風は無けれど蜑小舟。天の鳥舟いはぶねの、空走り行く如くにて、山無き西に山みゆる、月に先立つ日につれて、日の本出でし秋風の、立ちも變はらず其まゝの、まだ秋風に鱸釣る、松江の湊に着きにけり。人々舟より上がり給ひ、誠におちごの御情。座したるやうなる舟の中。かかる波濤を時の間に、渡し給へる御方は、いかなる人にて有るやらん。人がましやな名もなき者。我日の本に昔より、住み馴れたれば住吉の、大かい童子と申す者。いとま申して此わッぱは、住吉に立ち歸り、歸朝を待ち申さんと夕波の、水際なる蜑の小舟を漕ぎ戻し、追ひ風にまかせつつ、沖の方に出でにけりや沖の方へぞ……

九仙山

●九仙山

○文句自然に悲壯よく境界に適した。

傳へ聞く陶朱公は句踐を伴ない、會稽山にこもり居て、種々の智略をめぐらし、遂に呉王を滅ぼして、句踐の本意を達すとかや。昔をとへば遠き世の、ためしも呉三桂が、今身の上に白雲の、山より山に身を隱し、太子を育て奉る。移れば變るこけむしろ、宮前の楊柳寺前の花、峯のこぼくに立ちかはり、夕の霧の間には、我身を以て孵とし、變與屬車の手車も、蔦の錦に織りかへて、朝の露の

ほどりには、谷の猿の肩に懸し、早二年は昨日今日、暮るるも山明くるも山、我名も君が顔も、八目をつつむ雲水に、虹のかけ橋とだえして、深山烏やぬるこ鳥、梢に來鳴く鸎鶉さへ、昔をまねぶ聲は無し、水遠くして山ながく、根ざさ芽原すきひはら、峨々と聳えし崔嵬の、山路に勞れ行く末は、名にのみ聞きし江寧府の、九仙山に攀ぢ登り、暫し佇ずむ松風も、馴れてや友と住みなれし、蓬眉白髪の老翁二人、石上に碁盤をすゑ、黒白二つの石の數、三百六十一目に、離々たる馬目、連々たる鴈行、脇目もふらぬ碁の勝負。心はささがにの空にかかれる糸に似て、身は空蟬の枯れ枝となり、浮世を離れしゆだんの業、中間禪のかうたいかと、太子を石段に移し參らせ、枯木の株におとがいもたせ、見とるる我も諸共に、余念の塵をや拂ふらん。吳三桂與に乘し「なう〳〵老人に物申さん。市中を放れし座隱の遊び面白し。さりながら、琴詩酒の三つの友を放れ、碁を打ッて勝負を爭ひ給ふこと、別に樂しむ所ばし候ふか」。翁さして答へなく「碁盤と見れば碁盤にて、碁石と見る目は碁石なり。大地世界を以て、一面の碁盤となすといへる本文有り。心上の須彌山是に有り、大明一國の山河草木。今爰より見るになをかくもらん、一角に九十目、四方に四季の九十目。合はせて三百六十目。一目に一日を送ると知らぬ愚さよ」。「面白し〳〵」。天地一體の樂に、二人對ふは何事ぞ」。「陰陽二つあらざれば、萬物調ふ事も無し」。「勝負はさていかに」。「人間の吉凶は時の運にあらずや」。「扨白黒は」。「夜晝」。「手段はいかに」。「軍の法。切ッて押さへて跳ねかけて」。軍は花の亂れ碁や。飛びかふ鳥、群れゐる鷺とたとへしも、白き黒きに夜晝も、わかで昔のおののえも、自からとや朽ちぬ

べし。翁重ねて曰はく「今日本より國性爺といふ勇將渡ッて、大明の味方と成り、只今軍眞最中。是より其間遙かなれども、一心の碁情眼力にあり〳〵と、合戰の有り樣目前に見すべし」と、曰ふ聲も山風も、碁石の音にぞ響きける。吳三桂はッと心付き「實に〳〵爰は九仙山。此九仙山を申すは、四百餘洲を目の下に、峯もかすがにおぼろ〳〵と、雲かと見れば一霞、麓におつる春風の、風のまにまに吹きはらす、空は彌生のなかばなる。柳櫻をこきまぜて、錦につつむ城郭の、あり〳〵とこそ見えにけれ。何國の誰が龍りしぞ。門高く堀ふかく、砦〳〵に欄楯つき、要害嶮岨を帶びたりし、こう〳〵たる高やぐら、揚る雲雀や歸る雁、花と見つるも色々の、旗に翼や休むらん。閑かに照らす朝日かげ、月影打ッて付けたるは、日の本の美名をあらはし、延平王國性爺が乘ッ取ッたる石一頭城。いはねを夫と白眞弓。鐵炮高麗矛鎗長刀、大旗小旗なびき合ひ、吹き拔きのぼる馬印。へんぽんと飄る、返り天も五色に染めなせば、藤もつつじも山吹も、共にうつろふ色見えて、春の日數は盤上の、石の數とぞ積もりける。わか葉が末の深みどり。はれ行く雲の絕え間より、是南京の雲門關と、名乘りて出づる時鳥。まんまく高き卯の花がき。今年も夏の中旬なり。方三十里に逆茂木引き、關の大將左龍虎右龍虎、三千餘騎、兜の星を輝かし、大皷を打ッて亂調子。鳥の空音はかるとも、ゆるす方なき勢ひに、劒ば夏野の薄を亂し、火繩は澤の螢火と、要害きびしき關の戸は、鳥も通はぬばかりなり。日本そだちの國性爺、たとへば此關鐵石にて固めたりとも、押し破ッて通らん事、童が障子一重破るよりも易けれども、軍中の目醒ましに、我本國文治の昔武藏坊辨慶が、安宅の關守りあざ

むきし、例を引くや梓弓。軍兵に目配せし、「そも〳〵是は驪山の麓、楊貴妃の御廟所。大眞殿再興勸進の大行者。勸進帳を聽聞し、勸めにいれや關守り」と、軍勢の着到一卷取り出だし、味方の祈禱敵調伏と觀念し、高らかにこそ讀み上げけれ。「それつら〳〵おもんみれば、韃靼客土の秋の月は、無殘の雲に隱れ、生死不定の永き夢、驚かすべき勢ひも無し。爰に往昔帝おはします、御名おば玄宗皇帝と名付け奉り、寵愛の玉妃に別れ、戀慕やみがたく、湖泣眼にあらく、涙玉をつらぬく思ひを、せんろにひるがへして、大眞殿を建立す。今程の靈場の、絶えなん事を悲しみて、隣鄉のはうじか、末葉諸國を勸進す。一戰合戰の聲は、敵方にては首を矛につらぬかれ、味方にては合戰勝利の勝鬨あげん。奇妙稽首敬ッて申す」と、天も響けと讀み上げたり。關の大將右龍虎左龍虎「すは國性爺。飛んで火に入る夏の虫」。梢に蟬の嘆いてかかれば、にッこと笑ひ、「樊會流は珍らしからず。門を破るは日本の、朝比奈流を見よやとて、貫の木逆茂木押し破り、むかふ者をたたきふせ、迯ぐるを摑んで人礫。左龍虎右龍虎打ち取ッて、なんなく過ぐる月日の關や。碁盤の上も、せき吹きこゆる秋の風、霧はれわたる山城は、韃靼の軍將利王が楯籠もり、前は巖壁後は海、要害賴みの油斷を見て、秋の夜討ちの國性爺、乘ッたる駒の轡の虫。月まつ虫の聲すみ渡り、しん〳〵りん〳〵しづ〳〵と、堀際近く攻め寄ッて、百千の高提灯、一度にばッと立てたるは、千世界の千日月、一度に見るが如くにて、城の兵寢耳に水の、あわて騷いで甲を脚當て、鎧をさかさき馬を背かに「ヲヽ〳〵〳〵大手の門を押しひらき、切ッて出づれば寄せ手の勢、貝鐘鳴らし鬨の聲。大將國扇追ッ取ッて、ひらりひらりら〳〵ひらり。ひらめかし、日本流の軍の下知、攻め付けしひぐは義經流。ゆるめて打つは楠流。くりから落とし坂落とし、八島の浦の浦波も、爰に寄せ手の勢ひ強く、もみ立て〳〵切り立てられ、城中指してぞ引きたりける。

ひびき、須彌も崩るるばかりなり。時分はよしと夕みに、日本秘密のほうろく火。矢打ッて放つ其楚人の一炬に焦土となんぬ、咸陽宮をかけてくる〳〵。くるり〳〵しぐれて過ぐる岡の邊に、棟門高き城郭こそ、是も國國爺が切り取りし、ぼく州のちやうらく城、軒の甍はらん〳〵と、玉を彩どる初霞、霓まじりの夕嵐、吹きくる上に降りつもり、塀も櫓も埋もれて、雪の眺望は面白や。其外みん州けん州諸國の府、三十八ケ所切り取りて、太子の御幸を待ち顏に、所々に附城築き、兵糧軍兵こめ置いて、威勢は天の氣に顯れ、手にとるやうにぞ見えにける。吳三桂喜悅のあまより、身をも人をも打ち忘れ、太子を抱き奉り、城有る山へと走りゆく、二人の老翁引きとどめ「愚なり〳〵。目擊一瞬に見ゆるといへども、各百里を隔てたり。汝山に入りて一時と思ふとも、五年の春秋を送り、四年に四季の合戰、を見たるとはよも知らじ。斯くいふ中にも立つ月日、太子の成長汝が身の面影をよく水鏡。水清ければ影清し。汝忠有り誠有る、心の鏡にうつり來る。我は先祖光皇帝。我はせいでんりうはくうん、住み處は月の中に立つ、桂のうち棄吹きかへし、智見の目には上十五。下十五夜と見つれども、衆生は心亂れ、碁の石とや嘲な見るらん。又水中の遊魚

○安宅を轉用して趣きを大きう派へた。

○高岡おのづから仙骨を含む。

は、釣り針と疑へり。雲上の飛鳥は「弓のかけをも驚けり。一りんもくだらず、蓮水とてもものぼらねば、滿ては欠る影あれば、欠けても滿る月を見よ。暫しが程の雲隱れ。遂には晴れて天照らす、日の本和國の神力にて、太子の位ははや出る日」と、曰ふ御聲は松ふく嵐。面影ばかりは松立つ山の、峯の嵐に吹き隱れてぞ失せ給ふ。茫然として吳三桂、夢かと思へばまぼろます。實にも五年の月日を經たるしるしにや、我顏には鬚伸びたり。太子の尊容時のまに、御脊丈も立ちのびて、はや七歳の、御物ごし「吳三桂〳〵」と召さるる御聲おとなしく、「雪の深山に黃鳥の、初音を聞きし思ひにて、「あい〳〵〳〵」と頭を下げ、天を拜し地を拜し、嬉しさ足も定まらず、二度夢の心地せり。御前に手をつかね、「古の鄭子龍が一子國性爺、日本より渡ツて、味方の義兵を起こすとは音にこそ承れ、春秋五年の勳功あきらかに、大明半國は取り返し候へば、國性爺に案內して、君是にまします旨を、告げしらせ度く候ふ」と、申しもあへぬに遙かの谷の向かふより、「なう〳〵夫なるは、言馬將軍吳三桂にては無きか。吳三桂〳〵」と呼ばるる方を能く〳〵見て、「御身は昔の鄭子龍か」。「是は〳〵吳三桂。命あれば珍らしや。一子國性爺が故郷の妻、栴檀皇女を御供せし」と、招きあへば姬宮も、「懷かしの吳三桂。おことが妻の柳歇君、命懸けての忠節にて、うきせを渡る浮かれ舟、日本へ吹き流され、一官親子夫婦の情、不思議に二度逢ふ事よ。柳歇君は何國にぞ。緣子は何と成りけるぞ。早う逢ひたい逢はせてたべ」と、焦がれ給ふぞ道理なる。「されば其時の深手にて、我妻は慮しくなり、后も敵の鐵砲に、命を落とし給ひしゆゑ、胎內をたちやぶり、我子を害し敵をあざむき、太子は山中にて、やすく〳〵育て參らせし。はや七歳の生ひ先は、是に渡らせ給ふぞ」と、語るに付けて姬宮も、わッとばかりにぞうと伏し、人目もわかぬ御歎き、思ひやられていたはしく、一官麗を見返ツて、「あれ〳〵貝勒王めか姬宮を見付け、數千騎にて追ひかくる。年寄り骨に示威を出し、暗みとやまッて命かざり、防き支へんとはやれども、宮の御上あぶなし〳〵。それ〳〵どうぞ退けたいが、此山不案內。谷をこす道は有るまいか」。「いや〳〵此山廻れば六十里。谷深うて底知れず。是へも招ばれず其處へも越されず」。「ヱ、いかがせん」。「何とかせいでんの劉伯雲、神仙微妙の力を合はせ、常非の危難を救ひ給へ」と、太子諸共一心不亂に祈誓有り。姬宮小むつも手を合はせ、「南無日本住吉大明神。福壽海無量」と、丹精無二の志し、天も感應地と納受。とうこうより一筋の雲、無心にして棚引けば、天の雲梯鵲の、渡せる橋やかつらきの、衆の岩橋夜るならで、夢路を辿る如くにて、渡るとも無く行くとも無く、向かふの巖に登り付き、足もわな〳〵慄ひけり。程なく賊兵雲霞の如くぞッと駈け寄せ、「あれ〳〵太子吳三桂も見えたるは、思ひも寄らぬ拾ひ物。鰯網で鯨を取るとは此事。的に成ッたる奴ばら、やれ弓よ鐵砲よ。打ち取れ射取れ」とひしめきける。貝勒王下知をなし「やれ待て〳〵。後はひろし退き場は有り。弓鐵砲は叶ふまじ、こりや見よ遂に見ぬ雲梯。必定國性爺めが日本流の算盤橋。たたみ橋なんといふ物ならん。敵に喰ひ物あてがふは、おろかの軍法。續けや者ども渡れや渡れ」と五百餘騎、押し合ひつめあひ我先にと、えい〳〵聲をかけ橋の、なかば渡ると見えけるが、山風谷風さッ〳〵〳〵と、雲のかけはし

●第五

吹き切れて、大將始め五百餘騎とた〳〵〳〵と落ち重なり、めッかう打ち割る天窓を碎く。泣いつ叫いつ彌が上、谷をも埋むばかりなり。吳三桂鄭子龍、「得たりかしこし心地よし」と、大石大木當たるを幸ひ、投げかけ〳〵打ち付くれは、一騎も殘らず刹那が中、人の鮨とぞ成りたりける。中にも大將貝勒王。岩根を傳ひ桂をたぐり這い登れば、吳三桂遊仙の碁盤引きさけ「こりや。此碁盤はところでねッて石より堅く、苦うて口はあはずとも一口くふか。己れが一目目をもッて御用無の碁の相手。碁勢を見よ」と頭を出せばちやうど打ち、面を出せばはたと打ち、ぶち付け〳〵腦も鉢も打ち碎かれ、微塵に成ッてぞ失せにける。「オ〳〵本望〳〵。本朝にも斯かる例は、先例吉野の碁盤忠信。それは芽の木是はところの九仙山。先手が味方へ廻りくる、四つ目殺しに中手を入れて、しちやうにかけて打ち切ッて、せめて搦手たち切ッて、手詰めのせきを勝ち軍。敵のはまを拾ひ上げ、國も御代も打ちかへて、手を盡くしたる功も有り、忠義の道はまッかうかう。道はかうよと打ちつれて、福州の城にぞ入りにける。

第五

泰山を挾さんて北海を超ゆる事は能はず、王の王たらざるは、能はざるにはあらずとかや。延平王國性爺兵を用ること掌にまはすが如く、五十餘城を屠り、武威日々に盛んにして、妻の女房古鄕より、栴檀皇女を供し參らせ、九仙山より吳三桂太子を御幸なし申せば、十善天子の印綬をささげ、永曆皇帝と號し奉り、龍馬が原に八町四方の本城をからくみ、陣幕とまく錦の幕。陣屋の上には日

本伊勢兩宮の御はらひ、大秡麻を勸請し、太子を別殿に移し參らせ、其身は中央の床几にかかり、司馬將軍吳三桂、散騎將軍甘輝、同じく左右の床几に座し、韃靼大明分け目の勝負いくさ評諚區々なり。吳三桂團扇取り直し、「凡そ謀計は淺きに出でて深きに至るに如は無し」と、竹筒一本取り出だし、此筒に蜜をこめて、山蜂多く入れ置いたり。斯くの如く數千本拵へ、先手の雜兵に持たせ、立合ひの軍する體にて、筒をすてて逃げのかば、貪慾さかんの韃靼勢、食物と心得拾ひ取らんは必諚。口を拔くと等しく數萬の山蜂むらがり出で、賊兵を毒痛せしめ、漂ふ所を取ッてかへし、八方より討ち取るべし。是御覽候へ」と、口をぬけば數多の蜂なり羽ぶいてぞ出でにける。「賊兵あざ笑ひ、淺はかなる童おどしの謀計。燒き捨てて耻ぢかかせよと、積み重ねて火をつけん、其時筒の底にしかけたる、放火の藥鳴り渡り飛びちッて、十町四方の軍兵に、生き殘る者は候まじ」と、火繩を筒にさしつくると等しく、飛んだる亂火のしかけ。「實にも斯う」とぞ見えにける。吳將軍甘輝菓物入れたる花折り一合取り出だし、「吳三桂の奇計尤もに候ふ。又某が謀。かくの如く折り籠二三千合も拵へ、樣々の菓子餉酒肴したため、各是に鴆毒を入れ、陣屋に貯へならべ置き、陣所近く敵を引きうけ、戰ひ負けたる體にして、十里ばかり引き取るべし。韃靼が例の長追ひ、勝ち誇ッて陣屋に込み入り、此食物に眼くれ、寶の山に入りたりと、軍將雜兵我先にと、摑み喰はん事必定。唇に觸ると等しく片端に毒血吐き、刄にちぬらずしてみな殺しにして吳れん」と、面々軍慮心を碎き、評議とり〳〵まち〳〵なり、國性爺打ち頷づき、「いづれも一理有る計畧。批判申すに及ばず。さりながら、國性爺が魂

に徹し忘れがたきは、母が最期の一句の詞。韃靼王は汝らが母の敵。妻の敵と思ひ込んで本望とげよ。氣をたるませぬ其爲の、自害なりとの詞の末、骨にしみ五臟に徹し、刹那も忘るる事は無し。千變萬化の謀計も何かせん。只無二無三に攻め入ッて、韃靼王李踏天に、押し並べてむずと組み、すた〳〵に刻んで捨てずんば、たとへ國性爺が百千萬の軍功も、君の忠も世の仁義も、母の爲には不孝の罪」と、鏡のやうなる兩眼に、涙をはら〳〵と流しければ、吳三桂甘輝を始め、一座の上下諸共に、皆々袖をぞ濡らしける。「殊更女の身ながらも、古郷を忘せず生國を重んじ、最期まで日本の國の恥を思はれし、我も同じく日本の産生國は捨てまじと、あれ見給へ。天照太神を勸請す。某匹夫より出でて、數ヶ所の城を攻め落とし、今諸侯王と成ッて各の傳きに預る事、全く日本の神力によッてなり。然れば竹林にて徑へし島夷共、日本頭につくり置き彼等を眞先に立て、日本の加勢と披露せば、元より日本弓矢に長じ、武道鍛錬かくれなく、韃靼夷聞きおぢして、二の足に成る所を、疊みよせて乘ッ取らんと、此頃我女房にしめし合はせたり。ヤア〳〵源の牛若。軍兵卒し是へ〳〵」と、團扇を上ぐれば「あッ」と答へて立ち出づる、小むつが髮の初元結ひ、諸軍勢の元服頭。大和淺黃に唐錦。花やかなりける出で立ちなり。假御殿の幔幕より、姫宮走り出で給ひ、「なう〳〵國性爺。此簱は御身の父一官の簱印。此書き付けも一官の筆、心もとなき文言」と、出だし給へば床几を下がッて讀み上ぐる。「我なまじいに明朝先帝の朝恩を報ぜんと、二たび此土に歸參し、功も無く譽れも無し、老後の餘命幾許の樂しみをか期せん。今月今夜南京の城に向かッて討ち死にをとげ、美名を和漢に留むる者なり。鄭子龍老一官、行年七十三歳」と、讀みも了らず國性爺、すッくと立ち、「ヤア敵に念が入ッて來た。母の敵に父の敵。智略もいらず軍法も何かせん。旁は兎も角も、身に逼まるは國性爺。只一人南京の城に乘り込み、韃靼王李踏天が首捻ぢ切り、父が最期の場をかへす討ち死にして、父母が冥途の旅を同道せん。今生のお暇乞い」と、飛んで出づれば、兩將袖に縋ッて「ア、曲もなし。甘輝が爲には妻の敵舅の敵」。「吳三桂が爲にも妻の敵縁子の敵」。「オ、それ〳〵」。いづれも敵にかるめなし。天下の敵は三人一所。ヤアこい」と駈け出づる、此三人の太刀先には、いかなる天魔疫神も、面をむくべき方も無し。鄭子龍老一官、夕霧くらき黒皮縅、すすどげに立ち出で、南京城の外廓の、大木戸叩いて、「國性爺が父老一官と申す者。年寄り膝骨弱ッて人なみの軍叶はず、さればとて若殿原の軍聞し、安閑と聞いても居られず、此城門に推參して、速に討ち死にし素意を達し度く候ふ。あはれ李踏天出で合ひ、此白髮首を取りてたべ。生前の情ならん」とぞ呼ばはりける。城の中より六尺ゆたかの大男、「やさしし一官。相手に成ッて取らせん」と、木戸押し開き切ッてかかる。「心得たり」と二打ち三打ち討つぞと見えしが、つッと入ッて首打ち落とし、大きに不興し大音聲「一官年よッたれぞも个樣の葉武者にやる首持たず、李踏天出合はれよ。外の者の出でたらば、いつまでも此通めよな。問ふべき仔細あまた有り。殺さずとも搦め取ッて引ひて來れ」「承る」と四五十人棒ずく取り廻し、隙をあらせずめッた打ち、捻ふせ〳〵縛り付け、城中さして引いて入る。無念といふ

も餘り有り。程なく甘輝呉三桂國性爺を眞先に、大手の門に駈け付ければ、引ッ續いて六萬餘騎。小むつを後陣の大將にて、今日を死戰と押し寄せたり。國爺性下知をなし、「未だ生死もしれず。殊に此南京城、四方に十二の大門三十六の小門有り。一方にても明いたる方より落ち失せんは必定。四方に心を配ッて討て」と、相詞に手をくばり、箙をたたき鬨の聲、天も傾くばかりなり。小むつが嗜む劍術の、牛若流の小太刀を以て一陣に進み出で、「相手えらばず時えらばず、所もえらばぬ此若武者。死にたい者が相手ぞ」と、思ふさまに廣言し、多勢が中へ割ッて入り、火水を飛ばせて戰ひける。賊兵數多討たるれども、七十萬騎楯籠もッたる南京城、落つべきやうこそ無かりけれ。國性爺は如何にもして、父の生死を知るべしと、駈け廻ッても詮方なく、陣頭に大音聲、「我唐土へ渡ッて五年の間、數ヶ度の合戰ついに無刀の軍をせず。今日珍らしく劍の柄に手もかけまじ。馬上の達者劍術ゑものの韃靼勢、寄ッて討てや」と招きかくれば。「憎い廣言打ち殺せ」と、我も〳〵と喚いてかかる。引き寄せて劍捻ぢ取りたたきひしぎ打ちみしやぎ、鉾鎗長刀もぎ取り〳〵、ねぢまげ、押しまげ折りくだき、寄せくる奴原脚にさはれば踏み殺し、手に觸るを捻ぢ殺し、絞め殺しては人礫、騎馬の武者は馬共に、ひとつに摑んで手玉に上げ、四足を摑んで馬礫。人礫馬礫石の礫も打ち交り、人間業とは見えざりし。左しもの韃靼責めよせられ、すは落城と見えたる所に、一官を楯の表に縛り付け、韃靼王を先に立て、李踏天進み出で、「ヤア〳〵國性爺。己日本の小國より這ひ出で、唐土の地を踏みあらし、數ヶ所の城を切り取り、剩へ大王の御座近く、今日の狼籍緩怠千萬。是によッて親一官を斯くの如

く召し取ッたり。日本流に腹切るか但し親子諸共、直に日本へ歸るに於いては、一官を助べし、承引なくばたッた今、目前にて一官を引きはり切りにせん。とくの返答はや申せ」と、高聲に呼ばはれば、今まで勇む國性爺、はッとばかりに眼もくらみ、力も落ちて打ちしほれ、諸軍勢も氣を失ひ、陣中ひッそと靜まりける。一官はがみをなし、「ヤイ國性爺。狼狽へたか。おくれたか。七十に餘る此一官、命存らへ何に成る。母が最期の殊勝なりとて、父にも語り吹聽せしを忘れしか。これほどまで仕おほせし一大事。此皺爺が命一つに迷ふて、仕損せしといはれて、末代の耻辱古鄕の聞こえ、日本生まれは愛におぼれ義を知らぬと、他國に惡名とどめんは、日本の耻ぢならずや。女なれども汝が母は、生まれ古鄕を重んじ、日本の耻ぢといふ字に命を捨てしを忘れしか。是程の手詰めに成り、此親が目前に、八つ裂きにせらるるとも、目もふらず飛びかかッて本望とげ、大明の御代になさんと思ふ根性はどこで失ふた。ヱ、未練なり淺まし」と、じだんだふんで制すれば、國性爺父に耻ぢしめられ思ひ切ッて、大王めがけ飛んで出ずれば李踏天、父に劍を指し當つる、はッと氣もきへ立ちとどまり、進みかねたるしどろ足。頭べの上に須彌山が、今崩れかかッても、びくともせぬ國爺性、前後にくれてぞ見えにける。甘輝呉三桂互にきッと目配せ、つッと出でて韃靼王の前に頭を下げ、「斯くまでしおほせ候へども、御運强韃靼王一官搦めとらるる事、國性爺が運も是まで。末頼みなき大將。我々兩人が命を助け給はらば、國性爺が首取ッて、差し上げん。御誓言にて御返答、承らん」と云ひもあへぬに韃靼王、「オヽ〳〵神妙〳〵」と云ふ所を、飛びかかッてはッたと蹴倒し絞め上ぐれば、隙をあらせず

國性爺、飛びかかッて父が聲飛ぬぢ切り〳〵、李踏天を取ッて押さへ、父を縛りし楯の面、まッ其如く高手小手に縛り付け、三人目と目を見合はせて、「ヲヽ、嬉しや」と悦ぶ聲、國中響くばかりなり。諸軍勢勇みをなし、太子姫宮御幸なし奉れば、「御前にて彼奴原、則ち罪科に行ふべし。夷國とは云ひながら、韃靼國の王なれば、縛りながら鞭ち打ちして、本國へ送るべし」と、左右に分かッて五百鞭。半死半生打ち据えて引き退けたり。「サア是からが李踏天。元のおこりの八逆五逆十惡人。かたみ恨みのないやうに、國性爺は首引き抜かん。兩人は兩腕」と、三方に立ちかかり、聲をかけて一時に「えいや。うん」と引きぬき捨て、「永曆皇帝御代萬歲。國安全」と壽くも、「大日本の君が代の、神德武德盛德の、滿ちて盡きせぬ國繁昌、民繁昌の惠みによッて、五穀豐饒に打ち續き、萬々年とぞ祝ひける。

（總評）全篇すべて非凡壯快な文字で成ッた。近松翁の作中殊に人氣に投した非常の大作との古來からの評は無理でも無い。

明治三十年十月二日印刷
明治三十年十月五日發行

版權所有

發行所　發賣書肆

著作者　東京市芝區南佐久間町一丁目一番地　山田武太郎
發行者　同　神田區錦町三丁目一番地　大平舘
印刷者　同　東京市芝區南佐久間町一丁目一番地　田中正造

同　日本橋區通一丁目　文修書房
同　神田區裏神保町　嵩山堂
同　神田區表神保町　明法堂
同　神田區表神保町　東京堂
同　神田區南神保町　岡崎屋

山田美妙評註

日本淨瑠璃叢書

評註近松著作集

一冊正價金三十錢
三冊秩入美裝金九十錢
遞送料一冊ニ付八錢

第一冊目次

○長町女腹切（お花半七）
○淀鯉出世瀧徳（井筒屋新七）
○曾根崎心中（お初徳兵衛）
○重井筒（お房徳兵衛）
○五十年忌歌念佛（お夏清十郎）
○心中二枚繪草紙（お島市郎右衛門）
○戀八卦柱暦（お三茂兵衛）
○堀川波の鼓（四人の仇うち）
○卯月の紅葉（お龜與兵衛）
○卯月の潤色（おとおひ心中）
○伊達染手綱（丹波與作）
○心中萬年草（お梅久米之助）

第二冊目次

○今宮心中（おさき治郎兵衛）
○心中刃は氷の朔日（小かん平兵衛）
○夕霧阿波の鳴戸（夕霧伊左衛門）
○冥途の飛脚（梅川忠兵衛）
○生玉心中（おさが嘉兵衛）
○鎗の權三重帷子（おさゐ權三）
○壽の門松（山崎與次兵衛）
○博多小女郎浪枕（小女郎惣七）
○天の網島（小春治兵衛）
○女殺油地獄（お吉殺し）
○宵庚申（お千代半兵衛）

第三冊目次

○出世景清
○百日曾我
○世繼曾我
○曾我會稽山
○本朝三國誌
○傾城反魂香
○國性爺合戰